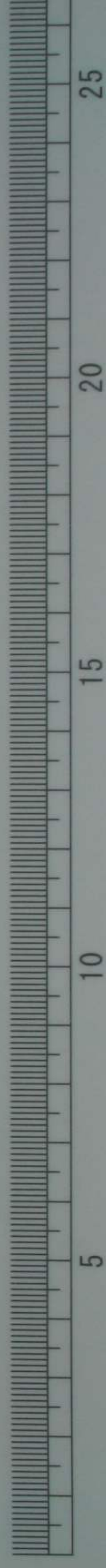


著者 藤内 博 著

論語 卷之九



信と評論

坪内雄藏著



文學博士坪内雄藏著

作
と
評
論

早稻田大學出版部藏版

文學博士坪内雄藏著

作と評論

早稻田大學出版部藏版

作と評論

目次

「ゼニスの商人」 法庭の場	一
新曲「常闇」	五
喜劇「登ろく！」	九
希臘古代の演劇に就いて	二六
エスキラスの三段曲梗概	三三
イブセン作「亡魂」梗概	三五
ハウプトマン「孤螢」梗概	三〇
文学藝術の三作用	三五

半意識しつゝ見る夢	二六三
日本で演ずる「ハムレット」	二七七
シャイロックとポオシヤ	二八七
海苔鹿朶	二九一
シャイロック	二九一
エドモンド、キーン	二九六
オセロとハムレット	二九九
ゾラと沙翁劇	三〇二
見せ物としての沙翁劇	三〇三
文藝雑談	三〇五
華やかながら無謀な討死	三〇五
本場も賈ひも共倒れ	三〇七
二大勁敵	三〇九

二十年の蘊蓄	三一
では如何したらよいか	三一三
殊に湊合藝術は困難	三一五
調和と文藝	三二八
切迫した社會觀と遊びの無い文章	三三〇
湊合藝術と不調和	三三三
町家藝術より國家藝術への過渡	三三五
自然の意義	三三七
舞踊劇に關して	三三八
脚本	三三〇
思想劇	三三三
樂劇とシムボリズム	三三五

偶像破壊……………三三六

功名心と日本の小説……………三三八

人生の味ひ……………三四一

西洋の作と日本の作……………三四四

理想的俳優を養成せんとすれば必ず先づ良き新脚本を得ざるべからず……………三四五

脚本難……………三五三

俳優について……………三五七

女優難と作者難……………三六七

観劇漫言……………三八一

藝術界の爲に大博覽會を利用せよ……………三九三

帝國劇場會社重役に與ふるの書……………三九八

日本舞踊の現在及將來……………四二七

日本舞踊の將來(再び)……………四三九

音樂と文學……………四五〇

舞踊劇に對する予が作意の過去及將來……………四五七

寫實式の背景と唄物、淨瑠璃物……………四七五

初夢の曲と振……………四八三

油繪式背景の適用範圍……………四八八

作 と 評 論 目 次 終

小説の精進日記

作と評論

ゼニススの商人

此一篇は文藝協會試演部の用にとて特に翻譯を試みたるものゆゑ、譯者の見るところによりてトガキを書き添へたり、但しシャイロックに関するものは米國の名優ブリスの型に由れり。

ゼニス法庭の場

舞臺、上手寄上段にゼニス公爵、その後うしろに市の重役の貴族若干名。中央上段に大なる卓子テーブルを控へたる裁判官の空席。上手前の

方平舞臺に被告の豪商アントニオ、其友人の貴公子パッサニオ。下手に同じくアントニオの友人サラリノ及びグラシヤノ。尙後邊、下手、其他よきところに下役人乃至長柄の武器を執りたる警護の役人、傍聽人など、大勢。

公爵

いかに、アントニオはあるか。

アントニオ

お前にをりまする。

公

さて、其方は氣の毒なものぢや。敵手方のシャイロックは頑石同然の人でなし、慈悲憐愍の心としては微塵ほども

無い奴なれば、さぞ心を苦しむることであらう。

アン

承りますれば、上にはお心に掛けさせられ、段々敵手方をお諭し下されましたげにござりますれど、あくまでも執念深う申張りまする上は、所詮まぬがれませぬ國法のお表、此上は觀念の仕りまして、邪見の犠と相成りまする覺悟にござりまする。

公

たれかある、シャイロックを呼び入れい。

これにてサラリノ下手戸口に立寄り戸外へ思入ありて

サラリノ

かなたに差控へをりまする。たゞ今これへ。

このうちシャイロック下手戸口より徐ろに入場す。

そこ開いて予が面前へ進ませい。

これにてシャイロック公爵の前へ進み頭を下げる。

シャイロック、世上の者も然思ひ、予もまたさやう存じをるこ
とちやが、何と其方が此たびの訴訟は、よも本心ではある
まい。事落着の間際と相成り、俄に打つて變り、慈悲を施
し、今責促る此の商人の肉一斤は申すも更なり、元金の
半をも免除し、重ねぐの案外に世人を驚かさん所存で
あらうな。近ごろ引きつゞいて彼れが身に降りかゝり
し不慮の損亡、さすがの大商人なれども、進退谷つたる爲

體、よしや心、鐵石の如き殘忍無慈悲を慣はしの、土耳其、鞆
の夷たりとも、何とて憐憫を抱かざらん。こりやシャイ
ロック、情ある返答を聞きたいものぢやの。

シャイロック徐に貌をあげ、恭しき態度、口吻ながら動かすべからざる決心の思入にて言ふ。

手前の存寄は先だつて申上げておきました。天帝に誓
うた上は、證文通りには是非受取らねばなりません。それ
をならぬとおつしやりますれば、お政道は暗黒、エニスの
國法は無いも同然でござりまする。かやう申したなら、
何故また三千兩といふ金は取らいて、益にも立たぬ人肉
をたつた一斤やそこいら取るのかと御不審もござりま

せう。その御返辭はいたしませぬ。が、言はゞ手前の好き勝手と申したら如何でござります。

口吻や、ぞんざいになる。

譬へば鼠めがあばれて困る、それが憎さにもし鼠を殺して呉れたなら、報いに一萬兩やらうと言ふも好き勝手。何と、そんなものではござりませぬか。世間には、豕を見れば胸がむかつき、猫を見れば氣が狂ふといふ仁もある。それもこれも各自の持前。好悪は人の情の操り、絲、百八煩惱の元締。何で豕が氣にくはぬ、何で猫が嫌ひだと問はれても理は言はれぬ。蟲の好かないアントニオ、三、千兩のかたに肉一斤、てんで桁にあはぬ取引も、深い怨があるによつて意趣返しがしたいはつかり、外に仔細はござ

りませぬ。何と、お聞分下されましたか。

シャイロック公爵に向ひて頭を下げる。バツサニオこらへかねたる思入にてシャイロックに向ひ

あまりといへば人情知らず、そのやうなことが残忍非道な此御訴訟の申開きになると思ふか。

シャイロック傲然として背向になりたるまゝ、見かへりもせずして

シャイロック

お前さんの氣に入るやうな返事をする義務はない。

バツサ

好かぬからとて殺すといふは人情ではないわい。

シャイ

憎む程なら殺したいと思ふのが人情の當り前だ。

パッサ

氣にくはぬと憎いとは同じではないぞよ。

シャイ

シャイロック屹とパッサニオの方へ振向き

何だと。お前さんは蝮まむしに二度咬ませる氣か。

パッサニオいきごむ。アントニオとめて

アントニオ

あ、これく、敵手あかてにこそよれ、問答は無益なむやくこと。ヂュウに道理を言聞かするは、親羊ひつじを鳴かする狼おおかみに、なぜ子羊こひつじを取つたと詰り、峯の松風や磯打つ浪に音を立てるなと諭すも同然。世に頑かたくなゝものもあれどヂュウが心に優すもの

はござりませぬ。もう何もいうて下さるな。此上は片時も早うお裁決さいけつうけ、彼れがなす儘ままになりませう。

パッサニオは再びシャイロックに向ひ

パッサ

三千兩を、これ此通り、六千兩にもして返すのぢやわい。

シャイロック徐こに見返り低聲こゑながら儼然げんぜんとし

た調子にて

シャイ

六千兩が六萬兩でもイヤサ六千萬兩でも取る氣は無い。證文通りが望だ。

と決然けつぜんと云ふ。此間公爵思入あつて

公

そのやうに他に酷つらうて若しおのが身に咎とがが下らば、其方

は如何にして慈悲を願ふぞ。

シャイロック案外だといふ思入にて公爵の貌
を見あげ

曲つたことをせぬものが、どんな咎を憚りませうぞい。
近い例が閣下方のお邸で養うてござる大勢の奴隷衆、金
の威光とお主の威光で牛馬同様に虐使うてござらつし
やるを、何と、引上げてお婿さまになされませ、なぜあのや
うな痛はしい酷い仕事をおさせなされます。閣下様と
同じやうに柔い臥床に寝せて、なぜ旨いものを喰させは
なさらぬのだと申したなら、あれは奴隷だ、買取つたもの
ゆゑおれのまゝだ、とさ、おつしやるでござりませう。ま
づその通り。あの男の肉一斤は大金出して買つた代物。

わしの物だからわしが取るので。それをならぬとおつ
しやれば、エニスの國法は反古同然。御政道が立ちます
まいぞよ。御裁判下されまするか。いかゞでござりま
す。

と傲と言つて公爵に向ひ頭を下げる。公
爵思入あつて

予が國主たるの威權を以て法庭を閉ぢるも心のまゝち
やが、豫て此の訴訟は、世に聞えたるベラリオ博士をば相
招いて、裁決かすべき手筈なれば、程なくこれへ出頭なさ
ん。

これにてシャイロック徐に下手へ退く。サラ
リノ進みいで、恭しく

サラリノ

申上げます。バデュアなる博士方より使者一人、書状を持
参し、かなたに差控へをります。

公

其の書状持参せい。使者を通せ。

サラリノ心得て場を退く。バツサニオ愀然
たるアントニオに近づき、肩に手をかけ

バツサニオ

アントニオ、氣をたしかに。何の力を落すことがあらう
ぞ。われらの爲に一滴たりとも和殿の血をなくさせる
程ならば、此のバツサニオが身代りとなつて、血も肉も骨も
ともに、彼奴に呉れてやりまするわい。

これを聞きてシャイロック冷笑の思入、徐ろに

アントニオ

此身は死んでも惜しくはあらぬ群ひれの中の病やんだ羊ひつじ。同じ
やうに熟する菓くだものでも脆いのは早く地に落つる。われら
は覺悟を極めました。おまへは長う存へなされて死後
を弔うて下さりませ。それが何よりの功徳とくでござりま
す。

カクシより庖刀ナイフを取出す。

公

そのもとはバデュアなる博士方より参られたか。

ネリッサ

さやうにござります。博士よりも御挨拶を申上げられ

此うちボオシヤの侍女ネリッサ、法律家の書
記役の服装にて、サラリノに伴はれて徐に
場に登る。公爵立迎へて

まする。

と書状を差出す。公爵手づから受取りて
徐に開き讀むこと。之より先シャイロックは
片膝つきておのが靴の踵にて一心に庖刀
を研ぎはじめ。バツサニオ之に目をつけ
シャイロックに向ひ

バツサニオ

なぜそのやうに一心に庖刀を磨いてゐるのぢや。

シャイロック

はて、そこな身代限から料の肉を切らうためだ。

グラシヤノ

やい、ヂユウ靴の底で磨くよりも砥石そのけの己れが胸
の底で磨げ。世の中に何が鋭いといつて、如何な善く切

れる刃物だつて、首切刀だつて、貴様の胸で磨き上げる邪
見の切先には叶はぬわい。やい、どれほど禱つても貴様
の胸には通ぜないか。

グラシヤノがみくといふ。シャイロック見
返りもせず

シャイロック

お主の知慧相應な禱りぢやあ通ぜない。

冷然としてかたいぢさうにいふ。グラシ
ヤノ赫となつて

グラシヤノ

呆れ返へつた剛情つばりの犬畜生！ 貴様のやうな奴
を生かしておくのは政道の手ぬかりだ。畜生の魂が人
間の體に宿るといふピタゴラスの説もどうやら眞らし

くなつて来たわい。

シャイロックわざと驚く真似やがて冷然とひざまづいたまゝ、徐ろにカクシより證文を取出し、巻返し、黙讀してゐる。

貴様の魂は元は狼なのだ、ところが人間を咬殺した科で、絞殺される途端にツイ魂が脱出して、貴様のお母の胎内に宿つたのに相違ない。強慾非道な其狼根性が現の證據だ。

シャイロック尙下なほしたにゐてグラシヤノを尻目にかけ、證文の印形に指ざしゝて

シャイ
證文に押しした印形が、怒罵どまつて消えりやあいざ知らず、そんな大きな聲を出しやあ肺の臓が痛まうぞい。お若い

の今の間に繕つくろはぬと、智慧袋が傷いたんで、始末におへないことにならう。

と磨とぎ了りたる庖刀をカクシに藏めて突立ち
おれは裁判を受けに來てゐるのだ。

手前なぞと問答するひまがあるものかといふ思入、こなし。此うち公爵は書狀を讀了り、思入あつて

公
此書面によれば、ベラリオ博士は名代として、年若き卓識の一博士を當法庭に推薦するとあるが、して其御仁は

ネリッサ
とネリッサへ思入。

すぐかなたに差控へまして、御意を相待ちをられまする。

公

無論ぢや。たれかある、兩三人かなたへ參つて、疎忽なきやうに案内申せ。

これにてサラリノはじめ二三人場を退くこと。

其の間に一同の者、博士よりの書面の趣を承れ。

と書記役へこなし。書記役書狀を公爵より受取り、進みいで、朗讀す。

書記

御使者來臨の砌、老生儀二豎に相惱み、大命奉じかね候處に、幸ひ羅馬府より名をバルサバアと申候一青年博士參り合せ居候故、不取敢御下命の件を同人に申含め、猶立會の上にて種々典章相調へ、卑見逐一會得爲致置申候、同人

公

學識の儀は當代無双と申候も敢て溢美には可無之、老生が立案も彼れにより一段の精采を加へ候程に御座候、隨つて是非とも名代として此度の御用相勤め申させたく、推して出頭爲仕候、年弱く智慧老いたる彼れの若きは、近古未聞と存候、何卒弱年者と御輕しめ無く、御登用被成下候やう奉悃願候、謹言。

此間シャイロックは耳を敬て、不審氣の思入にて朗讀を聞いてゐる。書記役退く。公爵一同に向ひ

ヘラリオ博士が書面の趣を皆の者も承つたか。

この時ボオシヤ姫、法律學博士の定格の服装にてサラリノに案内せられ、下手戸口よ

り登場す。公爵これを見やりて
察する所、あれへ見えたのが定めし其の博士であらう。

ボオシヤ姫徐に進み近づく。公爵も座を
離れて立迎へ

ようこそ。

と握手しつゝ

老博士のもとより参られたるか。

ボオシヤ

さやうにござりまする。

シャイロック不審さうにボオシヤを見つめて
ゐる。

公

ようこそ参られた。先づ席に着かせられい。

これにてボオシヤ判官席に着く。

さて其許には、只今これにて審問中の訴訟の始終を御存
じでござるか。

ボオシヤ

委細承知致しをりまする。いづれが當の商人にて、いづ
れがヂエウでござりまするな。

公

アントニオ。シャイロック。兩人ともに前へ出い。兩人進みいで、公爵に會釋す。

ボオシヤ

シャイロックと申すは其方か。

やゝ驚いたる思入にて見上げながら、かた
いちげに

シャイ

シャイロックは私でござりまする。

ボオシヤ思入あつて

ボオシヤ

さて、其方が此度の訴訟は奇怪至極の訴ぢやの。しかし手續には何等邪まな儀もなければ、エニス國法の表として之れを斥くべき道理はない。こりやアントニオ、そちが一命は訴訟人シャイロックが心のまゝとな。

アントニオ

さやうに申しをりまする。

ボオシヤ

證文の面は毛頭も相違ないか。

アントニオ

相違ござりませぬ。

シャイロック此時きつとなりてアントニオの方を見ること。

ボオシヤ

さすればシャイロックに於て慈悲をかけねばなるまいぞよ。

シャイ

とはまたどういふ據ない……理をお聞かせ下さりませ。

ボオシヤ

あゝいや、慈悲は強ふべきものではない。

とボオシヤしづかに上段の席を離れ、平舞臺に下りて宜しくシャイロックとアントニオとの間に立ち

慈悲は春の小雨の如くに静かに自然に人を潤す。その

德澤は二重にして、受くる者にも福ひあれば、授くる者もまた福ひなり。畢竟するに慈悲は人君の偉徳にして、衆徳の會る所ぢや。此の徳王者の胸に宿れば、其光寶冠に百倍す。笏は人君の威力の彰目に見ゆる尊嚴の標號なれど、慈悲は其にも彌増りて、天つ神の御持物。されば慈悲を以て義理を和らげ、情を以て法度の備はらぬを補うてこそ、政道はじめて天道に合ふの道理。ぢやによつて、シャイロク、其方の申條は義理には悖らず、掟には叶うてゐれども、此道理をよう思へ。只一圖に義理を責め、政道の表のみを強ひて立抜かうとするときは、罪深きは人の身の常ぢや、誰れ一人現世の救拯を得るものがあらうぞ。旦夕神に慈悲を祈るは、取りも直さず餘人に對して慈悲

を懸けよの誨ではないか。こりや、かく言葉を費すは、義理一邊の訴を和解めようと思へばこそぢや。承引せずば是非に及ばぬ、のつびきならぬ法文の表に隨ひ、それなる商人をば重き罪科に處さねばならぬ。

場内聞となる。シャイロク決然として聲を勵まし

私の所行が曲事ならば、どんな御刑罰でも受けませう。御法通り、證文通りに、科料をお渡し下さりませ。

ボオシヤ徐かに被告の方へ向ひ

アントニオは金子を拂ふことが出来ぬか。

あゝいや、其金子は、まづ此通り、彼れに代り私より支拂ひ
まするでござりまする。はい、元金の倍額にござります
る。もしこれにても不足と申さば私の手なり、首なり、心
臓なり、抵當にいたしまして、十倍にしても支拂ひます
る。尙それにて承引いたしませぬやうならば、訴訟沙
汰とは表向、實は人を陥れて殺害なさん底意なりと存じ
ますれば、何卒政府の御威光を以て、大義公道の爲、聊か御
法を曲げさせられ、此人鬼めをお制御下されませう、お
願申上げまする。

あいや、その儀は相成らぬ。エニス國廣しと雖も、いかな
る威權を以てするも國法を托ぐる力は無いぞ。一たび

悪例を作るときは、百の過誤つゞき起つて、長く國家の禍
根となるわい。其儀は固く相成らぬ。

儼然と言ひ放つ。 シャイロック且つ駭き且つ
喜ぶ思入。 覺えず聲をあげて

ダニエル様の再來！ 取も直さずダニエル様！ お若
いには似ぬ明判官様！ 恐れ入つたる御發明！

と立寄りて、恭しくボオシャの長外套の縁
をキッスする。 ボオシャ打解けたる體にて
シャイロックに向ひ

どうか其證文を見せてくれい。

シャイロック急がはしく證書を庖刀と共にカ

クシより取出し

シャイ これにござりまする。 憚りながら、これにござりまする。

とポオシヤに證書を渡す。ポオシヤ一讀して

ボガ シャイロック、何と、此金額を三倍にして返濟せんと申しをるではないか。

シャイ 誓うた上は、誓うた上は、天帝に誓うた上は！ おのが魂たましひに背かれませうかい。エニス一國と取換つこにしても否いなでござる。

ボガ はて、此證文は期限已に切れたれば、國法の表によれば、そ

れなる商人しやうじんの心元こころもとより肉一斤を切取ることそれなるヂュウが心のまゝちや。

と言ひかけてシャイロックに向ひ

こりや、シャイロック、情なさけをかけい。三倍の金子を受取り、身共に此證文を裂かせてくれい。

シャイロック飛びかゝるやうに

シャイ 證文通りの……支拂が濟んだ後なら、お心任せになさりませ。

と思入あつて

お見受申したところ、お立派な判官様はんくわんさま法はふや掟おきてもよう御存ごぞんじ、御理解ごりかいも道理だうり千萬。御國法ごこくはふの大黒柱だいこくちゆうとも存じますから、其國法ごこくはふを楯たてに願ねがひ申しまする。早う裁判して下さ

りませ。心にかうと誓うた上は、人間の舌の力では此心
は動かされぬ。證文通りのお捌をお願ひ申上まする。

アントニオ

これにてアントニオ思入あつて

私よりも申上まする、何卒速にお裁決下されませう、お
願申上まする。

ポオシヤも思入あつて

此上は是非に及ばぬ。胸元を押開いて、刃を受くる用意
いたせ。

とアントニオへ思入

さてく、あつばれな判官様！ 年に似あはぬ偉いお方

シャイ

ちや！

と喜ぶ思入。

此證文に見えたる科料は、國法の本義に叶ひたれば聊か
も異議はないわい。

これを聞きて、シャイロックは公爵其他の貌色

を窺ひ、得意の思入。

御意の通りく。さてく、發明な、依怙最負のない判官
様！ 見かけは若うても、分別は老人も及ばぬ。さてさ
て偉いお方様ちや！

シャイ

此上は胸を露す支度いたせ。

ポオ

シャイロック急ぎボオシヤの手より證文を受取り

はいく。胸でござる。證文にさやう認めてござります。

と言ひつゝボオシヤへ證文を返し

「すぐ胸元より」とござりませうがな。

いかにも。肉を量る秤器はあるか。

はいく。ござりまする。

とカクシより秤を取り出す。

シャイロック其方自辨にて外科醫者を呼寄せおけ。傷口を

とゞめぬときは、命を失ふも圖られぬ。

さやうなことが證文に認めてござりまするか。

と驚きたる思入、急ぎボオシヤの手より再び證文を乞取りて見ることに。

いや、認めてはなけれども、さばかりの情を掛くるは當然ぢやわい。

手前は會得いたしませぬ。證文に書いてござりませぬ。

ボオシヤ改めてアントニオに向ひ

商人、何も申すことはないか。

とくより覺悟いたしをりますれば、改めて申す程のこと
もござりませぬ。

とバツサニオに向ひ

バツサニオ様、どうぞ恙なうお暮らしなされ。おまへの爲
に此やうに成つたからとて、必ず歎いて下さるな。財産
に離れて老い憐ひ、額には波をたゞへ、凹んだ眼をして己
が身の上の不仕合せを詠め暮すも多いならはし、それに
比ぶれば、只一思ひの身の果は、まだしも果報ぢやと思ひ
ます。お内方へも宜しく傳へて下さりませ。此身の
最期、お前様への情誼、亡い後にてくはしう話し、これなら
ば眞の友と言はれうやら、お内方に判断して貰うて下さ

れ。心友を失うたと悔んでさへ下されば、身に憾みはさ
らにない、満足して死にまするわい。

アントニオ、お主のお庇で最愛の命とも思ふ妻をば得た
れど、其命も其妻も全世界も、お主の命には代へられぬ。
何もかも皆打棄、成らうことなら何もかも此悪魔の犠牲
に供へて、一命を助けたいわい。

兩人よろしく愁のこなし。

わしもつい此間約束した戀女房があるが、今思へば彼女
が死んで天にでも登つてゐたなら、何かと便宜があらう
ものを。言傳手して神様に縋らせ、此狼めの心を入れか
へて貰はうものをなあ！

最前よりじれつたげに此長問答を聞いて
ゐたるシャイロック、此時グラシヤノらを賤む
思入よろしくありて

シャイ

呆れ果てた基督信者の薄情な根性！ それにつけても
女ジエシッカ、基督信者にくつゝかせる位なら、泥棒にでもく
れたはうが、まだましであつたものを！

と如何にも無念さう、悪さげにいひて、氣を
かへ

何のかのと時が経つ。

お宣告を願ひまする。

と公爵へこなし。ポオシヤ思入あつてシャ
イロックに向ひ

ボオ

これなる商人アントニオの肉一斤は其方の物ぢや。法

庭之を許し、國法之を與ふるぞ。

と言ひ終るとシャイロックは勇みたち、見物の
方へ背を向けたまゝ、庖刀を頭上へ高くさ
ゝげて

シャイ

さつても公平な明判官様！

と聲高く叫ぶ。

ボオ

此上は其方是非自ら手を下して、彼れが胸元より肉一斤
を切取るべし。國法之を認め、法庭之を許すぞ。

シャイロック彌々勇みて

シャイ

さつても博學な判官様だ！

と公爵の方に向ひて低く頭を下げ、ふりか

お宣告だ。覺悟しろ。

へつてアントニオに向ひ

と直にアントニオの襟元を掴みて庖刀を胸に突付ける。人々立騒ぐことあり。ボオシヤつと入りてシャイロックをとめて

ボオ
待て、しばらく。今一言申すことがある。これ、此證文には、血汐は只の一滴たりとも、其方につかはすと書いてはないぞ。肉一斤と明白に、書いたる上は證文通りに、肉一斤を取るの儘……なれども切取る其はづみに、基督信者が鮮血の只一滴でも灑ぐに於ては、地所も家財も悉く、エニスの國法に由つて、エニスの國庫に没収いたすぞ。

これを聞くうちシャイロック驚き呆れ、覺えず

ガラシヤノ

依怙最負の無い判官様！ どうだザウ。さてく博學な判官様だ！

たちくくと後へ退りて我知らず庖刀を取落す。ガラシヤノ勇みたちて

シャイ

それが御法でござりますか。

ボオシヤ引取つて

ボオ

疑はゞみづから調べよ。強ひて條文を楯となし、一へに

嚴罰を課さうとする故、己れに出るものは己れに返り、其方が望む以上の嚴重なる捌をもいたさにやならぬ。

成程、博學な判官様！ どうだヂユウ。成程、博學な判官様だ！

それちやあ先方の望通り、證文の三倍で、其奴を許してやりまする。

其金子は即ち爰に。

と金子を渡さうとする。

控へい。ヂユウはあくまでも掟通り、國法通りに捌き遣は

す。急くには及ばぬ、控へてをれ。やいヂユウ、科料の外は何物たりとも取立つることは罷り成らぬぞ。

シャイロツク默然思入。

どうだヂユウ。成程、公平な判官様だ！ 成程、博學な判官様だ！

シャイロツク默然思入。

いざさらば、肉を切取る準備いたせ。但し血を流すことは罷り成らぬ、まつた胸の肉一斤の外を切取るとは相成らぬぞ。若し聊かたりとも分量相違いたすに於ては、よしや分厘の輕重たりともイヤサ髪の毛一筋の相違たりとも秤皿の上に生ずるに於ては、其方の命は無いぞ、そち

が家財は悉くエニスの國庫に没收いたすぞ。

シャイロック如何はせんと煩悶する思入。グ
ラシヤノ彌々勇みたちて

ガラ

今ダニエル様！ 今ダニエル様！ どうだ、もうかうな
つちやあグウの音も出やあしまい。 さまあ見ろ！

ボガ

何とてヂュウは躊躇いたすぞ。 科料を取らぬか。

と儼然といふ。 シャイロックしばらく悶えや
がて思ひ切つたる思入にて

シャイ

元金だけを受取つて、お暇がいたゞきたうござりまする。

バッサニオ急ぎ財袋を手にさゝげて

バッサニオ

とくより準備いたしてをる。 すなはちこれに。

と渡さんとするをグラシヤノ横合から引
たくる。

ボガ

あゝいや、場所こそよれ法庭にて、一旦受取らぬと申せ
し上は、彼れにはあくまでも掟通り、證文通りの科料のみ
を受取らせい。

グラシヤノ

ダニエル様！ も一つおまけにダニエル様！ おいヂュ
ウ、とんだ好い語を教へてくれた。 禮をいふぞよ。

此時ボオシヤ證文をシャイロックに投げ與ふ
る。 シャイロックの足もとに落ちる。

すりや元金もとぎんだけでも受取ることが出来ませぬか。

科料の外は一切叶せうはぬ。命がけて切取るか、どうぢや。

ちえゝ！ 此上は、どうとも勝手にしやあがれ！

とシャイロック憤然として足下の證文を踏みにじる。

もう論判は無益むびなこつた。

シャイロック席を蹴つて去らんとする。

ボカ
ボカ
さて、シャイロック。尙其方まだそのほうには御用がある。自儘の退席罷り成らぬぞ。

シャイロック愕然として立停る。

エニスエニスの國法によれば、直と間接との別なく、若し外國人にして當エニスの國人を殺害せうがいなさんと企てしこと露見に及べば、其の財産を二つに分ち、當の敵手は其一半を取り、一半は國庫に没收なし、尙犯人の一命は、一へに公爵の仁恕に任せ、何人たりとも此儀について異議をさしはさむを得ざるの制定。其方が罪状は正しく是れぢや。直接にも又間接にも此れなる商人が生命を奪はんとせしこと明白なれば、其罪はまぬがれぬぞ。此上は地に平伏して公爵のお慈悲を願ひ申せ。

シャイロック悄然となつて、此言渡終ると同時に地上にひざまづかんとするを、グラシヤ

クラシヤノ

やい、願ひ申すなら、どうか首を縊めて下さいましとお願ひ申せ。身代残らず没收されちやあ繩を買ふだけの錢もなからうから、政府の費用で首を縊めてもらはねばなるまい。厄介な代物だなあ！

と突き放す。シャイロックべたりとなり其ま
ま頭を下げてゐる。公爵思入あつて

公

此方の情操の汝等と異なるを知らせんため、願ひを聞くまでもなく其方が一命は赦し遣す。さて財産の一半はアントニオに取らせ、残る一半は當國庫に没收せん。但し悔悟の實見えなば、科料ばかりにて差許さん。

ホオ

それは國庫に對する分、アントニオへは制規の通り。

シャイロック悄然と貌をあげて、低き涙ぐみたるふるへ聲にて

シャイ

いや、赦免は望でござらぬ。命も何もかも取上げて下さりませ。大黒柱を抜かれるは家を取られるも同じこと、生活の資本の財産を取上げる位なら命も取つて下さりませ。

ホオ

アントニオ、情を掛けて遣はす氣か、どうぢや。

此アントニオといふ一言にてシャイロックきつとなつて突立つ。クラシヤノ横合より

もし無料で遣るのなら、たかゞ首を縊る繩位のものでござります。外に何がやれるものか。

アントニオは恭しく上段に向ひ、敬禮し

憚りながら公爵様はじめ御列席の方々へ申し上げます。シャイロックが財産の一半は科料にて御免除あるやう、只管願ひ奉ります。また残る一半は私當分の間預かりおき、シャイロックが死後に、先だつて彼れが女を誘ひだし、只今は遠國いたしをりまするロレンゾと申す若人に相渡したうござります。なほ此上に二ヶ條のお願い……第一シャイロックこと、かく御仁恵を蒙りましたる上は、只今より基督信者と相成りまするやう

第二には死後一切の財産を女夫婦に譲るといふ證書を此れにて認めまするやう何卒御申附下されたく、お願申上まする。

いづれも取り行はせん。若し相背くに於ては免除の儀は叶はぬぞ。

と言ひかける、これにてシャイロック身ぶるひする思入、基督信者云々といふ言葉にて、短く鋭く唸き、覺えずたちくと後ろへ退り、掌をあほむけにして右の手を高くあげ、天を仰ぎて絶望のこなし。

とシャイロックへ思入。シャイロック悄然として俯く。

ホオ

シャイロック、異存はないか。 どうちや。

これにてシャイロック顔もろともに両手をあげて何事か訴へんとするかの如き思入、やがて思ひかへしたる體にて、顔をも手をも下げて力なげな低き調子にて

シャイ

異存ござりませぬ。

と悄然として言ふ

ホオ

書記役。 財産讓渡の證文を認めい。

と書記役へこなし。 シャイロックは悵然と面をあげて

シャイ

公

何卒お暇を下しおかれませう。 氣分がすぐれませねば、證文は後からお送り下され、宅にて調印仕ります。

と哀しげにいふ。

退席は差許すが、申附けたることを違へまいぞ。

シャイロック低く頭をさげて公爵に會釋し、徐かに退場せんとするを、グラシヤノ摺れちがひさま其左の手を捕へ

グラシヤノ

やい、デユウ、洗禮を受けるにやあ立合人が一人だが、おれが判官であつたのなら人數を十人ふやし、貴様のやうな奴は、洗禮盤へつれてゆくより絞罪臺へつれてゆき、手取早く亡者と改名させたものを。 命冥加な奴だなあ！

と手荒く突放す。シャイロックよろ／＼となつて戸口の方へたぢろき、そこにてアントニオにゆきあひ、きつと思入、覺えず手を高くあげ、やがて又氣をかへ、悄然として首をうなだれる、と擧げたる手が首と共に下りて自然に頸を抱へる、からだはよろ／＼と戸へ倒れかゝる、扉が開く。幕

常闇

文藝協會發會式用に綴れるもの、明治三十九年二月「早稻田文學」所載

前の幕

國つ陰山麓の場。

哀れに寂しく、物すこく情なげなる器樂一しきりありて、山嵐、川浪の音に、擬したる噪音と共に暮あく。舞臺は一面の平舞臺。上手に遠く嵯峨たる山麓を見せて、こゝかしこ疎らに枯れたる立木を配置し、正面は

草茫茫たる平原、下手に遠く斜に大河見ゆ(舞臺の電氣を消したれば、これらの景は只朦朧と見ゆるのみ)。中央に老若男女の神、凡そ十二人參伍々不行儀に、或は蹲踞し、或は胡座して悵然なり。うめくやうに同音に唱ふ。

同

あはれ！ あはれ！

天が下 常暗と 昏く。

晝夜の 分別も 知らず！

あはれ！ 幾日 経つる？ 知らず！

青山も 枯山なす 枯れはて。

海河も 濁り、腐り、とろよぎ。

あらぶる 神の音なひ 狭蠅なす い涌きて。

よろづの 物の禍ひ 蜂のごと おこりぬ。

あはれ！ いづち往かむ？ いづち？

やがて 世や滅ぶ？ 世やも！

あはれ！ あはれ！

天つ霧 時じくも 降りて

海陸の 區別だも 見えす！

あはれ！ 幾夜 経つる？ 知らず！

たなつもの つぎくにも 萎れて。

生けるもの ことごとくにも 盡きなむ。

あふげど、見えす 御光り！ 螢なす 光りも！

呼ばへど、賜ばず 御救ひ！ 雫なす 救ひも！
あはれ！ いづち往かむ？ いづち？
やがて 世や滅ぶ？ 世やも！

と歌ひ終りて一同うめき歎く。や
がて此の群中の長と見ゆる鬚髯の
黒く立派なる神、阿梁思、幸福氣、命、貌
をあげて向うを見ることありて、思
入あり、起上りて一同に向ひ、向うを
指さし

幸

見よ！ あれを。あれを見よ！
螢なす 寄りくる 光り！

トこれにて一同も起上り、向うを見
て聲を合せ

同

げにや げに！ 寄りくる光り！
あな！ 嬉し！ あな！ 嬉し！
あはれ！ 道しるべ 得てむ。

ト此のうち寂しき器樂につれて、向
うより國津道屋、命、白頭の老翁、願髯
は長うして臍に及べり。右手に松
炬を捧げもちて先に立ち、其のうし
るより老若男女の神、都合六人、覺束
なげに随ひ來る。いづれも衰へ疲
れ若しくは恐れ悲しめる色あり、折
折躓き仆れむとするものあるを相
扶けて辛うじて歩む。次々の白は
いづれも間延に單調子に休み、
言ふと心得べし。既にして花道の

半まで来る。
器樂やむ。

道白

吾れに隨きて來。只 吾れに隨きて來。あ
やふきこともなし。あやふきこともなし。

丙白

さりとても 三咫前も 見えぬを。あ！
胸騒ぐ！ おそろし！ おそろし！

道屋、命は松炬を手の届く限りさし
のばし揮り照らして

道白

それや！ それや！ かうばかりも 明に
見ゆるを。それや！ それや！

下類に松炬をふりかざして皆々を
勵す。この途端幼き神、丁、横さまに

倒れて

丁白

あいた！ あいた！ 蛇に足を嚙はれつ。
あいた！ あいた！

母らしき女神、丁を扶け起す。此の
時中年ながら瘦せ萎れたる神、甲、ふ
と心附きたるが如く聞耳たて、歩
をととめ

甲白

や！ 待ちね。待ちね。いづこにてか 潺
溪の聞ゆるげなり。や！ このものにも か
のものにも 聞ゆれ！ や！

トあちこちと窺ふことありて

甲白

や！ や！ や！ 崖ぞ！ 崖ぞ！ 此の

面も 彼の面も 二咫三咫先は 八千尋な
す 谷ども！ 黄泉に通ふ 谷ぞよ！

皆白

トこれにて一同愕くこなし。

あに？ 崖とや？ 八千尋なす 谷とや！
黄泉に通ふ谷とや！ いで。 いで。

皆白

ト皆々こぞみて左右をうかゞふ。
道屋命ばかりは、突立つたるまゝに
て、左右へ松炬を揮り照らす。

うべも！ うべも！ うべも！ げにも潺
湲の聞ゆるげなり。 げにも 水の音の 聞
ゆるげなり。

乙唱

あはれ！ あが胸は ほとくす！

丙唱

あはれ！ あが胸も ほとくす！

皆唱

あはれ！ あはれ！

あれらが胸も ほとくす！

あな！ おそろし！ あな！ おそろし！

若し崖ならば 何とせむ？

崖ならば 何とせむ？

トこれにて道屋命さへも、覺えず慄
然として、一たびは尻込みせしが、さ
すがに心を鎮めたる體にて、皆々を
制し

道白

手まどひすな。手まどひすな。此の火ある

からは 危きことなし。右も左も 吾れに
随きて來。右も左も あしこまでゆけ。い
ざ。いざ。

ト先に立てど衆皆おちげづきて尻
込みす。此のうち最前より花道の
方を見つめ、遙かに此の間答に耳を
傾けぬたりし舞臺の一群、此の時や
うやう聞きわけたる體にて、幸福氣、
命をはじめ一同聲を合せ

同

あら！ 嬉し！ 炬火なりけり！ 神の氣す。
あら！ 嬉し！ こゝたの神の 聲すなり。
いで い迎へて あの炬火
え分ちて 道を 照らさむ。

幸

なづかし！ あがはらから！
ともしび 分ちてたべ。

道屋ノ命進み迎へて

道
なづかし！ あがはらから！
とうとう 分ちてとれ。

トこれにて幸福氣ノ命は道屋ノ命より
火を分ちとりて、先に立ち、道を照ら
す。舞臺なるも、花道なるも、皆々蘇

一同

あら！ 嬉し！ あら！ 嬉し！

道は見えつ。道は見えつ。

いでや いで 一つとところに 集はむ。

りたるやうになりて喜び勇む。

ト花道の一群舞臺に來る。途端に
山嵐はげしくして松炬消えむとす。
一同うるたへ騒ぎ袖垣して防がむ
とするもあり。

一同

あら！ 何とせむ！ 何とせむ！

ともし 消えなば 何とせむ！

道屋ノ命と牟福氣ノ命は我が持てる松
炬に風をあてじと身を以て防ぎな

がら、あちこちと走りめぐりて

道白

など 各々 枯枝だに持來て 火をうつさ
むとはせぬぞ？

牟

あはや！ あはや！ 此の火は消えなむ！

道

など うつさぬ？ とううつせ。

牟

とううつしね。とう。とう。

ト此のうち道屋ノ命の火先づ消ゆ。
命いよく氣を揉みあせりて

道

など 衆皆 みづから取らぬぞ？ など取
らぬ？ など取らぬ？

ト此のうちに又一陣の山嵐して卒
福氣命の松炬も消え、又もとの如き
眞の暗となる。

一同

あら！ 悲し！ 何とせむ！
又も世は 常暗!!!

ト皆々途方にくれたる思入、こなし。
道屋命やうく我れに返りたる思
入、手に持てる松炬を揮りこゝるみ
て

道

しかすがに しかすがに
螢なす 火の氣残れり。
此の火種 香山にて得つ。

あすくまり 空に死なむや！
這ひくも 往きて又得む。

卒

げにや げに。

息の緒に 思へるあれらを。

千萬の ためを思へるを

大神の やはか幸はぬ？

二人

おもむろに つゞけ 神々。

一同をひきめて、燈しの松を揮立て
つゝ先にたつ。皆々悵然に萎れて、
力なげに随ふ。又も哀しく寂しき
器樂一しきり。山嵐、濁浪の岸を洗
ふ噪音にて暮。

後の幕

虚の大峽の場。

浮きたる陽氣なる器樂にて幕あく。本舞臺一面の平舞臺。上手立枯れしたる大木の立木の隙間に山坂道の岩組を見せたる暗淡たる山間の景。奥も下手も所々に立枯れしたる老木、若木、其の下枝は大かた折取りて上梢ばかり残り。すべて天の香山本につゞける山峽の體。よき處にくさぐさの服裝したる大勢の神、みだりがはしく集ひて酒を飲みぬる。既に酔ひじれたる體也。

中央に畫にかける天の宇受賣、命のやうにしどけなき姿したる少女神、凡そ六人、酔へる神らの同音に唱ふ戯歌につれて緩く輪がたに廻りて舞ふ。次々の歌の意味によりて舞ふといふよりも踊るといふに近き振をなすこともあり。され歌のいくさり果つる毎に、酔へる神らは手を拍ちて、諸聲に樂しげに笑ぐ。舞臺前の方、上手と中央と下手、三ヶ所に篝火焚きてあり、酒宴に加はらぬ三人の神ありて之れを守る。怒る神と歎く神と物言はぬ神となり。怒る神は酔へる群の方を苦々しげに睨みて、高津神の災ひーなど撃たぬくやつらな？高つ鳥の災ひーな

ど裂かの醜のつら？」と折々罵り歌
ひつゝ、上手の山坂より降り来て枯
枝を上手なる篝火に投じ、さて苦々
しげに酔へる一群を睨めまはしつ
つ又山坂を登り去るを例とす。物
言はぬ神は只黙然として中央の篝
火を守り、只折々あちこちと探りあ
るき、一枝二枝の枯木を拾ひ集めて、
一へに火勢を衰へしめざらむこと
を力む。歎く神は始終下手に在り、
初めは枯れたる老木の下枝、中枝を、
或は延び上り、或は攀ぢ登りて折り
取り来て下手の篝火に投じ、其の都
度あまたゝび歎息して、あはれ！世
や亡ぶ？世やも！と悲しげに歌ひ
つゝ、あたりに枯枝の漸う乏しうな

るに及びて物言はぬ神と一二度同
じ枯枝を奪ひあひ、あはや叩きあふ
にやと見ゆることなどもあり。す
べて此れらの言動は酔へる神らの
次々に歌ふ戯歌の間々に挿まるも
のと知るべし。
暮あく酔へる神ら聲をあはせて
笑ぎ／＼歌ふ。

酔問

や！ 眞山の小葛！ や！ 繰れ、繰れ 小

葛！

や！ 鷺の頸取ろむと。 や！ いとはた長う

て。

や！ 胼胝踏むな 後なる子。 や！ 我れも

目はあり 先なる子。

怒

此の時怒る神山より下り來りて

高津神の災ひ!

など撃たぬ くやつらを?

醉同

や! ゆすりあげよ。そよりあげむ。や!

そよりあげよ。ゆすりあげむ。

歎く神は此の時あまたゝび歎息して

歎

あはれ 世や亡ぶ? 世やも!

醉同

や! あぶり戸や ひわり戸! や! ひわ

り戸や あぶり戸!

怒

高つ鳥の災ひ!

など裂かぬ 醜しづのつら?

醉同

や! 谷から往かば 岡から往かむ。や!

岡から往かば 谷から往かむ。

や! これから往かば 彼れから往かむ。や!

かれから往かば これから往かむ。

此の歌につれて少女らをかしき介して舞ひ踊る。

舞ひ了ると、醉へる神ら一同手を拍ちて、楽しげに笑ぐ

醉白

怒

やよや！ やよや！ ハ、、、、！ ハ、、、、！

高津神の災ひ！

など撃たぬ くやつらを？

高つ鳥の災ひ！

など裂かぬ 醜のつら？

歎

あはれ！ 世や亡ぶ？ 世やも！

かくて怒る神は罵りながら山坂を
登り去り、歎く神も中つ枝を折ら
んとて大きな木を攀ぢ登る。醉へ
る神ら又歌ふ。少女ら又舞ひはじ
む。

醉同

うそらが崎に 鯛釣る漁人も！ 鯛釣る！

鯛釣る！

吾妹子がためと 鯛釣る漁人も！ 鯛釣る漁

人も！

舞ひ了ると、一同又手を拍ちて、楽し
げに笑ぐ。

醉白

やよや！ やよや！ ハ、、、、！ ハ、、、、！

怒る神は此の時山より歸り來り、歎
く神も地に下りたつ。

怒

高つ神の災ひ！

など撃たぬ くやつらを？

歎

あはれ！ 世や亡ぶ？ 世やも！

醉へる神ら又歌ひはじめ。少女ら又舞ふ。

醉同

だぶくの だぶの河原べや。御稻春く 女
の美さよや！ それもがも 彼れもがも 従
妹中の いとこせにせむ！

こゝに至りて怒る神堪へかれたる思入、奮然とたちあがりて醉へる神らに近づき、目を怒らして一きは聲高く歌ふ。

怒

高つ神の災ひ！

おちかゝれ くやつらに！

高つ鳥の災ひ！

裂き破れ 醜のつら！

されども醉へる神らは之れにかゝはらず、尙ほ笑ぎ歌ふ。

醉同

葦原田の稻春蟹のや。おのれさへ美女を得ず
とてや。おろしては捧げや。かひなげをする
や！……………

ト歌ひ進み、舞ひ進むにつれて狂態ますます甚し。怒る神もはや堪へかねたる思入にて、「しこめく、く！」と罵り叫びながら、大いなる火の燃えつきたるまゝの枯枝をふりかぶ

えんとし、物言はぬ神のも次第々々に火勢衰ふ。歎く神ひとり氣をいらつ思入、こなし。

歎

あはれ！ あはれ！

箒 消えむ。

百枝杜樹。湯津かつら。

五百枝の槻も 眞榊も。

下枝 中つ枝も 盡きぬ！

あはれ！ 世や亡ぶ？ 世やも！

此の時酔へる神ら總立に立上りて、男女入りまじりて、自ら歌ひつゝ舞ひ踊る。猥りがはしき浮きたる器樂又盛ん起る。

醉同

千歳！ せんざい！ せんざいや！ 千とせ

の千歳や！ なほ千歳！

歎

あはれ！ 世や亡ぶ！ 世やも！

醉同

萬ざい！ まんざい！ 萬歳や！ よろづの

萬歳や！ なほ萬ざい！

歎

あはれ！ 世や亡ぶ？ 世やも！

此の時に至りて怒る神の箒と物言はぬ神の箒とは全く消え果て、歎く神のも火の勢ひ漸く衰ふ。此の途端前の場の幕開に聞えたと同じ

き哀れに寂しく、物すごく、情なきやうなる器樂の音次第に近く聞え、やがて前の場の一群道屋命と半禰氣命とに導かれて花道を探るやうにして本舞臺に近づき、篝火の衰へて今將に消えむとするを見て驚き、舞臺なる歎く、神に聲を合せて

一同

あはれ！ あはれ！

箒 消えむ。

あはれ！ あはれ！ 世や亡ぶ？

あはれ！ 世や亡ぶ？ 世やも！

醉へる神らは之れを聞きつけぬもの、如く、以前の「萬歳！まんざい！萬歳！」を反覆して歌ひつゝ、踊り狂

ふ。されど歎き聲の次第に甚しくなるにつれて、漸く其の興を妨げられたる體にて大に怒り、其のうちの一人、よるめきく群を離れて、歎く群の方へ進み向ひて、目を怒らし

醉

あな！ がまや！ あな！ がま！

なに おらぶ？ しれもの！

此の時道屋命徐かに進みいで、睨まへ

道

あさましや！ しれもの！

なが睦 え見ずや？

世の亡ぶ 汝が罪！

歎一同

げに 世の亡ぶ 汝が罪!!

これを聞きて酔へる神ら一同大に
激したる色あり、よるめきながら一
齊に進み向ひて

酔同

あはれ! しれものゝ しれものと

呼ぶぞ につくしや あれらを!

歎一同

夢に酔ふ しれもの!

酔

につくしや! ころさむ。

歎

うらめしや! ころさむ。

酔

につくしや! ころさむ。

兩群亂れ進む。悲しく寂しき樂と
浮きたる猥りがはしき樂と雜然と
して錯綜し、神もまた陰陽の兩群入
り亂れて、あはや激しき格闘となら
むとも見えたる途端、俄然として山
鳴り震動して、向ひより天の手力男、
命、見上ぐるばかりの巨いなる神、岩
が根を沫雪なす蹶散らかして、殿の
男叫び踏みたけびて、猛然と馳せ出
て来る。手には入尋瓊矛を提げて、
山鳴り震動す。命近寄りて

手

しこめ！ おれ！ をこのしれもの！

ト罵る。兩群共に疾風の前なる枯葉の如くに左右へ辟易す。手力男、上手に瓊矛を突きて小山の如く突立ち、下手なる群衆をにらまへ

手

高ひかる 日の神 かくろひまして。
螢倣す 光りも 照らさずなりて。

谷蟆の 狭度る極み。
潮沫の 留まる限り。

世を舉り 痛めるなかに
あにおとゝ たゝかふか？ おぞ！
しこめ！ おれ！ をこのしれもの！

手

聞くや 汝等？

さかし神たち

神はかり はかりまして。

安の河原に

神つどひ つどひまして。

靈し祝ひことをもちて

日の神の御怒りをば

ことほぎて 鎮めむとす。

汝等も とうまる來て

ねぎことに 言ぞへしね。

トこれにて一同怖れ畏みて拜伏す。

やをれ！ 來むや？ 來むや？
來むや？ 來じや？ 否や？ 諾？

これにて一同平なばり拜して

皆白

う。う。う。う。う。

といふ。時に篝火殆ど消えむとす。
歎く神けたしましく聲を放ちて

歎

あはれ！ あはれ！

篝 消えむ。

あはれ！ あはれ！

一同も驚き聲を合せて

一同

あはれ！ あはれ！

篝 消えむ！

と悲しげに叫ぶ。手力男きつと思
入ありて、つかくと下手なる枯れ
たる松に近づき、二つ三つゆりうご
かし、ヤと聲かけて難なく根こじと
なし、つと逆まにして其の枯れたる
上梢を篝火の中に突入る。皆々驚
く。

一同

すすまじ！ すすまじ！

すすまじ！ 靈業！！

火、松の梢に燃えうつりて、ばつと一
時に火勢揚る。手力男たちにはそ
れをもたげ起して、高くかざし

手

しるへせむ。つゞけ 神々！

と根こじの松を大炬として先にたつ。又も山鳴り震動す。

一同

あら！ 嬉し！ あら！ 嬉し！

道は見えつ。道は見えつ。

いでや いで 後へにつきて 辿らむ。

宜しく活人畫模様にて幕。

(常闇完)

喜劇 「登ろく！」

早稻田大學廿五年記念會餘興喜劇

登場人名

中山安兵衛
 小倉屋の亭主
 仕出 し 甲、乙、丙、丁、戊、△、□、×、其他
 堀部彌兵衛
 同 おかめ
 小野 梓
 山田 一郎
 太田 持資

山吹の少女
梶原景季
松尾芭蕉
在原業平並に小童
鬼子母神
子供大勢

中山安兵衛武庸、元祿好みの假髪かづら、酒に酔ひたる體にて、肩あてのあたつたる紋附をだらしなく着流し、下緒さげも無き剥げかゝつたる朱鞘の大小を落しざしにして、揚枝をくはへ、酒おくびをしながら、よるめきつゝ、場に登る。

安「うゝい！ あゝ、どうもいゝ心持に酔つたわえ。いつもながら酒でへ奴やつは重寶なものだ。天の美祿とはよくいつた。金があらうとなからうと、儘にならうとなるまいと、これさへあれば、世の中はてんとたまらぬ極樂世界だ。ふさぎの虫も宿がへをして、臆病者も強者つはものとなるわさ。ハ、ハ、ハ、強者の

交り頼みある中の酒宴かな。ハ、ハ、ハ、

と此時馬場下の酒屋小倉屋の亭主、店着前垂がけのまゝ、あとを追うて來りし體にて、だしぬけに安兵衛の胸づくしを取る。

安「だれだ〜。これさ、どうするのだよ。

亭「中山さん、いやさ安兵衛さん、どうするもないもんぢやありませんか。

安「だれだ〜。

亭「小倉屋です、馬場下の酒屋ですよ。勘定はどうして下さります。けふはど

うあつてもいたゞかねばなりません。

安「困るよ、けふは困るよ。

亭「あなたよりもわたくしが困ります。

安「あさつてまで待つてもらはう。

亭「あなたのあさつてを誰がほんとにするものですか。紺屋のあさつてのは

うがまだまだ。

安「そんならそれと取換へたらよからう。

亭「じゃうだんぢやあない、どうかして下さいまし。」

安「どうかしろとつて御當人がこの爲體だ。中々以て餘人を助けるいとまはない。目がまふく。」

亭「ともかくも店までいらつしやい。」

安「いていく。まあそこを離せ。」

と揉みあつてゐる。此うち二重下手より仕出し甲乙走り出でながら捨てりふ。

甲「何だく。」

乙「果し合だく。」

甲「どこだく。」

乙「高田馬場だく。」

乙先に、甲つゞいて二重を上手へ走りぬける。これにて平舞臺の二人は、二重を見あげ、一寸拍子抜けの體。つゞいて上手より仕出し丙丁戊、ばらばらと二重へ登り、めい々思ひくの捨てりふにて遠方を見やるこなし、思入。

丙「何だく。」

丁「けんくわかく。」

戊「果し合だとよ。爺さん一人に相手は五人だとよ。」

丁「一たいどこの侍だい。」

戊「何でも青山の松平右京さまの御家來で、菅野六郎右衛門といふお爺さんだ。」

云々。云々。

此せりふのうち、彌二馬おひく殖える。元祿明治ゴツチャなり。安兵衛は小倉屋に胸倉をとられたまゝきつと思入。

安「青山の右京殿で菅野を名宣るはたつた一人、おれの叔父貴の六郎右衛門殿

より外にはない——

亭「これさ、何をいつてゐなさるのだ。まあ、店までおいでなさいといふに。」

安「察する所相手といふは、兼て叔父貴を遺恨に思ふ村上庄左衛門兄弟にきはまつたり。こりやかうしては——

ト小倉屋の手を振離さうとしても離さぬので、手荒くれぢつて突放すと、双

方共に不細工に左右へけしとびぶさまに倒れる。安兵衛やつと起上つてをられぬわえ。

ときつとこなしをやる積りが酔つてゐるので腰はへナ〜。すぐにかげ出さうとする。此以前より木蔭に様子を窺ひをりし堀部彌兵衛、同じく女おかめ徐かに前へいで

彌「あいや。しばらく〜」。

安「何ぞ御用でござるか。如何なる御用かは存せんが、少々心せきにござれば

彌「お心せきは御尤なれども、大事の場合に襟の御用意もござらぬげなるは、心元なう存じ申す。憚ながら、まだ嫁入は仕らぬ童わらわにひとしき少女をとめが腰帶、當座の御用にお立て下され。

とおかめへこなし。おかめはづかしげに緋縮緬の腰帶を解いて安兵衛へさしげる。此うち彌二馬どもおひ〜大勢になり、とり〜の思入をして、二重から見下してゐる。

安「これは千萬かたじけない。有難く頂戴いたしまする。」

大勢「トロ〜と〜!!」

と腰帶をうけとりて身仕度をする。彌二馬連騒がしくなる。

△「おそれいつたねえ。緋縮緬の腰帶を拜領するなんて、理想的だね。」

□「おい君、頗る艶羨に堪へなからんとするねえ！」

×「頼むよ、吾人を惱殺しちやあいけないよ！」

戊「ありやおめへ、愚圖安ちやあねえか。」

丙「成程ありやあ赤鞘だせ。」

丁「よう、赤鞘、うまくやつてるせ！」

此中安兵衛身仕度を終り、すぐにかげださうとする。小倉屋氣取つて前へいで

亭「あいや、しばらく〜」。

安「まだ何ぞ御用で——」

と良を見て

安「何だ貴様か——」

亭「お心せきは御尤なれども——
安「じやうだんちやあない——

さゆきかける。亭主走りよつて小聲にて
亭「もしく。ようごすかい、あなた。レコはいつもの光ぢやあないかい。
とこれにて安兵衛はじめておのが兩刀に心づきたる思入。二三寸抜きか
けて見て

安「あ！成程さうだ。こいつあどうも——こいつあ、こいつあ——

と頭をかへて俄にしよげる。小倉屋氣の毒がり、そつさおかめに手眞似
で、おとつさんの刀を貸してやつてくれとさゝやくこと。おかめ心得て同
じく手眞似にて彌兵衛にさゝやく。此うち彌二馬ごも二重をおりて、安兵
衛らの後ろに集り、何事かと不思議がり、同じく手眞似をして耳こすりする。
此所二十五座式のこなし。そのうちに彌兵衛は自身の大小を抜いて徐か
に安兵衛に近より

彌「苦しからずばそれがしが差料粗末なれどもお使ひ下され。
安「いやどうも、面目次第もござらん。——しからは暫時借用いたすでござり

ませう。

トおしいたゞき、會釋よろしくある。此うち彌二馬連。

西「おい／＼お爺さん、だめだせ／＼。愚圖安に貸しちやあ返りつこはないよ。

戊「やい赤鞘、相かはらず大小まで飲んちまつたのだな。その大小は光かい。

え、竹光かい。

これにて安兵衛むつとしたる思入。

安「何だと？無禮者めが。大小は武士の魂ぢや。どこに飲む奴があるか。

戊「あらあ、そこにあらあ。飲まんのなら、見事抜いて見ろい。

大勢「さうだ。抜いて見る、抜いて。

安「抜かなくてどうするものだ。

といひながら、もぢ／＼してぬる。

西「そらどうだ。抜かれなからう。

大勢「ざまあ見ろ！

さ笑ふ。

安「何を。」

こ手早くすりかへ、彌兵衛に借りた奴をスラリと抜く。

大勢「そら抜いたわ！」

と皆々ばつと下手へ逃げのく。安兵衛刀を取直し、じつと見つめて思入。

安「げに音に聞く村雨の寶劔、抜けば玉散る露か雫か。焼刃のにはひは空に虹
蛭の引くが如く、地に清泉の流るゝに似たり。豊城三尺の氷、吳宮一函の霜。
神龍ために雲に吟じ、鬼魅この故に夜哭かん。今圖らずして此名刀の我手
に入りしは多年の本懐、遂ぐべき時節の到来せるか。あら喜ばしや、心地よ
やなあ！」

と一ふり二ふり揮り試ると、下手の彌二馬連聲を揃へて、馬觸るれば馬を斬
る！」と吟聲。安兵衛つい釣込まれて劔舞一番舞つてしまふ。

大勢「チエスト!!」

安兵衛ふつと心づき

安「え、そこどころぢやなかつたんだ。」

と又氣込んでかけ出さうとする。と此うち小野梓、山田一耶羽織袴にて上
手より登場し、安兵衛の行きかけるなとむることをよろしく

梓「顔の色をかへて君はどこへゆくのだ。」

山「假裝行列にでもゆくのか。グロテスクな扮装だね。」

安「どうして、そこどころぢやないのです。僕の uncle が今現に duel をやつ

てゐるんですから助太刀にゆくのです、助太刀に。氣がせくから通して下

さい。とほせんぼうなんかしちやいけません。」

梓「君は夢でも見てゐるのぢやあないか。けふをいつだと思つてゐるのです。」

安「知れたことさ、元祿九年三月……。」

梓「それだから困る、さう時勢に後れてゐるから困るよ。」

トいひながら大勢に向ひ

諸君。エ、諸君は知らずや、そもく、本日は——

維れ時本朝紀元二千五百六十有七年、明治天皇陛下の第四十年、すなはち廿
世紀の劈頭第七年十月廿一日、我早稻田大學創立廿五年の記念大會を兼ね

て、本校の恩人大隈伯爵閣下の銅像除幕式を行ふ其當日であるといふことを知らないのか君らは。

とこのうち安兵衛の一連は皆々呆れ驚くこなし、思入。

安「え、廿世紀！」

彌「早稻田大學の記念會！」

おかめ「大隈さんのお銅像の除幕式！まあ！」

安「おどろいたね！」

彌「膽がつぶれたね！」

安「あきれたね！」

おかめ「あきれてよ！」

とこれにて樂座にて浮いたる樂。次第に乗つて歌になる。

安「あきれて——」

彌「たまげて——」

皆々「たまげてあきれ、たまあけてものはいはあれないよ。」

大勢「そかよ——そかよ——そかよ——」

と皆々釣込まれて一寸踊りがへりになる。此れより先山田一郎前へ進み

山「諸君。々々。——」

と演説口調にて呼掛ける。皆々耳に入らず踊つてゐる。彌兵衛と梓とにてやうくしづめる。

山「満場の諸君。え、げに真心の赤穂なる四十七士に名も高き元祿の年間よりかく明らけく治まれるなる聖代までは、かゝなふれば二百二十餘年、取りも直さず十七世紀より廿世紀へ一足飛に進化したるも同様の大珍事に候ふからは、千早振てふ神代にも例へを聞かぬことでありまする故に、諸君のウオンダア、ソルブライズが彼の水の江の浦島が子の古事にしも似たるべきは、敢て異しむにも足らぬ次第と考へます。え、——つらくおもんみるに、不肖山田一郎が嘗て當早稻田専門學校の去來今を論じましてより、日未だ深しとは申しがたいこととござりまするに、早く既に今日の如き隆運を目撃するに至りましたるは、小野梓先生と共に、不肖一郎が真に衷心の悦

びを禁ずる能はざる次第の譯柄にござります。え、――
梓、おい、山田君、まあ待つてくれたまへ。君に演説をはじめられては、少くとも二三時間は啞になつてしまはなければならんから、先づわが輩に少し物をいはせて下さい。

これにて一寸押問答の末山田退く。梓正面へす、み、見物一同に向ひて

梓、諸君。想ひ起す二十五年以前、予が本校の恩人大隈伯閣下の知を蒙り、又諸君の許す所となつて本校の評議員に列し、微力を傾けて私立専門學校の創設に従事いたしましたのは、蓋し先づ學問の獨立を全うして以て國民が精神の獨立を確めんと望んだからである。今や紅海以東獨立國の體面を全うし自國の旗章を掲げ得るものは、寥々乎として眞に曉天の星の如くであります。印度は已に亡びて英國に屬し、瓜哇は其制を荷蘭に受け、暹羅は其命を英國に聽き、安南も亦疲れて佛蘭西に歸する等、漠々たる亞細亞大陸の廣き、能く獨立の體面を全うし、獨立國の旗章を翻す者は、唯り日本と支那とのあるのみで有ます。我日本の任務は實に重且つ大であるといはん

ければならん。予が不學短識を以てしては、恐らく微々として何の補ふ所もなかるべきを思ひながらも、常に熱心と勉強とを以て我が専門學校の事に従ひたりし所以のものは、此任務の重且つ大なることを信じたからであります。今日御來會諸君のうちには、定めし尙其記憶の新たなる方々もあらうと思ふことであるが、當時は政波黨瀾の澎湃たりし折柄とて、政治上、社會上、經濟上、種々の方面に種々の障害があつて、或は誤解、或は猜疑、或は異論、或は分離、種々の煩累のために妨げられて容易に意の如く行動する能はざる次第でありまして、當事者の困難は、到底今人の想像し及ばぬ所であつたのであります。予や不幸にして我が専門學校がまだ其生存の苦闘を辛うじてつゞけつゝある其半途にして世を辭しました事ゆゑ、世を辭する當時までもかく神速に我が校が隆運に向はんとは豫想し及ばなんだことでもあります。然るに僅々二十有五年にしてかゝる大典を擧ぐるを得るに至れるもの、一は是れ時運の然らしむる所といふべきではありませんが、主として二十五年一日の如き大隈伯閣下の教育に對せらるゝ熱心、本校職員

諸君が終始一貫の熱誠と勤勉、校友諸君を始め、海内好學の諸君子が本校に寄せられたる深厚なる同情、有形無形の贊翼の力たることは梓の堅く信じて疑はざる所であります。勿論今日を隆運といふは、其志す方向に就き得たることを祝賀する餘りの言葉でありまして、吾々の眞の冀望よりいへば、今日の早稻田大學は纔に生存の苦闘を脱し得たるに過ぎぬのであります。前途は尙迢々乎として遼遠であるのである。併しながら我愛兒が單に健かに生長して纔に小學程度の學業を卒へたるを見てさへも親心としては喜びを禁ずる能はざるが人情といたしますれば、今や舊の早稻田専門學校が生年二十有五齡に達して、名をも早稻田大學と改め、意氣正に軒昂進取邁往の精神の勃々として全世界をも吞吐せん概あるを見られたる恩人大隈伯閣下、當局教職員諸君、校友、校賓、海内無數の同情者諸君の衷情は、蓋し察するに餘りあるのである。予は此式場に臨んで殆ど喜びの涙を禁ずる能はざる所である……

と語俄にとぎれて思入よろしくある。女連涙をぬぐふ。これより先仕出

し甲乙其他上手より來り集る。

皆々「小野さん萬歳!! 小野先生萬歳!!

此うち下手にて新曲「太田道灌」の前奏を弾じはじめる。

山や。大ぶ和洋折衷式に陽氣になつて來た。やあ、何かやつて來るやうだね。皆々「やあ、美人だ」。萬緑叢中一點紅だね。こいつあえらいや。ほんもの

と此うち曲につれて太田持資、先に、山吹の少女下手より登場し、振ふるしくある。

曲露の身ながらおきかねて、きゆるや思ひなるらん。うらぶれし我が世はてなき武藏野や草のやどりも安からぬ風に戸塚のはなれ里。

と收まる。このとたん、上手より梶原景季、甲冑姿、松尾芭蕉道行ぶり、在原業

平東下の扮装小童をつれて登り來り。梶や、だれかと思つたら、君は太田持資君ですね。持や、梶原君も早稻田に縁故があるかい。

梶「え、あるのだんぢやあない。右幕下頼朝公がある處へ進軍の時に、高田馬場で陣備へをしたんです。僕の駒つなぎの松てへのが石黒さんのところにあります。

持「さる處なんかは怪しいね。あてにならない話だ。ハ、ハ、ハ。それにしてもいかめしいなりだね。それぢや振がつきさうにないぢやあないか。

え。

色にはなまじいつれば邪魔——

樂座「ひとり魁け功名せんと駕籠にも乗らず只一騎生田の森の柵ならで——

と樂座にて語り出す。樂を奏しかける。梶原ついで釣込まれて踊りかける。

梓「これく、またはじめるよ。暫時中止々々。時に持資君、その美人は？」

とこれにて山吹の少女前へいで

吹「山吹の里の賤の女でございます。何分よろしう。

山「ぢや貴嬢ですか、今度「ハムレット」のオフィリヤをやるのは。

持「あ、これ、山田先生、そんな樂屋をすつばぬいちやあいけませんよ。極密極

密。

安「小野先生、芭蕉の宗匠を御紹介いたします。

芭「え、はじめまして。

安「これが山田一郎君です。

と皆々に挨拶すること。業平も同様間に合せのせりふをいふ。此うち又

下手にて「校歌」の譜を奏する。

持「や、また何かやつて来ましたよ。

亭「ありや多分早稻田小學校か何かの生徒でございます。あれく提灯行

列をやつて來まさあ。

とこれにて過半數は二重へ登り、向うを見おろすこなし。此うち「校歌」につ

れて雜司ヶ谷の鬼子母神貌は頭巾にてかくし、先にたちて男女の子供をひ

きぬ、踊りながら登り來る。子供大勢皆大學の紅提灯を持つ。登りをへて

又一しきり踊る。なさまると

皆々「やんやん!!

亭「小學校の先生かと思つたら、さうでもないやうだ。お前さんはどなたです。

鬼御免なさいまし。わたしや雑司ヶ谷のお神ですよ。

と頭巾を取る。

皆々いよう!!

と驚く。持資鬼子母神に向ひ

持「だれかと思つたらお前さんは——あの——」

皆々「お鬼子さんだね!!」

鬼「皆さん、まことにお久しぶり。ふだんはね、ついもう手前にかまけまして、御

ぶさたばつかし。今日は格別なんですから、御近所づから、子供らに提灯行

列をさせてお祝ひに上つたのですよ。

梓「いや、これは御丁寧に。」

持「大ぶ踊がうまかつたから、僕はまた町内の師匠でいもあるかと思つた。

安「ついでに、何かもう一つ踊つちやあどうだ。」

大勢「賛成々々。」

鬼「よいかげんになさいよ。この貌でいざと改まつて踊れるもんですかね、二

十五座ちやあるまいし。馬鹿々々しい。

持「二十五座ちやあるまいし馬鹿々々しいは、一寸揮つたね。ハ、ハ、ハ、ハ。」

安「さうさ、君の洒落よりはました。」

持「これや恐れ入つた。ハ、ハ、ハ、ハ。」

梶「やりたまへ〜。踊りついでだね。やりたまへ〜。」

鬼「だつて、まさか一人ぢやあ——」

持「一人ぢやなら——おつとある〜。この先生、々々々。」

吹「あらいやよ。わたしにやあ出来ないことよ。」

持「そんなことをいふもんぢやない。さあ〜オーケストラ。はじめたり〜。」

とこれにて樂座にてチントンシャンと「舌出し」を引きはじめ。梶原、持資、山吹と鬼子母との辭退するを中央へ引っぱり出し、かれこれ争ふうちに二人振になる。

曲「花が咲きそる黄金の花が、てんこちない今を盛りと咲きにほふても、さつても見事な黄金花、ほしいかおまじよぞ一枝折りて、え、ぞりや

たれに、いとしい少女のかざしの花に、ほい、やれ戀の世の中、いつ戀の世の中。

とをさまる。拍手。

皆々「やんや〜!!

梓「愉快ぢやつた〜。

といひながら小野梓一人だけ前へ進み、やがて斜に皆々に向ひ

梓「諸君! —

とこれにて皆々拍手する。

梓「諸君よ、此愉快なる式場に臨んで、特に再び繰返して申しおくことがある。今や我早稻田大學は著しく發展したとは申すものゝ、それは畢竟するに、比較上の沙汰で、我々の理想からいへば、纔に無限無窮なるべき階段の其一二段を登りをへたに過ぎるのであるから、諸君はあくまでも自愛し自重して、尙遠き將來に向つて、永く攀登の大努力をつゞけんければなりませんぞ。

山田「ヒヤ〜! —

皆々「ヒヤ〜!!

梓「麓から仰いだ時には雲に冲るとも見えた東洋第一の富士の高ねも、登り盡

して見れば、纔に昇天の第一階たるに過ぎるのである。

山田「ヒヤ〜!

皆々「ヒヤ〜!!

梓「ねがはくは我ともがらをして長へに高きに登らしめよ。

皆々「ヒヤ〜!!

梓「また此無限の精進をつゞくるためには、願はくは我ともがらの齡をして其最も低き度合に於ても、尙百二十五歳を下らしむる勿れ。

皆々「ヒヤ〜!!

梓「しからは先づ恩人大隈伯の齡をして萬歳たらしめよ。

皆々「大隈伯萬歳!!!

梓「校友校賓の齡をも萬歳たらしめよ。

皆々「校友校賓諸君萬歳!!!

梓「我早稻田大學の齡をして千萬歳たらしめよ。

皆々「早稻田大學千萬歳!!!」

梓「大日本帝國をして萬々歳たらしめよ。

皆々「大日本帝國萬々歳!!!」

梓「しからば我ともがらをして長へに美しく、長へに健かに、長へに遠く、長へに

高く、高く、高く、更に高く登らしめよ。

持「しかり、登らしめよ。登れ——」

皆々「登ろ——」

持「登れ——」

皆々「登ろ。登ろ、く、く、えい——」

と樂座にて歌ひはじめ。皆々曲につれて踊る。

曲「登ろ、く、く、えい、登りをへては、富士の高ねもさて低いものよ、う、ほし、や

あの星とつてたもれよ、や、手にとるまでは登ろえ。

と踊りをさめると

梓「諸君よ、あんまり踊つてゐて時刻におくれてはならん。さあ、揃つて提灯行列。提灯行列。」

と樂座にて又「校歌」を歌ひ且つ樂を奏する。一同これにて提灯を捧げ、踊りながら徐かに場を下る。

希臘古代の演劇に就いて

四十年七月「能樂」の爲に

古代希臘の演劇と我能樂とは、双方とも大切な國家の式樂で、最初から國教に因んだ樂劇で、普通に謂ふ劇とは違つて、頗る尊まれ重んぜられたものであるといふ點に於ても、假面を用ふる劇であるといふ點に於ても、中々進歩した劇でありながら舞臺面一切が近世の劇のやうに油繪仕立即ち寫實式ではなくて、彫像式即ち理想式であるといふ點に於ても、又其の樂器や旋律や拍子や舞や科みづりや介こやしやが比較的單純簡樸であるといふ點に於ても、大ぶ似通つてゐる點が多いらしく、隨つて此の二つの者の比較研究は西洋の古代學者等の考へ及ばない點を發明するに至る一機縁となるまいものでもないやうに思はれるので、現に能樂研究會創立の砌にも會員中に既に此の意見があつて「希臘劇との比較」といふ一題が研究課目中に加へられたのでありましたが、何分にもめ

いゝが多忙で手が廻りかねるのと、二つには餘りに唐突では手の附けやうもないのとで、今日に至るまでは何等の緒も發かれなかつたのであります。併し古代希臘と日本との關係は單に演劇上ばかりではない。日露戰爭以後の我が國は二十世紀の希臘といつてもよいほどの名譽ある、希望ある新興國、地位といひ、閱歷といひ、境遇といひ、風俗、宗教、文學、藝術、種々の方面から見ても少相通ずる所があつて、古代希臘の事蹟を調べておくことは、我々其のために必要な事と思はれます。西洋では十八世紀以來熱心な研究が續けられて、今では古代希臘に關する著述はそれだけでも一つの圖書館が出来る程であります。我が國では雜誌に見えた一二の論文と哲學上、道德學上の或著述との外には、恐らく希臘古風俗に關したるものなどは一も出版されてゐなからうと思ひます。これは大きな手落ではありますまいか。それは何れにもいたせ、右様な有様では迎もゝ詳しい比較研究などは何事に關しても出来たものでない。せめて其の緒を供するために、古代希臘の演劇だけに關してなりとも誰れか、口を切つたならばよからうと思ひます。で、私は希臘學者でも

何でもなく、其の任でないのは勿論なれども、誰れか、露拂をせねば事のはじまりやうがないから、假に此の雑誌の讀者諸君はすべて此邊御不案内であると思ふと見做して、ほんの一應のお話を試みるのであります。いづれあとから専門家の研究が出るでもあらうし、又是非出していたゞきたいものと豫め願つておきます。

希臘の演劇に幼年期、青年期、壯年期、老年期の四大別があるものとすれば、幼年期は、能樂でいへば室町以前、青年期は東山以前、壯年期は徳川時代以後などに比すべきでありませう。幼年期の事は學者の取調もまち／＼であるのみならず、今尙半以上臆測沙汰でもあり、殊に本誌の讀者諸君には餘り面白くもありませんまいから省き、今日は主として青年期、壯年期の状態を述べて見ませう。

青年期と名づけたのは基督紀前第五世紀以來のこと、今からざつと二千五百年もむかし、當代の露國ともいふべき彼のペルシャ王國の大軍が天津浪の如く希臘に押寄せた時分の事で、恰も我が日本海の大捷に比すべき彼のサラ

ミス灣頭の大勝利を経てアセンス共和國が中央希臘の盟主となり、國威内外に發揚し、「希臘の眼」と仰がれ、藝術の母と崇められ、歐洲文明の大源を開いた時分であります。そのころアセンスに在つた劇場は一種の國家的建設物で、譬へば今日の獨逸の劇場、彼のドレスデンやマンハイムなどのそれらの如く一國の名譽となる建物であつたと同時に、宗教上の必要なる建築物でもあつたので、決して他國の演劇場の如く單に娛樂の場所とのみは見做されなかつたのです。其の本來をいへば希臘の神祇の中の最も陽氣な神、即ち酒を司り、青春を司るダイオニシヤス(バッカスともいふ)を祭るために一年四回の大祭があつて、其の都度歌舞を催す習慣であつたのから、段々盛んな演劇が催さるゝやうになつたので、明かに一種の宗教的儀式であつたのです。で祭日以外には決して催したことはなく、最初は只歌ひ且つ舞ふ位にとゞまつてゐたのが、多少我が能樂と相通するやうな進化發達を経て、聲を揃へて大勢が謠ふばかりであつたものに、我が能のに似たる白が加はり、シテ、ワキ、ツレなどに相當する役別も生じ、立派な作家が幾人も出て、脚本の筋立も複雑になり、竟に壯年期

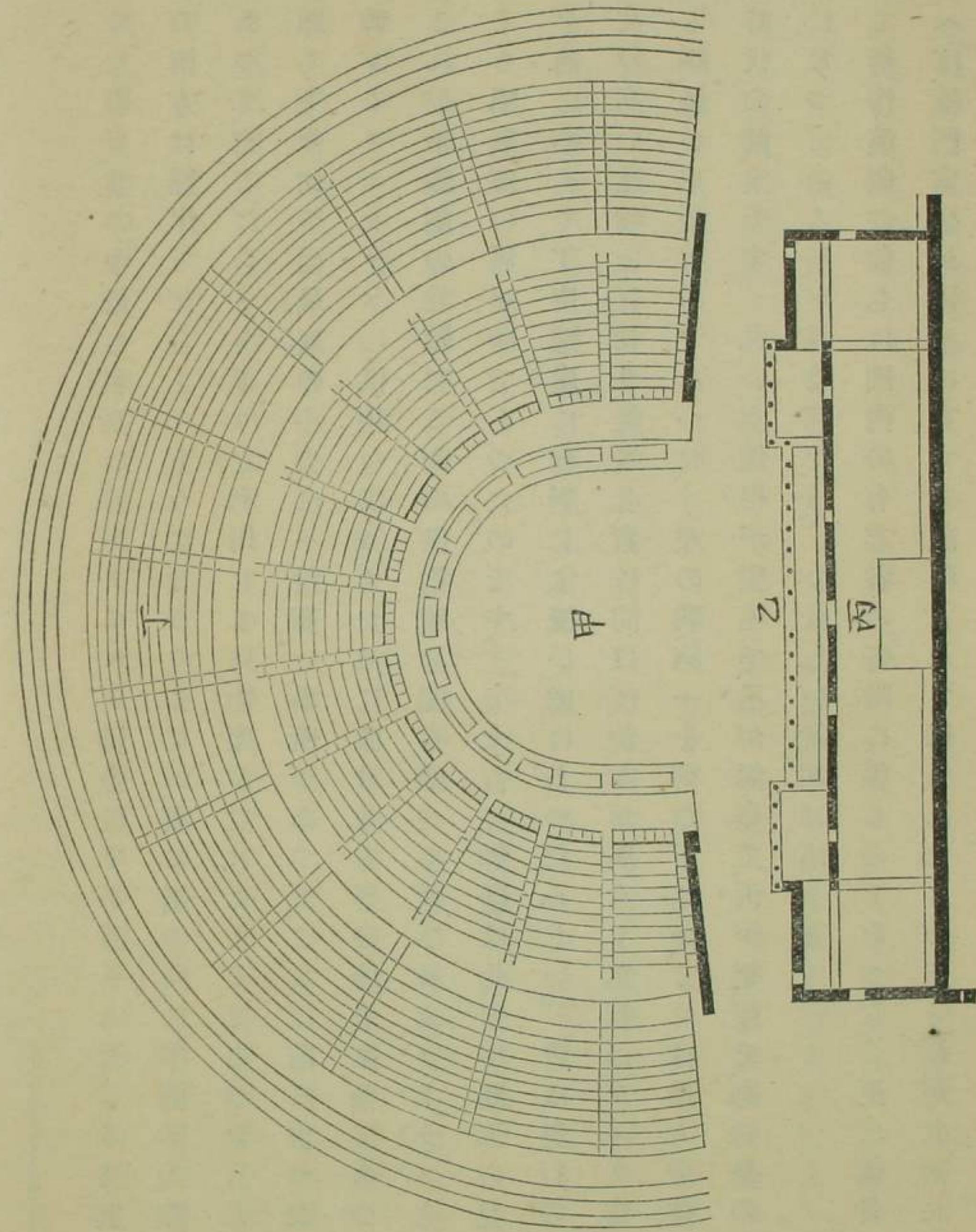
の全盛、老年期の精緻爛熟を致したのである。催しは三日間位が通例で、同じ脚本を稀には繰返して演じた例もあつたが、それさへ決して同じ年内には行はないといふ恒例であつたから、年々歳々幾篇となく新作即ち新曲が出来た。一脚本は大抵一時間半位に演じ了つたので、取換へ引換へて朝から晩迄に興行した。見物人は全國民、といつたところでアセンス國は御存じの如く一市府たるに過ぎんから、多くて三萬人、行政官も行けば將校も行く、立法官も行けば神官も學者も文人も美術家も商工も貧民もといふ風であつた。

其やうに大勢はいる劇場はどんなであつたかといふに、最初即ち幼年期は甚だ質素なもので、見物席は無、論青天井、段々高く設けた席とても甚だ粗末な棧敷式の木造であつたものらしいのが、紀元前五百年頃から見物席も舞臺後の建物(即ち樂屋)も堅固なる石造に造り直すことに着手し、何でも三百八十年頃よりは最早大ぶ立派な劇場が成立つてゐたといふことです。右の劇場の在所はアセンスのアクロポリスといふ城塞内で、これはアセンス市の一方に當つて高く聳えゐた丘陵で、そこにはアセンス人が崇敬せる種々の神祇の殿堂

があつたので、其の中最も名高いのがミネルワ神の社でありました。さて其の社の南方は懸崖でだら／＼下りになつてゐたが、其の裾の所に半圓形の劇場があつて、右のだら／＼下りを利用して見物席を設けたものであつたらしい。即ち下り切つた最底ばんぞの中央に一段高い場所があつて、こゝに前に言つた酒の神ダイオニシヤスに供物を供ふるために設けた方形の壇が据ゑてあつた。これが希臘劇の骨髄たる(此の供物壇を圓く廻つて歌ひ舞ふ)コトラスと名づくる唱歌班の居場所であつたのです。で太古の舞臺は此の半圓形の見物席を前に控へて丁度懸崖に相對して低い處にあつたらしい。背は奥行の浅い、丈の高い建物で見切り、舞臺其者は間口ばかりが廣くて奥行はヤハリ浅く、頗る細長い形のものであつた。左の圖(第一)を御覽下さい、これは最も發達した時代の圖案です。丸い空地甲が樂座で、乙が舞臺で、丙が樂屋で、蜘蛛巢のやうになつてゐる所が見物席です。くはしい説明は省きます。

總じて新作演劇の催しは國內の有志者の寄附に係るのであつた。更に露骨に言へば、權門富豪が國家に對する義務として舉行したもので、それがために

第 一 圖



年々税を課せられたのであつた。脚本の如きも寄附者中にそれ／＼の團體があつて會議の上を選定する習はしであつたといふ。又一切の費用も右の有志者國內の富豪の負擔であつたといふ。衣裳の新調、新曲の節附、其の他には富豪等互ひに我れ劣らじと競争して善美を盡さうと試みた。いはゞ今日事あるに臨みて軍艦費を寄附するなど、殆ど同格の言はゞ名譽ある喜捨と見做されてゐたらしく思はれます。かくて一日の催しが濟むと、其の都度劇の優劣を判じ、最勝者には賞を與へ、殊に作者には最大の名譽を與へ、薦の鬘を作つて其の頭を飾り、其の功を讚美するなどの習はしがあつた。勢ひかくの如くであるから、脚本の作者らは、恰も我が國の力士が回向院の五月場所を先途と息込むが如く、何卒最勝者の名譽を博したいものと肝膽を摧き、盛んに競争をしたもので、アセンス全盛期には世界の大詩人の中に數へらるゝやうな作者が前後相ついで四人までも輩出した。

劇の成立が成立ゆるアセンスでは作者や俳優を賤しむなどいふことは更になかつた。むしろ宗教上是非なくてはならぬもの即ち一種の神官のやうに

も見倣してゐた。随つて作者も俳優も皆立派な市民どころではなく市民中の最も尊敬されるもの、一つであつた。現に最も古くして最も傑れた一人と見倣さるゝ作者エスキラスの如きは、貴族の血統で、古武士の典型とまで崇められた人で、文武兼備の紳士で、古今有数の詩人で、彼のマラソンの激戦に於ては、大手柄を現はした武人で、多才多能で、謹嚴方正で、剩へ自作の脚本を自ら立つて演ずるの俳優でもあつた。それから又彼の希臘のシエークスピアといはれるソホークリーズの如きも、身心共に健全な人で、當時の許す限りの十分の教育を受け、十六歳の時に彼の日本海の大捷に比すべきサラミス灣の海軍大勝利の祝祭に唱歌群の舞班中に選み出されて之れを勤め、二十六歳にして老詩人エスキラスの競争者となつてダイオニシヤス祭の作者となつて第一等賞を得、一擧して大名を全國に知られたので、さすがのエスキラスも之れがために意氣沮喪して竟に退隱してしまつたとまで傳へてある。ソホークリーズ作の脚本の今に傳はつてゐるのは存外に少數なれども、もとはは一百篇からあつたといふ事です。このソホークリーズがまた、一方に於ては勇敢な

武士でもあり、政治家でもあつたので、現に時の大政治家ヘリクリーズなども交はつてゐた。俳優としても慥かに技倆のあつたとは前に申した十六歳の時の事蹟に徴しても明かだが、只聲量が不足で音吐が妙でなかつたので、科白の役者たることを断念したといふ説が傳はつてゐます。

といつたやうな譯で、希臘の古劇はまづ、我がいにしへの能樂同様、殆ど神聖といつてよいほどに崇められたものであつた。さてお話が大ぶ雜駁になつて來たが、私の本意は成るだけ手短かに希臘劇の成立と仕組のあらましとだけお話申しておいて、早く文學としての作の性質に移りたいといふ點にあるから、大體に關する説明の多少ごたつくのは止むを得ないことゝ御容赦を願ひます。

さて前にも一寸申した如く、エスキラス以前即ち幼年期の希臘劇は、言はゞ我が室町以前の能などに比すべく、尙甚だ單純なもので、聲を揃へて歌ひ舞ふコーラス組の歌舞が眼目で、白らしいことを言ふものはホンの附けたりで、役者も只一人のみであつたが、エスキラス出で、名作を出すに至つた後は、作が複

雑になつた必要上から、いつしか白セリムを言ふ役者が二人となつて、其の問答が劇の主眼となり、コーラス組の歌舞は寧ろ二の町の位置を占めんとするに至つた。役者は二人と申したものの、脚本面には人物が三名も四名も出てゐる。があるが、其の場合には右の二人のうちで早代りをして勤めたといふ事である。それから又暫くして又一人を増し、恰もシテ、ワキ、ツレといふやうな名目まで出来た。それからコーラスは、初期即ち歌舞を本領としてゐた時分には五十人も一時に歌舞したことがあつたが、追々減じて、先づ通例は十二人で、三人づゝ並んで練り廻るのが定例。其うちの音頭取は所謂俳優即ちシテやワキと問答を交へる役を勤める習ひであつた。

此のコーラスといふものゝ劇に於ける職務はといふと、是れも期と共に變遷したのであるが、大體を言ふと、我が能樂の地謠や淨瑠璃樂の地にひとしく、筋を賣り、劇中人物の行爲について善惡邪正の批判をもなし、見物に對して隱然教訓を與へ、或はまた頻に悲喜哀歎して以てシテ、ワキなどに對する見物の同感を鼓吹することを勤めた。只我が地方ちかたと異なる所は、男が十二人出ようと

女が十二人出ようと、何れも毎に劇中の人物で、或は僧侶群、或は農夫群、或は少女群など、劇中人物と同時代の群衆を代表し、何れも役に適した假面を被り、扮装もまた略ぼつそれに相應した好みといふ鹽梅であるのみか、始終シテ、ワキ、ツレ等の言動に呼應して、或は反感し、或は同感して一齊に歌ひつゝ廻りあるき、最も感興の高調に達した場合には喜怒哀樂の感情を舞の手振に表出することを力めたのである。これは所謂表情、舞踏といふ種類の舞踏で、今の西洋ダンスなどに似たよりは寧ろ我が能の手振又は所作事の或手振に似たものであつたらうと思ふ。

さて歌ふには音樂の伴つたことは無論なれど、音樂の事は先づは臆測沙汰に止まつて十分に確かなことは傳はつてゐないのみならず、これは私などの辨じ得る事柄ではないから、わざと省くことゝするが、かく音樂の本質が明かでない位ですから、随つてどんな風に歌を歌つたのやら、如何やうに舞つたのやらも、同じく精確には分らない。多分我が能樂の謠ひかたや俗曲のそれなどに似た單音式のものであつたらうといふことだけは略ぼつたしかです。

第 二 圖



さて白を述べる俳優は如何なる扮装であつたかといふに、何れも頭からすつぽり被るやうに製してある假面を被り、木で造つた高い駒下駄程の繼足を穿き、それから其の役々に相應した頗る立派な衣裳を着て舞臺に現れたもので、人物は大抵希臘の神話に因んだものであつた。で神祇みづからも現れるが、人間とても普通の人間ではなく、善惡ともに理想化せられた人物、神祇に類する人間ばかり。蓋しかく繼足までして巨大に粧ひ做したのは、三萬人からの見物が遠方から見てもよく見えるやうにといふ必要から起つたことでもあつたが、一つは人間以上の人物に扮するのであるから、かく巨大に粧ふことが必要であつたのであらう。どんな扮装であつたかは管々しく申すよりも畫のはうが早分りゆゑ左の挿畫を御覽下されたい。これは何れも悲劇の人物です。



假面の種類は或希臘學者の説によれば、悲劇我が能に比すべき眞面目のものが、二十八種、喜劇我が狂言に比すべき道化たるものが、老人の面六種、若き男の面八種、女の面十一種、奴僕、面三種とある由。尙此他に狂言には鳥獸の面に擬した可笑しい面が數十種あつたといふことです。圖を御参考下さい。

假面は金屬製といふ説と、さる木皮を以て製したといふ説と粘土製といふ説と三種あるが、木皮のがどうやら多く用ひられたらしいといふ。それから舞臺面はどうであつたかといふに、最初は何の粧飾もなく、只前に言つた供物壇が中央にあるばかりで、全く我が能舞臺式であつたらしいが、青年期以後にはおひく背景を用ひ、仕掛をさへ用ふるやうになつた。しかし何分にも奥行の浅い横長の舞臺の事ゆゑ、背景といつても只一面の社殿の景とか城塞の景とかを見せたに過ぎなかつたものらしい。さりとして粗末ながら我が中乗に類する仕掛もあつて、之れを雲中から神が出現する場合などに用ひた。又後年にはセリアゲの仕掛もあつたらしい。又別に押出し舞臺とい

圖 六 第

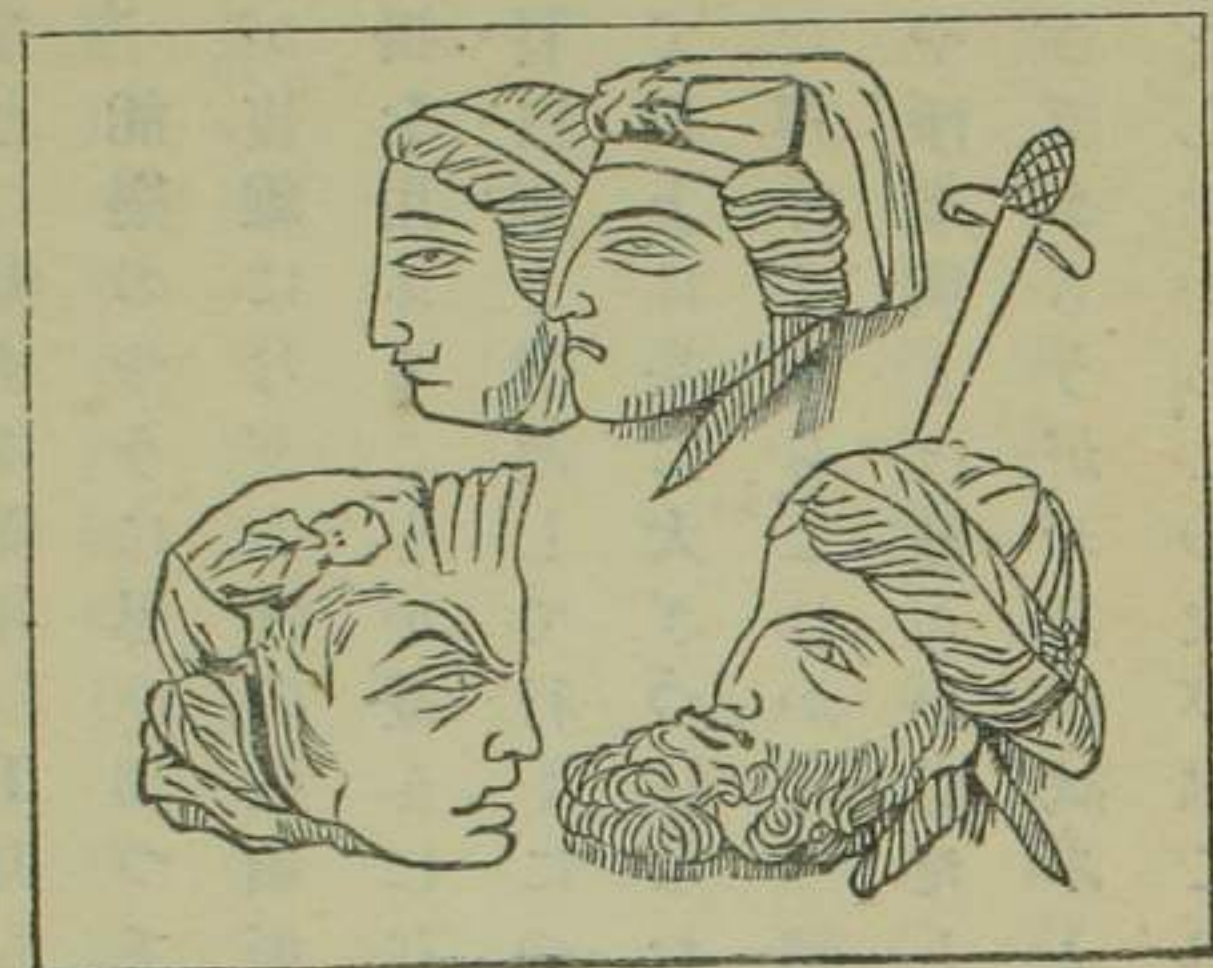


圖 七 第

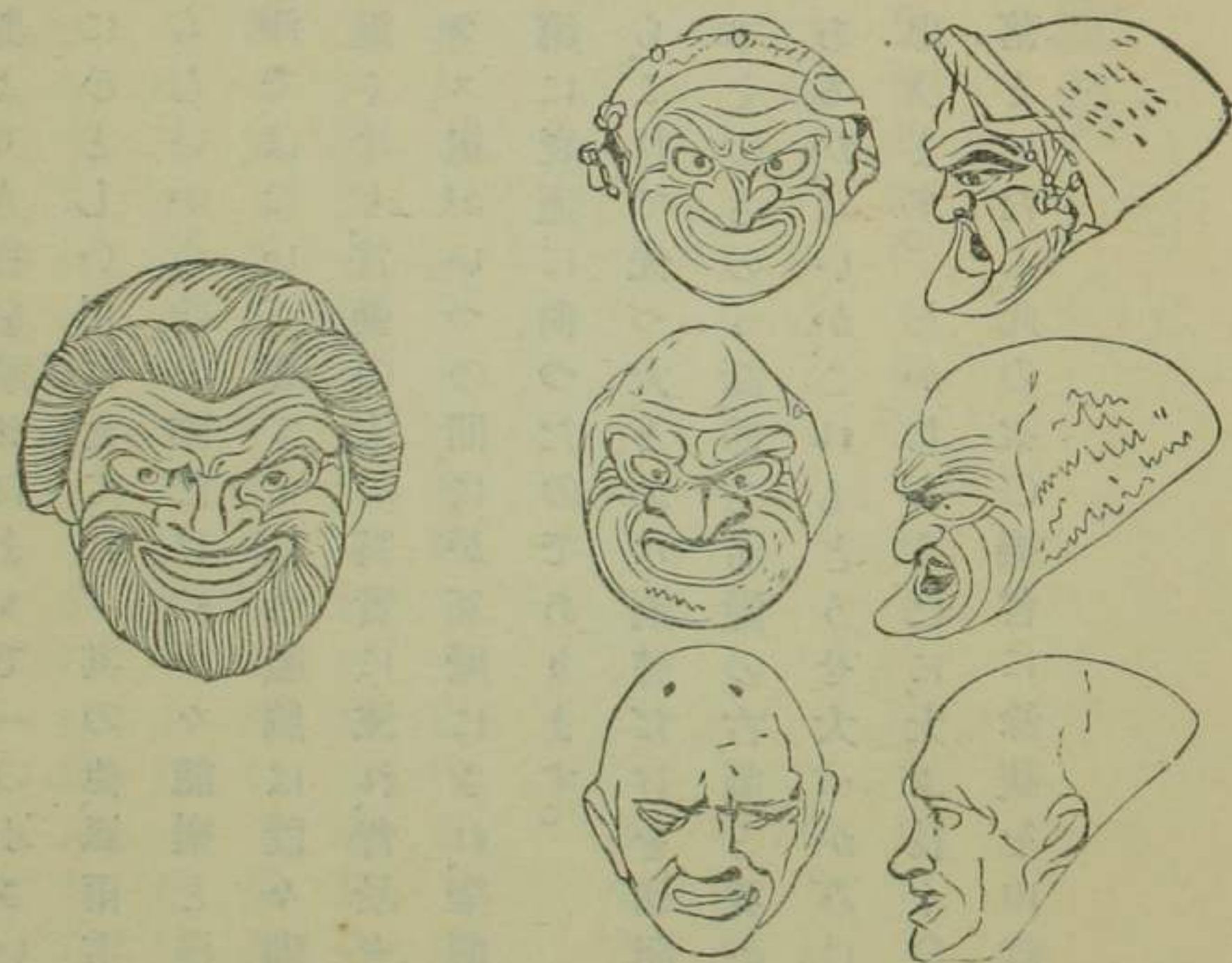
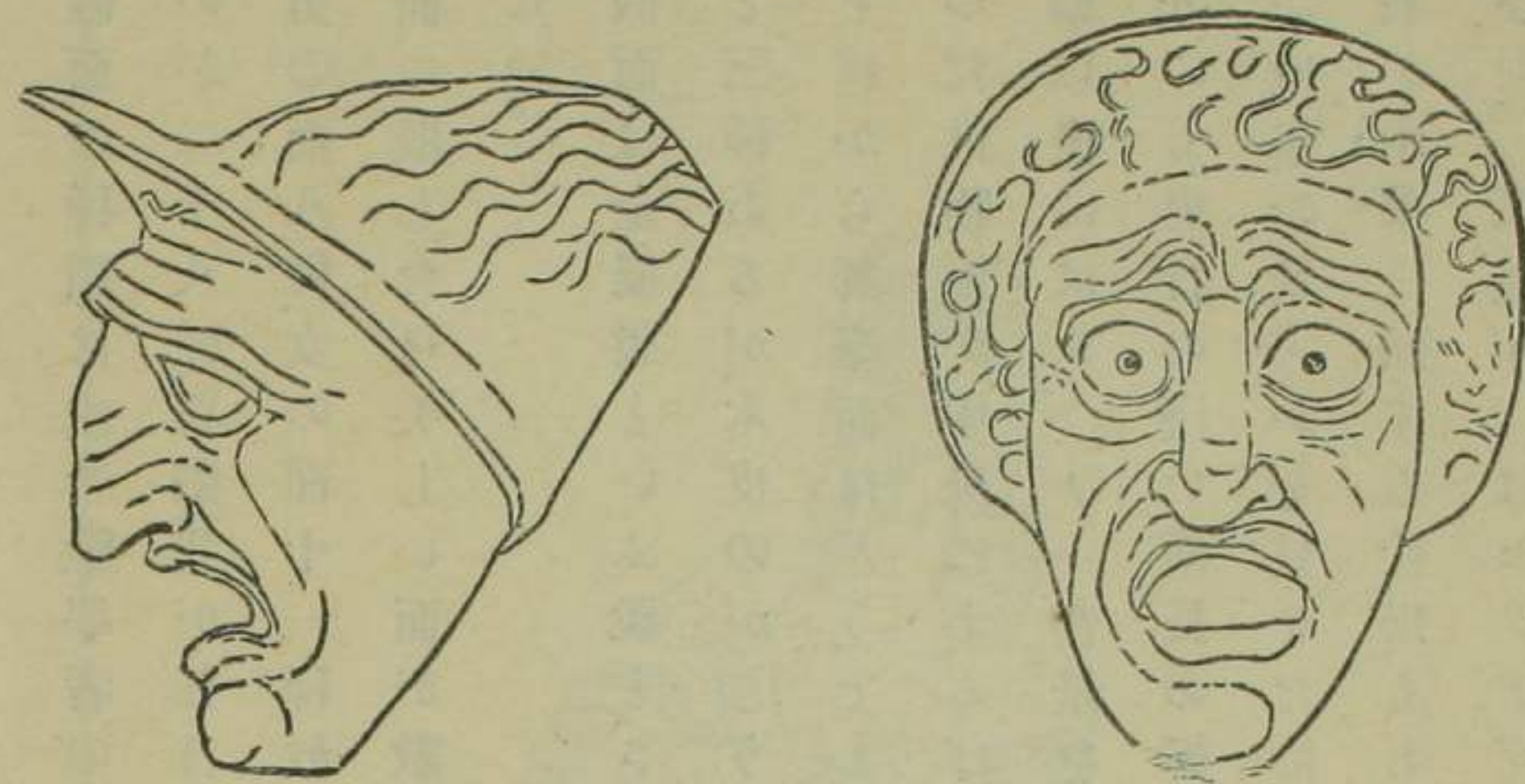


圖 四 第



第 五 圖



ふものがあつて、正面を左右へ開いて奥より人物を載せたまゝで一の小さい舞臺を押し出し、我が歌舞伎の廻り舞臺にひとしい用に充てた。その他、風雷雨電などに擬する噪音の工夫もあつたらしいから、此の點だけは少々能樂と違ふ。能樂のやうに思ひ切つて淡雅簡淨ではない。要するに希臘劇は段々脚色が複雑になり、人物の種類が凡人に近くなり、言動の末が寫實に流れ、背景や仕掛を用ふることが盛んになり、コーラス組がいつの間にか邪魔にされ、樂劇が科白劇と變遷して行くにつれて次第に衰運に向つたのであります。さて以上は甚だ大ざつばなお話ながら、これで先づ大まかな荆棘だけを切開いた譯ですから、これから一轉して脚本そのもの、話、即ち希臘の古劇と我が能や淨瑠璃とは幾らか似たところがあるかないか、これもどうせ大づかみになるであらうが、お話を試みようかと思ひます。しかしもう已に大ぶ長くなりましたから、このたびはこれで一段落といたし、此の次の機會に餘談を申試みませう。

エスキラスの三段曲

希臘上古の名作は二千三四百年間の世波時潮にも押流されずして、幸ひにも今日まで存外作數も多く傳はつて居りますが、中に就いてエスキラスの作に係るものは最も古く且つ最も珍重すべきものと思ひます。扱此の人の作の中で最も整つた大作はといへば、多分アガメンノン王の事蹟を材料とした三幕物でありませう。

希臘の古劇は、喜劇を除くの外は、大抵我が「古事記」などに相當する古代史上の事蹟に因んで出來てゐるのであります。が、國柄の然らしむる所か、其の古代の史蹟が支那の戰國時代の事蹟で、もあるかと思ふ程に複雑で、如何にも殘忍で、殺伐で、優美高尚な美術國として知られた希臘の傳説とは信せられん程に、邪淫の話や悖徳の話が多く、随つてそれを其の儘材料として劇に仕組んだならば、逆も美術的な高雅なものとは出來なからうと思はれるのであります。が、そ

こが作家の手腕で、それをよい鹽梅に取捨し、工夫想像を加へて種々の名作を成してゐるのであります。殊にアーゴス國王アガメンノンに關するものは有名で、エスキラス以外にも立派な作が二種あります。先づ史蹟のあらましを述べませう。

アガメンノンに關する史蹟

むかしフリジャ國王の子にペロツプスといふがあり、エリス國に來りて競車の技に勝ちたる結果、國王の婿となりて二人の王子をもうけたり。兄をエートリウスと云ひ、弟をシエスチスといひけるが、故ありてエートリウスはアーゴス國王の女と婚して其の國の王位を継ぎたり。かくて弟シエスチスの來り寓するやいつしか嫂たる妃と姦せり。エートリウス大いに怒りてシエスチスが妃に生せたる小兒を殺して其の肉を調理し、弟を招きて食はしめ、やがて死兒の頭と腕とを示して罵り辱しめき。シエスチス逃れて他國に奔りしが、後にミネルヴ神を祀れる杜に入りて其の實の女のペロピヤに逢うて姦す。

或は謂ふエートリウスに復讐せんがために故意に然せしなりと。ペロピヤは其の以前不祥なる豫言を避けんとて神に仕へしめられしなり。(豫言に曰ふ、シエスチスが其の實の女に通じて生せたる子は長じて其の叔父を殺すべしと)。

ペロピヤ懐胎してエジスサスを生む。後故ありてペロピヤはエートリウスの妃となりぬ。エートリウスはシエスチスの世に在るをいぶせく思ひ、漸く長じたるエジスサスを遣はしてシエスチスを殺さしめんとす。エジスサス途にてシエスチスの實の父なる由を知り、却つて歸り來りてエートリウスを殺し、其の王位をも篡ふ。エートリウスに子あり、兄をアガメンノン、弟をメネレーヤスといふ。一時は二人とも本國アーゴスより逐はれしが、後和議なりて歸國し、アガメンノンは王位を継ぎ、エジスサスは其の後見となれり。メネレーヤスはスバルタ國に王たり。

かくて後トロイ國の王子パリスといふものゝスバルタに來りてメネレーヤスの妃ヘレンに通じ之れと共に出奔するに及びてトロイと希臘との間に葛

藤を生じ、彼の有名なる遠征の事あり。アガメンノン希臘列國大同盟軍の總大將となりて十年の長き年月の間トロイ地方に出征せり。此の間に王妃クリテムネストラはひそかに王を怨むことありてエジスサスに通じ、王若し歸り來らば殺さんと企てをれり。妃が王を怨めるは、妃が生める王女イフィジエナイヤといふを王が或女神の怒をなだめんために人身御供となし、ことに因れる也。二つにはトロイ王プライヤムの女カツサンドラといふを王が妾となして伴ひ歸れるを怨める也。

以上は傳説に見えたまゝを略述したのである。エスキラスが作はアゴス國人が十年の遠征にあぐみ疲れて王の凱旋を日毎夜毎に待ちかねをり、又それと同時に誰れいひいづるともなく、何事か國家に不祥なる事の起るべき由をほのめかし語るものありて人心恟々たる體を背景とし、アガメンノンが凱旋の數時間前より端を發いてをるのである。

「アガメンノン」と題したる序幕の次に「コエフォリ」と題したる中の幕があり、尙其の次に「善神群」と題したる大詰の幕がある。何れも調子の高い韻文で綴つ

てあつて、唱歌群の所作となつては、我が能若しくはオペラに等しく純然たる樂劇式で、ところ／＼は舞ひ且つ踊るやうになつてゐるのであります。全篇を貫く趣旨は怖るべき因果應報の理で、シエスチスの邪淫、エトリウスの殘暴、其等業因の綿々として相因果して滅する期なきを示したものと見てよい。エトリウスが其の甥のエジスサスに殺されたのみならず其の子アガメンノンまでも其の同じエジスサスに通じた王妃クリテムネストラの爲に殺されること云ふ筋である。併しながら夫を殺し君を弑したクリテムネストラ夫婦が安穩に王位に在らんことは天理でない。こゝに於てかアガメンノンの一子オレスチスといふが中の幕で外國より歸り來り、其の妹と相謀つて復讐を思ひ立つ。現在の母を父の仇として覘ふといふことになる。血で血を洗ふ業因が綿々として絶えない。最後の幕に至つてはオレスチスが復讐の本望を遂げる。エジスサスを誅し母をも殺す。併しこれと同時に半狂亂の有様となつて王宮より狂ひ出でアポロの殿堂の方へとさまよひ行く。是れ父の仇とはいへ現在の母を殺したのは十分の正義でないがため、苛責を司る神

々が彼れを責め惱まし安處せしめないものである。最後にアポロ神の恵みと諸善神の慈悲とによりてオレスチスの罪は免せられ、めでたき祝賀の歌の中に劇は終るのである。シークスピヤの傑作「マクベス」と「ハムレット」との或部分を併せたやうな作で、而も一段調子が高いのである。シークスピヤは間接ながら多少こゝに負ふ所があつたらうとも思はれる。左にほんの曲詞の意味だけを紹介して見ませう。原文は世界有数の美文なれど、こゝには英書二三種によつて大意だけを粗末な散文に譯するのであるから、どうか其の積りで御覽を願ひたい。

此作全部を總稱して或は「オレスチヤ」ともいふ。

序の幕

舞臺正面は巍々たる石造の宮城、其の外廓に聳えたる物見矢倉に一人の番卒非常を戒めて詰めてゐる體。すぐに番卒の白になる。

「十年の永き間我れ眼をトロイの方角に放ちて見張を怠りしともなし、しかるはトロイ城陥りなば直ちに烽火を以て告げ知らすべしとアガメンノン王の約したまひたればなり、さてもく待ち久しきことかな、夜毎々に星ばかり見て寒夜の濕つぼさを忍び、眠らで明すつらさよ、折々は餘りの退屈さに小歌などを口ずさめど、それも徒らに古へを思ひ出すよすが、今のあさましさを思へば、ひたもの物悲しくなりて涙の出るのがこらへられぬ、云々。

といふ意味の獨白が終ると此のトタンに舞臺の右手に當つて烽火の見たる心。番卒は勇み喜ぶ思入。

「萬歳、萬歳、あなめでたの大光明や、晝を欺くあの光明を見てはアゴス全部が目醒して舞ひ踊り歌ひ奏で、此の吉祥を祝すべし。いで、此の由をお妃に申さん。いで我れ先づ前奏に一踊せん。いや、まだ此の外にはねばならぬ事のあれど、今は我唇に磐石の据ゑられたり。我れは言はずとも此の物すぎき宮殿の四方の壁がやがて言はうぞ。知る人ぞ知る、我れは語り。云々。

ト番卒入る。やがて十二人のアーゴスの故老等列をなして登場す。是れ所謂唱歌群なり。樂に合せ聲を揃へて唱ふ。半は勇み喜び、半は愁ひ歎く氣味の歌なり。

「曩に兄弟の大君たちアガメンノンとネレーヤスとが威武凜然として一千の艦艦を卒ゐてトロイ征討のため進發ありしや我等は年老いて軍役には堪へざるゆゑ小兒等と共に此のアーゴスに残しおかれたり。蓋しをさな子は今漸く命の液を受け得つゝあるもの、老いたる人は今將に搖落せんとする秋の病葉歩むには三脚を要し、白晝さへも夢心地、おはれ勇氣なきことをなごと相如く。云々。

と歌ひ、やがて一轉して

「おはれクリテムネストラの御方のめでたき左右をや聞き召されつる。あれ見よ供物を獻する篝火の花々しさよ。地の神、空の神、野の神、市の神に捧げまゐらする祝ひ火は光焰天をも焦さんとす。我ともがらの心は只何故ともなく憂ひに滿つ。祝ひ喜ぶべき吉左右あらば、とう／＼告げ聞えたまへや。

かくて一同樂座に整列して改めて齊唱になる。

「いざやいざ、いともめでたき御出陣の歌をうたはん。

トこれよりアガメンノンの將に出陣せんとせしや何處よりともなく二頭の鷺宮殿近く舞ひ下りてアーテミス神の使はしめとして衆人の崇め重んずる兎と其の子とを食ひ殺せし不祥の出來事ありし由を物語り

「おはれゆゝしや、あさましや、さればとて幸くあれや行末。

ト縁起を祝ひ直すことありて、又物語の歌をついで曰く「さるほどに其の折に豫言者カルカスの言ひけらく、トロイ城は二英王の御稜威の下に亡ぶべし、さもあれ禍の兆は見えたり、アーテミスの神深くも驚のしわざを怒らせたまへれば」と謠ひ了りて

「おはれゆゝしや、あさましや、さればとて幸くあれや行末。

ト祝ひ直し、又物語をついで曰く「さるほどにカルカスは此等が基おとなりて前代未聞の犠牲を神にさゝげねばならぬと起るべく、又

これがために當王家の奥殿に怒濤逆巻き子を亡ひし嗔恚のほむら
に燃え返る女人の胸こそおそろしともまたおそろしけれ
かくなん豫言者カルスカは聲もおどろに宣つたりけり、ゆゝしき鳥
の前兆はゆゝしくもあり、さきくもあり、心せよとぞ宣つたりける。
「あはれゆゝしや、あさましや、さればとて幸くあれや行末。

果せるかなや此の豫言のしるしは見えてオーリスの濱とやらかす
あかしま風船は全く動かすなりて、糧は盡き、人は疲れ、今は如何とも
せんすべなし。王はカルカスの言葉にしたがひ、涙ながらに愛姫君
イフイジエナイヤの御方を犠牲にとて献げまし、神慮を和らげたま
ひける。痛ましや其のおんいまはのみありさま、云々と、これよりイ
フイジエナイヤ姫が人身御供となりし折の有様を語る歌言葉一く
さりありて

「これはた王家のまがつみの最終にてはあらずとよ。あはれゆゝしや、あさ
ましや、さればとて幸くあれや行末。

ト聲を揃へて祝ひ直しつゝ歌ふ。此のトタン奥より王妃クリテム
ネストラ盛粧して、樂しげに勇み立ちたる氣はひにて出来る。唱歌
群は之れを迎ふる歌一くさりあり。やがて音頭取の長老口を開き
トロイ落城の吉左右参りしやと白にて問ふ。(これより短句の問答
七八回あり) 妃然りと答ふ。唱歌者いつ。妃こよひ。唱歌者いか
にしてさばかり早く吉左右が参りつるぞや。トこれにて妃の長白
となる。これらの長白は、思ふに半は我が能のコトバの如きメリハ
リにてもありたらんが、又ところゝは拍子に合せ聲を永うして謠
ふやうに物せしこともありしならんか。

「さればなり、日の神アイダの山巔に立たせまして、先づ萬丈の光焰を放ちた
まふ、火こそは早使ひなりけるぞや。かくて烽火を傳ふるに烽火を以てし、ま
たゝく間に傳ふる勝利の知らせ、山より山に、島より島に、飛ぶや猛火の
きらめきわたりて海原遠く照らせれば、彼方にそびゆるマジスタスの山守る
勇士が目早くも、みそらに高く打擧ぐる烽火の煙り忽ちにユーリバスにも傳

はりて、云々。

ト烽火を以て戦報を遞傳せし古代の習慣を叙する名句一くさりありて、それよりクリテムネストラは、さながら身みづからトロイの落城に臨みたりし如く想像して、彼方の戦況を物語ることにありて、勝つて兜の緒を締めよといふ誠に背きなば、戦勝者の身の上に如何なる災厄の來らんも知れずなどいふことあり、トクリテムネストラは又奥殿へ退き去る。

此時唱歌群の故老一同は聲を揃へてジウス神に禱ることあり、曰く「不法無慚なるトロイの王子パリスをば罰したまひし怖ろしの太神よ、あはれ苟も中庸を誤りて放肆淫逸の振舞ある時は神罰たちどころに下る習ひなれば」と、これより彼の王子パリスがメネレーヤスの妃のヘレンに通じ邪淫に耽りし報いにてトロイは竟に滅亡するに至りたりと過去の事蹟を物語る。此の齊唱コーラスの間にストロイ、フェと稱して右より左へ歌ひつゝ舞ひつゝ廻はり行き、又アンチストロイ

フェと稱して同じく左より右へ歌舞しつゝ廻り行くことあり。

此のうちアガメンノンの本陣より軍使來りて「程なく總督は凱旋あるべし」と報ず。唱歌群の長は軍使を歓迎し、而も其の内心に杞憂ある由をほのめかす。軍使曰く「人皆多少の艱苦憂愁無き能はず、吾々將た或時は霜雪に苦しみ、或時は炎暑に悩み、或は病没し、或は戦死して、千辛萬苦を経たりしが、今かく恙なく凱旋し、故郷の土を踏む嬉しさよ、初めこそはあれ、竟には幸ひの來る習ひ、云々」と語りあへるうち妃クリテムネストラ又登場す。衆に向ひて如何にも嬉しげに

「とく／＼四方の門を開いて大王を迎へ奉れ。戦ひ勝ちて歸らせたまふ夫を迎へまゐらすばかり世に樂しきことやはある。云々。

此時コーラスの長は軍使に向ひ「メネレーヤス王にも恙なく凱旋ありしや」と問ふ。軍使慚然として「我れ若し偽りを語るとも人々の喜びは只束の間ならん」といふ。長「然らば眞を語られよ、眞と善との離るゝや久しうは掩ふべくもあらず」。軍「メネレーヤスの君には無念

や難風にあはせられて、云々と歸航中の難船を物語り、ト、多分は恙なくて歸らせたまはんと信ず、云々と告げ終りて退場す。

尙此の物語の間に軍使はトロイ征討の禍根を醸し、妃ヘレンの事を歌ふことあり。曰く、彼の妖婦こそは所謂傾城傾國の禍因なり、誠むべきは驕奢と富榮となり、富は禍の源なるぞや、夫れ正義は平靜なる賤が伏屋に住し、平和に常に穩當なる生活の中に宿る、金碧燦爛たる臺閣には、あはれ、應報を司りたまふ神のいと物すごき棺布ぞ懸れる。云々。

此時アガメンノン王は其の妾カツサンドラと共に戰車に同乗して從兵大勢と共に登場す。唱歌群喜び迎へて唱ふ。

「萬歳、々々。エトリウス家の大君殿下、トロイ平定の御功おんさとしの高く且つ大いなるを如何に稱へ奉らばふさはしかるべき。嗚呼いかさまにか稱へまつらん。(略)はじめ兵を出したまふや我等ひそかに其の無謀の擧たるべきを思ひて心平なる能はざりき。さもあらばあれ今かく功成りて凱旋ありしを見る上

は、我等いかでかは賀せざらん。夫れ時は賢慮の源なり、君が久しく在さざりし間に於て誰が最も忠誠にして誰が最も腹黒かりしかはやがて自ら悟りたまはん。云々。

こゝに於てアガメンノンは喜ばしげなる思入ありて

「わが先づ感謝すべきは我が祖國也、祖國の神祇也、我が功は半以上彼等の力也。云々。

と言ふことありて、やがてトロイ落城の模様をいと勇ましく物語る。此の長白のうちに、戰爭中及び歸航中に不幸に逢ひし身方の人々の身の上を廻想し、或は人心の反覆の圖るべからざるものあることに言ひ及び、油斷は大敵、驕るは破るゝの基もとといふ意味の述懐ありて「神祇よ、願はくは我れを護りて常に勝利を伴はしめたまへ」と禱り、やがて宮殿の方へ進み行かんとす。此時妃クリテムネストラ又登場す。

「我が國人よ、市民よ、アゴスの長老等よ。我れは御身らの前ながら、我がはしき夫君みうとに戀ひ焦れたる妻の誠を打出づることを恥づるに遑あらず。知れ

る人々の前にては物はちする臆病心も消ゆるぞかし。いでや十年の長き年月の間如何に寂しき晝夜を経たりしか、心のつらさを我夫に語り申さん。

ト夫の戦死といふ訛報を得て歎きしこと、三たび自ら縊れんとせしこと、涙盡き眼乾れて、眠りては怖しき夢に惱まされしことなどを語りて、尙も夫を驕らしめて、深く中庸を破ることを忌む天神の震怒を招かしめんと欲し、直ちに土を踏みたまは勿體なし」とて

「やよ腰元ども、何をかたゆたへる。とくく御道筋へ紫錦襪を布き奉れ。

トいふ。アガメンノンこれをとめて、さる過分なる方法を以て凱旋の式を行はんは宜しからず、燦爛たる錦繡を地に布くは偶、嫉妬の神の忌諱に觸れん縁たるのみ。さることは神明にのみふさはし。勿體なし。謙徳こそ人の質なれ。人は人相應の敬禮歓迎を要とす。云々と止む。

これより八九回の短問答あり。とッアガメンノンの恐れ憚るは世評輿論に外ならざるを知り、嫉妬何かあらん、嫉妬せらるゝは英傑た

るの證なるをや」といふやうの反駁ありて、終にアガメンノンは車より下りて紫金襪を踏むとて、伴ひ歸れるカッサンドラを妃に紹介し「これこそは三軍が分捕品中の花として我れに獻じたるものなり、乞ふらくは優遇したまへ」といひて歩を進む。

クリテムネストラは件の要求に對しては何の答もなくて、かゝる大君の凱旋を賀するため、我が喜びを表するためには如何なる華奢の接待も過分にはあらず」と主張し、最後に

「天にましますジョーブの太神よ、萬の事の成就を司りたまふ太神よ、我が宿願を願はくは遂げしめたまへ。未だ残れる一大事の候ふをば願はくは打忘れさせたまふなよ。

ト禱り了へて奥に入る。此の間カッサンドラは悵然として車上に留まれり。悲しげなる音楽起り、唱歌群は壇を廻りながら歌ふ。其の歌は杞憂を表示する歌なり。「大君の凱旋を親しく目撃しがら只行末ぞ心にかゝる怪しさよ、あなゆゝしの心いられや」と數十行歌ふ

うち、クリテムネストラ又入りてカツサンドラに向ひ

「汝もとく内に入りね。けふよりは此の金殿玉樓に仕へて其の幸榮の末に浴する身となれるを忝う思へかし。かゝるは捕はれ人の常の運命なり、倨傲の心を棄て、疾く車を下りね。などて物いはぬぞ、夷ことばの外を得知らぬよな。」

唱歌群はカツサンドラを慰め、とく命に隨へ、是非に及ばずと諫むれど、カツサンドラは憤慨の色いちじるしく、何の答もなさず居り。「此の上は言ふも益無し」とてクリテムネストラは奥へ入る。

唱歌群再びカツサンドラを諫む。カツサンドラ慨然としてアポロ神に哀訴する言葉ばかりを三四回繰返す。

「あはれ、アポロの太神おほんがみアポロの太神。」

此の禱りの間を縫うて、「こは何事ぞ、アポロの神に祈るも甲斐はなからんを、云々」といふ齊唱を挿む。

「怨めしのアポロの太神や。などてか我れをかくの如き無慚の宿へはゐて

來まし。そも此の家の來し方は

トこれよりシエスチス以來の罪惡を數へ立つること、骨肉相殺し、みどり手をも慘殺し、父みづから之れを食ふ、其の業因滅せずして今また悍婦の夫を怨むありて、やがても欺きて浴室のうちにて殺さんとすなり。あなあさましや、怖しや。我が命將た盡くる時近からん、毒婦の我れを妬めれば、云々と謠ふ。

此の間唱歌群は「あなゆゝし。ゆめさるまがごとをな宣らせ」と止め、竟に又「あなまがくゝし」の豫言や。おぼろげながらあなゆゝしの豫言やなど齊唱す。

カツサンドラは、かく語るうちに恍惚となつたる體にて、シエスチスの子供らが髣髴として其眼前に現れ浮ぶを見ることあり。

「かゝる業因のあればこそ業果の結んで今はしも笑みの中に劍つるぎを藏かくす毒婦が諂諛、見よ、それもいつまでかこのまゝにてはやは過ぎん、オレスチスが今にもあれ歸り來らん其の折には天罰必ず廻るべし。云々

かくてカツサンドラは已に宮殿に入らんとせしが、覺えず立ちとどまりて

「あはれ、いまはしやな家うちに満つる血汐の臭ひ。なまぐさや。あななまぐさや。

唱歌群「いな、それは御供の臭ひにてこそ候ふらめ。

カツサンドラ「否々正しく是こそは死人の臭ひに疑ひなし、墓邊洩り來る臭ひぞとよ。さもあらばあれいざ入らん、アガメンノンの身の果を悔まん爲に我れもまたゆゝしき宿にいざ入らん。因果は廻る小車の世に怖しき果を見よ、其の果を見よや人々。

カツサンドラ奥に入り去る。唱歌群奥へ思入ありて

「あな淺まし人の身や。榮ゆるも只一時のうたかた、夢の世のたいすまひ。勝ち克ちて歸らせまし、其の喜びもはや消えて、血汐に報う血汐ぞとや。あはれ頼まれぬ人の身の榮えはやも。

トこのトタン奥にて、アガンノンの聲にてけたましく

「あな無念や。窮所の痛手を負ひけるぞや。

ト聲永く叫ぶ。唱歌群之れを聞き聲を合せて

「や、あの聲は。窮所とや、痛手とや。

ト謠ふ。又アガメンノンの聲にて

「あな無念、又も窮所を。第二の痛手を負ひけるぞや。

唱歌群又も聲を合せて謠ふ。

「あの聲こそは、大君のみこゑを聞きて思ひ知る、あはれゆゝしき大逆の遂げられけるぞ、いさゝらば、疾く人々に告げ知らせて、いでやいで、救ひを求めん、いでやいで。

トかくて唱歌群はめい／＼種々の案を呈出す。直ちに奥へ闖入して様子を實驗せんといふものなどもありて、騒然擾然たり。ト同一列を作りて宮殿の方へ肅々として練り入らんとす。トタンに舞臺の正面左右に開きてアガメンノンの王の慘殺せられたる現狀を露呈す。我が劇の廻り舞臺などに比すべき仕掛にて押出し舞臺とも

譯すべき車仕掛の小さき舞臺をクリテムネストラの乗りたるまゝにて奥より押出すなり。其の傍にはアガメンノンの浴槽中に入りたるまゝの屍あり、紫色の網を以て掩ひたり。又其のうしろにはカツサンドラの屍をも見せたり。

クリテムネストラ「いかに人々、王を殺し、は我れなり。こは豫てしも我がたくみおきつることぞ。されば彼れをして逃るゝ道なからしめんために、恰も漁夫が網をもて魚取る如くに、驕奢の紫衣を以て其の四肢を包み、さて三たび撃ちて彼れを斃しつ。(略) 汝アーゴスの長老らよ、我れと共に祝せよ。近親の血汐をもて王位を汚し、不祥者の血統はけふを限りに絶ちつるぞや。業因めぐり、て應報今はじめて全し。云々。

唱歌群 これを聞くうちに次第に激昂し、聲々に妃の大逆を罵り、直ちに國外に逐はんとすといふ。妃少しも動せずして「我れにはエジサスといふ後楯あり、聊かも汝等の威嚇を恐れず。且つや汝等の言ふ所悉く理に違へり。アガメンノンは我がためには愛女の仇たり、

又カツサンドラを伴ひ來りしは我れに對する甚しき侮辱なるをや。されば彼の女奴は其の當然の運命に遭遇し、白鳥といふ鳥の如くおのが挽歌を歌ひつゝ、今がたしも命を終へたり、云々といふ。

唱歌群 尙服せずして大王を弑せし大罪を罵ること頻なり。妃は、我れは取りも直さずアテスの神に成代りて應報を司れるなり、毒を以て毒を制する天神の妙配劑を代表せりと知らざるやなどいふ。唱歌群 尙服せずして怒り罵り慷慨す。このうちにエジサス兵士を率ゐて入來り、自己の成功を喜び、父シエスチスの舊怨を報い得たることを喜ぶ白あり。

唱歌群 怒りてエジサスを罵り

「などで自らは手を下さで、女人をして大逆を犯さしめし、あはれ汝卑怯者、云々。

ト罵ればエジサスも大いに怒り、汝等を悉く獄に下さん、飢と暗との相伴ふ所に、

「いざやいざ、こやつらを引括れ。」

唱歌群いよ／＼激して

「いざやいざ人々よ、劍を取れ。いざ死なん。闘はん。」

ト雙方奮激して已にかうよと見ゆる時、クリテムネストラ進みいで、
なだむることあり。唱歌群は、やがてオレスチスの此の事を聞知
りて歸り來る日あるべきぞと豫言す。妃は、此上に血を流さんはず
祥なりと猫撫聲にてエジスサスをなだむ。雙方氣込み、睨みあひて
幕。

「能樂」には以上のみ掲げたのであつたが、このたび綴り足し
て下に全部を掲ぐ。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

中の幕

は *Choephori* と題する。神酒を供へることを司れる女群を齊唱部と做し、最も感慨深き部分を此群をして合唱せしむるが眼目ゆる、かくは名附けたのであらう。*Choephori* とは「献酒係り」といふ義。

此幕の舞臺面は前の幕の事あつて後幾何かの月日を経た體である。これより先、アガメンノンの嗣子オレスチスは外國へ行つてゐたが、父王の横死を人傳手に聞いて、復讐の念ひ遣る方なく、有名なデルフイの神殿に賽してアポロの神に祈願すると、一夜神託があつたので、彌々其の志を決し、直ちにアゴスに赴いて母と其の奸夫とを誅せんと思ひ立つ。此間アゴスにてはオレスチスの妹エレクトラは母に忌まれて婢女同様に貶しめられ、怨を呑んで日を送つてゐる。此際トロイより伴はれ來りし捕虜が呻吟の聲は城内に満ち、國民の心も次第に新國主に對して離畔せんとし、物情何となく穩かでなく、慘憺

たる妖雲日々に王宮の四邊に迫るといふ有様。
場處の一致を嚴守するは希臘劇の定則のやうに審美學者などは言へど、此作の如きは然うでない。或は在來の説は原作を十分精讀しないで斷説したのでないかと疑はれる。兎も角も、此幕も次の幕も景色が前後一つで無い。随つて第一段、第二段と別けたはうが當然だと思ふ。

第一段。先づ幕が開くと正面は王家の墓地で、よき處に當時死者を黄泉に送ることを司り兼ねて亡者の權利を保護する神と信せられてゐたマーキュリー(或は Hermes とも稱す)の像があり、又前の方にはアガメンノンの廟があるといふ舞臺面。こゝへオレスチーズ(二十幾歳といふ青年)が旅姿で其の信友の Pyraides と共に入來り「あはれ、ヘルミーズの神よ、願はくは吾れを護りて復讐の志を遂げしめたまへ」と祈ることありて、自身の前髪二房を切取つて、一を家庭の神の Inachus といふに獻げて「吾れを生育したまひし慈恩を謝し奉る」と言ひ、更に一を「父王の靈に供す」といふ意味の短き獨誦を了へ、やがて奥の方へ

思入あつて「かしこへ來るは何者ぞ」云々と言ふことあり、といひピラヂースと共に物蔭に潜みつゝ、献酒者の來たるを窺ふ。(オレスチーズ、ピラヂースと讀むが英吉利讀なれど、以下便宜のため原音に近づけてオレスチス、ピラヂスと做す、他も同例に依る。)

王宮の門が左右に開くと、内より黒衣を被たる女群が出で來たる。エレクトトラ姫は其の先導の役を勤め、女群はめい／＼手には油と蜜と肉汁との和合より成れる一種の飲料を盛りたる小瓶を携へてゐる。是れは墓の頂に灑ぎかけるためのもの。女群は何れもトロイから妾奴となりて強ひて伴ひ來られたる女囚で、今はかゝる役に使はれてゐるのである。オレスチスは一目見て其の妹たるを認識し、且つ彼等のこゝに來れる理由をも察する。

さてエレクトトラが廟前に近づきて立つと、女群は例の樂座の方へ降りてゆき、エレクトトラの誦するのと相呼應することが出来る程に舞臺に接近して格好よく並び立ち、聲美しく一齊に歌ふ。其の歌の大

意は

「われく命を承りて、こゝに靈廟に神酒を献ぐ。さもあれ我等が心は痛み、我等が面は涙によごれたり。何が故ぞや。不祥の夢を王妃の見させまして、魔れたまひけるをば、夢占の占ひ申すらく、是れこそは天罰の來らん兆候と。かゝりしかば妃大いに怖れまして、神靈の御怒を和めんために此の供献を云々。(中略)さもあらばあれ血汐は一たび灑がれたり、血を以てせずしては如何にしてか之れを償はん。あはれ、血を流したる業因にて此家やがて滅びざるべからずとおもほへば、怖ろしくもまたあさましく、云々。

此時エレクトラ口を開きて「此の御供は存へたる妻が其の亡夫の靈に供ふべきものとしも思はれざるを、我れ甘んじて供ふべしや、若しくは父を辱めたる賤しき輩の供物として唾して棄て、地を蹴つて歸り去るべしや。いかに」と問ふ。女群口を揃へて

「いや、むしろ其の御供は正義のためのものと見做し、姫みづからの爲、オレスチスどの爲に復讐の望みを遂げしめたまへと祈りませ。云々。

これにて、姫は階段を登りて神酒を墓の頂に灑ぐこと。此時女群は先王の横死を哀悼する意の短き歌を唱ふ。

此中エレクトラは不圖オレスチスが供へ置きたる前髪を取上げ、怪みて之れを女群に示し、しばらくは疑ひ惑ふ意味の白あり、やがて毛の色己れの似たると其處らに残れる足跡によりて、扱はオレスチスが歸り來れるにはあらずやと思ひつきたる思入。

姫「似たりやな此の髪の色は。」

群「似たりとは誰人に。」

姫「我がのに似たりや髪の色。云々。」

此中にオレスチス進みいで、名宜りかくる。されど幼き折に分れたれば、姫は其の面を覚えぬ體。オレスチスは昔姫が物せし外套を見せる、姫は喜び泣きて一別以來の述懐になる。「神よ、こゝに鷲父の孤兒二人あり、父は毒蛇にまとはれて死し、云々」と哀悼することあり

「あはれ、わがはしき、懐かしき、あらゆる愛を集めまして、兄とも見、父とも見、母とも見、又亡き妹のイフイゼナイヤとも見まゐらすべき君よ、云々。

と唱ふ。かくて二人して Noia の神に祈り、何卒復讐を遂げしめたまへ、云々と言ふと、女群も之れに和し、惡を犯せる者は懲罰を蒙らざるべからず、云々と賛意を表して歌ふ。

かくて兄妹はコーラスと共に廟に向ひて祈願の意を述べることに良やしばらくあり、其の間或は沈み、或は激し、或は殆ど絶望し、或は豫言的に行末を見越して勇み立ち、何卒亡き父の亡靈現れまして吾等が擧をば助けたまへなど唱ふ。やがてオレスチスは女群に向ひ

「一たび人を殺すときは、天が下を擧り神酒を灑ぐも、其の汚れをば浄めがたしとなん言ふなるを、我が母妃はかばかりの供物もて其の重き罪をば攘ひ得べしと思へりや。

と罵る。女群之れに答へて夢物語をはじめめる。すなはち妃は夢に龍を生みたるが、其の龍妃の胸を引裂きて食ふと見て覺えず絶叫し、

その聲に驚きて目を覺まし、其の凶兆を攘除せんための今日の供獻云々と歌ふ。オレスチス之れを聽きて、よし、我れ其の龍の如くに彼れをば殺さん、是れまことに天命の然らしむる所と決心の思入あつて、此上はピラヂスと共に Phocia より來れる外國人らしくもてなして王宮に入り、先づエジスサスに近づきて志を果さんとエレクトラだけに此の内意を打明して場を退く。エレクトラも去る。コーラスの女群のみとまりて、怖ろしき事變の程なく起るべきを豫言し、人間の罪惡の時としては極端に流るゝを歎じ、就中女の惡行の怖るべきを説き、史上に有名なる幾多の毒婦妖婦の名を並べ立てたる後、子を殺し、父を殺し、又は夫を殺し、女にして孰れか正義の手に罰せらるゝことをまぬがれ果てん、云々と歌ふ。

「夫れ正義の鐵砧は磐石よりも尙重し、運命の女神之れに倚りて司刑の劍を鍛ひたまふ。因果應報の神毎に之れを補けて舊惡を償ひ盡さるうちは休むことなし。云々。

第二段。場面が變つて王宮前の景となる。こゝへオレスチスはピラデスと共に服装を變じ外國人らしく打扮ちて入來り、門監に向ひ「成るべくならば男君に逢ひたけれど、止むを得ずば女公にてもよし」とて、クリテムネストラを呼び出さしめ、あくまでも外國人を装うてオレスチスが非業の最期を遂げし由を僞りて語る。

「われらはフォーシスよりアーゴスへ參る途中にて圖らずも見知らぬ男に出逢ひ、かくく傳へ申せよとゆくりなくも頼まれたり。死體を引取りたまはんや、いかにと申せと頼まれたり。そもく知らず貴婦人は、オレスチス殿の御身内にてやおはすらん、云々。

妃之れを聽きて「あら悲しき知らせや。我が望みは全く絶え果てつるぞや。さもあらばあれ御身の骨折には報うべし、先づ奥へこそは、云々。腰元ども此旅人たちを歡待せ、我れは此事をエジスサスどのに知らせてん」とて入る。皆々ついて入る。

こゝへ乳母の *Klissa* といふもの出で來る。コーラスの女群之れを迎へて「汝は今何處へ行くぞ」と問ふ。乳母曰はく「只今妃は喜びを藏して悲みを粧ひ、妾に命じてエジスサス公を呼び來れ、力士をひきゐて疾う來ませと申し參れと命じたまひぬ。さるにても悲しきかな、我がいつくしみ養育みまゐらし、オレスチス君のみまからせたまひぬとや。云々。

と饒舌の愁歎あり。コーラス暗に誡めて「エジスサスを呼び迎へにゆくならば、只一人にて疾くく來ませと言へ」と命ずる。

乳「そはそも何故ぞや。

群「その故は問はずもあれ、只その如くに傳へたまへところぞ。

乳母心得て入る。

コーラスまた天上の *Nous* 神に對ひ「孝子を助けて其志を遂げしめたまへ」と祈る。こゝへエジスサス入來り「オレスチスの死せりとは實か」とコーラスに問ふ。「我等も又聞なれば奥に入りて使の者に委細

を聞取らせたまへ」と答ふ。エジスサス奥へ入る。
かくてコーラスが其結果いかにと俟ちかねて氣を揉みあせる意の
歌を歌ふうちに、奥にて「あなや！ あなや！」といふけたましき叫
び聲幾たびも聞え、やがて一人の下人走り出で來り、エジスサスの斬
殺せられたる由を報じ、同時に女人殿の戸口を打叩きてクリテムネ
スツラを呼び「大變なり〜！」と言ふ。

妃「何事ぞ。」

下「死にたる者他を殺し、生ける者に命なし。」

妃「あゝ、謎は解けたり。誰ぞ疾く斧を持て來。我れ克つか、彼れ克つか、いで立地に決めん。」

妃は應報の其の身邊に迫り來れるを暗に意識してをりながら尙ひ
るみたる色なく、武器を持來れ」と家臣に號令しつゝ、奥より出で來る。
オレスチスも同時に出で來る。（オレスチスは例の如く Ektelema
といふ押出し舞臺に乗りエジスサスの死骸を見下して立つたる儘。

ピラヂスも傍らに立つたる體。

妃「やあ、懐かしきわが夫の君！」

オレ「かゝる惡漢を懐かしとや！ さあらんには此奴と共にこゝに横たはり
たまへところ。」

妃「あゝいや御事をばはごくみにし此母刀自をば忘れつるか。齒も生え揃は
ぬ齒ぐきして我が乳首を含みたまひし其のいにしへをや忘れたまへる。」

オレスチスさすがに躊躇しピラヂスを願みて如何にすべきかを問
ふ。

ピラ「いや、アポロの神の命をば忘れたまふなかれ。人間には背くとも神
には背きたまふなとよ。」

クリテムネスツラ之れに對して「我が罪惡は畢竟するに天の命たり
しに外ならず」と辯護する。オレスチス應へて「我れが母を殺すもま
た命なり」といふ。妃「我れを殺さば我が怨靈神汝を罰せん」。オレス
チス「父君の怨靈神を如何せん」。ト、妃の手を掴みて押出し舞臺の

上に強ひて引上ぐる。妃は怖ろしき目してオレスチスを睨む。

オレ「父を弑せし應報を今こそは思ひ知れ。

妃「あはれ吾れ毒蛇をはごくみけるよ!

オレ「げに夢は中りけりな。いでやおことが悪業の怖ろしかりしにふさふべき怖ろしき死様見せてん。

かく罵りつゝ押出し舞臺に乗つたるまゝ、元の如く奥へ車じかけにて押戻されて入る。門扉は元の通り閉ぢる。

こゝに至りてコーラスは勇み立ち、重ねくゝの慘劇まことに痛むべしと雖も、ともかくも秩序回復の目途だけは附きたり、黑暗々の此の宮城に大日輪の照臨して多年の醜穢を淨除せん日も遠からじ、あなめでたし云々と歌ふ。暫くは四方閨寂として何の物音もせぬ體。やゝありて又も押出し舞臺に乗りてオレスチスは母とエジスサスの屍とを見下しつゝ、門内より出で来る。オレスチス手には白刃を提げアガメンノンの紫衣を指してゐる見え。下人等大勢群りて件

の紫衣の褶を擴げて捧げてゐる。

オレスチスは女群に對ひて復讐の大義を遂げたる由を語り、是れ天に代つて誅を行へるに外ならずと辯じて、又押出し舞臺に乗りて奥へ入る。

かくて女群が聲を揃へて更に新しき殃の出来せんことを危む意味の齊唱を歌ふ間に、オレスチスは橄欖の枝と紐飾とを携へて半狂亂の體にて入來り

「あゝらゝ、我が心搔亂れて麻の如く、やがても狂はんとす。しかはあれども我れは敢て言ふ、我が母を殺しつるは飽くまでも正義の所爲ぞや。その夫を弑せし女、我が父を殺し、女、人も怒り、天も怒る。彼の女を殺し、はデルフイなるアポロの神の神勅なり。……我れは今より此の神救の章を持ちて地獄の苛責をまぬかれんとはするなり。親殺しの罪はありとも此の章だにあらば、其苦しみの幾何かをまぬがれん。あはれ、我が心の正しきを證する人となりてたべ。けふよりは我れ此世界を果もなく狂ひあるかんすらん。

あはれ、あさましの身や！

コーラスは之れを憫れに思ふ思入、君は功こそはあれ罪科はなきも
のをと歌ひ慰むるうち、オレスチスの狂氣は漸く募りて

「あれ、あしこへ悪魔王の一群が―怨靈神の一群が―女囚人の姿となつ
て、頭の髪は悉く毒蛇と蠢動き来るぞや。あれこそは母が曠志の怨靈神！
南無々々、アポロ！ 助けたまへ！ あれ、怨靈神の數が増すぞや！ あ
れ、我れをば追ひ立つるよ！ あなや、！

ト叫びつゝ、あちこちと狂ひ廻りて又奥へ入る。

コーラス之れを見送りて「是れ皆因果應報の然らしむる所、子を殺し
て其の父に食はしめし業因、云々……あ、いつの日か此の因滅し
て世は安國となるやらん、云々」と歌ふ。

* * * * *

下の幕

は Eumenides と題したもので「善神群」の義である。此幕で前の幕の悪
魔神(怨靈神)が一念發起して悉く善神と化することあるゆる斯くは
題する。此幕と前の幕とは數日或は數月を隔てたものと解すべく、
オレスチスは怨靈神に驅逐せられて殆ど狂人同様となり、諸國を駈
けめぐり、逃げ廻りて疲れはて、今や又デルフィのアポロ廟までさま
よひ來り、其の寶前にぬかづきて救ひを祈願してゐる體。アポロは
我が宇佐八幡などに比すべき神託の源泉と崇められた神で、其の神
殿前には重なる希臘諸神の石像がある。是れが此場の舞臺面。此
の幕も第一段と第二段との二場から成立つてゐる。

老いたる巫女 Pythones といふが來り殿前に跪きて祈禱をする。
先づ大地の神に祈り、次に日の神を祈り、尙郷土の神々に祈り、續いて

Pallasの神Bacchusの神Poseidaの神Zeusの神等にも祈りを做し、更に豫占の神通力を修せんために鼎足座といふものに登らんとて神殿の内陣に入る。既にして驚き戦ひたる思入をして内陣から駆け出して来る。其の獨白によれば、

「われ内陣に進みぬるに、思ひがけきや、中央の禮盤には一人の怪しき男横はれり、手には鮮血尚滴り、白刃をも提げ、且つ橄欖の枝は白き羊毛の飾紐の着いたるまゝ、其の頭を纏ひ、又其の後へには見るも怖ろしき女妖の一群、寧ろ *Gorgon*とも呼びてまし、醜しとも怖しとも名づくべき言葉を知らず、こはアポロの神慮に任せまゐらせて淨め攘ふより外に術はあらず、云々と述べたりて退く。

中央開けて内陣見ゆる。(例の如く押出すにや)。オレスチスは中央の禮盤の上に跪きて一心に哀訴祈願する體。前の場の怨靈神の一群は追求に憊れ果て、オレスチスの左右に分れて熟睡してゐる體。怨靈神といふは復讐を司る女神にて顔色は取りも直さず我が俗に

槃若と稱する女鬼、頭髮は悉く蛇の形をして蠢動いてゐるといふ物凄き形相。

時にアポロ神ヘルミス神を將てオレスチスの傍らに出現して「我れはあくまでも汝を護り遣はすべし、汝が母を殺し、は我が命に外ならざれば」といふ意味の白あり、尙ヘルミスをしてアゼンスなるPallasの市まで汝を護送せしむべし」と宣告し、忽然として去る。ヘルミスもオレスチスも同時に退場するらし。

此時又クリテムネスツラの亡靈出現する。身には黒衣を被り、頸には生々しき血痕を現しつゝ現れ出で、熟睡せる怨靈神を呼び醒せども容易に目を醒さぬゆゑ、怒り罵る意味の獨誦となる。白の間々に怨靈神のすさまじき鼾の聲や唸り聲を挿みて以て單調を破る。

「眞晝は却つて眼界に限りあれども、眠れる者は心眼明しと言ふなるを、汝等は我が頸の傷を見ずや、我れを痛はしとは思はざるや。汝等の眠れる間に雄鹿の逸早く係蹄を脱けしを知らざるや。あな頼み甲斐なな輩よ。あはれ、我

が今呼ばふ此の聲音を聞かざるや、我が此聲を聞かざるや。

鼾聲聞ゆる。

「何事ぞ其の鼾聲。其の間に彼れはしも落延びん。

鼾聲聞ゆる。

「あゝ我が上を思ふとしも無きいぎたなの居眠りや。この間に彼れはしも落延びん。母殺しの大逆も罪なはれでや過ぎぬらん。

唸り聲聞ゆる。

「さても、疲れと眠りとにそが務を忘れ果てぬるあさましさよ。

唸り聲聞ゆる。

「毒龍の力も盡きしか。あさましや〜。

此中怨靈神は次第々々に熟眠より醒めはじむる思入にて、尙眠れる態度のまゝにて代るゝ捕へよ〜「そこなるを、こゝなるを、捕へよ〜」勿^な逃^{にが}しそなど代るゝ夢心地にて罵る。

「あゝ汝等は夢に狩すと覺えたり。いで疾く眞に眼を開いて科人の跡を追

ひ其の罪を糺しくれよ。いで〜。

亡靈去る。怨靈神の頭だつ者(コーラス長)まづ立上りて一同を呼起す。「起きよ〜、我れを責むる聲ぞすなる、我等を咎むる聲ぞすなる。

あはれ、科人は逃れぬるぞや。こは皆此の神殿の主なるアポロめが爲すわざぞ。あな彼の成り上りの神めがしわざの憎さよ、云々。

此時アポロ神手に白銀の弓を携へて出現し

「いかに醜の輩ら、疾く〜去れ。否といはば翼生えたる銀の蛇を此の黄金の弓より走らせんす。疾く去れ。眞の大逆を犯し、をこそ罰するが汝等の務なれ。オレスチスには罪科無し。云々。

怨靈神服せずして、否々汝みづからが勸めて現にオレスチスに大逆を行はせつるならずや。母殺しをなどて大逆と言はざるべき、云々といふ。アポロ「いや〜、クリテムネッスを殺し、は父の仇を報いたるに外ならず」。怨靈神「いや〜、夫の血は近親の血にはあらず。アポロ「夫婦は親子よりも大切ならずと言は、LoveとJunoの御中を

も辱しむるの道理なり、云々。此の問答數回に互りて尙怨靈神は屈服すべき色無ければ、アポロは最後に「さらば追ひ行かんは隨意たるべし、されど我が加護するからは其の追迫も効無からん」。云々。是れにて第一段は終り、第二段となる。

舞臺面はアセンスのミネルヴ(アシーナとも呼ぶ)神の神殿内。こゝへオレスチスが逃げ來り、ミネルヴの神像に取絶り救ひを祈つてゐる見え。

「アシーナの女神よ、あはれ願はくは、罪業深き我れを救ひたまへ。我れに罪あることは實なれども、今は已に懺悔の洗滌を経ざるにあらず、まして新しくは汚れしこともなき身なるをや、云々。

こゝへ前の場の怨靈神入來りて、こゝに彼の者の足跡あるぞや。獵犬の鹿を追ふが如くに血汐のしたゝれる蹤を尾けて、こゝまでは來りしが、云々と互ひに奨勵して尋ね廻り、ト、神像の傍らにオレスチ

スの蹲まれるを認め、いで、思ひ知らせん、云々と脅嚇する。されどオレスチスは惡びれたる體なく、おちつき、て言葉靜かに曰ふ、我れ既に幾回かの犠牲(家)を供へて罪を償ふための行を修したれば、我が手なる血汐の色はあせたり、母殺しの大罪も今ははや大かた洗ひ去られたり。

「年経れば物は皆古りて穢きも淨まるためしぞ。われ將た今は汚れざる舌もて聲高くアシーナの神に祈らん、救助を垂れたまへと祈らん。

こゝに至りて怨靈神は大いに憤激し、汝は我が生贄と定まれる身なるを、いかでかは免れ得ん。いで、汝を縛すべき呪を歌はんとて、之れより一同聲を揃へて怖ろしき呪咀の歌を唱ふ。

「いざやいざ舞ひ踊らん。集へ、いざ怖ろしき歌の力を知らせん。人は只我等が心の儘ぞよ。人の手の清かれれば、我等近よるを得ざれども、一たび血汐に汚れては誰れかは我等が贄とならぬ。そも、是れなる科人を罰することは正義の命する所なるに、邪まなる女神らの依怙最負して我等が正義の妨げ

をす。あはれ、夜の神よ、今歌ふ此の呪歌の力によりて、見よ、今に此奴の心は縛められ、此奴の心は狂ひ亂れん。云々。

「いざやいざ舞ひ踊らん」と拍子言葉を繰返し、凄じき形相して狂ひ舞ふ。此時奥より例の押出し舞臺に乗りてミネルヴ神出現し、やおれ汝等は何者ぞや、云々と怨靈神と一わたりの問答あり、やがて又オレスチスに對ひて、汝はそも何者ぞと問ふ。オレスチスわらびれず其の身の素性を語り、且つ、それがし不正を犯したりとは思はれず、あはれ願はくは神裁を垂れさせたまへと言ふ。ミネルヴ神は流石に怨靈神らを憚るらしく、二つには此事頗る重大にして將來の利害にも關はるべければ、我獨斷にては決すべくもあらず、市民の秀良を召し出だして此の議に參せしめんと言ひて去る。

怨靈神の一群は又聲々に、かゝる大逆を罰せずして、かりにも逃れしめんには

「罪惡これより時を得て、會釋もなく世々にはびこり、子の親を殺すことも習

ひとならん。畏怖の心のあればこそ人間邪修を慎みて中道を歩めども、若し此の心を亡は、毎に放僻を極めつゝ、神を信せぬ脚を擧げて正義の祭壇を蹶返さん、云々。

此の意味の長きコーラス終ると、ミネルヴ神は傳令を従へ、且つ十二人の元老(Areopagus)を將て再び出で来る。元老連はオルケストラに住ふ。ミネルヴは宛然として裁判長といふ態度、皆々に靜肅なれと傳令さする。時にアポロ神も入來る。怨靈神は之れを見て、汝が來るべき處にあらず、汝の領に歸り去れと聲々に罵る。アポロ曰く、否々、我が來るに二の理由あり、一には證人としてなり、二には回護者としてなり、彼れの母を殺し、は元我が命せしことなれば、云々。ミネルヴ之れを歡迎して坐に即かしめ、更に怨靈神等に向ひ訴訟をはじめよと言ひ渡す。宛として裁判庭の光景。

怨「先づ問はん、汝は母を殺し、や、如何に。
オレスチス「いかにも。殺し、に相違なし。

怨「いかさまにして殺し、か。それをも語るべしや。
オレ「まつこの如く劍を抜きて、彼れが頸を打つたりけり。
怨「そも誰が勧め、誰が教へて。
オレ「日の大神の御指圖。

「日の大神はアポロをいふ。この問答十數回に及べる時、アポロ進み出で、父と子との關係は母と子との關係よりも大切なり、母は無くとも子は生る」とて、自身が甲冑して、*Nereus*の頭より生れ出でし事蹟などを證左となし、更に全會衆に對ひ、後世の龜鑑ともなることなれば、汝等も此の判決に參せよ」と言ひて、小石を瓶の裡に投ずるの式を行はする。此間アポロ一句、怨靈神一句、一は呪ひ、一は辯護す、宛として檢事と辯護士の論争。其の結果如何とオレスチスと元老より成れるコーラスとは相錯綜して危惧の意を吟唱する。ト、裁判長ミネルヴは投石の數を取調べ、有罪とする者と無罪とする者との數が同一なれば、我れ之れに對して判決票を投せん」と言ひて一石を投じ、竟

にオレスチスが無罪と宣告する。こゝに於てコーラス一同大歡呼の歌を唱ふ。怨靈神は聲を揃へて其の權利を蹂躪せられたるを怒り罵るの意を歌ふ。オレスチスは免せられて退き去る。
ミネルヴ徐ろに怨靈神を諭す。彼等も竟に屈服して、以後は悉く善神となりてアセンスの市を護らんと歌ふに終る。こゝに於てか一同歡呼し聲を合せて
「あなめでた、あな嬉し。あな／＼めでた、いで祝へ人々、いで賀げや人々。
と樂しげに歌ひ舞ふ。

(完)

エスキラスの作は尙他にもあり、彼の「縛せられたるプロメシウス」の如きは廣く人口に膾炙せる所なれど、惜いかな彼れは斷篇、到底此作の完璧とは比べも

のにならないと思ふ。二千幾百年の太古にかゝる雄篇が儼然として成立つてゐたと思ふと、後世の文壇に生れて何一つ物らしいものをも作り出し得ぬ吾々は自分ながら何といふ意氣地なし、能なしかと恥ぢ入らざるを得ない。此作については批評し解説すべきことも多いが、今はわざと省いておく。

(四十二年二月稿)

* * * * *

イブセン作「亡魂」

(早稻田の講義録の爲に)

一概に西洋の演劇といふものゝ、之れを別ては數へ切れぬ程の區別がある。先づ年代的に言へば、二千何百年以前には、希臘に盛んに行はれた音楽入の我が「能」めいた一種の演劇があつた。之れを希臘劇ギリキヤといふ。今は全く絶えたものだが、其頃出來た立派な脚本が今尙依然として傳はつてゐる。支那、印度の劇や我が能に似てゐる。それが羅馬帝國に傳はつて其の滅亡と共に衰へた。次に起つたのは歐洲中古の劇で、之れを通例ゴシック劇といふ、ゴッス人の創意に成つた宗教劇に胚胎したものである。或は之れをロマンチック、ドラマともいふ。當時の平民語であつたロマンス語の奇譚に因縁する所が多いからである。此種の脚本は主として西班牙と英吉利とに榮えた。就中最も卓越したものとして今尙世界中に尊重されるのが英のシェイクスピアの諸作で、其の内容から形式までが、其の深淺は別にして、頗る我が國の劇に似通つた

ところがある。其の次に歐羅巴で一時全盛を極めたのは擬古劇といふもので、其の立派な代表と見るべきは十八世紀の佛蘭西劇である。これはゴシック劇全盛時分にも伊佛英等に萌芽を發しつつあつたものだが、まだ其の頃には時の劇壇を占領し盡す程では無かつたのが、十八世紀の佛國王ルイ十四世の朝に至つて、王が豊太閤のやうに華美驕奢を好み、殊に演劇を好んだのが元で、ラシーヌとかコルネーユとかモリエールとかいふ秀でた脚本作家が輩出し、盛んに名作を著し、其の感化影響が諸外國にも及んだ。で一時は劇といへば佛蘭西式の擬古劇でなくてはならぬやうな有様であつた。此の種の作を擬古劇といふのは其の内容から形式まで音樂的といふ點だけを除いて前に言つた希臘古劇の體式を金科玉條として、而も頗る變則的に模すことを専としたからである。然るに年月の移り、人の好尚の改まるにつれて、此の式もおひ／＼壓かれ氣味となり來つた所へ、所謂ロマンチック、ムーヴメントといふ文藝上の一大革新活動の勃然として興つた爲、十九世紀の初めよりは、前に一旦は拋棄せられたシエクスピア一流のロマンチック、ドラマが又も歓迎せられるこ

ととなり、就中シエクスピアは此の大活動の本尊模範標本のやうに崇められ、苟も劇の新作家を以て任ずる者はシエクスピアを師表とせなければならぬやうな氣運となつて來た。獨逸では、ヘルデルやレッシングやゲーテやシルレルやが音頭取となり、英國ではコールリッチやラムやハズリット等が先達となり、佛では彼のギクトル、ユゴーが眞先に立つて此氣運を煽り立てた。十九世紀の前半に名を顯した詩人で、能ふべくんばシエクスピアの競争者たらんと望まなんだ者は殆ど一人も無かつたと言つてよい位。シエクスピアはたしかに詩人の理想、少くとも理想的演劇脚本の權化のやうに見做されたものであつた。ゲーテの天才を以てしても尙且沙翁の作に對しては「我れ及ばず」と歎じてゐたらしいから、其の他の作家群に至つては何れも皆後へに瞠若として、其の到底攀ぶ可からざるを感じたものであつた。然るに十九世紀も次第に闌となつて、一千八百八十年と言ふ頃となり、こゝに意外な邊より意外な作家が躍り出で、少しづつ沙翁如來の巨大なる臺座の礎を掘崩しはじめた。勿論其の地盤は一朝一夕の流行で築かれたの

で無く、随つて甚だ堅固だから、廿世紀の今日となつても、まだ決して打崩されはせぬのであるが、流石に前々に比べて見ればめつきりと傾いて歪んだと言はねばならぬ程にシェイクスピアの礎石を動かし、少くとも奈良の大佛の隣へ鎌倉の大佛よりもズット大きい奴を据ゑ附けたと評すべき程の新現象を生じたのが歐洲近世の劇況。さて其の新作家とは誰れかといふに、これがソレ、處は歐洲の極北スカンデナヴィヤのノルウェー、作家の名はヘンリック、イブセン。此の男が天下を驚かす新式の脚本を作しはじめたのは其の五十一歳の時と見るが正當。勿論、其の以前にも澤山の作はあるが、沙翁の臺座をゆるがしめた作はといふと五十一歳以後の作。左に其の諸作の名と年代とを示さう。

人形の家

一八七九年

亡魂

一八八一年

民衆の敵

一八八二年

鴨

一八八四年

ロスマルスホルム

一八八六年

海から来た婦人

一八八八年

ヘッダ、ガブラア

一八九〇年

棟梁

一八九一年

小さいアイヨルフ

一八九四年

ジョン、ガブリエル、ボルクマン

一八九六年

死んで生返る時

一八九九年

以上をイブセンの社會劇と呼ぶ。即ち現社會の實相を寫したものと名高いのである。彼れは一千九百〇六年七十八歳で世を去つた。イブセン一たび出で、劇壇の局面は一變したと言つても過言でない。もとよりさう成り來つたには遠い深い因縁の有つたことは勿論だが、其の爆裂の導火となつたはイブセンの作たることは争はれない。最近に至つては形式なり内容なりに於てイブセンのよりも新しい脚本が彼方には幾らもあり、又見やうによつてはイブセン式に對する反動さへも起りかゝつてゐるともいへるのであるが、尙我が國の劇壇から見れば、イブセンは依然として見ぬ仙郷の奇異なる

果實で、舞臺上の眞味を味はつて居る人は甚だ少ない（無論洋行した人は別として）。いろ／＼のイブセン評論が新聞や雑誌の上に散見し、其の脚本の翻譯も四五種以上公にされたと記憶するが、それにも拘らずイブセンは未だ十分紹介されてゐないと思ふ。自分は茲でイブセンの傳や論や作やを紹介しようといふのでは無い、只其の味ひがどんなであるかといふことを一通り諸君に話されるものなら話して見たいと思ふばかり。

蓋し日本在來の芝居ばかりを看慣れた者に取つては沙翁劇すらも大分趣が變つて見え、こんな風のもものが舞臺に上して間が抜けないであらうか、ハムレットの獨白のやうな長い／＼文句を役者がたつた一人突立つてゐて饒舌る、それを見物が聽いてゐることが出来るであらうかなどいふ疑ひが起る位。況んや十八世紀式の擬古劇に至つては筋立が一層單純で、波瀾活動が乏しく、長白も多く、場面も時間も同じ處、同じ日の事が眼目で、どちらかといふと、能めいた脈が多いので、我が目まぐるしいやうな淨瑠璃劇を看慣れた目には淋しいのが定り。然るにイブセンの晩年の諸作即ち前に掲げた社會劇に至つて

は、更に一段我が國の劇とは味ひが飛び離れてゐる。茲に試に其の如何ほど飛び離れてゐるかをざつと話して見ようと思ふ。先づ、其の一例として「亡魂」又は「幽霊」と譯する作を引用する、これは三幕物で、時間は二日間に亙るきりで、場所は三幕とも同じ一室内の事で、人物は三幕を通じてたつた五人きり。何と先づこれだけでも我々日本人から見ると奇ではないか。日本の劇ならば只一幕、いや只の一場にでも時としては十人や十二三人の役者が出る、それを三幕押通して、背景も變らねば服装も變らず、而も人物はたつた五人、時々は只二人でじつと座つて話してゐるといふ芝居。これが所謂イブセンの寫實劇。ハテナ、實際どんな味の物であらう、こいつ實地に就いて取調べて見たいわいと思はざるを得ない。試に諸君と共に英國なり獨逸なりへ行つて、突然イブセン劇を演じてゐる或劇場の木戸を潜り、恰も「亡魂」を演ずるといふ舞臺面に對つたとしたら如何であらう。外國語の知識が十分で無く又イブセン劇に關する知識も無いものとして、はじめて「亡魂」を舞臺に觀た感じは斯うもあらうか。

第一幕

イブセンは日本の劇などとは全く行き方が違つてゐると聞いたが、果して如何であらうかと、好奇心満々として待構へてゐると、リ、リ、リ、リと鈴の鳴る音が一しきりして、唐突に幕が上がる。幕開の騒々しい日本の舊式の芝居なぞとは先づ是れからして大きに違ふ。但見る、舞臺は平凡な有りふれた西洋式の一室、正面奥の方には温室があるらしく、玻璃戸が閉めてあり、庭口へ出る扉があり、庭が見えて、遠山も見える。次の間へ通ふ戸口がある。室内には卓子、椅子、卓子の上には雑誌や書籍や新聞紙など、いふ飾附。何の事は無い、只の家だ。金ぴかの襖などを看慣れた目には勿論、本郷座式の油畫の背景を見附けた目にも淋しい。さて人物はと見ると、庭口に職人らしい跛足の男が一人、今ちようと室内へ這入らうとするのを、止めてゐるらしいのが十六七の娘、此家の小間使らしい。

女「何の用？ あらまあ、びしよぬれぢやなくつて？」

男「え、こ、お冥加もねえおしめりだせ。」

女「嘘よ！ 七里けつばいの雨だわ。」

男「どうだい、其の口は！」

トいつたやうな問答。場面から扮装から口吻から動作まで思ひ切つて現實的。只の問答だ、何處の臺所口にもザラにありさうな仕草や言草ばかりで少しも芝居らしい際立つた點が見えぬ。此の二人は父子らしい。娘、あれさ、そんなにバタクサしては不可つてよ、若旦那さまが目を醒すから。」男「何だと、此眞晝間に寝てる！」ふと此問答が耳に附く。で注意すると、若旦那々々といふとが度々聞える。此二人の言ふことが、とかく半分どこで切れる、奥齒に物のはさまつたやうな言ひ振をする。随つて聞落すまいと耳を澄ます。其の中に明日は此の家の主人であつた故大尉の記念日、而も死後十年目に相當するので、其の記念に孤兒院とやらが落成して、それがため、何か盛んな儀式を執行する準備中だといふとが二人の話で分る。「え、こ、こ、こ、孤兒院の保母にな

つたつて詰らねえ話だ爺の方へ来いよ、いい目を見させてやる」と言ふやうなことを職人が言ふ。娘は鼻であしらつて意味ありげに「若しもね……わたしの思ふやうにゆきやあ……」と言ひかけて、變な目附をして「後はいはなくつてもよいことなのなぞとはぐらかす。段々看慣れるに随つて、是れが畢竟イブセンの作の特色だといふとが分る。どの人物も、物を半分言ひかけて口をつぐむか然らざれば人か事かに妨げられて談話を中止するのが定り。見物は否でも應でも多少の好奇心を挑發せられざるを得ない。勿論イブセンの劇は酒を飲みつゝ飯を食ひつゝ若しくは煙草を吹かしつゝ看る劇では無い。つゞけて二三言も聽洩したら最後、或は筋が丸で分らなくなつて仕舞ふ。所謂 all eyes, all ears で、on the alert 式に肩を凝らして見て居ねばならぬ。見るに骨が折れる芝居だ。其の代り、片言隻句も聞落すまいと注意して見てゐれば、次第に好奇心が募るやう、探偵慾が萌すやうに出来てゐるので、普通の芝居を見るのとは全く違つた一種不思議な面白味を感じはじめ。言は、出来心で探偵になつたといふやうな氣持。味に喩へれば、普通の看劇の味が甘い。

なら、是れは澁辛いやうな味だ。

只の職人、只の小間使、常の劇ならホンの仕出したるに過ぎない人物だが、そいつらの仕草が妙に氣にかゝる。一體此家はどういふ家だらう、此の職人と此の娘との關係は一體どういふのであらうなど、いふ疑問がいつとなく浮びかける。

其中職人(名はエングストランド)は出て行つてしまふ。すると一人の紳士、見るから牧師らしい謹直さうな四十五六の男が這入つて來た。小間使が餘所行言葉で會釋をして「お早うございました、お外套をお傘を」と愛想を言ひ、奥さんに申し上げませう」と言つて奥へ入る。残つた牧師はあちこちと歩く。ふと卓子の上の書物に目を着ける、忽ちギョツとした思入。それが如何にも大げふなので、見物の好奇心が一段と加はる。ハテナ、あの書は何だらう。社會主義の本? 自然主義の小説? いろ／＼の臆説が萌しかける、其のトクン奥から出て來たのが、これも四十何歳であらうといふ婦人。あゝ、これが所謂奥さんだ、此の家の女主人だ、ハ、ア、して見ると未亡人だと思ふ。牧師

と一通り拶揆が済む。此のあとはまるで不斷の通り、少しも芝居らしい事はない。其の中に牧師と未亡人との間に、新思想の著述を読むのは可いとか否いとかいふ妙な議論が始まる。ハ、ア、して見るとあの本は無神論か、進化論か、何でも其の邊だなど勘附く。その中に話頭が轉じて、こんどは寄附とか預金とか大ぶ俗務的な相談になる。「孤兒院には保険を附けておいたほうが萬一の爲に安全だが、併し神を信する筈の牧師たる者が、保険を附けるとは何となく矛盾の沙汰で、輿論の攻撃が思ひやられる」と言つたやうな筋の内密話。とうとうこの遠慮の爲に保険は附けないことに定る。さて、ノルウェイ邊の牧師など、言ふ者は斯様な取越苦勞までするものかと我々日本人には奇態に感ぜられる。話は何時の間にか小間使の事に移つて、牧師は「里へ返せ」と言ひ、未亡人は「是非とも孤兒院で使ふ」と一寸話が角目立つ。此の小間使に關しても何か仔細があるらしい。益、好奇心が募る。トタンに息子のオスワルドといふのが奥から出て来る。これが噂のあつた所謂若旦那だ。幼少から母の手元を離れて佛蘭西のバリーへ行つてゐたので、書を修めてゐたと言ふ

話。年は二十四五でもあらうか、何となく倦憊衰弱の容態、なまけ者、文學者肌、デカダン風といふ様子が見える。牧師のマンデルスは全然見ちがへる位だと言つて驚く。互の拶揆が済む。「胴樂息子のお歸りでさあ」と言つて謹嚴な牧師を驚かす。やがてバリー風俗の話になる、佛國畫家の放縱な生活、内縁の妻といふ奴を引摺込んで暮してゐる模様などを語ると、牧師は目を丸くして呆れ驚き、顰縮して非難の語を洩すと、オスワルドは黙つてゐない、我國の所謂模範嚴父や模範良人よりはまだしも優しだ。僕は彼等がバリー逗留中に行つた事を傳聞して呆れたと、旅の耻は搔棄式の紳士連の陰慝を攻撃する。ちよいと我々日本人の胸臆にも響く所ある時弊に剴切な語句が聞える。豫てイブセンは嘲世諷俗の鋭い筆力を持つてゐると聞いてゐたが、扱こそ是れだわいと思ふ。さう心附いて聞くと、何でも無いやうな問答のうちにも始終隱然として此種の鋒鏘が閃めくやうに感ぜられる。何となく痛快だ。今までは好奇心、探偵氣が主で見て居たのであつたが、此に至つて一種の人生批判的の感興が加はる。俗に謂ふ劇としては何等の波瀾も無く活動も無く、見

た目に面白いと思ふ點も無いが、此の異様な感興があるが爲に、どうやら餘所
事で無いやうな氣がしてツイ乗出して聞耳立てる。牧師が頻に眉を顰めて
オスワルドの本能満足主義を難するのにも一理ある、併しオスワルドの自由主
義、天真爛漫主義も頗る愉快だと思ふ。其の問答は簡疎だが、形式主義に對す
る自然主義、本能満足主義に對する輿論習慣の拘束など言ふ問題が仄示かさ
れてゐるので面白い。「先代萩」や「忠臣藏」や「桃山譚」や「加賀騒動」などで聞く問
答とは違つて、全くヒシ／＼と身につまされ、鼻頭眼前の事のやうだから面白
い。

かうなつて來ると、おひ／＼芝居といふ事は忘れてしまふ。況んや作の良否、
藝の巧拙などは二の次、三の次の事になつて、専ら人物の白に聞耳立て、其是
非當否が評したくなる。人物に最負が附く。見物中にマンデルス黨も出來
ればオスワルド派も出來る。未亡人が牧師に向つて「わたしも實は件と同感
です」といふ段になると、見物の或者は我れを忘れて乗出して「僕も内々さう思
つてゐた所だ」と言ひかねない。かくてマンデルスと未亡人との問答がおひ

／＼キハドクなつて來る、此家の過去の内情の複雑な事が分りはじめる。で
益、好奇心が募る。固唾を呑んで聽いて行くと、故主人の大尉といふは放埒千
萬な不身持な男で、未亡人は結婚後只一年で愛想をつかして逃出し、娘時代の
親友であつた牧師、即ち爰にゐる牧師マンデルス（の家へ轉げ込んだのを牧師
が頭からはねつけ、無理やりに説得して元の鞘へ納め、それから何と思つてか
牧師は此家へ足を向けぬやうになり、隨つて其の後は萬事首尾よく治つてゐ
たものと信じてゐた所、其實大佐の放蕩は其後も更に改まらず、未亡人は世
間を憚つて種々に苦心をし、やつと外へ出ての放埒だけを止めさせた甲斐も
無く、現在召使の婢に手を出し、或日未亡人が次の間で聞くと、も知らず其の婢
に戯れた場所もあらうに現在此の室、ツイ此の次の間で或日の事あれ、いやで
すよ、いけません、離して下さい」と婢が叫んだ、云々と未亡人が語る。牧師は聽
く事毎に大げふに驚き呆れる表情をする。で見物もツイ釣込まれて駭き呆
れる。この話の中に今の小間使のレギーナといふ女は大尉が手を附けた下
婢の生んだのだと言ふことが分る。幕開に出た職人は、言はば土産附の婢を

押附けられたのだといふこともほゞ分る。そんなこんなの舊惡の罪滅しにとて未亡人が此の十年來苦心經營したのが孤兒院の建築、大尉の財産の有りつたけは、牧師に依頼して管理させ、それによつて此の建築を果し、同じ因果に生れたレギーナは其處の保母として使ひ、長く大尉の醜名を掩ひ藏さうといふのが未亡人の本願であるといふことも分る。

さて此の昔話漸く熟して見物も静まり返り、如何さま今の世間の大方は正に是れだ、奇麗に見えるのは表がゞりだけで、裏へ廻れば大抵が是れだ。あゝあゝ、あの棧敷やあの高士間に居る見物の中に、此の未亡人と感を同うする奥さん連がありはせぬかなど、ツイ思ひ浮べる、其のトタンに、突然次の間の方で

「アレ、いやですよ、いけませんよ！」

といふ少女のなまめいた聲が聞える。ツイ今聞いた昔話中の言葉だから、見物が先づハツと思ふ。果して未亡人が顔色を變へた。「オヤ幽霊！」と未亡人が叫ぶ。未亡人が「幽霊！」と叫ぶまでもない、見物の方で、今噂のあつたばかりだから、其の大尉と其の下婢の幽霊が出たのでは無いかと思つた所だ。それ

に未亡人の表情と叫び聲とが凄いので、尙更以てギョツとして猶耳を欬てようつとする間も無く……西洋式の下し幕が——だしぬけにツトと下りる。オヤとばかり開いた口が閉がらぬ。餘韻嫋々とは是れだ。いやでも應でも暫くは考へ込まざるを得ない。何だか非常に眞面目な謎を掛けられたやうな心持がする。好奇心が絶頂に達する。中々以て作のよしあしや藝の巧拙などを批評する邊はない。「幽霊！」と叫んだ未亡人の一言が耳に残つて忘れられない。豫て此作は遺傳の怖しさを寫したものだと思つてゐたが、いふやうな事が念頭に浮ぶ。さてオスワルドと小間使との關係は如何なるであらう。あの二人は腹がはりの兄妹では無いか。世間體を欺ます爲に只の小間使として使つてゐたのが因果應報、この先どう成るのであらうか。後家はあれから如何いふ態度を取るか。早く次の幕が見たいと思ふ中に

第一一の幕

がはじまる。
定めし牧師立合で忤オスワルドを異見の場などで、あらうかと待ち構へて

わたとは大違ひ、幕が上ると、場所も同じ室、次の間から「まことにお粗末さまで」と言ふ食事後の挨拶と共に未亡人と牧師とが出て来る。何だ！食事をしてゐたのか。よく家常茶飯式といふ事を言ふが、是れは實に讀んで字の如く家常茶飯だ、これなら錢を出して芝居を観に来るが物はない、内の臺所を覗いてゐても濟むなど、悪口屋が半疊を打込む。併し又考へると、こゝが如何にもイブセン式で、寫實式なところ、幽霊！騒ぎの後へ食事の場などは新しい。生きてゐる人間だ、戦争中だつて兵糧は使ふ、幽霊！騒ぎの最中だつて食事時が來りやあ物食ふは當然だ、イヤかうなうては嘘だ。よしんば胸には荒波が逆巻いてゐても表面は飽くまでも取澄して遊ばせ言葉で奇麗に世を渡るのが文明社會の習はしである、流石に未亡人おちついたものだと思ふ。それから又牧師と差向ひでの密談。四十女と四十男とが眉を顰めて如何にも心配さうな相談事。此の話の中に職人エングストランドが如何いふ手續でレギーナの母を引取るに至つたかといふ事が詳しく分る。三百圓の手切金が役に立つたのである。牧師が顰縮して「それではあのエングストランドは三百圓

の金に目がくれてさういふ墮落した女を娶つたのか」と苦々しげに言ふと、未亡人が遮つて「慾得づくの結婚がゐるいのなら、それに貴賤上下は無い筈、わたしが故大尉に嫁したのもツマリは其の財産を目あて、それを淺ましく思つて離縁せうとしたわたしを、強ひて元の鞘へ納めた貴下は、取も直さず慾得づくの結婚を是認して墮落男へわたしを押附けたのでせう」といふ意味の議論で、鋭く切込む。このあたりの問答は又々人生觀上の感興を促す。「戀に上下の隔はない」といふ諺は陳い奴だが「慾得づくの結婚に貴賤なし」などは新しい。時弊に適中してゐる。痛快々々！牧師の旗色大きにゐる。後家さんの氣焔はおひ／＼高く、世の輿論を畏れ、世間體を憚る輩らを眞正面から罵倒しはじめ。「わたしは今までは實に／＼卑怯であつた、臆病であつた、世間を畏れ、輿論を憚つて自ら欺き、僞善を行つてゐたのであつた」といふ意味の述懐を述べ立てる。此の述懐は一面は自ら責むる意だが、一面は牧師マンデルスと同臭味の俗人を罵る聲である、取りも直さず場内多數の見物人にとつては随分耳の痛いほう。「わたしは卑怯であつた、臆病であつた」といふ此の Coward!

Coward!といふ聲が暫く場内に響き渡る。見物の或者は何だか頻に叱り付けられ、痛めつけられてゐるやうに感ずる。若い感じ易い近世式の男女に取つては野に叫ぶ豫言者の聲かとも聞えかねない。聴けば聴くほど未亡人は大膽な事を言ふ。「よしんばオスワルドとレギーナとは血がついてゐようとも關つたことはない。骨肉相婚といふことも世間に有りうち、内實を洗つて見りやあ大概な家が然うぢやありませんか。いゝえさ、進化論的に見ても、人間は然うして以て繁殖して來たのぢやありませんか。牧師は駭いて呆れて、目を見張つて、殆ど口を開き得ない。「畢竟我々は過去の謬信といふ亡者に取着かれてゐるのです。亡魂に憐まされてゐるのです。そこにもこゝにも、此新聞紙の行の間にも幾らも亡魂が附纏つてゐるなど、言ふ。警句！成程大概の人間は習慣や遺傳や過去の謬信や過去の傳説などに縛られて、自ら求めて煩悶してゐるに過ぎぬ、時勢の推し移つたのに心附かず、何時までも舊習慣や舊道徳に縛られてゐるのは、神經病に罹つて、自分で幽霊を拵へ、それに取附かれて苦しんでゐるやうなものだわい

と思ふ。そのうちに未亡人は舌鋒を一轉して今度は頻りに女の道とか妻の義務とかいふ事のみ八釜しく言つて個人の自由を重んじないのは間違つてゐると攻撃する。牧師も黙つてはゐない。女は良妻賢母を理想とせねばならぬといふやうな事を諄々として説きつける。牧師は一に世間を憚り輿論を畏れ、隨つて飽くまで俗道徳に服従してゐるらしい。未亡人は流石に實行は得しないものゝ、頻りに個性の自由を欲し、獨立の生活にあこがれてゐるらしい。

さて此の邊になると「看者の心に新に一種の疑念が起る。どうも此の男女の關係が只で無い。はじめは「奥さん」と呼びかけてゐた牧師が、此の議論の間に、「ツイひよいと、ヘレンさん」と呼びかけることがある。又「わたしは未だ曾て貴女を他家の夫人としての外は念頭に持つてゐた事は無い」なぞと妙に分疏らしく言ふ。すると未亡人はすかさず切込む。「オヤさうですか、とかく人は昔を忘れ易いものですからねえ」。例のイブセン式！言外に意味がありさう。さう心附いて廻想すれば、前幕にも大ぶ怪らしい言葉の端々があつ

たつけと思ふ。ハテナ昔は、こりやアノ何だ、何でも餘程只で無かつた關係だ、と勘附く。して見ると故大尉の放埒に愛想を盡して牧師の宅へ轉げ込んだのにも、多少別種の動機も加はつてゐたのらしいなどと臆測する。ともかくも又新に一の探偵慾が生じ、二人の一顰一笑を見脱すまいと居住ひをなほすトタンに、職人のエングストランドが入つて来る。忽ち局面が一變する。前に一寸記して置いた通り、未亡人が牧師にエングストランドが持參金を取つてレギーナの母たる小間使を妻にしたといふ履歷を悉く話したので、牧師は大きに腹を立て、それでは彼れは私を欺いたといふもの、わたしに對しては曾て其様なことは言はなんだと大きに怒つてゐた折柄ゆゑ、エングストランドの顔を見るや否や忽ち一場の詰問きが始まる。ペランメイ調のエングストランドは御座り奉つて口がしこく辯解する、牧師は迂濶な學者口調で下手々と詰問する。これが又一寸面白い。と、エングストランドは巧く言ひ脱けて出て行つてしまふ。看者はどちらがどちらとも判じかねて半信半疑而して牧師は全然エングストランドの言ふ事を信じたらしい。「あゝいふ

譯なら、何も強ひてエングストランドを咎めるにも及ばんといふ。すると未亡人は牧師の傍に近寄り、あなたは何時までも大きな嬰兒ねえ！と唐突に言ふので、牧師は「エ、！」と振向く。看者も言ひ合せたやうに未亡人の顔を見ざるを得ない。未亡人は笑を含み、牧師の肩へ手を掛け、ほんとに抱してキッスをしてあげたい位よといふ。ハテナ！ 牧師は此の一言に酷く駭きあはてた調子。「そゝさういふ―あなたはソノさういふわるい戯談をなさるから」といひもあへず、丸で怖ろしい物にでも出逢つたやうに、匆皇として奥へ入る。看物も一寸呆氣に取られる。未亡人は太い溜息をして、只ひとり悵然と長椅子に腰を下して、しやうがないといふ思入。こゝに至つて看者もはじめて牧師の爲人を合點する。ハ、ア、あの牧師先生は大ぶお心善しだわい、エングストランドによいやうに言ひくるめられたのだな、所謂學者肌の世間知らずだ、早く言へば抜けてるのだ、腐儒といふのはあゝいふ手合の事だ、云々、云々。看者の心にいろ／＼な批評が浮ぶ。折から、若旦那のオスワルドが入つて来る。

さて、初手は「何だ、つまらん芝居だ」とばかり居つた此の芝居が、此の邊まで觀入つて來ると、もう言はゞ何かに魅せられた形で息がつかれない。殆ど應接の違がない。况んや作の巧拙や藝のよしあしなどを思ふ違はなく、只々これから、どうなるかと思ふ。親類縁者の宅に起つた珍事を洩れ聞いたやうな心持。他人事、餘所事とは思はれんので氣が揉める。

オスワルドは煙艸をも吹かせば酒も飲む。前幕で牧師に初めて逢つた時、娯樂者が歸つて來ました」といふ意味の事を言つたことがあつたが、如何さま、大ぶ娯樂者肌にも見える。どことなく自暴氣味の舉動が見える。酒でも飲まねば堪へ切れないといふやうな様子。せめて肉體の嗜慾でもほしいまゝにせねばといふ趣。氣が鬱閉いで、ムシヤクシヤして堪らないらしい。時も時、スカンデナギヤあたりの黄昏時。折しもビショ／＼と霖雨。鬱陶しいつたらない。唐突に頭をかゝへて椅子にもたれて獻款をはじめめる。「オヤどうおしだ」と母親が驚いて駈寄つて介抱する。其の筈だ。アカの他人の看者一同さへも思ひ懸ないから驚く、氣に懸る。どうしたのだらう。「エ、お前どうおし

だえ。「阿母さん、僕は——僕は決して放蕩なんぞした覚えは無いけれど——」と、これよりオスワルドは啜り泣をしながら母に向つて自分が圖らずも不治の病に罹つた事を話し出す。母は慰めて「あまり無理な勉強をした一時の疲勞であらう」と言ひかけると、「いや／＼、僕も初めは然うかとも思つたが、さうでない」と、パリ—留學中一度其の難病が發したので早速醫師に見せた所、醫師が言ふには、是れは生れ落からの遺傳病で、これが若し再發したら、迎も助からぬと言つたゆゑ、いや／＼、わが父は、品行方正な人であつたと兼々母から聞いてゐる、決してそんな病を遺傳しよう筈が無いと辯駁した所、それでは自業自得と見るより外に説明は無い、あなたの不養生から來たことだと言つたけれど、僕は別段斯うといふ不攝生をした覚えも無いのに、何の因果で如是難病に罹つたか」と男泣に啜り上げての述懐。此の話は母にも看者にも眞に意外。前幕以來連りに探偵氣は起つてゐたが、こゝへは夢にも氣附かなんだ。「父は品行方正な人であつた！此の一言を聽く未亡人の顔の表情！幼少からへチ秘しに秘して、父親を品行方正の紳士に仕立上げてしまつてゐたので、息子は

然う信じ込んでゐたところ、怖ろしいは因果の法則、親の不しだらが子に報うて、遺傳したは何病？ 恐らくは激烈な花柳病？ これがためには一種猛烈な狂疾を發し命を絶つに至つて止まる例實は内外に夥しい。酒毒の遺傳、毒の遺傳、この二つは現代の最も著しい頽風の特徴。満場の者覺えず慄然として遺傳の不可避性に想到する。眞に痛ましい！ 取りわけ親の罪過を自分の自業自得と誤解し、煩悶するのが痛ましい。それをさうとは今更には言ふに言はれない母親の心の中の切なさはどうなだらう！ 母は堪へかねて、せめても一時、憂を掃ふ玉箒にとレギーナに命じて「シャンペンでも持つてお出」と言ふ。かうなるとオスワルドは殆ど甘へつ子のやう、レギーナに對する自分の戀情を秘さうともせぬ。「阿母さん、レギーナは立派になつたぢやないか」と、あれを僕の妻にしたいと言はぬばかりに言ふ。見物は一種の反語を感じて無慚に思ふ。理論の上でこそ骨肉相婚何かあらんやなどと云ふものゝ、流石に女は女、母親には到底それを實行する勇氣は無い。人もあらうに、現在、腹がはりの妹を慕ふとは、と見物すら無慚に思ふ。未亡人の苦悶が其の表情

で善く讀める。

オスワルドは惱ましげに言ふ、大陸にゐるとかうでも無けれど、故郷へ歸つて來ると丸で穴の中へでも這入て行くやう、氣が鬱閉いで苦しくてくならぬ、大陸では人生を愉快なものと観じてゐれど、國へ歸るとすべてが悲觀的で、何一つ心を慰めるものも無くて、酒とか色とか肉體の樂以外には耳目を喜ばすものも心を樂ますものも無いといふ意味の感慨を述べ立てる。「僕は暗いことや苦しいことは大嫌ひ、明るいことや愉快なことが欲しくてくならぬ、それゆゑバリーに居る間も畫を一寸畫くにしてからが、いつでも題目は幸福とか日光とかいふやうなものばかりであつたなぞといふ。不治の遺傳病に罹つて、もう程なく氣が狂つて命までも無くならねばならぬ運命の此の青年が、これほどまでに人生の悦樂にあこがれ、幸福に渴し、肉體の愉快を貪らうとしてゐるかと思ふと、彌以て憫れにも無慚にも感ぜられる。蓋しせめてもレギーナのやうな多血質な暢氣らしい蓮葉な活潑な女と一しよになつて戯れてでもゐたら、此の悶々を忘れる隙、まぎれる間がありさうなものと云ふが病的な

オスワルドの願ひらしい。氣が鬱した時に強烈の火酒を飲む格だ。母は同感に堪へずして、せめても其の業病を自ら招いたと思つて苦悶してゐるのをだけなりと除いてやりたいと思つたと見えて、先づいろ／＼に息子を慰め、一切の事を打明けて話さうと、己に口を切らうとするトタンに、孤兒院開院の式を了へて牧師マンデルスが歸つてくる。

「もう濟みましたか、御苦勞さまで」と言ふ挨拶がまだ終るか終らぬ内に「それ、火事だ！」といふ大騒ぎ。牧師も息子も、未亡人もレギーナも「ソレ！」と言つて駈出す。見物も覺えず起上つて、氣の早い者は舞台へ飛び上つて奥へ駈行かうかと逆上る位。少くとも背延び位はして舞臺の奥の方を一同が見込むうちに——幕。

第三幕

さて孤兒院はどうなつたか、十年の經營空しく一宵の灰燼となつてしまつた

か、さて／＼無慚千万な事だと、餘所事でないやうに氣が揉めて、幕の上るを待つうちに、忽然として現はれるは前と同じ舞臺面。未亡人とレギーナとは戸外を望んで悄然と立つてゐる。「すつかり焼けてしまつたのね。」と絶望的といふよりは諦めたといふやうな調子で、未亡人がつぶやく。殘煙は尙風に煽られて中空に漲り漂うてるやうといふ光景。ところへ牧師のマンデルスが只ならぬ様子でアタフタと入つて来る。顔の色が土氣色で、物言ひもおどつて、何か仔細が有りさう。ついでにエングストランドが「とんでもねえことが持上りましたね」といひ／＼入つて来る。「お前さんまた尾いて來たのか」といふ牧師の言葉が妙に耳立つ。こりやあ何か火事の前か後かに二人の間に事件があつたらしい。又例の好奇心が萌す。するとエングストランドは女（レギーナ）に向つて極小聲で「え、かう鳥が懸羅つたせ」と言ひ、すぐ氣を換へて牧師に向ひ「あなたがあの蠟燭の心を切んなすつた時に、わつしは實にあぶないことをなさると思ひやしたのさ。それ、あの指で以て蠟燭の心を」と言ひかける。牧師はドギマギして「イ、ヤわしは決してそんなことをした覚えはな

いといふ、いや、たしかに切んなすつて、その心をお棄てなすつたが、それがあの
鮑屑の中へ落ちやしたやうで。「いや、さういふ筈は無い」なぞといふ押問答。
ト、それはマア兎も角もとして、此の事が早晚世間へバツとなり、新聞屋の地
獄耳に入れば、忽ち牧師が職掌上の責任問題、進退問題にもなると、牧師は大煩
悶。それと同時に未亡人は、何か深く諦めた所があるらしく、もう故大尉に關す
るものとは總て手を切つてしまふ氣ゆゑ、残つてゐる預け金などは一切牧師
に一任するから、どうなりとも處分してくださいといふ。こゝで、尙いろく
込入つた關係があつた末、ト、牧師はこよひの失火の原因に關する嫌疑をエ
ングストランドが引受けると言ふを聞いて、大きに喜んだ様子で、その報いに
故大尉の遺産の一部をエングストランドに或事業の補助費として貸渡すと
いふやうな約束をなし、勿皇と未亡人に暇乞してエングストランドと共に
出て行つてしまふ。之れより先、牧師に對する見物の同感、幕を重ねるにつれ
て段々薄らいでゐたが、こゝに到つて、其の心事の卑しいのが見え透くので、甚
しい反感を感じる。輿論を怖れ、職を失ふを恐れ、剩へ他人の遺産を自己の便

宜に利用してエングストランドのやうな奴と利益の交換を約束するとは何
といふ俗牧師だらうなぞと憤慨する見物も出来る。しかし未亡人は却つて
是等の事は餘り氣にも止めぬ様子。
こゝへオスワルドが外から歸つて来る。「あゝ、だめ、だめ、お父さんに關係
した物はツマリみんな燃えつちまふでせう。現に僕がまた燃盡されんとし
てゐる」。息子が不治の業病に罹つてゐるのを想ひ起して見物一同此の語の
如何にも痛切なのを感じる。オスワルドは自分一身を持刺して、もう人前も
遠慮もないで母の前もかまはず酒も飲めばレギーナをも呼び近ける。母は、
此の際一切の事實を打明けて取舍を二人に決せしめようと思ひ定めたらし
く、改めて過去を語り始める。此の長白がまたおのづから一種の議論でもあ
る。未亡人は盛んに良妻賢母主義を攻撃する。わたしも今までは亡き夫ば
かりを咎めてゐたが、よく考へれば幾分の罪責は自分にも在る。といふのは
ツマリ良妻賢母主義の教育の罪である。四角四面の三指主義で躰けられ、夫
を慰め樂しみまする法も術も知らないから、人生の悦樂を貪らうの念の熾んな

男に取つては面白くない筈、夫が家庭をわびしく詰らなく思ひ、外へ出て酒色を貪るに到つたも、尤至極なぞと述懐することありて、とレギーナとオスワルドとは腹はちがへど兄妹だといふことを打明ける。息子も驚く、レギーナも駭く。三人三様の表情。こゝに至ると見物も忙しい。あちらを見、こちらを見、さて此の結果はどうなるかと固唾を呑んで見てゐると、意外！レギーナは突然に立上つて、此の上はもう私はお暇をいただきます」と言つて、半分は自暴の意味で、丸で別人のやうなフテクサレの様子になつてツイと室外へ出て行てしまふ。母子は敢て止めようともせぬ。

あとは只二人のさしむかひ。オスワルドの様子は彌々わるい。段々病的の徴候が見えて来る。で、悶えながら言ふ言葉もますます常識離れがして極端になる。「お前はそれではお父さんの事は思はないのかえ」といふ母の間に對して「僕はお父さんには早く離れて恩もなけりやあ、知りもしない位情があらう筈がない」と冷然として言ふ。母が呆れると、「一體父といふ名に泥んで、子は父に孝行をせねばならんなぞと義務呼はりをするのが間違だ、それは一種の

謬信だ、死んだ理想に取つ附かれてゐるのだ、習慣となつた僻見に囚はれてゐるのだ」と喝破する。母は覺えず「成程、それも亡魂か！」と叫んで、暗に同感の意をほのめかす。見物は之れを聽いて多少驚きを感じながらも、かういふ業病を何の罪もない倅共に遺傳する父親は果して孝を請求する権利があらうかどうかといふ點に想到して、沈思せざるを得ない。このうちにオスワルドの苦悶は彌々ますます募る様子。「阿母さん、もしあなたが僕に對して眞の愛情があるなら、僕のたつた一つの望を聽いて下さい」といふ。母が何事かと問ふと、懷中からモルヒネの薬瓶を取出し、若し彌々業病が發したなら早速これを飲ませて、みじめな餘生を救つて下さいといふ。母は驚き叫びて、どうしてそのやうなことが出来ようぞと拒む。「いや、生んでくれと頼みもせねに此様淺ましい身體に生みつけて下されたあなたが恨めしい、此の命を取り返して下さい」と迫る。もう殆ど半狂亂の體。母は狼狽して醫師を呼びに行かうと起上る。「阿母さん、どこへ行くのです、是非、飲ませて下さい」。こゝに至つて母はもう心が顛倒して「アレ、誰れぞ來ておくれ」と叫びつゝ、戶外へ馳

出さうとする。オスワルドは狂氣の體で追絶つて一生懸命に戸を鎖す。流石は母親だ、やつと心を押鎮めて、オスワルドの傍らに座り、わざと承諾したやうに言ひ拵へて和めると、オスワルドもやう／＼おちついた體、しかし業病が彌々發しかけたらしく、容體はますます／＼わるい。

其の中に夜は明けかゝる。オスワルドは長椅子に倒れて悶えてゐる。もう東から旭が昇りかける。それなのに其の光線も目には入らぬか、オスワルドは連りに「暗い暗い」と呻吟く。おひ／＼人事不省の體。母親は氣が氣で無い。「これ、どうおしだ、オスワルド。これさ、どうおしだ、これさわたしが分らないかえ。」といつても、くらいよ！くらいよ！といふばかり。彌々最後の發作が起つたに相違ない。母は悲み悶えて鬢髪を掻きむしり、「これが見てをられるものか」と言ひかけて、不圖思ひついたといふ思入、オスワルドの胸元を探つて、前の藥瓶を取出す。それを手にしかと握つて、「いや／＼／＼。と／＼とんでも無い！」と身の毛をよだ／＼せたといふ思入で、病人の方を見返る。オスワルドは石の像のやうに横たはつたまゝで、くらいよ！くらいよ！と丸で病んでゐる。

る小兒のやうな聲で力無げに呻吟く。

其の「くらいよ！くらいよ！」といふ何とも言へぬ情ないやうな呻吟聲の餘韻が嬾々として尙見物の耳元に消え残つてゐるうちに、何の知らせもなしに――幕が――徐かに降る。

今はわざと劇としての批評はしない。讀者が之れによつてイブセン劇の小戀を味ひ得たらばそれでよいのである。

イブセン劇は皆かくの通りと言ふでは無い。しかし其の脈の如何に我が劇などとは異なるか、又斯くの如くに見來れば、たしかに一時舞臺上の人物と同化して見物し得らるゝものたることは明かであらう。

ハウプトマンの「孤榮」

これは去三十七年の春、或學生會の席上にて、荒筋を語りし折の草稿なり。一たび「趣味」に掲げたり。(メレー、モリソンの譯に據る)。

處はベルリンの近郊なる或別荘、奥に庭園ありてミュッゲル湖に臨めり。幕數は五つ。始終同地、同室の事也。主人公はドクトル、ホツケラットとて新時代精神ともいふべき個人主義に立脚せる二十八歳の學者、計算などは眞暗全く學者肌、詩人肌の男也。之れに配するに其妻キチーと女友アンナ、マール嬢を以てす。キチーは嫁して後、夫の機嫌をとりかねて苦勞し、男の兒を産みて後痛く衰弱し、ヒステリーに罹り居りて、笑ひ易く泣き易き蒲柳だちの女性也。舅姑ともに舊習のまゝなる基督信者、召使などもあまた使へる相應にゆたかなる家柄なるが如し。

序 幕

幕開は赤兒に名を命くる爲の洗禮式が果てたばかりの様なり。姑と嫁と幼兒と乳母との對話にはじまる。姑が嫁に向ひて「此の子が出来たからはデヨ（主人公の名）の心も治なまらうなどいふことあり。又「此の子はお前によく似てゐる」といへば、嫁は却りてそれを喜ばぬげの體なり。とかくするうち主人公が友人にて、ブラウンといふいづれかといへば、粘液だちの畫工登場し、キチーと對話中主人公デヨン如何にも不興氣なる體にて入來り、太息をつくことありて

「おい、食事はどうした。(ト妻に向ひていふ)。

「廊下であがるかと思つたもんですから。(トおどろく)。

「え、どうしたと、廊下ッ?

「いけなかつたのですか、わたしやアまた……」

「おい／＼おい頼むよ、その泣貌お御免だねえ。食つちまうといやアしないからね。こたへられない！（キチーはやつと氣をかへて）」

「アノ廊下へ出しましたのです。（トはつきり言ふ）」

「そんならい／＼。無論至極よし。鬼ぢやアあるまいしさ！（ブラウン聞きかねたる體にて）」

「マアいゝ加減にしたらよからう。（トつぶやく。そのうち主人公も漸く機嫌を直し妻を搔抱くことありて）」

「じやうだんぢやアない！ わたしやお化ぢやアないよ。泣く癖だけはよしとくれよ。」

「だつてあなた直にお怒りなさるもの。」

「怒つたつていゝぢやないか。そつちも怒つてくれりやアいゝんだ。踏み蹂られても黙つてゐるのがこたへられない。マドンナまがひがわたしは大きらひだ。云々。」

太息！ 又太息！。すべて此の調子也。

信神家の父母と無信仰なる主人公ヂヨンと先づ心相合はず。次に無學なるキチーと理想家たる主人公と其の思想感情相通せず。是れ主人公が快々として樂しまざる原因なるが如し。加ふるに今方に一大著述に従事し苦心慘憺たるに一人の同感を寄するものなし。

此のうち老父が一老牧師を伴ひて奥より出で來ることあり。老牧師は家族と握手し接吻し酒をすゝめ煙草をすゝむることあり。やがて書架に近寄りてその傍に掛けたる名士大家の肖像を看る。ダッキン、ヘッケルは我が師なりと主人公が昂然として答ふることあり。老父序ついでわるしと思ふげの體にて、急ぎ事に托して老牧師を園内に誘ひ去る。あとにブラウンと主人公とキチーと對話幾回あり。主人公は頻に心中の悶々をほのめかせども風馬牛也。原稿をいだして苦心を語らんとすれど、ブラウンはうるさがりて聽かんともせず。主人公又太息す。キチー、ブラウン入る。老母登場し主人公に神を信せよとすゝむることあり。主人公之れを否みてゲーテの句を引きて俗僧を罵倒す。此のトタン洗濯女レーマンといふもの來る。饒舌を弄する寫實的の

一節あり。トッ同人が案内し來れるブラウンが巴里にて知る人となりし女學生アンナ、マアルといふ女登場す。二十四歳、いやみなくさつぱりとして何處やら男らしくもありながら女らしきやさしさを失はぬ物ごし、取まはし。只今チューリップヒへゆく途中也。衣裳は黒。家人と初對面の挨拶あり。主人公デモンとは只しばし物語するうちに已に知己の感あるものゝ如し。デモンは幕切に妻キチーに向ひ

「キーさんや、あの娘はすばらしい女だよ！ 大へんな學者だ。創見に富んでゐるので驚いてしまつた。あの位の才學があつて生活に困るといふのは意外だ、ブラウンは折々さういつたけれども。マ何にしる二三週間位は是非逗留させてやらなくつちやアすまんと思ふね。どうだい。」

「どうともなさいました。」

「いゝえさ、わたしぢやアないの。おまへがさうすべきぢやないか。わたしに取つてよりもおまへに取つて遙かに大切なこつた。あゝいふ婦人のそばにゐりやア何位學問するかわかりやしない。なせ誰れもそこへ氣がつ

かないのだ。みんなスピリットがないのか。ほんとにぞつとしてしまふ。云々。

キチー獨り残りて暗涙眼に満てり。辛うじて起ちあがりて悄然として奥に入る。

二幕目

うらゝかなる秋の朝なり。老父は他所へ旅行中の體。アンナは尙滞留し、殆ど家人の如し。葡萄を摘集め來りて老母との問答嫁姑の如し。アンナ博士はあんまり情が深過ぎるお人だと思ひます。老母、どういふ風に。アンナ、どういふ風にも——きのふも酔どれを介抱なすつて、云々。老母併し神さまを忘れてしまつたには困り切ります。十三四の頃學校の出來はずばぬけてゐましたのだが「下悔みて愚痴に止度なし。アンナ之れをなだめ、博士が自由獨立を欲したまふは自然ならずや」などいへど、風馬牛也。アンナ入る。キチー登場す、病

みて疲れたる體也。「稚兒などは乳母に任せておけばよきになどいへど、などてひとり子を母なしにしておかれう」とて聽く色なし。それよりアンナの噂になり、キチーは「やさしくて女らしくて、學問はありながら鼻にかけぬお方」とほめ、夫もあの方來なされてから快活になられたりといひ「今時の女は淺ましい境界にゐるとアンナさんの話、ほんにさうだと思ひます。……今でも夫が女房を打擲してもよいといふ法律があるさうです」など語る。老母は「その様な新説とやらは分らぬ、生中氣にとめて心を亂すはよしな」と言ひ、キチーの爲にコヒーをもて來んとて奥へ入る。此の時キチーはアンナと夫とが窓外を快活に樂しげに語りつゝ通り行くを見てギョツとすることあり。やがて老母も來り、夫のドクトルもアンナも入來る。ブラウンも此日一旦出立せしが汽車に乗後れて又入來る。

ブラウンは學問の眞旨を解せず、されば主人公との談論ともすれば衝突す。ブラウン出行く。主人公快々たり。アンナ之れを慰め「なせそんな小事を氣におかけなさる」と問ふ。「昔の不快を思ひだして」。昔を見返つてゐるうちは

眞の進歩は成らぬもの。「成程さうだ。併し學問を賤んで只社會的活動ばかりを大切と思ふとは、云々」と鬱懷を吐くことありて「御身を得てはじめて活きたり。君は清新なる生命を我れに與ふ、我が君を得たるは大旱の膏雨を得たるが如し……」。アラまるでボエチカルよ。「ボエチカルにもなりまさあ。お袋は僕の著述を目の敵にして火に燃べたく思つてゐるし、親父とても……」。ブラウンまでが……。「あんな人達のいふことをなせ氣にするんです。云々。ブラウンの爲人を評して主人公を慰むることあり。アンナ入る。主人公原稿の復讀に餘念なし。

こゝへ老母來りて信仰をすゝめ、ダアキン、ヘツケルを譏り、只意志さへあれば信仰が出來さうなものと同ふる。主人公少々じれ氣味也。老母去る。こゝへキチー入來り

「銀行から書面が來ましたが、どういたしまして。」

「そんなこと、今かまつて居られない。」

「あれを賣拂つてようございますか。」

「チョッ！ 頼むから今邪魔をしてくれちやア困るよ！」

「だつて今直にどうかしなればならんのですから。」

「え、かまふもんか。(原稿へふるへる指をさし)これが第一だね。これを今どうかしなくちやならんのだよ。」

「さうでせうけれども、あしたのお金がありませんものを。」

「うるさい！ お前とはどうしても氣があはんよ。やつと考がつきかゝると思ふとやつて来てぶちこはしてしまふのだもの！」

「わたくしにやアさつぱり譯がわからない。郵便が來たんですから、それで申してまるつたばかりなので。」

「さうさ。それつきりさ。それが分らない證據なんだ。おれの仕事を靴を製るのと同じやうに思つてゐるんだ。郵便が來たからそれで知らせに來る。無論のことさ。併しそれが爲にネ數十時間かゝつてやつと纏めかけた考へがちやく／＼むちやくちやになつてしまふことが丸つきり分らないといふのは情ない。」

「だつてあなたさしかゝつた實際のことを棄て、おくわけにはいきませんものを。」

「併しね、私しの仕事のはうが第一だらうぢやないか。え、第二でもあり、第三でもあらうぢやないか。それから……實際のことにして貰ひたいね。キーさんちつと合點して貰ひたいね。少しでいゝからわたしの手傳をして貰ひたい。え、どうかねえ、日常の事だけは全くソノどうかして貰ひたいね、そちらで。」

「でもさういふ責任はわたくしにやア負ひ切れませんものを。」

「負へない！ それだからいけないよ。女といふ奴ア只人に依頼して計りぬようとする。云々。(キチー又書面をさしだして)」

「どうぞね、あなた。どうしてよいかおつしやつて下さいな。」

「今はいけないといふに。」

「だつて、いつ、それぢや貴郎！ アンナさんのゐる時はいけないでせう。そゝ、そゝ、そゝいふ根性だからいけない。何もかくすことはないぢやないか。」

金のことだといふとかくすものだと思つてゐる。チョッ！ どうも區々屑々としてゐるから堪へられない。

「それぢやあアンナさんの前で申してもよいのですね。」

「なせさうアンナさん〜といふんだい。アンナさんの知つたことぢやない。アンナさんが何か關係してゐるのかい。」

「關係してゐなさるとはいひませんが、あの方がおきゝなすつたつて…」

「おい〜キーさん！ほんとにいやだねえ。どうも二言目にやア金々つて。飢死うまじでもしかけて居やしまいし。お前は只年が年中金のことばかり思つてゐるようだ。噫あッ！女といふことについて高尚な理想を抱いてゐるおれが……一體愛といふのは……」

「わたくしア如何どうなつたつてかまやアしませんけれど、坊がどうなるだらうかと思つて！それぢやア家のことは打ちやつといつてもよいとおつしやるんですか。」

「知れたことさ。つまりかうなんだ。お前はね、家庭だけのことを思つてゐるんだ。わたしは廣く偏く天下の事を思つてゐるのだ。一家の事などは念頭ねんとうにない。此の「我れ」のうちに潜みかくれてゐると感じてゐるものを發揮しようとしてゐるのだ。いはゞ鞭をかけられてゐる天馬のやうなものだ。かういふ風にあつかはれりやア早晚のたれ死をしてしまふのだ。」

「あなた！さうおつしやられるとわたくしはどんなにつらいかしれやあしません。」

「成程アンナさんのいふ通りだ。獨逸の女の地平線は臺所と保育所、それ以上は一切まつくらだ。」

「それだつて、だれか食物のことや子供のことに氣をつけなけりやなりませぬ。アンナさんがそのやうにおつしやるのはけつこうなことです。わたしだつても本ばかり讀んでゐたい！」

「おい〜わたしがお前ならね、さういふことをいふのは自分の小さゝを示すやうなものだから、いひませぬよ。敵手あひてにもよりけりだが、あの高尚なアンナさんに對して。」

「だつてあなたさういふことをおつしやるやうぢやア……」
「どんなこと？」

「獨逸の女がどうだとか——そんな馬鹿なことを。」

「何も馬鹿なことはいひません。大ちがひだ。さういやア言ひませうだが、アンナさんはかげで噂してもお前をどんなにほめてゐるだらう。それを聞いたらはづかしくてよもや貌が上るまい。」

「わたしどもの根性は臺所限りだとまでいやア澤山ぢやありませんか。」

「面白い。それぢやアンナさんがどう間違つてゐるのだ(ト居丈高になる。)

「キチーは堪へかねて泣きだし」

「あなたは不斷はやさしいけれど、どうかすると酷い！ ひどい！ あんまり思ひやりのない……(ト泣く。主人公少し怒をしづめて)

「思ひやりのない？ どう？、え、どうして？ (キチーすゝりなきして)

「わたしをいぢめたり責めたりするもの……よく知つてゐながら。」

「どう？ 何を？」

「わたしア自分で自分を不束だと思つて、しよつちゆう悔んでゐることを知つてゐながら……知つてゐながら、ちつとも思ひやつて下さらないで、毎日くつまらないうちに目角をたて、小言ばかりおつしやるんだもの！ どう？ 何をいふんです。」

「ちつとはほめて下さると氣に張が出来るけれど、わたしや何故こんなにしよつちゆうおさへつけられてゐてばかりと思つて、大きな望みはないけれど、ちつとは蟲はありますもの。どうせ役にたつ人間ぢやアなし、とうから餘計な身だと思つてゐます(ト泣く。主人公手をとらんとする。引去る。)

「何の餘計な身であらう。」

「いえ、つい先刻さうおつしやつた。坊だつて大きくなりやわたしなんざ要りやアしないし、アンナさんのはうがわたしよりか……」

トこれより主人公いろく慰諭することあり。キチーが其の間始終銀行よりの書面を氣にする。やがて「それはどうともするがよし」といふをきいて、すぐ奥へゆかうとする、それを引止めて、やさしく抱きしめ、またいろく慰め

諭し、接吻し、和解悉く成りたる途端——アンナ外出の服装して、ット入來り、あら御免なさいまし、下身を引く。主人公は「暫時船道遙ふなみちにいつてくる」とて出行く。キチーあとを見送りて、美しき夢の消えゆくといふ思入。眼には涙あふれたり。

三幕目

家計次第に不如意の影はキチーが計算にいそがしき幕開に見えたり。ブラウンとの問答中にも「何か内職をせねばならぬ、一千二百マルク位一年に不足云々」といふことあり。ブラウン去りて後涙を忍びかねて寢室に走り入ることなどあり。こゝへ姑出來る。アンナに對する好情の冷却せる趣著し。主人公登場し、アンナがスキッルへ歸り去らんとするについて、我が家も餘所へ移したしと思ひたつ。老母不賛成にて去る。主人公例の太息する。キチーが「スキッルへ移らんと宣ふは如何」と問ふ。主人公激して「無邪氣げに粧ふ勿

れ」と叱し「どうしてスキッルへ」とキチーの口眞似をなし「アンナがゐるところだからさ。ちつとも不思議はない。何でも思ふ通りいふが」と邪見にいひちらして奥へ入る。キチー太息して「Oh dear! Oh dear!」と歎く思入。アンナはスキッルへ歸り去る準備して汽車の出づるを俟つ。主人公は之れを去らしむるを喜ばず。アンナとキチーとの間に好情籠れる告別あり。寫眞をアンナの貰ふことなどあり。

「もう時刻でせうか。

「まだ四五十分あります。

「それつきり。

「あなたの寫眞を下さいな。——博士のもあるなら下さいました。……私の事なんか直に忘れておしまひでせうねえ。

「何の忘れますものか。

「ほんとう? 純粹に?

「とおつしやるのは?

「少しは喜んでゐるんぢやなくつて？」

「え？」

「何にしろ歸るのはどの道當然だと思ひます。姑御は私をうるさがつてゐらつしやるやうですもの。」

「そりやた貴嬢の思ひちがへでせう。」

「いゝえ〜。……寫眞をとりだし此の口元の皺は心の淋しい證據。あなたはいつからドクトルと知あひになつて？ 學生時分？……あなた音楽をなさらないの、それにドクトルはすきなね。……こなひだうち弾いたり、歌つたり。……ア、〜香りや艶だけ見てるのがいゝ。ね、さうですわね。」

「わたしは知りません。」

「香しきもの必しも眞に美ぢやアなくつてよ。」

「そりやさうかも知れません。」

「さうですとも。あゝ、一等いゝのは自由！ 自由！ 國もなく家もなく友達もないのが一番。……もう時間でせう。」

「まだですよ。」

「わたしやチュリツヒへ一週間も早く歸るの。……まだ仕事がないだけに尙更。……あゝ、ほんたうに味氣なくつて、どうなることかしらん。」

キチーを抱きしめて歎歎することあり。漸く思ひ返して書面認めにとて奥へ入る。こゝへ主人公入来る。主人公はキチーや老母がアンナを抑留せぬとてヒガミをいふ。キチーと又一衝突、主人公激して去る。姑入る。キチー堪へかねて嗚咽して姑にすがり、わたしはもう棄てられましたからと一部始終を語り、ひまを下さい、逆もお氣には入らぬからといひ、生きてゐたうない」と歎く。姑は伴の行跡に憤激し、「これ神罰也、神をなみするのみか、姦姪を行ふとは！」と言ふ。キチー息もたえなくとなる。姑介抱して寢室に入る。やがて主人公入来る。老母と問答數回、老母は婉曲ながら密通のことをほのめかして詰責す。主人公はその矜持を害されて憤激いよいよ甚し。其中にアンナは旅仕度して入来り、皆々に告別す。主人公は心ならずも見送りに出行く。かくてキチーはアンナの心を思ひやりて痛はしく思ひをるうち、主人公勇み

て歸り來り、アンナは尙逗留することを承諾せりと報ず。老母あきれてこゝに又一悶着。老母は「とゞめることはならぬ」といふ。「なせなりませぬ」と言争ひ漸く激しくなり、老母は第五禁令を犯せる身を以て云々と言ひ放つことありて、どうしてもきかねば、よろしい、わたしが此の家を去るばかりです。「わたしはあれを追出す位ならピストルで自殺します」。よろしい、それではわたしがあゝの女に談判します。男誑めがやうも、念入に網をかけたつた！」已にゆかんとする、主人公立ふさがる。ブラウン見かねてとゞめ、中裁を試る。ブラウンどうしたのです。主、餘計な世話だ。うつちやつといひて下さい。老母去る。二人の間に又一衝突。ト、主人公はブラウンに向ひ、只一言最後にいはう。我輩は母や君が望むことは斷然實行せぬつもりだ。もう君たちのいふことは寸分も聞く耳もたぬ。I have found myself, and intend to be myself, myself in spite of you all. 憤然として急に書齋に入る。

四幕目

キチー子供のシャツを縫つてゐる。姑も何か編みもの。キチーは痛く病み衰へたる體。こゝへアンナは「下いひながら主人公入來り、キチーの額に接吻して、いゝかい、藥を飲んでるか」と問ふ。老母、藥がきくものかね。外に藥があるわけだ。主、またおつかさん！」老はいゝ、もういひません。云々。そのうち主人公出する。キチーの加減甚だわるし。姑心配して寢室へ介抱しつゝ入らしむ。ブラウン入來り、老母の歎きを聽き、その頼を納れてアンナに談じ見んと思ひたつげ也。此のうち主人公アンナと共に登場す。互ひに理想を語り、現實のまゝならぬを憤る。

アンナ、男女間の交際に新しい一層高尚な状態が早晚來るべきだとあなたがよくおつしやつたつげが。

「さうさ。人間の羈絆が動物の羈絆に打克つ時が來るだらうと思ふ。美し

い、不易な、不可思議な組織の上に交誼が成立し得るものだと思ふのです。いや、そればかりでない。更にはるかにノーブルな、リッチな、フリーな……云々。

「ぢやア我々の交誼が恰もそれだといふことが出来ませうか。

「無論です。それをあなたは疑つてゐるのですか。あなたはキチーに對して十分温い情を持つてゐなざるでせう。僕のあれに對する情とても決して減じやアしない。その反對です。深く濃くなつたといつてよいです。

「が他人がさう信じませうか。キーさんが苦勞なすつておやせなさるのをといめることが出来ませうか。所謂新交誼に關する感情はまだ生ひたぬ若木……此の若木が生長して物になるのは中々我々の生きてゐる間のことではありますまい。

「だから別れようといふのですか。

「いゝえ、これは一般にいふので、我々みづからのことをいふのではないのですけれど……何だかかう目もはるかに向うの方を見渡すことの出来る高

いゝ山頂から狭い低い谷かなんかへおりたやうな気がして……

「だつて他人に何等の害をも與へなけりやアいゝぢやありませんか。

「それは出来ないことですもの。

「キチーさへ我々と同じ考へを抱き得るやうになりやア……

「よしんばキーさんが同じ意見を抱いて一しよにお暮しなさることが出来たとしても……わたしが……どうも自秀が信せられないものを……今は

まだ何ですけれど、早晚おそろしい力をもちさうな或物がありますもの……

……ランプをつけちやアどうです。

此のトタン老母入來り、暗中に二人が黙座しゐたるを知りて驚き、不快を感じ、ランプに點火し、主人公に用事ありとて奥へ伴ひ入る。こゝへブラウン入來り、過去を語りいづ。ブラウンは失戀の不快をほめかす。アンナ冷然鼻唄を口ずさみつゝ、聞き流す。ブラウン話頭を進めて「ジョンさんとの關係につきて一言あなたに……」といひかける時アンナ形を改め、今までは友人の義務として承つてゐましたが、もう一言もおつしやつて下さるな。おつしやつた

とて聞く耳はありません」と手に持ちし花束を抛つ。ブラウンも去る。
老母入来り「ブラウンにきいて下すつたか」ト問ふ。答へかねて泣きいだし歔
歔す。老母しきりになだめいたはる。「何卒伴を返して下され」ト一家のこし
かた、老夫婦が苦勞を語りて頼むこと。アンナ竟に此の家を去らんと決心す。
此の一段の悲哀は古今東西の劇に見ゆる縁切と段取は一なれど、精神は殊な
り。アンナ入る。こゝへ老父旅より歸り來る。

老人に似あはぬ快活かくれてゐて嫁を驚かすなど、その樂天的が後の悲慘と
相照應す。老妻よりアンナの今尙逗留すと聽きて驚き、伴の不しだらをきい
て彌々呆れ、是れ畢竟天の罰トなげくことあり。

五幕目

前と同じ夜。デヨンは何故に大事の客を追出したるか」と母を詰る。「追出し
はせぬ」。「うそをおつきなさるな……若しあの女を追出すなら、わたしが先に

死にます。死骸を跨がねば歸られまい」トいひつゝ拳銃を取りだす。母驚き
て叫び、人を呼ぶ。老父入り來る。デヨンはいまだ父の歸れるを知らず驚く。

「お父さん、どうしてこゝへ。誰れが呼びにあげたんです。」

「The will of God—神さまの御意だ！」

「お母さんが呼んだのですか。」

「さうよ。」

「何の爲に？」

「汝の眞友となつて汝を助けるためだ。」

「なんで助けが必要ですか。」

「きさまの意志が薄弱だから。」

「それが事實だとしたところで、どうして助けようといふのです。」

「第一どの位我々がきさまを愛してゐるかといふことを話し、次には神さま
は罪業を犯したものが悔い改めるのを深くお喜びになるといふことを話
すのぢや。」

「わたくしが罪業を犯しましたか。」

「邪淫の心を以て女をながむるものはとキリストのをしへちや。がそればかりでない……いやいや耳をふさぐな。おれも汝も同じ罪人ぢや。これ手を出せ。よくきけ。」

「駄目です。あなたとは立脚の地盤がちがふから。」

「きさまの立つてゐる地盤はすん／＼くづれてゐる。」

「あなたに分るものですか、わたくしの地盤が何だか。どういふ道を私が取つてゐるか御存じある筈がない。」

「知つてます。破滅に赴く道を取つてゐるのぢや。」

これより或は論じ、或は諭し、或はやゝ激し、或は大いに柔かに説き諭せども聽かず。舊師を罵倒し、「師父の訓誡はすべて我が身の仇、破滅の基なりき」と叫ぶ。父親はもてあまして「それが親々の多年の恩愛に報いる所以か」といへば「Your love は我が destruction なり、その多年の恩愛が皆わがための仇だ」と罵り叫ぶ。

老父呆れ果て太息つき「I don't recognize you, John. I can't understand you. 倅とは思

はれぬ。貴様のいふこと一切わからぬ。」といへば「さうでせう。御尤。あなたがたは決して私を解し得ない。わからう筈がない。」

双方しばらく無言。老父もう此の上はいふことはない。これほどまでとは思はなんだ。助けてやることが出来ようと思つたがその望みも絶えた。神さまでなうては助けやうもない。老妻を顧みて「これよ。もうこゝに用はない。神さまがお召になるまでどこかへはいつてひそんでゐませう」と悄然として行きかけて振返り「たつた一言いひ置くことがある。——必ず血で手をよごすまいぞ。必ず／＼血を流すまいぞよ。近ごろのキチーの様子を見たか。毎晩きさまの古い寫眞を見て泣いたりうめいたりしてゐるのを。知らなければお母さんに聞いて見るがいゝ。もう一度いふが、必ず血をつゝしませうぞ。これでよい。さあ／＼マルサ、ゆきませう。」

ゆきかける。ジョンはしばらく悶ゆる思入。やがて「お父さん、お母さん」ト呼びざま振返る父母の腕へ身を投掛る。父「どうした。」母「どうしたらよいでせう。」父「あれをとめるな。出してやんなさい。」母「ちやア出させう／＼」ト言

ひ／＼疲れ果てた思入にて床の上にグタリと座る。老人夫婦は喜び、父はデ
ヨンの背を撫でさすり、額に接吻して寢室に入り去る。デヨンはやがて起上
り、身をふるはし、窓より暗中を詠め、客間の戸を開きて「だれかゐるのか」ト呼ぶ。
「ドクトル、ホツケラット。わたし。」トいひ／＼アンナ入来る。

「いとまごひもせんで立たうとしたのですか。」

「さうしようかと思つたところでしたが。」

「僕の境遇はおそろしい有様となつた。不斷のんきな親父が今の様子。も
うどうしてよいか分らなくなつた。頭はわれるやうで、めちや／＼になつ
て、勇氣も膽力も自尊も何もかもなくなつてしまつた。（あちこち歩きなが
ら）何かつかまりどころを與へて下さい。倒れてしまひさうだ。死んでし
まひさうだ！（ト煩悶する。）

「わたくしにだつてどうしたらよいか分別はつかないけれど、早晚かういふ
ことになるとはお互ひに知つてゐた筈で、それについて約束したことがあ
るぢやありませんか。お互ひの間に一つの規約を設けて堅くそれを守ら

うといふことを。ね、それより外には二人の間をつなぐ方法はないことは
はじめから分つてゐます。それを守る氣はありませんか。

「さあ、さうすりやあ……いくらかひつこたへることが出来るかも知れんが、
それが丸で空になるかも知れんぢやないか。どうしてその信仰を保つて
ゆくか。」

「意志さへ強ければ信仰も保證もいりやアしないぢやありませんか。」

「若し意志が弱つたら？」

「さあ、わたしは意志が弱りやア同じ規約で苦勞してゐるあなたのことを思
ひだして力めるでせうし、あなたもまたわたしのことを思つて勇氣を鼓舞
して下さいな。」

「よろしい……兼ての理想の生活をきつとさういふ風にして感情の上だけ
でも遂げませう。實現することは出来ないまでも決して忘れはすまい。
それが唯一の道しるべの光だ。その光が消える時は僕の命の終る時だ……
……アンナさん有難う！」

「さよなら。」

「どこへゆきます。」

「北へも南へも。」

「知らして下さるか。」

「知らせんはうがよいでせう。」

「何してる位互に知らしたがよいぢやア……」

「いゝえ、そんな事をするとは失敗するかも知れない。自ら欺く原かも知れないでせう。」

「それぢやア耐へませう。此負擔の爲に押つぶされたつてかまはないから。
(ト手をとりにて)さよなら。」

「此の指輪は夫の配流に伴つてサイビリヤで死んだ婦人の所有品でしたが、ホ、ホ、ちようどそのさかさま……これを形見にして、折々思ひだして下さい。あなたと同じやうに淋しい、つらい生活の戦を人しれずしてゐる者があることを……さよなら。」

「これが一生の別れだ！」

「二度と逢へば二人の破滅です。」

「アンナ！ 妹！」

「兄さん！」

「兄が妹に一生の別れだ、接吻したつてよからう！」

「いゝえ、いけない。」

「よい。いゝや。よい！ (ト強ひて抱きて接吻す。)

アンナ蹶然として袂を拂つて去る。デモンはしばらく茫然たる思入。髪をかきむしり、太息又太息して、あちこちと歩み廻る。汽車發の鈴三度鳴る。デモンは狂氣のやうに書齋にはいつて見たり坐つて見たり、やがてまた廊下へかけて出る。月がさえわたつてゐる。

こゝへ老夫婦入來り、デモンは安息を要す。マアそつとしておくことなどいふ問答あり。やがて誰れやら湖へ船を出したやうなり、トいひて奥へ入る。こゝへデモン死人の如く顔色青ざめて入來り、口をあいたまゝに呼吸しつゝ、

忙しく筆をとりて數行の書きおきをなし、また廊下へ走りいつる。

老夫婦キチーと共に出來り、くづをれたるキチーをいろ／＼に慰める。キチーは悄然として只管身の不束をくやみ、何故に結婚の當時身をかへり見て婚をいなまざりしかと自ら責むることあり。老夫婦は慰めて「只伴の罪業を赦してやつてくれ」といふ。「何の罪業！ 赦すべき過失がデヨンさんにあるのなら百たびでも千たびでも赦しませうけれど、所詮はわたしが十分でないからのこと」としほれる。この途端「おうい！ おうい！」と呼ぶ聲戸外に聞える。ブラウン入來り「デヨンはどこに」下問ふ。「多分二階に。」ブラウンけん貌して出する。暫くして歸り來り「デヨンはぬやうだ、今だれか舟を乗出したやうだ。」ト云ふ。人々驚く中にもキチーは「それこそきつとデヨンさんです。早く／＼とめて下さい。お父さん！ お母さん！ あなたがたが追出したのです。なせ追出したのです！」老夫婦も狼狽する。キチーは半狂亂。「きつともう生きてゐないのだ。わたしやどんなことでもするから……歸つて下さい！ 歸つて下さい！」ト呼ぶ。

老父は園へ走りおりて呼ぶ。「デヨンやあい！ デヨンやあい！」キチーはブラウンをいそがし立て、走らせ、おのれもつゞきながら「わたしも今そこへト手をふりしぼりて、どうぞ／＼生きてゐなされますよう！」ブラウンは湖水に向つて「おうい！ おうい！」ト呼ぶ。キチーは奥に向ひ「アルマや、シンナや、お庭の方へあかしを。あかしを！……あかしを早くよ。あかしを！」かけあるきて失神したるやうになりて倒れる。戸外にては呼ぶ聲尙頻り也。

文學藝術の三作用

(某地方新聞の爲に)

文學藝術の究竟目的の何たるかといふとは、今は之れを決すると難し。人生一日も缺くべからざる倫理の標準すらも、嚴密に學理上より論ずる時は、人々思ひ／＼なりと評せざるを得ざる今日に在りては、比較的閑問題たる藝術論の如きは、到底一定不拔なるものを立し得べき望みあらず。ハルトマン等の審美論が金科玉條として、我が文壇に歓迎せられしは、僅に十數年の過去なりしを想起すれば、其の變移の急速なる、寔に驚くべからずや。然れども斯くの如きは、獨り我が文藝壇の情態たるのみにはあらず、世界を擧げては、同調子なりと評して可なり。國の内外を問はず、今尙文學藝術は専ら其れみづからの爲にのみ作らるべきものにして、國家社會に於ける利害得失の如きは、元より顧るに及ばずと主張する者もあれば、文藝家の本領は主として社會の風教に裨補するにありと唱ふる者もあり。冷熱深淺の差こそあれ、本能満足の爲

に個性を發揮するに外ならずと言ふもあり、自然、人生の真相、眞趣を活寫して人をして眞智見を證せしむるが本領なりと唱ふるもあり。或はまた自らも娛み他をも娛ましむる言はゞ一種の娛樂機關を製作する是れ文藝の眞意と説くもあり。或は又彼のトルストイの如く、同じく風教裨補といふ點に着眼しながらも、普通唱へらるゝよりも遙に嚴格に、あくまでも眞面目に、又頗る究屈に、あらゆる文學藝術をして純然たる宗教的機關たらしめんと主張するも無きにあらず。要するに文藝の目的に關する主張は其の人々の面の如くに千差萬別なり。予は今の時に於て文藝の目的論を一定せんと試るが如きは甚しき徒勞なるべきを思ふ。故に爰には目的論に涉るを避けて、單に其の作用のみを論せんと欲す。夫れ目的と作用とは同じからず。目的は歸着なり、作用は中途なり。例へば之れを小刀に見よ。之れを殺人に用ふると自殺に用ふると外科に用ふると紙を剪るに用ふると、おのゝ／＼全く其の目的を異にす、而も其の能く切るの用は一なり。目的は人によりて移ると雖も、其の作用は常住なり。文學藝術の作用將た之れに異なることなし。先づよく作用

を解するは能く之れを利用する所以ならん。

凡そ人の其の趣味性に適合せる文學若しくは藝術に接するや、少くとも其の當座暫くは心陶然として酔へるが如きを覺ゆ。之れを刹那の忘我と名づく。名畫に見入り、上手の音樂を聴き、又は面白き演劇を觀、乃至面白き小説を讀める瞬間の感じ即ち是れなり。

或は未だ曾て斯の如き經驗無しといふ者も無きにあらざらん、しかるは其の生來の趣味性の極めて鈍きか然らざれば其の鑑賞上の修養の尙甚だ不足なるが爲なるべし。藝術品の高尚に過ぎたるために趣味を感せしめざる場合はあり、若しくは見馴れ聞き馴れざるが爲に聯想起らず、隨つて深き味ひを解せず、それが爲、興を覺えざるの例はあれども、如何なる藝術品に對しても未だ曾て何等の面白味を感せずといふが如きは人の性の自然にあらず。又畫にもせよ、音樂にもせよ、詩歌小説にもせよ、其の他の藝術品にもせよ、未だ曾て如何なる種類の人間をも、婦人小兒をだにも未だ曾て恍惚たらしめしことなしといふが如きものあらば、そは名のみ、の藝術品ならん。苟も文學若しくは藝

術と稱する限りは、少くとも忘我作用程は具へざるべからざるの理なり。知識の上流に位する者の賤み斥くる類ひと雖も、社會の或階級の嗜好よりすれば、忘我作用は勿論、それ以上の効力をすらも有する例多し。彼の浪花節、薩摩琵琶のたぐひが廣く世に歡迎せらるゝの理を思ふべし。

忘我以上の作用を予は遊神と名づく。こは當の藝術を鑑賞する其の刹那、其の瞬間のみ心恍惚たるに止まらず、譬へば彼の碁將棋を好める者の輸贏に我れを忘るゝが如くに、其の當座幾十分時、時としては其後二三時間、長き時は其の夜一夜、甚しきは三日又四日、さながら夢みつゝあるが如く惘々然たるをいふ。「能の後三日」とは斯くの如き經驗をいへるなり。「三月肉の味ひを知らず」と言へる、將た此種心境を指せるにはあらずや。蓋し藝術の供する感興の筏に乗りて、我知らず情の海に浮び出で、心を別天地に遊ばしむるを言ふなり。屑々營々たる現實界を離れて一種理想的なる空なる世界にさまよふを言ふなり。かゝる心境に遊ばしむるを文學藝術の微妙なる作用と倣す。忘我作用に止まれるは其の尙甚だ低級なるを證す。

併しながら藝術の眞作用は同化に至りて極まる。作用の遊神に止まれる間は、譬へば彼の安住の地を悟得せざる者と一般、一たびは現實を離れたりと雖もいつ再び現實へ復歸し來らんも知るべからず。所謂遊神は夢裡の心境なり。藝術の微妙なる力に魅せられたる間は心暫く自我を脱して、或は飄逸なる、或は高遠なる、或は美麗なる別乾坤に遊ぶ。然れども然るは其の夢の穩かなる間のみ、一たび穢き騒々しき現實界の聲に叩き起さるゝや、美しき夢裡の幻影は忽然として消え、生中に其の夢の美しかりしだけに、更に彌々現實の醜惡なるを覺ゆること無きにあらず。

思ふに世間大概の人の經驗せる所ならんが、凡そ幼少の時代に在りては、如何なる奇怪なる夢と雖も、少くとも之れを夢見つゝある間には、夢と心附くこと稀なるを例とす。然るにおひ／＼成長し、自意識の發達するや、日夜に心を勞すること多きがため、夢もまた圓かなる能はず、随つて其の夢見つゝある最中にだに、「こは夢なり」と心附くこと次第に多し。是れ其の夢の破れ易き所以なり。恰もそれと同じき道理によりて人皆の自意識の著しく鋭敏と成り來れ

る廿世紀の今日に於ては、彼の忘我遊神を最上の作用と做し、一種の美しき夢に遊ばしむることを以て能事了れりと做すが如き文學若くば藝術は、最早人心を魅するに足らず、随つて假令刹那の忘我には用立つとも長き遊神には用立たざるものゝ如し。現代人の多慾なるや、「こは夢にはあらず、現なり」「こは虚にあらず、實なり」「こは假にあらず、真なり」とまで深く切に同感し得んことを欲す。藝術上の幻影か、現の人生か、殆ど辨別する能はざるまでに心酔し且つ同化せんことを欲するなり。彼の偏に技巧に依り、空想に頼る文學藝術の、今は昔時の如く歓迎せられざらんとするは、主として此の理にもとづくなり。現實を有りのまゝに寫すといふ自然派の作品の近來大に持囃さるゝは、もとより他にも由來あれど、其の一面の理由は同じく一種の夢にはあれども、成るべく現實に似寄りたる夢を見せて、暫く其の夢たることを忘れしめ、以て遊神の作用を持続せしめんの意の作家の内心に潜めるに在るならん。否、作者の心には此の意存せざることもあるらん、讀者に此の底意あるや争ふべからず。之れを悪しく解すれば、人心の次第にせゝこましくなり、世智辛くなりて、夢を

夢として樂むこと能はざるに因ることなるが、之れを善く解すれば、人の鑑賞力の著しく進みたるも其の慾望の大きく高くなれるとの爲に、忽ちにして妄誕不稽なるを看破し得らるべきが如き作品を玩賞せざるやうになれる爲なり。それは何れにもあれ、藝術にもせよ、文學にもせよ、其の効用の尙單に遊神に止まれる間は、其の果して六尺の鬚眉男子が畢生の事業と爲すに足るべしや否や頗る疑惑なき能はず。人生は短し、藝術は壽しと古人は言ひたり、然れどもこは果して古今東西幾何の藝術文學にか適用せらるべき。英雄豪傑の偉業は槿花一朝の榮にして多くの星霜を経たる後には空しく山丘と化し了す、ひとり文學者、藝術家の大作品は彼の屈平等の詩賦と共に長へに日月を懸くといふ。そは果して事實なるべきか。古今東西の名篇傑作にして今尙眞に人心を鼓吹し得る程のものゝ果して多く世に存せりや否や。げにや長く世に玩賞せられて一時の忘我用若しくは遊神用に供せらるゝ程度のもは東西ともに決して少からぬことならんが、單にさばかりの効用とすれば、そは果して六尺の男子が心血を濺ぎ、六十年、五十年の壽命を四十年、三十年に縮

めて以て刻苦經營すべき底の一大事なるべきか否か甚だ疑はしと言はざるべからず。宗教か育英か社會の改善か政治か實業かになづきはりて、少くとも一國一代の爲に身を獻せんかた、或は一段立派なる事業にはあらざるか、一段生れ甲斐ある仕事にはあらざるか。予はかくはいへど、文學藝術は必ずしも毎に教化を目的とせざるべからずといふにはあらず、況んや其の實用的ならんことをや。畢竟こゝには文學藝術の目的を論せんと欲するにあらず、只其の作用に於て忘我遊神以上に幾段を進めて他を同化せしむる底の魔力を具へざるの間は、未だ之れを以て眞の藝術的作用と做すべからざるを言ふのみ。

若し夫れ同化作用を有する藝術に接するや、人は其の刹那に於て先づ悉く自我を忘じ去る、否、只そのみにはあらず、其の當座幾何時か全く現實を超脱して、さながら別天地に遊行し去るの感あり。加之其の感の漸く薄らぎて自我に復歸せる後と雖も、多少我が好尚若くは性癖の一變したるが如き思ひあるを例とす。譬へば催眠術によりて精神療法を行はれたる不良少年などの場

合に似たる心的現象を生ず。すなはち穢かりし心も自然に美しく、荒々しかりし心も自然に優しく、めいりたりし心も引立ち、快活となり、嚴肅ともなる。一言以て評すれば、當の藝術品の内容と自家の心とが相融會して一となるなり。狹隘なる現實界以外に若しくは以上にいつしか一の常住界、安住の別天地の成立てるを意識して何となく心に餘裕あるを覺ゆ。所謂心廣く體胖かなる心状態是れなり。之れを藝術の同化作用と做す。さてかくの如くにして時を経る間に自然の勢ひとして此の心状態を自家以外に推し及ぼさんと希ふの心を生ず。こゝに至りては逆まに現實界を擧げて件の藝術界にて經驗すると全然同趣味のものとなさざれば止まざらんとす。こゝに至りては藝術家の態度は頗る宗教家の態度に似たるものとなり、強ひて勸化門を開きても世を擧りて同一味に化せしめんと欲するに至る。

併しながら所謂同化作用は或は高く或は卑く、何れの方角にも向ふ。善化の用をもなせば悪化の用をもなす。藝術の力は能く風を移し俗を易ふ。彼の健全ならざる藝術の風俗を壞ることあるの理も之れを推して考ふればおの

づから明白なり。古の賢君明主は言ひ合せたるが如くに、樂の正雅を貴び淫哇を惡みき。音樂の人心を動すことは最も廣く且つ深ければならん。其の理は移して以てあらゆる藝術の上に適用するを得べし。

(四十一年)

半意識なかばしつゝ見る夢 (口述筆記)

幼少の時に見る夢と丁年以後に見る夢とは誰れでもちがふに相違ないが、不眠癖が附いて以來の僕の夢は一種の癖が附いたやうに思ふ。此の世智辛い世の中に夢の話でもないが、多少今の文藝問題に相交渉する所もあらうかと思ふから、話して見よう。

誰れでも幼少の時にはどんな奇怪な夢を見ても、少くとも見て居る間には先づ夢とは心附かない。すなはち現まと信じて見る。自意識の大きに發達してからは、夢も次第に穩かでなくなる所から、夢の最中に夢だなどと心附くことが

多くなるで、夢が早く破れる。これは當り前の事だが、僕の場合にはそいつが少しくこちれて、癖がついて、或場合には半睡半覺の有様で持續する。夢だわいと心附きつゝ見續けてゆくと、半分は自分の心のまゝの如く、又心のまゝでないかの如く、一種變妙來な鹽梅に變化してゆき、最後にジメ〜とたはいもなく破れる。これが最近になつては大ぶ激しくなつて、苦しくてたまらぬこともある。例の眠られないので、どうかして眠らう〜と苦しみ、うつら〜と煮え切らん夢心地になる經驗からはじまつた癖で、時としてはをかしいにといまることもあるが、多くはうなされ氣味。しかしすぐに夢と心附くから、自分で醒ます。近ごろはうなされるに至らぬうちに醒めてしまふ、いや醒ましてしまふ。この心持、これが(委しくは後に言ふが)ロマンチズム對自然主義の問題に觸れて居ると思ふ。

次に——如何にも突拍子もない夢を見て目が醒める。さあ、それからまぢ〜と氣が澄んで眠られない。つい考へはじめ。どうしてあんな夢を見たかと其の晩又は其の日に起つた出來事を回想しはじめ。大概は當りが

つく。今までの経験では先づ全く當りのつかぬやうな夢を見たことはない、
而も翌日になつて考へたのではどうしても由つて來る所を探りがたいほど
に飄逸けた夢、奇怪至極な夢を見ることもある。世間には心理學者も説明し
かねるやうな怪夢、昔所謂正夢といふやつもあるらしいが、蓋しそれは例外の
例外で、大がいの人間の見る夢は因つて來る所の明かなのが多い。只其の時
の心的状態がおちついてゐないか、程經て因果の緒を見失なつたかで、分らな
くなる場合が多いので、或人々は今も尙夢を全然不條理なもの、又は時として
は全く神秘なものときめてしまふ。これと似た事が現にもある。宇宙の大
はしばらく措くとして、人生に關することが多少これに似てゐるはせんか。如
何にも其の根柢には大いなる神秘が嚴として横はつてゐることは否みがた
いが、所謂神秘好が神秘々々とおしならしてしまふ程に、それ程にザラに神秘
ではないと思ふ。少しくおちついて思索すれば、歴々として因縁果報が指摘
し得らるゝことが多い。夢と現と豈輕々しく分つべけんやなど、思ひ出す
と、尙眠られなくなる。これが第二の癖。

それからもう一つ。

いやそれを話す前に先達て見た比較的筋の通つた馬鹿々々しい夢の話をし
よう。半意識しつゝ見る夢の適例だと思ふから。もつともこれには由來が
あるから、つまらんことながら聽いてくれたまへ。

「實は此の三月以來餘暇を利用して例の舞踊劇の思ひ切つて夢幻的な奴を作
つて見ようと思ひ、例の白面九尾の玉藻の前の傳説を調べはじめ、彼の安倍の
康成に祈り伏せられて清涼殿に黒雲を捲起し、これを驅つて飛去るあたりを
見せ場に使用しようと案じはじめた所、さあ、どうしても趣向が纏らん。考へかけ
ては棄て、案じかけては打捨り、一月ほど經つた。只阿呆の樂園式に筋を立て
るのなら容易いことだが、在來の夢幻劇とは魂だけは全く入替へようとする
所が、それがこじればじめて、不眠が大ぶ募つて、或時三四夜つゞけて苦しめら
れた其の揚句、或夜二時を聞き、三時を聞き、四時も聞いた。もう考へる氣など
はとうに無い、只眠られんので苦しいばかり。そのうちに、やつとうとくとなり
なりかけたが、また忽ち現に歸つて、嗚呼もう眠つた所で二時間とは寐られん、

……明日は八時から學校のある日だ、七時前には起きねばならん……など、思ふうちにうつら／＼と寐入つたらしい。

すると、いつの間にか自分は十才ばかりの少女となつて、垂髪で十二單衣に緋の袴といふ打扮で、さめ／＼と泣きながら（ほんとに涙を流してゐたかと思ふ）どこを指して行くのやら、只ひとりで行く。その道筋が妙で——何でも幅一間以上もあらうと云ふ長廊下——兩側に部屋があつて、右手は記憶せんが、左手は十疊敷以上の室が幾間も學校の教場式に連なつてゐて、廊下なども奇麗に拭掃除が出来て居て、室も奇麗で、そこには老いたる若きまじりで婦人が大勢ゐて仕立物をしてゐる。少女に化けてゐる自分は一體何を悲しむのかといふと、不言不語の間に自分に一人の競争者があつて、今度同じく玉藻前の扮装をして舞踊劇を演ずるのである、その衣裳が格外に立派なもので、逆も／＼衣裳の點で競争が出来ない——（こんなやうな感じは性來曾て抱いたことがないから妙だ）——それが悲しいと斯う感じてゐるらしい。この仕立物をしてゐる連中も其の競争者側の者らしく（これは明瞭とは意識してゐなかつた）

自分は恨めしさうに横目でそれを見て、其の長い／＼廊下をやつてゆき、やがて突當つて、右手の方へ曲つた——と思つたら

忽然として局面が變つたらしい。いつの間にやら自分は少女でなくなつた。不斷の自分だ。無論泣いてなんざゐない。併しヤハリぶら／＼と考へながらやつてゆく。「はて、何としたものであらう。どうしても名案がつかぬわい。何かうまい趣向はないか。兎も角もあの女に遇つて聞いて見よう。」こゝであの女と指したのがをかしい。年ごろ七十位の、白髪、茶釜の、被布を着てゐようといふ老女。それが何處だか知らんが、やゝ都離れのした處に、娘がたしか二人あつて住んで居る舞の師匠なので、僕の親類だ。（ト夢の中で思つたが、親類にそんな老女などは一人もない。地方の踊の師匠に回縁の者はあるが、まだ年は四十二三で、そんな娘などはない。）あの師匠の舞は僕の好かぬ本行そつくりを俗曲に焼直した行き方で甚だ妙でないが、併したしか能の『殺生石』を翻案して拵へたものがあつた筈だから、とにかく参考に見て來よう」と考へ／＼行く道筋が、左右は廣々とした水田と云ふ田舎道。

やゝあつて攝州湊川の堤に似た所へ出た。おやゝ、こんな處ではない筈だ。はて方角がつかなくなつたと不審に思ひながら、あちこちと廻り廻つたと思ふうち、ひよいと奇な景色の處へ出た。正面は樹木鬱蒼として生ひ茂つて――丸で森のやうに――太い幹が並んでゐる間から奥が透かせたやうだが、何が見えたか記憶しない。奇怪なことには其の木が皆水の中から生えてゐる。森の手前は一面に清らかな沼で、僕の立つてゐる足元まで水がピチャ／＼ピチャ／＼と來てゐる。右手は慥か田圃らしかつたが、左手には一軒の草葺の農家らしいのがあつて、何やらの生垣、田舎びた折戸まで附いてゐて、中には年増の女がある――と頭から想像して居た。

これは妙な所へ出た。元來た時にはこんな所はなかつたがと思ふトタンに飛び込んで來たものがある。年ごろ三十前後のイナセな男――馬丁らしい――目くら縞の半纏股引、足袋跳足と云ふ扮装。「お別荘はこちらですか」と農家に向つて叫ぶと、あのお催しですか」と年増の聲。「えゝ、田邊さんで。」（たしかさう云つたと思ふ）。「それなら、そこを渡つていらつしやればよい」といふやう

なことを云つた。馬丁は其儘沼へ足を踏み入れたが、ヒョイ／＼と渡つて森の中へはいつてしまつた。これはと思つてよく見ると、不思議や其の沼の中に今までは氣が附かなんだが、黄金色に光る飛石がチャンと出來てゐるので、それを傳へば水は足の甲をぬらさぬほどだ。

一寸斷つておくが、此の夢の話は寸分の拵へ事はない。目が醒めた時すぐに手帳に大要だけ書きとめたまゝである、しかし其の書く時分に處々に細かい點は忘れてしまつた。

僕はふつと思つた。あゝこりや何か趣向だなとさう思つて又見ると、今まで目につかなかんだが、沼の水ぎはに根府川石の大きな碑が立つてゐて、それに漢字で妙な文章が刻してある。さアその文句だが、その時には讀んだ積りだつたが、元より無意義な文章なのでおぼえて居ない。何でも冒頭は十二三年といふので結末の一字が邊の字であつたことだけはたしかだ。こりやまるで野馬臺の詩のやうだ、どうしたことだらうと思つてゐる最中に、バラ／＼と又二三人驅けて來る足音が聞えた。自分は其の時こちらへ避けたい。

と見ると、いづれも二十三四の青年で、先に立つたのは洋服姿、後二人は日本服で書生風であつたと思ふ。「どこだ」。ばか／＼しいぢやないか。たゞ田邊ぢやわかりつこはない。全體たゞ人を呼んで置いて場所を知らせん奴があるか、失敬ぢやないか」と聲々に罵つて腹を立てる。と、そのうちの一人が碑に目をつけ、や、こゝに變なものがあつた、こりや何だらうといふと、皆一度にそこへ寄りかかつて頻りに首を傾げながら讀んで見る。十二年までは意味は通じることが、後は分らぬらしい。そのうちに一人が益々腹を立て、遠方の處を引つぱり寄せておきながら、こんな吾々を困らせると云ふのは無禮だ、とりもなほさず吾々を侮辱するんだ。歸らう、歸らう」と云ふ。

さてこの青年等の問答のうちに、たしかに煩悶とか自然主義とか云ふ言葉が交つて居たのだが、どういふ關係で用ひられて居つたか、又どんな事を云つたのか覺えない。畢竟目が覺めた時には碑文に重きを置いて居たので、其文句を思ひ出さうと氣を揉んだ結果、この邊の問答は忘れてしまつた。兎に角この問答を聞いてるうちに僕の心にフツと浮んだ、あゝ、こりや、園遊會だな。此

の屋敷の主人がキツトこりや洒落者だ。園遊會に客を招いたが、當り前では面白くないから、故意と別荘の番地を知らせず客の智慧に一任して探し當てさせようとするのだ。先刻たしか田邊と云つたが、此の碑文の末の字が「邊」とある、十二三年は吉の字に當る——（この邊が又曖昧だ、何故十二三年が吉の字に當るかわからぬ）——だからこれは田邊の別荘といふ知らせた。（吉の字と邊の字との關係も何かあつたが忘れた）。しかし此の青年連は現代の人だからわからぬのは無理もない。こりや教へようか知らと思つた。が又考へ直して、教へちや折角の趣向の底を割るやうでわるい、まあ様子を見て居よう。トかう思つて居ると——此間三人は何して居たか記憶しない——一人が碑の謎を讀み得たらしい。「こりや趣向だよ、主人の洒落だよ、嘲弄ぢやあない」と云ふやうなことを云つて外の二人をなだめて居る。すると外の二人は腹を立て、その趣向といふ事が癢にさはる。洒落とは何だ。人を弄ぶは不埒ぢやないか」と議論いよく、烈しくなる。こらへ切れなくなつて僕は仲裁に入つた。「諸君が腹を立てるのは無理はない。併しこれは文化文政頃には普通

の事で、所謂江戸趣味といふので、そのわけはかやうく——何でも此の邊で自然主義論に觸れる事があつたと思ふが覚えてゐない——つまり此の長談義で三人の青年はどうやら心が釋けたらしい。と、突然僕は直ぐそばに居た洋服の肩へ手をかけ、耳の元へ口を寄せて沈んだ調子で、時に君、此の趣向の全部を僕に呉れたまへ」と云つた。すると、三人は如何にも驚いた顔をして、何とも答へない。「外ぢやないが、此の場面は新派の幕開に最も妙だ。よく本郷座あたりで園遊會の場を序幕に使ふが何時も紋切形で甘すぎる。同じ園遊會を使ふにしても、かう云ふ趣向の園遊會にして、それも丁度君達が江戸趣味を解しかねて腹を立て、居る所なぞから始め、それが廻ると園遊會の舞臺面などは珍らしからうと思ふ。是非くれたまへ。その代り君達は全く無意識になつてくれなくちやいかん、さうでないといふのが只の寫生で、僕のオリジナルな空想にならぬ」と云ひかけると三人は目を丸くし、無意識になつてくれとは何だ、僕等の自覺を奪ふと云ふことはない」と非常な勢ひで腹を立ちはじめた。すると僕が、いつにない眞面目な沈痛な聲で、君達は知らんか。君達が斯うし

て居るのは悉皆僕の方だぞ。僕の言ふ通りになつて居れば、これから朝まで二時間餘の間に、まだいろくんな事を見せて、五十年の命をも呉れてやるが、若し否だと云へば是れつきりにする」と云ひもをはらぬうちに、洋服を着た一人が他の二人に目くばせをしたと思ふまもなく、やつけると云つたかどうだか、立ち所に短刀をキラリぬいて僕の胸倉を取つた。他の二人もたしか左右から手をおさへたかと思ふ。覺きて居る僕なら多分逃げ出したらうと思ふが、不思議に平然たるもので、おしつけられながら冷笑の態度で、洋服姿の顔を冷かに睨んで——その洋服の顔は今も目に残つて居る、瘦せぎすな、面長な、眼の馬鹿に大きくつて、どこやら日本人らしくない顔付——「何をやる貴様等は、厭だ」と云へば貴様等の命はおれの一呼吸の間にあるぞ。おれが一つ聲を立てれば貴様等は消えて無くなつてしまふのだ。「何を」といふ勢ひで短刀を突きつける。「突くなら突け、聲をあげるぞ——」といふと、向うはチョイとひるんだ。で我れ知らず聲を放つて、京傳の黄表紙にもない——と叫んだと思ふと、三人の青年がフラ／＼と僕の傍を離れて右に一人、左に二人、へナ／＼と靡いたと

思ふうちに、雪達磨が消えるやうにジメ／＼となりさうになつた。「おのれ逃がしてたまるものか、まだ用がある」と飛びかゝつた——のではない——心中で取捉まへて、こりや面白い、序に何か神怪不思議な妙な形の物を作つてくれよう——といろ／＼に骨を折つたが、さて如何しても顔が出来ぬ。腰から下は女になつたり、エタイの分らぬものになりかけたりしたが、顔だけは出来ぬ——と思ふうちに目が醒めてしまつた。

さて、たはいもない長話であつたが、見様によつては、これに多少の意味があると思ふ。その前日に於ける僕の心的状態と無關係で此の夢を考へた時分には、その由來する所が如何にも不思議だが、醒めた當時すぐに因縁を探つて見たので大概は歴々として辿られた。先づ全體の筋が變幻を極めて居ると同時に多少筋が通つて居て流石に普通の夢とは同じでないのは、これ僕の頭が恰もこの類の作をしようと思つて居たからで、玉藻前が劈頭に現れて來たのもそれがため。十歳の少女は僕の女で、それが十二單衣を着て居るのは嘗て「鉢かつぎ姫」でさういふ服装をさせたのを聯想したのであらう。衣裳の競争

云々は多分少女の情に同感する所から生じたかと思ふ。舞の師匠が白髪の花笠なのは丁度其の頃毎日派の劇評で見た久米八の微妙を舞の師匠と云ふ點から聯想したらしい。娘二人云々と能が／＼とは嘗て宅へ招いた事のある泉祐三郎親子を聯想したのである。又思ふに、本行云々は事によつたら京都の片山を思ひ寄せて居たかも知れない。湊川は思ひつかない。樹木鬱蒼は主として、宅の庭からの聯想で、水ビチャ／＼は丁度その晩雨が降つて耳元へ雨垂が落ちて居た。野馬臺の詩は「三國妖狐傳」に吉備大臣のことが出て居たので思ひついたらしく、江戸趣味、自然主義云々は云ふまでもない。馬丁も思ひ出せぬ。三人の青年の中の目のギョロリとした洋服は學校通ひに屢々出遇ふ清國人、言葉が通じるやうで通じない所が眼目。他の二人は普通の學生、併し後に短刀を擬する云々は新聞紙に見えた悪書生から聯想したのでらしい。「朝まで二時間」云々は、あゝもうあと二時間とは寐られない「からの聯想。新派幕開だの自意識を奪ふ云々なども皆一々説明は出来るが、省く。さて以上を總括して考へると、始め無意識で見かけた夢を半意識して持續し、

半無意識にしてこれを作爲する事が出来るると云ふ事、これが一つ。次には一見不可思議と見ゆる事もよく調べて見れば大概可思議であると云ふ事、これが二つ。最後に段々自意識が鋭くなつて來ると幼時の如く全然たる夢を見る事は出來ぬ、忽ち醒めてしまふと云ふ事、これが三つ。

このうち真中ののは既に前に説明したから残る二ヶ條を現在の文藝界の現象に當てはめて見ると、斯んなことが言へる。もはや全然たる空想文藝は夢と同じ道理でもはや今人を楽しましむるに堪へない。今の自意識の熾んな人達に取つては彼のロマンチズム式の樂園に遊神することは出來ても長くは續かない。其の作に魔力さへあれば随分暫くは夢心地にもならうが、やがてフラ／＼へナ／＼ジメ／＼と消えはじめて現に歸つてしまふであらうといふ事。次には作者の頭の働きも將來は大に變るだらうといふこと。西洋でも十五六世紀の頃若しくはすつと下つてロマンチズム全盛の頃には、作者の多數は、半分夢を見るやうな心持で作をしたものが多かつたのだが、今は次第にそれがなくなつた。日本に於ても元祿、享保から文化、文政時代へかけ

ては出來上つたものが全然夢幻的であるのみならず、作者の頭的作用そのものまでが先づは夢心地であつたのだ。推理的分析的に想を構へて行くのではなく、云はゞ牡丹の花などが次第々々にふくらんで一朝バツと開くやうな鹽梅に、出來る時には作者自らも驚き訝るやうに一時にチヨイと出來た例が多い。沙翁の作、近松の作の或部分は確かにそれだと思ふ。で、批評するに此の理を察しないで餘り理窟詰に近代式に評をするととんだ道具はづれの評になる。十九世紀になつての沙翁評が大概イリホガの力まけであるといふのも此の理に基く。まだ何やらこれについて感じたこともあつたが、餘り暢氣らしいからこの邊で止めておかう。

四十一年七月「早稻田文學」

日本で演ずる「ハムレット」

「ハムレット」と限らず、日本で外國の脚本、就中名家の作に係るものを演ずる場

合には、どういふ手心でしたものかといふことは、一考を要する價值があらうと思ふ。原語のまゝで演ずれば格別、邦語に譯して演ずる事としたならば、先づ其の翻譯文體は如何にすべきか、本郷座、新富座、新俳優一座などの如く、時代世話の區別なく、明治式の世話言葉で譯すべきであるか、或は文章語まがひの所謂思軒式翻譯語調を用ふべきであるか、乃至は現代物は別として、過去の時代に關する限りは、多少過去といふ幻像を起させるために、彼方の封建時代に屬するもの、譯には、幾らか我が封建時代の用語を加味し、太古時代の面影をほのめかすには、何分かわが古事記調をも利用するといふやうな用心が必要であるかどうか。是れが一つ。

次には、彌々演ずる場合となつて、當の脚本の内容は如何解釋したものであらうか、彼方で行はれる學者や劇評家の説、又は古來の慣例若しくは近ごろの名優が演ずる型などを第一に奉せねばならぬのであるか、或は原作者の本意さへ誤ることがなくば、日本人獨得の見解によつて新解釋を下してもよからうか。是れが二つ。

例へば、同じく「忠臣藏」といひながら、出雲の作と現に行はれてゐるものとは、單複繁簡の大きな相違があるのみならず、由良之助の性格なども、既に脚本の上にも多少の逕庭がある上に、演ずる役者々々の手心が思ひ／＼であるゆゑ、操と歌舞伎、昔の役者と今の役者、團十郎と宗十郎、團藏と右團次とでは見物の感じの一つでない事は明白な事實であるが、これが外國の名作となると其の内容が心理的に一段複雑で、人物の性格の解釋しにくいと、彼のハムレットの場合の如きが尠くないから、尙更以て様々になり易い。時の學者や劇評家の説が必ずしも正鵠を得てゐるともいへず、目下大人氣の名優の型が必ずしも原作者の本意ともいへない。それも當の外國で、右の批評、右の型が大勢力の場合に演ずるのなら、天才の俳優ならぬ限りは、先づ／＼それに従つたはうが、おとなしい行き方であらうなれど、どうせ正鵠なことは分らぬとしたならば、いや、分つた所で本場の名優と競争は愚かなこと、したならば、寧ろ忠實に原作の眞意を含味し、若し之れを我國に引直して見たらば、ほゞかうもあらうかといふ點に目安を置き、すべて外國の手振は外國らしいといふ幻像を起させる

を程度に、性情の活動を専一として演じて見たらどんなものであらうか。その是非はともかくも、此の點も問題とするに足ると思ふ。

さて本題に戻つて、若し日本で日本の俳優が沙翁の作中でも、最も評判のやかましい「ハムレット」などを演ずるとしたならば、さしあたり如何いふ態度を取つたものであらうか、先づ翻譯の文體は何としたものであらう。

前年文藝協會の試演用として、私が「マアチャント、オプ、エニス」の一齣を翻譯した時分に、一部には非難があつたやうだ。よくは覚えてゐないが、何でも外國の事蹟であるのに、我が國の過去の言葉を用ひさせたのは穿違へだといつたやうな非難があつた。なせ穿違へだか、反問して見ぬことゆゑ判らないが、多分大體の語脈が舊幕時代式であつたのを非難したのもあらう。非難者は本郷座式、近い話が伊井一座の「熱血」のやうにせよといふのもあらうか。もしさうなれば、尠くともそれは沙翁物に對しては、大きな穿違へといはねばならぬ。いふまでもないが、沙翁物は、主として律呂を整へて綴つたもので、韻こそ踏まね、脚本の七分がたは立派な詩だ。七五調以上の節調文なのだから、決

して現世調の純乎たる散文などで譯すべきものでない。よし散文に譯するとも、用語は或程度まで詩語でなくては情が移らない所が多く、内容と形式との調和の取れぬ所が多い。さりとて沙翁獨得の長所は、七分の律語と三分の散文とを不即不離に融會して、時代と世話、しかも思ひ切つて碎けた世話との二つの調子に捻れつ、纏れつ自由自在に奏で、ゆくところにあるから、所謂詩語は俗語(散文)に縫ひ合すに都合のわるいほどに古雅ではいけない。私はちやうど此の呼吸が近松の時代物どころかと思ふ。近松も沙翁も通俗といふ點に規ひをつけてゐる。これは彼の擬古派の學者肌の作者の脚本と比べて見ると明かである。併しながら沙翁の調子は近松よりもすつと高く、すつと廣く又深いから、近松の用語だけでは作によつては譯し切れない。「太平記」盛衰記「平家」邊までも遡らねばならぬこともあるが、大體は元祿、享保、喜劇などになると、すつと降つて文化、文政、默阿彌前派式の七五調まがひでも折あふのがある。さればとて默阿彌式や馬琴式の純粹なものになつてはいけない。即かず離れず、時代と世話の皮膜の間を縫つてゆくのが沙翁の特技で、これが彼れ

の上中下を籠蓋して一代に盛譽を博し、兼ねて今も尙老朽せない所以の一秘訣である。ベン、ジョンソン一流とちがふ所もこゝにある。

本來、エリザベス時代は、我が元祿享保を桃山と打つて一丸にして、それへ平安文明の薄衣うすころもをかけたやうな時代なので、一面は非常に貴族的、封建的だが、一面は例の文藝復興リネーサンスの個人主義全盛時代であつただけに、大分平民的な傾向も見える。それに今一つ、總じて外國の十五六世紀に謂ふ王や王妃といふものは、我々の目に映する我が帝室ほどに重々しいものではない。だから將軍家位と見て相應、とりわけ沙翁の作に現れる英史以外の王、そのうちでもデンマルク王とか、サクソン時代の王とかは、一段と位の下つたもので、我國の過去でいへば、九州の探題とか、關東の管領位の中にはほんの大名位と見て適當なものもある。ハムレットの父王が園中で侍臣も童小姓もつれず、地びたへ其の儘に横になつて居眠するとあるを見ても、其の平民式なところが分るではないか。此の理を考へると、王や王妃の言葉もお家騒動おやど式が相當、クラシクな語を用ひては折合はない。二つには、沙翁が通俗を專とする所から、如何に放縱なエリ

ザベス時代だからとて、よもや王族は用ひまいと思ふやうな俗語や、甚しきに至つては現に「ハムレット」にての如く、芝居者の通語などが用ひさせてあるから、彌はゞ以て餘り古雅な語は適はらぬ。殊にハムレットのやうな、狂氣をかこつて千變萬化な言動をする人物の白となつては、彌はゞ以て近松式に依るより外は仕方がない。思軒式や純然たる明治調を以てしては、此の不即不離の味ひが到底移し得られまいやうに思ふ。

平仄のある律語で書いてあればこそ、むかしは沙翁の作の白まはしは、大分我が歌舞伎の白まはしに似てゐたものであつたらしい。こといふ音などは、總て卷舌で發音し、friendなどいふ語が句尻へ來てゐれば、特に力を入れて「フリーンド」といふやうな鹽梅にいふ。すべて行毎に句尻に力を入れるもの。myselfを「ミセルフ」、my lordを「ミロード」なども、其のむかしの白まはしの記念であるに相違ない。「今日ッタ」だの「ゼンナク」だのいふ發音法が、節奏を重んずる謠曲の遺傳であると同じ道理。これを思へば、如何に時尙が移り變つて、特にアーギングのやうな俳優が出て以來は、白まはし其の他に大變化があつたとは

いへ、原文の譯としては、多少句調といふことをも重んじ、大時代にいはうとすればさうもいへるやうといふ用心が多少なくてはなるまいと思ふ。さりとて繰返していふが、例の馬琴式の七五調は禁物。乃至物語文式の冗漫なものも不可。あのやうな七五調や生ぬるい句作りでは逆も燃え立つやうな突裂くやうな、原句の熱と力とは移されやうがない。沙翁の原文を読んで見れば、アイヤムビクとはいひ條、如何にも自由な餘裕が見えて、時としては殆ど散文に近い。この點がどうしても近松式だと思ふ。

以上の理由によつて、私は「ハムレット」を勿論ほんの間に合せながら譯して見た。それ、あの劇の中で演ずる劇の脚本、あれが所謂擬古劇の體を模したもので、我が國で言へば、近松のロマンチズムに對する能のクラッシ、ズムに當る。で、彼の段を譯するならば、先づ謠曲まがひの文體で行つて當然かとも思ふが、急場のことで思ふやうにゆかんから、何だかえたいが分らぬものですましておいた。それからハムレットが口吟む即興の小詩は、これは如何な風に歌ふのやら、見聞したことがないから困つたが、日本人が見て情の移るやうにするには、

まさか元祿式の小歌でもあるまいし、まして新體詩の朗吟でもなからうと思ひ、ほんの間に合せに狂言語のやうな、小歌のやうな、曖昧なものにしておいた。オフィリヤの歌ふ小歌は、文句はまずいが、味ひと調べとはまづあの邊で折合はうかと思ふ。

文體の事は此の位にして、科介や白まはしの事をいはうが、これが日本人が演ずるには翻譯以上の難物。西洋人中でも英國人、英國人中でもエリザベス時代の其の英國人中でも、特に沙翁の作中の、しかもハムレット、クロードイヤス、ポロニアスなどいふ一種特殊の、剩へ種々雑多の履歷書附、折紙附の人物に扮するといふことは、殆ど頭から無理な話、これは論ずるまでもない、と言つてしまへばそれまでの事なれど、ともかくも沙翁研究を兼ねて、人情世態に二つはな「い」といふ土臺石の上に立脚して、大膽に試つて見ようとなつたとすると、そこに多少の工夫があるべき筈だと思ふ。冒頭に言つた通り、あちらで行はれる在來の型を飽迄も無上命令と奉體してかゝらねばならぬのであるか、又は、日本人の爲に日本人が演ずる沙翁作といふ表招牌を楯に、多少の新解釋や新趣

向を試みて見たほうがよいか、that is the question、であると思ふ。しかし私だけは後説に立脚したので、文藝協會の諸氏も多分同じ主義で演ずる積りであらう。さて其の理由はといふに、これは少々複雑だ、譯文の體に關して言つた倍程も説明せねば、全くの局外者には理が聞えまいと思ふから、けふはまあ御免を蒙りたい。私共としては、かういふ態度だ、といふことさへ斷つて置けばよいのだから、あとは非難が出たら其の時分に、或は文藝協會のために辯護の衝に當ることとして、けふはこれでよさう。只一言言ひそへておくが、新解釋、新趣向といつて、決して自儘勝手に拵へるのではない、自分だけの抱負は、むしろ此のほうが原作者の本意だとまで思ひ込む眞面目がなくてはならぬのである。外國の名優だからとて必しも解釋し得て當を得るとはいへぬ。『ハムレット』の解釋の如きは、尤も有名なだけでもゲレーテ、コールリッチ以來四通り以上もあつた。現に今日英米佛獨伊等で演ずるのを、書物の上や何かで讀んだり聞いたりした所によると、俳優を異にするたびに甚しく異なるのが常で、其の激しいのになると丸で直反對、どれが正鵠だか原作者ならぬ者の知ら

う筈がない。これだけは承知しておいて貰ひたい。

四十年「趣味」

シャイロックとボオシヤ

世界中に知らぬものゝないといふ沙翁も、我國ではまださほどに廣まつて居ない。併し『ヴェニス』の商人は『人肉質入裁判』と云ふ名で二昔も前に大坂で演ぜられ、近くは川上や文藝協會で演じたので、今は理髮店にまで知られたであらうと思ふから、シャイロックの談を少しばかりしませう、シャイロックを演じて英國の演劇史に特筆せらるべきは、先づ古くてマックリン、中頃にしてエドモンド、キーン、近くしては米のブリス、英のアーキングといふ處でせう。仕草から思入から扮装までが、此間に大分變遷したらしいから面白い。マックリンは赤帽で尖つた髻もみぢで、緩然ゆつたりとした黒色の長上被で、復讐の執念と憎怨の害心を主としたものださうで、見るから怖しげな兇暴な相格さう、鐵アイロンの如き顔色フェイスなど

評されてゐます、如何にも殘忍さうな蠻味を帯びた、皺は、索の様など、書傳へてある、法廷で庖丁を研ぐ時の如きは眞に物凄く、魔物か何かのやうに見えるたと云ふ。エドモンド・キーンは大體マックリンを學んだが、廿六歳の初役であつたから白髪多では演じにくかつたので大膽に格を破つて黒い髪の毛で演じて大當り。それでキーン以來大分シャイロックの品格があがつてヒブルウ的崇嚴の趣と頑冥なる狂信家的風采とが附加へられたと評してある。或學者はキーンのシャイロックは創世記の一章を讀んだやうな感銘を與へると云つた。

其の倅のチャールズ、キーンのシャイロックも「お宣告だ、覺悟をしろ」の前が酷く佳かつたと云ふ。熟とアントニオの顔を恰も邪神が犠牲を睨みつめるのかと思ふやうな眼光で睨みつめ、「ト」覺悟をしろ」と一聲すごく叫んで躍りかゝる刹那の意氣込は無類と云ふ評。最も峻嚴なシャイロックで執念深い殘忍無慚な兇惡な而も決して怪物ではない、人間には相違ないシャイロックであつたと云ふ。

アーギングに至つては更にそれが一進化して飽までも自家の主張を正義と頑信し、私憤私怨と云ふよりも寧ろ猶太人全族のために積年の宿怨を脩めんとするシャイロックと見らるゝに至つたと云ふこと。ブ羅斯の型は詳しく拙譯のトガキに添へて置いたし、アーギングのは別に書く積りだから茲には省く。序ながらテリーのボオシヤは、如何にも上品で氣高く、女皇のやうで、優美にして柔和なる女性の特質を善く現し、いはゞ靈化した智慧といふ趣があつて、蒼空から天降つた天使のやうで、端嚴にして清麗、畏敬の念を抱かしむると同時に、人心を魅し酔はしむる愛敬があつて、沈靜で、莊重で、言はゞ玲瓏透明、雲なき空の明月の如しといふ評。

ボオシヤは古い型からいふと、端麗な、快活な、能辯な、どちらかといへば、幾らかお俠だちのはねかへり質の交つた喜劇仕立の女性として演せられたが通例。成程シェークスピアの作意を味はつて見ると、多少さういふ風にも見える。蓋しシェークスピアの作の女性中で類分をすれば、ボオシヤはたしかに才女で、而も清少納言式二三分といふ肌合とも解釋が出来る、尤も無邪氣で貞淑で

はあるが。で、法庭の場などは、女が男に化けてゐるといふを見せるために、態と大股にあるいたり、態と演説口調などを用ひて演じたこともあつたらしい。然るにテリーのは全く此等の型を棄て、深い、温い情に富み、機智頓才にも富み、辯舌もすぐれてゐると共に、如何にも大家の姫たるにふさはしい品位もあつて一寸皮肉な所もあり、はしつこいといふところもあり、滑稽をも好み、戯語をいひ、快活でも陽氣でもあるが、それは畢竟身體が健康であるところからの自然の結果で、本來は全然無邪氣な、あらゆる人に對して深切な、慈悲深い、大様な、こせつかぬ姫君と、自然にさう見えるやうな演じぶりであつたといふ評。しかし昨今はもう年を老つたことゆゑ、大分趣きが變つたことであらませう。以上見て來たやうな虚ではない眞ほんの話で、いづれも外國の劇通からの受賣。

(四十年一月)

海苔鹿朶

シャイロック

世の進むにつれて古き脚本に對する解釋の次第に變遷し行くはまぬがれぬことなり。肝腎の作意を破壊せぬ限りは改むるもまた妙なるべし。彼の「忠臣藏」などの型の明治までに随分著しく變化せしが如くに、シエクスピア物の型も今と昔とにては山岡頭巾が蛇の目の傘と變つた程のちがひあるが如し。文協藝會に縁あればシャイロックを一例とせんに、作者と同時代の名優バルザックは——書卸しのシャイロックは——其の頃の紋切形にしたがひ、多分腰の曲つたる、見るから卑劣げなる、憎々しき、赤髪レッドヘアーの猶太人として勤めたりしものゝ如し。エリザベス時代には猶太人は常に嘲弄の的とせられ、腰は曲り、鼻は道戯たる幸四郎鼻、髪は赤毛が定りなりしが、シャイロックは流石ゴツゴツに不様なる窺鼻のぞきばなは附けざりしが如し。されど赤髪をいたゞきしことだけは證文あり。その

ち脚本に手を加へて道化形としてシャイロックを勤めし俳優もあり。彼の詩人ポーブが激賞して「これこそは真正銘まがひなしのシャイクスピヤの描いたる猶太人」と評せしマックリンといふ俳優は、一千七百九十九年の初役に型を破つて故實しらべをなし、活歴張に「赤き帽子」をいたゞきて登場し、一か八かの試演をなし、が、首尾よく功を奏し、大喝采にて、それよりしばらくはマックリンの型のみ行はれたりき。然るに一千八百十四年に、彼のコールリッヂかが、電光にて「シャイクスピヤ」を讀む思ひと評せし希代の名優エドモンド、キーンが二十六歳の初役に、大膽にも格を破つて「黒髪」にて演じ、未曾有の大當りをなしてより、又々これが流行の型のやうになりしが、アーピング出づるに及びて又一變化を経験せり。今日のところにては、一方にはアーピングの型と他方には米國のブースの型と、此の二大派あるに似たり。ブースのは大體に於て舊型の脈を傳へたれど、アーピングのはあらゆる前々の格を破つたるものといひて可なり。彼れの解釋によればシャイロックは敵役にはあらずして寧ろ此の脚本の准悲劇式の主人公なるが如し。即ち最も多く同感を寄せらるべき

數奇不遇の人物なり。決して本來の惡漢にはあらず。高利貸となりて貨殖に専らなるも、本來の慳貪に由るにはあらず、四圍皆仇敵たるの境界にある者の止むを得ざる唯一の自衛法にして、彼れがアントニオに對して殘忍なるも、ひとり私怨のためのみにはあらず。世界無宿の民となりて到る處に基督教徒のために侮辱せられ、凌虐せらるゝ猶太人全族のために宿昔の怨を脩めんと欲するのみ。いはゞ一種のヒーローなり。按ふにシャイクスピヤは、或はエリザベス時代に於て屢々猶太人の虐待せらるゝを見て憫然に思ひ、隱然世人をして反省せしめんがために此の作をなし、にあらずや。さりとして強ひて猶太人を辯護せんとして餘りに疵のなき人物に作りなしては不自然ゆゑ、不徳も弱點も人間らしく具へたる人物に物したる所がシャイクスピヤのシャイクスピヤたる所、と是れアーピングが解釋なり。されば彼れのシャイロックは何となく品よく、何となく貴族的のところありて、年齢も五十と六十の間にて、杖を要する程に老い衰へたれども、髪はまだ全くは白くはならず、薄れたれども胡麻鹽にて、ことに前頭部は半以上禿げかゝりて薄くなつたるこしらへ。髭くちひげ

は無く、髻も多からず、いはハ天神式にて、これも鐵色が、つたる鼠色。例の長上被は沈んだ鶯色、帽子は黄筋の入りたる黒き椀形。故實上よりいへば赤き帽子を用ひしかた、むかし伊太利に住みし猶太人の習俗に叶ひて正しき由なれど、アーピングは活歴よりも見た目の上の効力を重んじたりしなり。要するにアーピングのシャイロックは、形容は癩せて顔色は蒼ざめ、シークスビヤが書いたる如き多血質脈は殆ど無き、神経質だちの陰忍なる人物、曠志の鑑に多年我れと我が心を磨り減らしたる沈痛の氣、其の憂鬱氣なる眉宇の間に現れたり。とりわけ彼の裁判庭の場にては、其の前數日間此の一事にのみ精神を勞らして睡眠をもせざりしかと思はるゝ程に目も凹みたる顔のこしらへ、心は只復讐の一點にのみ集中して、餘事に對しては何となく氣ぬけしたるが如く、折々は心こゝに在らざるやうに憫としたる體ありて、在來のシャイロックの如く、はじめより勝ち誇り、威丈高になりて哮りたつといふ演じかたにはあらざりきといふ。晩年には又多少改めし點もあるべけれど、一千八百七十九年に初めて世を驚し、新型はハ右の如くなりし由二三の書に見えたり。國

土、人種の別を忘れて通く人間に同情するやうになり、何事につけても思索想像の濃かになりし十九世紀の見物にとりては此の解釋のかた氣に入るべし。されど原作の表よりいへば此の解は幾らかイリホガの嫌ひあり。アーピング自らが演しなばかくても可ならんが、他優が演じてはいかゞならん。猶丸本物に對する故團十郎が解釋のごとし。シークスビヤが作意よりいへばブースの解のかた穩當なり、ブースのはファルネスの「集注」の巻尾にくはしく載せてあり、今は擧げず、もつとも法庭の場の型だけは曾て自分の譯本に記しおきたり。幕切にグラシャノに嘲弄せられたる時の思入もアーピングのはブースのと違ひ、むしろ犬の如く吠ゆるグラシャノを深く憫み賤すむが如く、徐ろに頭をあげて冷かに一瞥し、頭を振り、やがて戸口に向ひ、悄然として徐ろに出で去るといふ段取なるが如し。ついでながら、歌舞伎座に於ける文藝協會にてはシャイロックの拵へ、白髪、白鬚髯なりしが、これは全く急場にて注文が思ふやうに出來ざりしたためなるべし。又ボオシャの服は其のはじめ予は黒色なるべしと話しおきしが、中ごろエレ

ン、テリーの訛へは赤なりきとの説にて、紅となりしが、ファルネスが引用せる諸家の説には皆法律博士の禮服は黒色とあり。いかゞにや。見た目には赤きもあしからぬやう思はる。但し紅は厭なり。

エドモンド、キーン

アーピングも多分天才の俳優なりしならんが、一千八百三十三年に死にしエドモンド、キーンこそは、兎にかく英國にては前に空しく、後にも匹敵なき天才なりしが如し。彼れが傳を讀めばさながら我が古名優の出世譚を讀むが如き思ひあり。つまらぬ旅役者の子と生れ、満二歳にして「バレー」のキュービッドとなりしが初舞臺なりき。十六歳のころ當時の名優ケムブルの下廻りたるんことを望みしが、叶はずして旅役者となり、種々の艱難を経験せり。或時さる渡場まで來りしが、渡錢さへ持合さず、餘儀なく服をぬぎ、ハンカチーフにてそれを縛り、頭に載せて河を涉りしなど頗る日本人式にて面白し。或時旅にてリーが作の悲劇を演じてアレキサンダー大王に扮せしが、小男なりしかば

見物中より「いよ、アレキサンダー小王」と嘲りたるものありき、その時キーンはぬからず、づか／＼と舞臺端まで進み、然り、小王なり、されども大いなる魂を有てり」とセリフにて言ひしかば、見物大きに受け、大喝采なりきとぞ。察するに先代小團治といふ藝脈もありしと見えて、何事にも器用にて、歌も唄へば、輕業も巧みに、バントマイム風の身振物真似も上手なりき。或時猿を使うて役を演ずるメロドラマ風のバントマイムに出勤し、猿の死を歎く役を演せしが、見物皆涙に暮れきといふ。地方興行十年ばかりにしてロンドンに戻り、廿六歳の若年ながら、一ヶ八か、冒險的に「黒髪のシャイロック」を演せしが、此の役古今の大當りにて、忽ちにして第一流の名優となりぬ。それより後は「シークスベヤ」物を演じて毎々の新工夫、殆ど悉く成功にて、凡そ廿年許りの間雷名都鄙に轟けりき。前にもいへる如く、身長は足らず、聲はわるかりしが、藝風如何にも清新にして破格無法などいふ非難はありしが、活氣あり、情熱あり、深刻か、沈痛か、穿鋭か、何れかの點に凡優の企て及ばざる妙ありき。其の肖貌の傳はりたるを見るに、役毎に別人の如き扮装、表情、アーピング以上にて、シャイロックに扮し

たるのなどは梅玉歌右衛門の法界坊かとも思はるゝ顔色、アーピングのとは全く別世界のシャイロックなり。畢竟キーンの藝は前に師なく後へに傳統なし。模倣者はありしかども皆遠く及ばざりき。オセロは柄の適らざりしめ見た目は面白からざりし如くなれど、尙彼れの伎倆にて、少くとも肝腎の見せ場だけは成功せし如し。在來は黑人の如く顔を掩へつゝ演ずる例なりしを、赤黒き顔の武人として演せしは彼れが工夫なりき。「鷺の如き眼、烏の如き聲」といふ評ありき。マクベスもリチャード三世もハムレットも皆それなり。好評なりしが、とりわけ以上四人物の最期を演分たる苦心は有名なり。リチャード三世のは、譬へば平親王などの戦死に比すべき悪戦の後なるが、其の死にゆくさま劍に酔へる人の如く、敵に劍は打落されながらも、尙傲岸なる意志だけは奮ひ去られざるものゝ如く見えたりとか。オセロはさながら枯れたる喬木などの倒るゝが如く、胸元を貫くや否や立ちながら立どころに落入る運び、如何にも自然、云々。又ハムレットは毒の効力を主とし、五臓の惱亂によつて視力衰へ、四肢しびれ、ふるえ、さながら女の息絶ゆる時の歎歎の如き、又はをさな

子の泣き聲の如き叫びと共に唇のこわばりつゝ、落入る様を示したりとか。キーンに關してはリュエスの著にも多少面白き評ありきと記憶すれど、今は忘れたれば引かず。因にいふ、キーンが流浪中競馬師の群に入りて、「トムブラー」たりしが誤つて脚の骨を折りて惱みきといふ事實あり。此のトムブラーといふは輕業師の如き藝をなすものにて、我がトンボガヘリなども其の藝のうちなり。トンボといふ語の語原如何。

オセロとハムレット

沙翁物のうちにて最も演じにくきは「オセロ」にはあらずやと思はる。「ハムレット」も演じにくきには相違なけれど、主人公の人柄が見物の同感を牽き易きゆゑに、恰も我が「忠臣藏」などの如く、見功者の満足を買ふことは難きながらも全然失敗に了るやうなることは先づ稀れなるが如し。然るに「オセロ」は何分にも醜き容貌の武骨なる男が、人に欺かれて可憐貞淑なる美人を絞殺すといふ筋

にて、皮相を見れば單に邪推の嫉妬騒ぎに外ならぬやうにも見ゆるゆゑ、一步を踏外せば喜劇にもなりかねぬ難物なり。デズデモーナがよくなければならず、イヤゴがとりわけてよくなければならぬなり。殊に我が國の武士かたぎとはまるで方向を異にしたれば、翻案は一段困難なり。川上夫婦が間に合せに引直して間に合せに演じながら流石に喜劇ともならで済みしは、幸ひに現今の事に引直したればなるべし。成程、今日の武人には却りて西洋式の豪傑もありて、女性に對してオセロ風なる人もあるべければなり。一千八百六十年の頃、佛の名優フェシテル英國ロンドンにて沙翁物を演じ大評判なりしが、「ハムレット」は大成功、オセロは大失敗なりき。フェシテルはいづれかといへば端手なる藝風にて、ブラス、アーピングなどに比すれば、其のちがひかた大阪役者に對する東京役者程かと思はる。總じて佛蘭西式は巧緻なるが如し。フェシテルが「オセロ」を演せし時の型とファルテスが「集注」に見えたるブラスが注文とを比べ見るに、少くとも團十郎好みと菊五郎好みと程の差あり。フェシテルの事は諸書に見えたれど、ハズリットがフェシテルを観たる時の評面白し。

曰く「フェシテルのハムレットを観て今更ながら此の作の偉大なるを覺えたり、其の瑕疵多きに拘らず、而も其の瑕疵は甚しく且つ夥しけれども、それを悉く打忘れて見惚れたり。然るにオセロを観ては多年買ひかぶりてゐたりきと感じたり、此の作の瑕疵のみがざら／＼と目立ちたればなり、美所は悉く藏れて、云々」と。

優伎の脚本を活殺すること實に此くの如し。或種類の脚本は、其の傑作たるに拘らず、極めて演じにくき作意なるがために最も適當なる解釋を得ざる以上は觀るに堪へざるものとなることあるべし。近松の世話物のうちにもかゝるたぐひあるべくや。脚本に慣れぬ人々は舞臺に上りたるを観て、はじめ其の作の面白味を味ひ得たりなどいへど、作意を精讀せるもの、經驗する所は東西ともに局外觀のさかさまなり。蓋し或脚本は讀者の想像に一任しおくかた遙かに趣深し。雁治郎の「河庄」よりは淨瑠璃にて聽き若しくは讀んだるまゝの方がよし。人情は不易といへど、倫理觀、社會觀の移りゆくにつれて、時をも處をも問はずといひならはしたる、シークスピア物の運命さへもだ

んくちいまりゆくべし。

ゾラと沙翁物

ゾラが某名優の「マクベス」を演ずるを観ての評に「こは予に取りて何の面白味もなし。予を離るゝこと遠き所にて起ればなり。雲中の事たればなり。成程此の作意は崇高なるべし、されど我が心は冷々然たり。同じく劇ながらも現代物を演せるを観たる時には、其の作の凡々たりしに拘らず我れは覺えず狂喜したりき。何が故ぞや。人も事も我が時代のものにて、我が呼吸する同じ太氣中に働けばなり。さながら隣人の身の上の如く感ずればなり。要するに予は藝術よりも人生を欲す。數百年を経て氷結しきつたる大作は其の實美しき死骸たるに外ならず。云々。

ゾラらしき評なり。しかし七八分の眞理あるを争ふべくもあらず。ことに我が舊劇には沙翁に比すべき程の不易の作もなく、團十郎、菊五郎無き今はアーピング、ブリスなどいふ名優を失ひたる英米の古劇壇よりも過渡期に處す

ること困難なり。思ふに當分は史劇物は不向とならん。例のステープン、フイリップスの作すら、ロスタンの作すら、米國あたりにては不人氣らしく、つい近ごろの「リテラリー、ダイジェスト」にも其の不當りの理由を論じたるが見えたり。其の一に曰く、「活人生より感得せざる作なるが故に人を動かさず」と。何さま史劇物は故實しらべのうるさき世なるゆゑに、一面には一種の繫縛もありて空想をほしいまゝにするに不便なることもあり。さればといつて、活歴劇も一頓挫の今日、科も白も新工夫を要すべく、第二の團十郎いづるまでは考物なり。かたゞ、當分は全力を現世物に注ぎて見る方ましなるべし。切に新代の作家に勸む。

見せものとしての沙翁劇

アーピング程の名優もデモクラシー時代の人氣を博するには見せもの主義も是非に及ばぬと見え、晩年に近づくにつれて、おひく、仕出しや書景や音楽の濫用が甚しくなりきといふ非難あちこちに見えたり。彼の「エニスの商人」

なども、一部の見巧者からは大ぶ非難の聲揚りたりき。先づ序幕へ本文外の仕立し大勢いだしたる、ジェシッカ逃亡後の場へ種々の假面行列を出したるも全く本文外の見せものなり。舞臺一面のゼニス市の夜景、橋又橋の水國の遠見、例の遊覽船を漕ぎ行く様を見せたるなど、宛然たるパノラマ式、彩色入の活動寫真なり。やがてシャイロックが用事を済して只ひとり淋しげに橋を渡りて歸り來る姿を見せ、娘の驅落を知りて悲しみ驚く孤獨の感に照り合ふやう、それと直反對なる賑やかなる祝祭音楽を聞かするなど、いづれも原作者の夢にも知らぬ献立なり。一千八百九十九年に米のジュリヤ、アーサーといふが「ロミオ、アンド、ジュリエット」を演せし時のも同じく甚しく味附劇の一例なるべし。衣裳、畫割等の立派なることに於ては前代未聞と傳へたり。されど、畫割は悲劇を作る能はずして徒らに之れを損ふのみ」とハッブグッドは「米國劇壇」といふ著述中にて歎じたり。此の折には此の劇を半樂劇的にせんとてか樂座にて悲哀なる樂の音などを聞かし、ため、折角の名文句半は溺らされて聞えざりきといふ。序幕に大勢餘計なる往來人などを出だし、カピュレット邸にては

「ミニョーエット」を踊る男女大勢出で、例の喧嘩場へも兩家の家人群りいでたりとぞ。かうもせねば今の人氣には叶はぬなるべし。シークスピアもおひおひ干鮎同様に扱はるゝ時代となり來れるなり。

文藝雜談

(口述筆記)

華やかながら無謀な討死

苟も創才のある文士、藝術家に取つては、今日程便宜の多い時代は過去にも少かつたであらう。昔は文章を書くにも、製作をするにも、格式がやかましかつたのだが、今は破格が歡迎される、思ひ切つた破格ほど其の作家の特性を發揮したるものとして稱讚されるのである。併しそこが即ち一得一失で、歴史的修養を要しないと云ふことになる、云はゞ百人が百人皆同じ踏出しに立つと云ふもの。誰れ彼れの差別なく同じ便宜をもつわけである。つまりは天才

と修養とに依つて優劣勝敗がきまるのであるが、其の最初にあつては、天才も劣才も殆ど同じ勢ひで踏み出す。格式のやかましかつた時代は違つて、比較の是れといふ標準が無いから、自分にも他人にも天才と劣才との見分が附かぬ。とりわけ自身には分らぬ。自ら揣らずし天才と一しよに駆け出す。此に於てか競争が度に於ても激烈、範圍に於ても甚だ廣い。最初は二三段先へ行つても、一寸うっかりして居れば忽ち追ひ落される。生存の餘地を失ふ。で、ツイあせる、もがく、無理をする。腕前もまだヤワで、武器も十分でなく、兵糧も腰に無いと知りながら、只一騎深入りして抜け駆けの功名をしようとする。血氣に任せて縦横に奮闘する。其の内に精力が續かなくなり、二度の驅を試るに及ばんうちに討死をする。と云ふ例が夥しい。併し續く身方もなくて唯一騎、大社會と戦つて斃れたと云ふ意味から云へば、如何にも悲壯にも見える。或は華やかな討死だと云つてもよい。が、よう考へて見ると、その遣り方は當を得て居るとは云はれぬ。無謀である。これで若し成功したなら寧ろ僥倖といふべきであらう。何事もさう無準備では出来るものでない。蟻螂が鉞

を擧げて車轍に對ふとか、火取虫が燈火に飛び込んで命を失ふといふ趣に似て居る。痛ましいことである。しかも斯う云ふのが、十九世紀後半以來西洋の藝術界に於ては殆ど普通の現象、調べて見たなら、名が残らないで途中で空しく討死した天才や、未成品で終つたオリジナリテイがどの位あつたか解るまい。一言で云へば、制限なきオリジナリテイの共進會と云つてよい。而して其の割合には功成り名遂げた者が少ない。製作の自由がザラになつては、大抵の新機軸が新機軸でなく、加ふるに、玉石同架でゴツタかへすために、何が何やら分らなくなるといふこともあるからである。尤もこれは西洋の状態を云ふので、我國はまだそれ程にはなつて居ない。

本場も質ひも共倒れ

今言つたのは主として藝術の方面の事である。文學は稍や別格だと思ふ。文學は唯一人の天才で出来るもの故、其の天才さへずば、抜けて居れば一朝にして群を抜き廣く世に行はるゝ事も出来る。他の藝術に至つてはさう云ふ

譯にいかない。繪にせよ彫刻にせよ文學よりは遙に貴族的のもので、特にベ
ートロンと稱するに足る多數の需用者を得ぬうちは、如何ともしがたい。而
してその意味の需用者を得るには種々の段取を要する。先づ新作品に對す
る好尚を誘致し養成するだけの準備が要る。該作品に適するやうに居室か
ら室内粧飾法からが一變して來ねばならぬ。讀んでさへくれゝばといふ小
説などは此の點が異ふ。油繪を茶室に掛けて見た所でねつから榮えぬやう
なもの。歌舞伎座でオペラ興行は妙であるまい。是れが先づ新しい藝術の
興しにくい一理由である。たま／＼それらの段取も出來て、眞に斬新と稱す
べき程の物が興りかけたとしても、其所に忽ちお定まりの障礙が生ずる。と
いふのは、少し人氣がありさうだと、直ちに之れを敷寫しにする者が出る。例
へば、同町内に同じやうな店名で同じ類ひの賣物が賣出される。一町内に殆
ど同時に貸本屋が二軒出來、汁粉店が二軒出來る。類似の雜誌が二種も三種
も出る。それで、眞似る方は後で出來るのでもあり、眞似るが専門であるだけ
に、時としては一層行届くか、何か又新しい所があるか、若しくは何等か小器

用な所さへある。蓋し前者の缺けたるを拾はうと云ふ點に着眼して起る例
が多い。其所へ持つて來て、所謂本元其物もツイ近年の店開き、高が三四年の
仕上げと云つたやうな場合には、新店との優劣がねつかから著しくなく、織元の
も多少の綿入であつた日には、綿入と綿入とで區別が付かず、果は其所らあた
り一面に行はるゝ事となり、初手の新が新でも何でもなくなり、やがて飽かれ
て共倒れになる。これは特に眞似に長じた日本の藝術界が警戒すべき點だ
と思ふ。

二大勁敵

新藝術を興すに當つては先づ右のやうな障礙があるが、それに加へて二大勁
敵がある。新藝術がやつと芽を出し懸けても、この二つの勁敵がおつかぶさ
るので、大概は忽ち萎れて了ふ。

二大勁敵とは、其の國固有の祖先傳來の藝術と、外國から新に入り來る名譽の
藝術をいふ。例へば畫の場合で云ふならば、茲に一人の創才があつて、何か新

しい日本畫を興さうとする。相應の段取を経て相應に立派な物を描き得たとする。それが社會の批判に上らぬ内は兎も角もだが、やゝ稱讃せらるゝやうになると、忽ち所謂二大勁敵に逢着する。世間の鑑賞家の一部は必ず之れを狩野、土佐、四條、圓山等の逸品と比較して是非を云ひ、他の一部はバリー直傳の油繪畫工の傑作と比較して褒貶する。其の結果は先づは十が十まではどちらにも劣るとせられる。これは其の筈のこと。歴史と格式との後援ちんげんのあるものと無いものとは無條件で比べるのが無理だ。畫などは一の天才に待つべきもの、それでさへ其の通り。まして多人數の協同を要する演劇類のもの——新音樂とか、新演劇とか、新舞踊とか、日本式のオペラとか、此等の類ひ——に至つては、尙更のことである。よしや鑑賞力の低い一部の社會には浪速節程度に歡迎される事があつても、前に云つた模倣競争の激烈な結果程なく飽かれてしまふと云ふ弱點がある。幸に暫らく存へる事を得るも、久うして見ざめがするから、到底内外の逸品と同等に珍重されることは不可能である。

蓋し内外の藝術で、今日猶ほ行はれると云ふは、それは何か深く國民的嗜好に今尙棄てがたい所があるか、或は長い間自然淘汰で擇り抜き、した結果生存してゐるか、若しくは外國で同じ經歷を有してゐるか、或は近頃一般に歡迎される名譽の作物だから特に輸入するとか、何等か極め付きの理由がある品であるべきだらう、それをツイほつ立ての亞鉛張りの藝術品など、比べるのが頭から不倫であるのだ。一と目で淺ましいと見られるのは當り前の事。其所で讀んで字の如く、嘲殺される、唾棄される、自業自得と云ふもの。眞の藝術が十年や其所いらで出来る筈がない。

二十年の蘊蓄

僕がよく云ふことだが、理髮師になるにも東京の眞ん中で店を張らうと云ふには、少なくとも十年以上の年期を要するであらう。さう考へて見れば、背ろに東西三千年の文明を背負つて居て新藝術を起さうと云ふには、餘程の年期がかゝるわけ、五十年でも廉い位、二十年はミニマムであらうと思ふ。近い例

が團菊の藝、實生梅若などの藝に照らして解るわけ。底光りがすると云ふ磨き迄には器物も十年以上の丹精を要する。イブセンの大才を以てしても新脚本に成功したは五十以後ではないか。と云ふと皆が云はれるであらう、それ位の事は誰れも疾くより承知の事だ、然し十年とぐすくして居れば時勢は流れるやうに移り變る。特に日本のは活動寫眞のやうだ。やつと練磨が出来上つて社會へ出ようとする頃には局面一變、まるで浦島の子のやうな思ひがあらう。苦心の新藝術がもう新藝術ではなくなる、時代の需要や好尚に後れてねつからもう役に立たぬと云ふ様な事が多い、それで已むを得ず急ぐ段取になるのだと云はれるでもあらう。いかさま、それも尤だ、然したつた十年や其所いらの内に時勢に後れてしまふやうな新藝術なら、所謂際物、場受物で、その値打は知れたものと謂つてよい。そんなのは出さず了ひにしても惜しくないと思ふ。

が茲に一つの困難がある。それは例の生活難と云ふ奴。新藝術と云ふ程の物は、逆も片手間仕事では興されぬ、必ず全力を注がねばならぬが、十年二十年

の間如何にして生活を續けるか、一大難問。二つには老少不定だ、いつ死ぬか解らん。所で大概の者がツイもがく、ツイあせる、若い人は血氣に任せて無理な過激な働きをする。トン／＼拍子でいつた所で、其の結果は神經衰弱。況んや失敗頓挫しては心的大反動を起してヤケになるか、病氣になるか、前に云つた華やかな討死か、さなくばホンの三日天下の共倒れか、孰れにしても悲觀的である。

では如何したらよいか

と云ふに、眞に眞面目で新藝術を興さうとするには、少なくとも二十年の先を見越して懸るに如く事はない。所が是れがまた言ふ可くして行ふ事は先づ出来難い。見越した積りが積りだけで、トンと見越して居らぬ事もあらう。始めのうちこそ衆皆眠れり、我れ獨り醒めたりと高く自ら持して昂然としてゐるものゝ、周圍に同情者は更にない。口や筆に税の出ぬ世の中だ。或は嘲弄する、或は罵倒する。中には何も知りもせぬ癖に勝手な熱を吹く。が相手

にする内はまだしもよい、果は冷然と看過して黙殺と云ふリンチングに處する例も多い。さうなると、社會が賢か、我が賢かと多少疑ひ出す。このストラッグルが十年となり二十年以上となると大抵の者に取つては之れを乗つ切るのが困難だ。偏へに意志の強弱に依つて事が定まる。見越し方が遠い程、場合に依つては、眞に見越して居る程ますます、俗の同感を得難い事もあらう。故に眞に事を成さうといふには天下唯一人、同情者更になんか天涯の孤客となつても泰然自若たる覺悟がなければならぬ。

さてさうなると、逆も功名を主としては出来ぬ仕事になる。生活難無論承知で、何か外の仕事をして生活し、或はあくまで無用の費を節して當用に充て、二十年一日の如く其の事に心を摧かねばならぬ、到底生きて居る内に出来上りを見ようといふやうな現實主義では出来ぬ。又遊び半分などといふ道樂氣があつてもならぬ。茲に至ると主として眞面目な藝術的本能満足主義であるより外に仕方は無い。唯一歩、仕事を進めて行く事、其事が面白い、わが志をリヤライズして行く事、其事が面白いと云ふ所に住せねばならぬ。そこ

からして藝術はどうしても創作クリエーションでなくてはならぬといふことが生ずる。模倣や敷寫では如何にしても此の満足は得にくい。自分の頭から自分の手で特に創作するといふ事が此の意味からして藝術の必要條件になると思ふ。つまりは創作さへすれば能事終るのである、成功と不成功とは問ふ所でない。勢ひ藝術に身を獻じてしまつて、一種無我の境に歸着するやうにならねば、物らしい藝術品は出来ぬのであらう。

殊に湊合藝術は困難

なせなれば湊合藝術には——假に湊合藝術と名づけたのは能とかオペラとか演劇とかの如く種々の藝術の協同一致を要する藝術を云ふのだが——これには是非とも打合せの必要がある。假に能で云ふなら、囃方、地方、立方のこの三者の十分な打合せが整はなくては能の演奏は立派には行かぬ。三四百年來打合はせ打合せて仕來つたものすらさう、况んや新藝術をやである。寶生九郎などは、古稀の老齡を越えながら、今尚ほ能樂堂などで演ずる時には

十分打合はせをするとか聞いた。今日の舊演劇乃至新俳優劇の、一は傳來の打合せがあり、一は少なくとも十五六年の練磨がありながら、尙全體の上から見て殆ど識者の鑑賞に値ひせぬやうに言はれるは、此の打合はせを怠つて、時としては、素人藝なぞのやうに不調和不整頓を極めて居るからである。管絃樂の合奏などに譬へれば、めい／＼の調子がチグハグで合はぬやうなもの、見苦しく聞苦しい。傳來の藝術品ですらさうである。其所で新藝術の湊合的なのを興すのがむづかしいのである。

なせなれば、まづ如何にして種々の要素と要素との間に有機的調和を保たしむべきか、どうして各部分の歩武態度を一致せしめようか。其の形式、其方法から先づきめて懸らねばならぬ。たゞ新機軸を出した脚本さへ出来ればそれで以て新演劇が興ると思ふは局外の考で、眞に新しき脚本ならば、其の白廻しも、其の思入も、一切の科介も新しからねばならず、舞臺の構造から、背景から、衣裳、鬘、顔の拵へ、鳴物まで、悉く一新せねば調和を保ちかねるであらう。いや、さうなうてはならぬ筈。此の調和が取れぬ内は所謂未成品で、眞の面白味は

出ない。新脚本を演じて見て、作者も失望し見物も失望する理は、外にも無論理由があるが、第一には此新適應ニユアダプティビティが成立たぬからである。しかるに劇評家中にすら此の點を深切に看る人は、存外少なく、責任を一に作又は俳優に歸してしまふことが多い。

芝居はまだしもの事、音樂を用ふる類ひの新藝術に至つては此の間の消息がいよ／＼ますます／＼デリケートである。實際問題から云ふと内容、内容は新意さへ鬱勃としてゐれば中位でもよい、形式は兎も角も藝術品式にアドジャストしてかゝらねば駄目だ。どんな立派な臺本が出来てもアドジャストメントの方法が整はぬ内は先づ絶望だと云つてよい。假に畫に譬へて云へば、畫工の想像を適切に表出するに足る色彩(顔料)を得ないやうなものである。然るに世間にはどうかすると此の段取を藐視して、形式などは追々に整ふ、やつて居る内に出てくると云ふやうな心組で、無二無三に突貫を試みようとする人もあるらしい。此等はたゞ戰場へ出て氣で以て戦へばよいとする人達だ。餘興的の藝術ならばそれでもよからう。然し眞の藝術を興さうとする眞面目な

遣り口ではない。素肌で戦場へ躍り出し、それで追々に膽力を練り、敵の死武者の武器を奪つたり何かして武器を拵へるといふも一法だが、それは野武士の仕事で、功名一點張の霸道としても如何と思ふ。況んや天下の民心を安んずる爲めの戦略としては見當違ひであらう。

素人で自ら演藝界へ打つて出る人がおひ／＼多くなると同時に、氣の毒な失敗を経験する人もおひ／＼多くならうと思ふと氣の毒でならぬ。好んで其の世界へ飛込むのだから、もとより覺悟の上ではあらうと思ふが、どうか二十年はミニマムだといふ僕の言葉をよく味はつた上で飛出して貰ひたい。

調和と文藝

古い問題だが、内容と形式、自然と技巧、どちらが主でどちらが客かと云ふ此の輕重優劣の問題は、つまるところ調和不調和の論に歸すると思ふ。調和は文藝の生命である。内容と形式とに位の先後はある、價の優劣はない。自然と技巧

とも同じ道理で、到底一方に偏してしまつては藝術品にはなるまい。通例行はれる技巧排斥論は彼の文明排斥論や理想排斥論や道德排斥論と同脈のものであると思ふ。即ちステール(老朽)な技巧を取り出して來て、それを全技巧の代表として排斥するのである。理想にも道德にも文明にもいろ／＼ある。いかなる極端の非文明論者も排理想論者も在來の以外に立派に新らしく成り立ち得るものがあつたら、必ずしもそれを排斥はすまい。第一義道德とか第二義道德とかいふ名目が立てられるのを見ても分る。理想とてもさう。僕なぞの謂ふ理想はいつもまだ曾て實現されないのを指すのだから、近頃の排理想とは全く没交渉に感ずる。技巧とても同じ事、最新の作家にもそれなりに技巧のある事は争ひ難い。他人の技巧を襲用すると云ふ意味の技巧はない、即ち型に入り切つた技巧はないが、自分が云はんと欲する所を間違ひなく云はんとし努力する點に十分の技巧があり、またあらねばならぬ。かの排斥せられる技巧は悪い意味に云ふ技巧で、内容に離れてしまつた死形式、よい意味に云ふ技巧は内容と死活の關係を保つてゐる形式である。これは今

更云ふまでもない事だが、技巧排斥論が熱したはづみには、間、筆拍子で議論が極端に流れ易く、内容さへ立派ならば他は問ふ所でないかのやうに説きかねない論者もある。只内容だけでよければ、翻譯と原文との優劣は何によりて起るぞ。如何に忠實に意味だけは譯しても、純文學、とりわけ詩歌脚本の類は翻譯して見ると生氣を失ひ見るに足らぬものとなる。多く論せずともこれだけの事を考へれば、技巧の必要が直ぐにわかる。内容と十分に調和する技巧を得なければ、その内容が死んでしまふ。さなくば同臭の間に喜ばれるのみに終る。調和は一に技巧の力で成るのである。

切迫した社會觀と遊びのない文章

昔の文藝は東西共に多少内容に遊戯的といふと悪い意味だが、善い意味に取れば概して幾分のゆとりがあつたものだ。随つて文章の上にも幾分の遊びといふとわるいが、ヤハリゆとりがあつた。今のは偏に眞面目又は生地きぢのまゝ若しくは生地きぢめかさんとする傾向があるから、随つてその觀察を言ひ表は

す文章も生地きぢのまゝでゆとりなどのない方が折合即ち調和がよい。昔のはよし遊戯的でないまでも、觀察が受賣的に客觀的即ち自分の頭から生み出したのでないといふ意味の客觀的、又は多少の技巧を交へて飾つたり拵へたりして輿論に副はしめたといふ意味の客觀が多い。それに對すると今日のは概して生きまじめの觀察、切迫した觀察、多くは死活問題に觸れる所のある個人的感想で、表面は客觀的であるが、その實は客觀化せる主觀の苦悶で、めいめいの懺悔で、極言すれば自傳的だと云つてよい。勿論若干の例外はあるが、大體の傾きは斯くの如くだから、勢ひ文章を弄ぶ餘裕はないわけ。よし、實際はさうでなくても、さう見えるやうにしたはうが内容との折合がよい、随つてむづかしい言葉や引き事や餘り巧みな比喻などは、どちらかと云へば成るべく多くない方が自然らしい。淡白率直なのが却つてよい。必ずしも技巧を嫌ふと云ふのではないが、畢竟は内容との調和問題から斯うなるべき筈だと思ふ。かの江戸ツ子調が免角近ごろは輕浮らしく聞えて來たなども此の理に基く。餘りに氣が利き過ぎるのである。近來の作風には重々しい口附、氣の

利き過ぎぬ筆つきの方が折合ふ。ペラ／＼喋舌るでなく、ムツリ／＼と喋舌り、チラと見るではなく、デロリ又はデロ／＼と見ると云ふ方が折り合ふのである。

なせかう眞面目になり、切迫したやうに窮屈になつたか、これにはいろ／＼な理由もあらうが、差當つては當面の現世的生活問題が忙しいので、かの舊時代の醉生夢死者流と同じやうに空想を樂しむの暇がないのである。たはいもない事に心を遊ばす事の出来ぬは勿論、とかく自分本位、現實本位を忘れる事が出来ないのに基づく。さすれば將來の文藝は一にかくの如き内容、かくの如き形式のものにのみ成り行くかと云ふに、必ずしもさうではあるまい。

思ふに、以上論じた如く、若しくは世間の批評家達が近來頻りに論せられるやうに考へるのは、云はゞ作者側、批評家側の觀察で、それは樂屋内の考、遠い將來にはさういふ考が廣く行渡るやうになるかも知れんが、さし當り廣い意味で云ふ世間は左程に立ち入つて考へては居ないらしい。かの自然主義の小説を歓迎するのも、原因は専門家側で思ふ通りではあるまい。彼等が新を迎ふ

るは主として陳腐な作意や文體に飽いたのがもとであるから、新奇と云ふ特質さへ伴へば、而して内容との調和さへ十分に行き届いて居れば、文章は華麗體をも高雅體をも、作意は空想的なのをも随分歓迎するであらうと思ふ。蓋し忘我遊神の必要は生活難が甚しいとか、心にゆとりがないとか云ふ時代に一段多かるべき道理である。今の批評壇はやゝ専門家側の見解に泥み過ぎると云ふ嫌がある。廣く社會の需要上から見ると今云つたやうにも云はれる。

湊合藝術と不調和

就中湊合藝術は種々の別格の要素を調和させる上に初めて成立つもの故、不調和は大禁物。劇で云はうなら、彼の活歴熱が歌舞伎劇に傳染した場合の如きがその一例。故實や理窟になづんで手を入れ、ば入れる程不調和が目立つ。近くは、千本櫻の辨慶が活歴仕立になつて渡海屋の場が不調和になつたやうなもの。さりとて元のまゝの毬栗頭の辨慶も今では俗悪で見るに堪

へないが、調和から云へば元のまゝでなければ妙でない。大隅や攝津の語を聴いても、おひくゝ寫實脈が加はり、文句も所々直してゐるやうである。併し本來が無理な修正ゆゑ久しうして破綻を覚える。つまり竹本劇の生命はおひくゝ縮まる。調和が藝術の生命である以上は此の類の修正には際限がある。舊時代の文藝の小修正は最早斷々として止むべき時期であらう。調和と云へば能や踊なども同じ理合で、かづら衣裳までがそれくゝに特質がある。同じ狩衣、直衣、甲冑と云つても、能のと踊のとでは一つでない。又本物とも違ふ。この違ふ所が妙。歌舞伎とても同じ事で、時代に構はず理窟に關らず、勝手な鬚、勝手な衣裳を工夫してその内容の夢幻的なのに調和せしめた所に妙がある。それを生中に故實を正したり何かしては打毀し、不調和が著しく目立つ。角を矯めて牛を殺すのためしである。時には修正して品もよくなり、味も悪くならぬ場合もあるが、先づ多くは不調和に歸する。踊では彼の「山姥」「賤機」の如きは修正して打毀しにならず、多少見よくなつた方、安宅や市原野は味を薄くした例。知つての如く、市原野は芳年の繪から思ひついたも

ので、例の金ピカの立烏帽子に狩衣と云ふ扮装が頗る詩的であつたのを、平井保昌の服装としては故實に適はぬとでも云ふのか、もとは頼光で演じたものを近頃は役名も保昌にし、着附も故實的に引き直してしまつた。で、舞臺面は大きに淋しい。剩へ振までが活歴の立廻りにかぶれて來た。「安宅」の辨慶も餘程前から勸進帳式の能衣裳に變つて、里の童との折合が非常にわるい。史劇にもいろくゝあるが、僕が以前に書いたのなどは何れも半夢幻的のものであつた。然るに着附の段になると兎角故實論が餘所から出て困つた。イリュージョンを起すまでには必要だが、それ以上に要らぬ事だの、ともすれば議論が煩さい。甚だしきに至つては奈良、平安のものになると禁色論までが出て來る。つまりぬ事だと思ふ。もし内容が純正史的、歴史學の参考品でもあれば格別、半ば以上空想であるものなら、服装その他もその内容に伴はせて至當であらう。

舊時代の主なる演藝で今尙生命のあるものは、第一に能、第二に歌舞伎、第三に俗曲だが、その中能は舊時代の上流而も武家に偏した藝術であるから、とても將來の國民全般には向かない。歌舞伎や俗曲と云へば、是れも都會の町家藝術で、江戸とか大阪とかの趣味に偏してゐるから、これも上中下引きくめての國民に向かない。されど、どちらかと云へば後者の方が平民的であるので、どうかしてこれを物にしようと云ふ半無意識的努力があちこちに行はれつゝある。前に云つたやうな小刀細工の行はれるのは、此の姑息な因循な慾望から來るのである。この引き渡しを實行するに當つて修正の方針が凡そ三點に約せらる。先づ町家から立憲國民へ移るのであるから、多少品格を高める必要がある。第二には遊戯的を眞面目的にする必要がある。第三には餘りに技巧的なのを自然的にする必要がある。此の三必要から種々の小刀細工が始まる。前二者の爲めに時代物に對しては史蹟調べ、それに伴ふ故實調べ、世話物に對しては狹斜趣味や色氣や殘酷や不條理や無意味等を抜き去る事を努める。その結果何が残るかと思ふと、平淡湯を呑むが如きものか、支離

滅裂なもので、つまり新人をも舊人をも樂しみますに足らぬ虻蜂とらずに了る。思ふに外部からの修正は最早望はない、注射では命をつなぐ事は出来ぬ。内容から改めてかゝらねばならぬ。併し新らしく生るゝ藝術は必ずしも寫實式とか、狹義に云ふ自然主義的とか云ふのではあるまいと思ふ。

自然の意義

蓋し藝術上に云ふ自然には二種ある。寫實の一步進んだるものとしての自然が一つ。藝術的意識に不快(不調和)を感せしめざると云ふ意味の自然、これが一つ。夢幻劇も内容と形式とが一致すれば取りも直さず一種の自然で見ると久しうして觀者の心がその夢幻界に融合して所謂遊神の境に入れば、いづしかな自然とは感じなくなる。併しこれは廣く理論の上で言ふので、在來わが國に行はれてゐたやうな夢幻劇が將來の見物をして果してかゝる感想を起さしむるか否かは大きに疑問である。非常なロマंचチックなるものも成り立ち得ると思ふが、在來の白せりふばかりの劇で以つて成功するかどうかは疑

はしい。又その中に出る人物にも特に注文があらう。例へば狂人か、英傑か、やゝ狂的な天才か、超自然力か、何か異常なものをあしらはねば調和がとれまい。つまり形式も内容も共に著しく調子高にする必要がある。全篇に通じて音楽的、繪畫的要素を豊かにし、云はゞ薬味澤山にパンジエントにせねばなるまい。さうせねば見物が折々息を繼ぐ、息を繼げば心はすぐに現實に戻つて、理窟が云ひたくなる。思ふに舊歌舞伎の衰ふるは今の人の神経が鋭敏に成り過ぎた爲に、尋常一様の刺戟には慣れつこになつて、言はゞ麻痺して居るため、古い音楽や古い繪畫の刺激位はきかなくなつたからである。支那人が唐辛子を生で焼いてポリ／＼やるやうなもので、要するに内容も形式も陳腐で生氣が無いのでは利かない、ワイルドの作「サロメ」のやうなものならば随分歓迎するだらうと思ふ。イブセンの「ワイキングス」のやうなものも觀られぬことはあるまい。

舞踊劇に關して

とはいへロマンチックな材料はイブセンやワイルド位の腕があれば格別、さなくば散文劇では書きにくい、いや形式と内容との調和が凡筆ではむづかしい。でさういふ材料は西洋では最もよくオペラ又はオペラまがひのものに適し、日本では今の所舞踊劇に最もよく適する。ところが舞踊劇は至極究屈な形式のものゆゑ、到底今のまゝではオペラのやうには範圍が廣くない。行く行くは勢ひ歌舞伎の長所を一段多く取り入れねばなるまい。併し一人の作曲者もない今日は、それは尙ほ遑遠の話で、いつの事だかわからぬ。僕が舞踊劇の革新を思ひ立つた當座は、先づ「浦島」か「かぐや姫」の如きものを自分の目的と定めて見たが、あれ程のものすらも今日の所、なか／＼實現が出来さうにもない。目下の必要は俗曲者流を導いて少しづつでも新らしい方へ進めるにあると思ふ。そこで此の二三年來少しく態度を改めて此の目的に副ふやうな新作を試みた。かの「鉢かつぎ姫」「俄仙人」及び今回出版の「金毛狐」以下四篇は何れも目下の用、間のクサビに供せんとして作つたのである。「浦島」や「かぐや姫」とは此の意味に於て立脚地が違ふ。わざと古い袋に無理に新らしい酒を盛り試

みたのである。併しこの態度も今回だけにして、此の次に出す作は専ら新發展の用に供する積り、在來のと丸きり行き道を變へたいと思ふ。

* * * * *

脚本

こゝ暫くは脚本が中心となつて作も批評も榮えるであらう。月桂冠が誰れに落ちるかと云ふだけでも興味を引く。所が小説とは違つて脚本はなかなか成功を望み難いのみならず、初手から一向専念に此の方面をと覗つて、そして出來損なつた脚本家程始末のわるいものはない。地の文を嫌つて會話體ばかり書きなれた筆は雜報記者にも訪問記者にも向かない。或は成功せなんだ場合に、己れはもとゞ舞臺のためには書かない、讀むべきものとして書いたのだなどと云ふが、バイロンやテニスンやスキンパーンのやうに韻文で書けばまだしもだが、散文で書いた机^{イブセン}上脚本^{イブセン}ほどつまらぬものはない。脚本と云ふ以上は生きた人間を使役し、其の表情や科白によつて其の作の意味を

強め、深め又は鋭くすることを必須の條件とせねばならぬ筈。云はゞ俳優の科白、舞臺の裝飾、適當な鳴物、それを一束にして始めて一の美術となる道理。然るにそれを離れた時分には、ちようど挿繪を失つた草双紙にも劣つた不具^{かたは}になる。しからばどうしたらば成功するかと云ふに、答は存外單純だ。先づ劇の實際に通せよといふ點が肝要。如何なる脚本の天才も多少實地に熟しなれば駄目だ。よしや自分が俳優にならぬ迄も、少くとも五年や六年は毎日のやうに舞臺に親まねばなるまい。イブセンの大才を以てしても前後二つの劇場のマネージャーとなつたのが實際の成功をたしかめた主なる原因であつたのだ。英國の作家多い中で最も成功してゐるのはピネロ、これは元は俳優。テニスン、ブラウニング以來えらい詩人で脚本を試みたもの恐らく十人にも及んだであらうが、殆ど一人も成功せぬ中に立つて、不思議に當りをとつたフィリップスはこれも矢張元は役者。沙翁やモリエールなどの昔話は今更に云ふまでもなからう。

とりわけ我國の今日は一段とむづかしい。何故なれば今日文學上より見て

成功と見做すべき脚本はよし出来たとしても到底今の新舊俳優の頭には入りにくい。筋も分り人物の性格もほゞ呑込ませることが出来たとしても、如何にせば其の性格が現し得られるか、全體に通じた深い意味は如何にして現すかといふ段になると、將來は知らず、さしあたつては望まれないことだ。所謂理では分つても情で分らないと云ふことになるから困る。だから作者が若し彼等をして己れが思ふ通りに演せしめようとすれば、十分精細に且つ實際的にトガキを書くか、若しくは自ら本讀をして少くとも白廻しの鹽梅位は具體的にやつて見せる程の心得がなければならぬ。伊國人のボルザはビネロの脚本を評して餘りトガキが詳細過ぎる、思入から科、衣装、鬘の好みまで斯う一々指圖されては役者がたまらぬ、我が伊太利の名優等ならば承知する事ではないと云つたが、是は場合による事だと思ふ。日本の今日は空前の過渡期だけに革新の志ある作者は俳優以上の舞臺の心得があつて、何から何まで一々指圖する位の見識でなくてははいけぬ。こゝはよろしく俳優の方で工夫してやつて貰はう、式のトガキでは駄目だ。將來作劇に従事する人々は豫めこの

邊を心得てやつて貰ひたい。

思想劇

イブセン熱以來、思想劇、問題劇と云ふ呼び聲は到る所に盛んだが、其の呼び聲の盛んな割合に俗衆が西洋だつても受けてゐるのではない。併し時勢が時勢だから將來知識の上流に喜ばれる脚本はと言へば先づはイブセン脈のものであるには相違ない。即ち何か時代に劃切な問題を捕へ、若しくは何か新しい思想を中心としてゐるものゝはうが、單に不易の人情を寫したといふ作よりも歓迎せらるゝ事であらう。併しこゝが考物で、勸進元のイブセンですら餘りに思想や問題に重きを置いた作は何れかと云へば失敗に近い。其の反對に特に是ぞと云ふ問題めいたものを含まんて、寧ろ専ら人物を主にして書いた彼の「ヘダガブラー」などは確かに傑作。蓋し問題は一時のもの、性情は不易、天才の筆を以てしても理窟にこだわると出来損ねる道理。况んや尋常の技倆を以て生中に思想劇を試みるのは損することが多くて利することが

少なからう。とりわけ彼の標象主義シンボルイズムと云ふものは考物だ。ほんのぼんやりと暗示する位はよいが、實際らしく自然らしく見するのを第一とすべき社會劇の中へ餘り際立つたシンボルイズムなどは妙でない。この意味に於て彼の「マスター・ビルダー」さへ僕は餘り面白くなく思ふ。それを真似て及ばざるものに至つては猶更の事。もつとも日本では珍らしいからと言つて新要素紹介のために試みて見る積りならば兎も角も、主おもにこれによつて成功を博する氣で試みる人があるならば、それは了簡違ひであらうと思ふ。極言すればシンボルイズムは間々手品に類する。なくても事は缺かんのだが、言はゞ腕のサエを見せて藝に旨味を加へる爲に添へるのだ。松旭齋天一の藝當を思ひ合はせれば分る。何も大砲を大業に花道まで引き出すにも及ばず、又見物に向つて鼓膜を破るといけませんから御婦人や子供衆は耳に手をお當てなさい」などと威かさんでもよい事だが、それをするのが藝のサエでもありアヤでもあるのだ。シンボルイズムが一寸それに似てゐる。つまり、老練な藝術家になると何をするにもアヤもありサエもある。一筋繩でない。目にも訴へれば

耳にも想像にも思索力にもと云ふ風に多端だ。イブセンが十九世紀に成功したのは思索を好む知識の上流にも適するやうに特別の景物を添へて、譬へば水を濁して底を見せぬやうにしたからだとも云へる。イブセンとても若しこの添物の方をのみ眼目にしたなら、單に理窟を具體にしたやうなものになるから、久しくして興味索然たるものとなつて厭かれてしまつたであらう。しかしイブセンはそれほど單純な作家ではない。

樂劇とシンボルイズム

さうはいふものゝシンボルイズムも用ひ處によつては随分役に立つ。例へばオペラとか我國の振事とかには用ひ方によつて存外妙な味ひを與へるだらうと思ふ。何故かと云ふに唱歌なり器樂なり舞踊なりを見聞してゐる瞬間には心は大抵恍惚と夢のやうになつて、一通り筋が通り、相應に理窟つぽく出來てゐる作でも、それが極めて漠然たるものとなつて、何が何やら分らず、唯もろろ茫々たる情の海に漂つてゐるやうな氣持になる習ひ。従つて普通行はれ

るオペラや有りふれた振事劇のやうな、無意義な、たはいのない、眞に夢のやうな筋立てであると彌々以て漠々茫茫として正真正銘の阿房の樂園に遊んでしまふ。それでも其の當座は必ずしも悪い氣持でもないが、後で餘り馬鹿々々しいやうな腹の立つやうな氣がしないとも限らぬ。云はゞ後口が悪い。かう云ふ場合には少しは理窟が欲しくなる。ツマリ餘り甘すぎるから辛味を要するのである。ワグネルの樂劇が兎角理窟つぽく、とりわけ彼の「リング」や「バルジファル」の如きは徹頭徹尾寓意あり氣にも見ゆるなども、恐らく其の邊を考へてしたとであらう。讀み物として見ると、スペンサーの「神女王」などに同じく少々五月蠅いが、舞臺で見たら多分何の不都合もないどころか、聲樂や器樂の華で調子の高いのと相引引して、觀聽きしてゐる當座には丁度程よい味になるのであらう。我振事劇には特に此の種の調和が必要だと思ふ。在來の作は餘り無意義だ。

偶像破壊

話頭は變るが、近頃流行るアイコンクラズム即ち先祖傳來の偶像を叩き壊すといふことは誰も仲間入がして見たいやうな痛快な仕事だ。維新の際に足利將軍の木像を斬首したたぐひだね。それがために生ずる弊害も少くはないが、盲崇拜の弊に比べたら、差引利益の方が多いであらう。尠くとも進歩發展に資すると云へる。唯一つ不審なは近頃の新手の諸君が銳氣盛んであるに似合はず、何故古い偶像ばかり叩き壊してゐて、新しいのは初手から拜むのであらう。文學だけで云つても十八世紀以前の大頭を打壊す事に於ては頗る激烈で、シエークスピヤすらも近頃は大分傷だらけになりかけてゐるが、つい近頃建立になつた偶像、例へばニイチエとかイブセンとかトルストイとかゴールキヤとか云ふやうな佛様になると初手から崇拜的態度で祀りたてるのはどう云ふ譯だらう。偶像は兎角天麩羅仕立が多いものかも知れんが、三百年四百年も持堪へて來た奴は持堪へたといふ事、其事が證する如く、或は純金かも知れず、よし純金でない迄も比較的金鍍金が厚いとも云へようではないか。つい近頃出來たのはほんの薄つべらの鍍金か何だか分つたものでな

い。偶像破壊好きに限つて曾て此邊に疑を挿まないのは一寸妙だね。

功名心と日本の小説

小説家になる程の人は藝術慾の満足を求むるのが主で筆を取るもので、よもや功名が主ではなからうと思ふが、萬一文學のはうが他の事業よりも名を成すに都合がよいと信じて、主として功名の爲に此の方面に身を投ずる人があるとしたら、こゝ大いに考へどころだよ。文壇の形勢が變れば知らず、今のやうな有様で持續するものと假定したら、日本の小説は筋骨逞しき四十以上の男が——病身な人や三十以下の人は先づ假に別問題として——其の全力を傾注し命懸けでする仕事たるに足るかどうかと云ふ疑は(二葉亭君の説は別としても)自然に起らざるを得ないよ。「生は短く藝は壽長し」と云ふが、それはどえらい作品の事。普通の作にそんな事が云へるであらうか。「屈平の詞賦は日月を懸く、楚王の臺榭は空しく山丘」なぞと言つたところで、白髮三千丈の格ではないかな。文學者の事業がそれ程に立派であらうか。僕自らも嘗てシェ

イクスピアを評した時に、文學者の事業は政治家の事業よりも偉大で且つ不易であるやうに云つたものゝ、それは千年に一人と云ふやうな大頭に就いて云つたので、くやしいことだが我々は與らず焉らしい。若し中位の所で比べたなら政治家と文學者、何らが上だか頗る疑問だ。鎌足と紫式部、秀吉と近松家康と西鶴、如何だね、これらは疑問になりさうにないではないか。頼朝と西行、馬琴と西郷、こゝらは一寸疑問になる位のところ。さう考へて見ると今の日本の小説などは大分心細くなる。第一我國語の及ぶ範圍が如何にも狭いので、一篇の部数は先づ概して五千部内外、將來は知らず今の處では翻譯して廣く外國に行はれると云ふやうな事も容易になさうだ。國內でもだ。先づは三十歳以下、主として二十五六歳以下の人達が持て囃してゐるので、實際社會の原動力になつてゐるやうな人間とは先づ今の所没交渉。元より幾らかの例外はあらうが、大體について悲觀すれば今の小説は先は青年男女のやゝ高尚な玩具たるに近い。藝術家の本能満足としてやれば勿論そんなことは關意つたことではないが、若しこれを男子と生れて來た甲斐に一大功名

を立てうとしてする事業だとすると、何だか物足りないやうな底力モチからのないやうな感じがするであらう。人生の真相若しくは眞趣を傳へると云ふ表招牌通りに行けば立派だが、其の實際の出来榮えを見ると、往々にしてほんの唯若い男女の煩悶や紛紜を寫してゐるに止まるともあるので物足りない。いや、更に幾歩を進めて西洋の作家の大作の如く、例へばゾラやトルストイの中年の傑作の如く出来たとしても、尙何處か物足らぬ處があるのではないか。現に數百版を重ね數十萬部を印刷し得る外國でも、作家が晩年になると、どうやら此の種の感じを起すことが多いらしい。トルストイなりゾラなり晩年に其の主張や目的の變つたのには其の原因色々あらうが、此の種の感じも大分に混つてゐよう。シェンキキツなりゴールキーなりが文學以外の目的に熱中するのも多少この邊の消息に觸るゝ所があるらしい。先日もある人達と話の折りに那威の文明の度が問題になつて、イブセン、ビルンズンを出す位だから其の文明の度は其頃既に日本よりも以上であつたらうと云ふ説もあつたが、僕は臆測ながら、さうは思はない。現に那威には千八百五十年迄は芝居

もなく劇場もなく、折々丁抹から旅役者が來て興行するのみであつたと云ふのを考へても、其の文明の度は思ひやられる。其の當時は我元祿にも劣る位。蓋し其の國が未發達で、社會上、政治上に立身出世の道が十分開かれてない時には自然民間の大才が文藝に向ふことがある。政治なり實業なりに十分才を伸す餘地があれば或は大才はそれに向ふかも知れぬ。露西亞などが其の一例、政治上ではどうもかうもならぬと云ふ有様、そこで第一流の英才が自然文藝に向ふのだともいへるであらう。日本はそれに比ぶれば自由だ、大なる才さへあれば、或は文藝以外の方が羽を伸すに都合がよいかも知れぬ。第一流の文藝家と言つたところで知れたもの。まだしも第二流の事業家、經世家などの方がましかも知れぬ。今の文壇は果して人才を網羅してゐるであらうか。今日我國の最大の人才は最も多く何れの方面に用ひられてゐるか、と云ふことは一寸問題であらう。

人生の味ひ

文學は人生の味ひを未だ之れを経験せざるものに味は、せるものだと云ふ事は、僕自らも唱へたことがあり、世間でも前々から唱へる所だが、それは果してどの位まで眞理であらうか。僕はかういふ疑ひを抱かんはうであつたが近ごろは仔細あつて疑ひはじめて來た。でタカ、海を見た事のないものがパノラマで海を想像する位なものではなからうかと思ふ。然もそれが見るものが全く海を知らない場合には最上飛切に屬する文學の作用で、到底其れ以上は望まれないと思つてよい。彼の實物の海に接し其の鹽辛い水を味つた程の経験はパノラマでは到底得られるものではない。要するに作が古今有數の傑作でない以上は、又讀者其の人が恐ろしい達觀家でない以上は、無いよりはまし程度の参考品だと思つて丁度よい、隨つて實際に觸れて人生を味ふ事をしないで文學で味はうなどは料簡違ひ、暢氣過ぎた話、恐らくは害あつて益の少ない場合が多からう。蓋し有數の傑作でない以上は如何に有り餘の儘に寫した作のやうでも多分の偽りの混じつてゐるのは免れない。況んや短篇の作となると水彩畫の海の景色。これによつて海の何たるを想像し

ようなぞとは、危^{あぶな}つかしい。勿論實物の海を知つてはゐながら、ある特別の海を知らない場合に其の海を繪で想像する位は出来る事だ。所が二十五六歳以前と云ふと、如何にも経験や閱歷に乏しいから、どんな拙い、逆も海には見えぬやうな繪を見ても、ハ、ア海とはこんなものかと早合點し、海と河とを實際に於て取り違へることがないとも云へぬ。折々は曾て海を見た事のない畫工が間に合せに海の繪を書かないものでもない。池の寫生が海と名乗つて持出される事もあらう。

又考へると人生を味ふと云ふ人は、つまり餘程心に餘裕のある人だね。僕などは始終引籠つてゐる方で昔から世故人情に疎い方だが、それでも從來直接間接に閱歷した辛酸と三面雜報で見せつけられる出來事とで、毎日味ひすぎる程に浮世の辛酸が思ひ知られて、此の上に文學で悲惨を味はうなぞとは夢にも思はぬ。寧ろ如何^{どう}かして暫くそれを忘れたくてならぬ。で所謂深刻な作(西洋の)を讀んで其の魔力には感服するが、二度とは讀みたくないやだ、苦しくてならぬ。思ふにこれは僕ばかりではあるまい。五十以上になると少

られねど、兎に角現在のまゝにて事足ると倣さるる以上は、改めて在來のを練磨するか、未來のを陶冶するか、何等か俳優養成の方策を講ずる必要あることは明かなり。

或は西洋の例を引き、彼方にては素人が中年より俳優となりて存外盛名を博することあり、寫實風の科白劇が盛んになれる今日は、我が國とても事情はほゞ同じかるべしといふ者あり。俳優の身分が段々高めらるゝやうになりさへすれば、學問見識ある側より幾らも此の方面へ躍りいづる者も生ずべく、随つてそのうちより未來の名優も成出づべきにあらずや。近時催さるゝ文士演劇などは其の前兆と見て差支なしといふ者あり。

これは至極尤なる説の如くなれど、實際は甚だ當にならぬ仔細あり。成程、外國には全く素人より一代の名優となりし例もなきにあらねど、それにはそれ相應の因縁あり、階梯ありしことを看過すべからず。例へば、彼方には、よし俳優學校は未だ備はらざる國はありとも、エロキューション、デクラメーション等の方式、又は師範者の無き國はあらず。是れが第一の手蔓なり。次には二十

世紀の今日までも依然として魔力を失はざる幾多の名脚本の存在するありて、獨修の便宜を給供す。是れが第二の便宜なり。尙其の上に此等脚本に慘憺たる苦心の經營をなして、後進者に参考の好資料を與へ、或は直接に指示論導の任に當たる一代の名優も夥多あり。之れに加ふるに累代の學者、批評家等が或は脚本を評釋し、或は型を褒貶して周到精細なる説明を與ふるあり。旁々中途より梨園に入るも、天分と勉強力とさへあれば、随分成功すべき手蔓ある次第なれど、我が今日の劇界には斯る便宜備れりや否や頗る疑はしといはざるべからず。勿論舊劇の方面には昔より此種の便宜あり。エロキューションは義太夫、講釋、落語にて修め、科介、物真似は踊、仕方話にて學び、近松、竹田の丸本物、南北、黙阿彌の臺帳、乃至種々の振事物を金科玉條と崇め、それに對する見功者の解釋、批評、代々の名優が仕殘したる型、老功なる先輩の活ける模範等によりて随分とも技藝を練ることを得たりき。但し舊劇の社會には階級制度が七むづかしきゆゑ、中年より飛入りして目覺しき立身をする事難かりしなり。今日とても尙門閥の遺弊ありて、到底舊劇方面には出世の道なし。加

ふるに所謂金科玉條の「忠臣藏」「天神記」「先代萩」「先陣館」「四谷怪談」「加賀騒動」のたぐひが、おひく時勢と風馬牛となり、骨董扱ひにさるゝ世の中となり來りたれば、在來の型や解釋や經驗や模範やが未來の名優を作るためには餘り役にたゞぬことゝなれり。随つてもはや義太夫や踊でエロキューションやジェスチャーを學んで足れりとすべき時にあらざること勿論なり。右團治、時藏は大阪式乃至丸本式、舊劇の活ける模範にはなるべけれど、二十世紀の新作には邪魔になるとも助にはなりかぬべし。芝翫、八百藏、高麗藏、羽左衛門、猿之助等、何れも活歴式より未來の何物かへ橋渡しの技藝委員たるや明かなれども、流石に師範役とは、少くとも當分の間、謙遜して名宣りかぬる所殊勝なり。

かゝる次第なれば舊劇の方面にも今日は科白修練の方式もなく、これと取いだして研究の地盤となすべき脚本もなく、活ける模範は勿論なく、彼等を指導すべき學者、批評家も到底外國程には無い譯なり。然らば新派側には何等か好き手蔓ありやといふに、それは尙一段落莫たる爲體なり。第一、翻案物の「サツホー」や引直し物の「不如歸」や「乳姉妹」や、彼等の金科玉條たるからは、一へに之

れに絶りて修練する科白、思入の藝術的價値は知れしものにあらずや。脚本に文學的價値なければ、今日までは之れに對する學者、批評家の精緻なる評釋などもなく、型として珍重すべきほどの藝もなく、現在の名優といつた所で、高田、川上、伊井、河合、喜多村等以外に先づ無しといふ有様。これらも將來に對する師範役としては謙退の態度を取るかた最負を加ふる道理なるべし。夫れ弟子は師に勝らざるが通例なりとすれば、今日の劇界は甚だ覺束なき有様なり。俳優養成の方法を講ずることなくば、たとひ帝國大劇場は輪換として中空に聳ゆるの曉となるとも、中にて演ずる技藝其物は少くともこゝ十二三年は、今日に大差なきものたるべし。

然らば如何にすべきかといふに、其の方法に二段あり。第一には時勢に相應したる良脚本を得ること是れなり。第二には俳優又は俳優の候補者をして新脚本の意義内容を咀嚼せしめ、且つ之れに相當する新しき科白の術を研究せしむること是れなり。前にも言へる如く、「先代萩」「忠臣藏」のたぐひは、尙此の後も古劇として珍重せらるべしと雖も、そは彼の古書畫、古器物の愛翫せら

るゝが如くならんこと明かなれば、これらは全く別種の種本となさざるべからず。十五六年前までこそは「忠臣蔵」や「先代萩」に多少の新解釋の餘地もありたれ、もはや今日となりては夢幻劇と寫實劇とは截然と分つた雙方の利益なれば、古きは其の儘に保存し、新しきは全く新に作るべきなり。萬古不易と激賞せられし彼のシェークスピアの脚本すらも、そろ／＼新解釋沙汰を試みては躓くこと多き時勢なることを思はゞ、我が丸本物などに小刀細工の修正は何の役にも立たぬ贅骨折に相違なし。黙阿彌物、櫻癡物も同様なり。世話物にもせよ、今はもはや全然新しき物を作せざるべからず。

さて如何なる内容の、如何なる形式の脚本を作るべきか、これ最も大切なる論點ながら、これは他所にて已に一度略説したることもあり、二つには今言はんと欲することゝは自ら別問題なれば、こゝには態と省くことゝす。只繰返して言ひ添ふべきは、古往今來、苟も名優と稱せられし程の者は、東西ともに其の出世の手蔓は良脚本なりきといふ事なり。英米の例を以ていへば、シェイクスピアは名優の試験石なり。シェークスピアといふものなかりせば、古くはキー

ン、近くはテリー、アーピング、ブリス、ツリーの輩らも、果してあれほどの大名を博し得たりしや否や疑はし。ずつと近年にては、イブセンの名作は各國に涉りて幾多の名優を作りしものゝ如し。

且つや新脚本成らざる間は、俳優養成第二の法たる新科白の研究といふことを行ふに由なきなり。舊俳優乃至新派連のセリフ廻しや仕草思入も幾分かは参考の料となれども、未來の科白劇の藝風は、其の質に於て、其の度に於て幾多の新風味を加へ來るべき筈なるが、其の新風味は是非とも新脚本の内部の生命によりて醸成せられねばならぬ次第なれば、新脚本の成立は新科白術成立の第一の要件なり。イブセン、ハウプトマンなどゝ贅澤なることは言はぬまでも、せめて、ピネロ、ジョンズ以上の文學的價値ある作品出でずしては、到底眞面目に批判解釋を試る學者、見功者も出でざるべく、隨つて俳優の品位も高まりかぬる次第なり。シェークスピアの如き名作を仕活せばこそ、作の光りは七光りにて藝の光り以外に役者が輝いて見ゆる譯合なれど、焼直し物や間に合せ物の筋襍合はぬのを演じては、拙からぬ藝さへも何となく下卑て見

ゆることあるを免れざるなり。

蓋しイブセンの作の主人公の如き前例なき人物を演せんとすればこそ全く斬新なる科白の工夫も附け、明確なる特性もなき、又は甚だ不自然なる、又は平々凡々たる人物のみより成れる脚本に對しては何等の新研究の加へやうもなし。我が在來の脚本は大概皆内容に乏しく、言はゞ輪廓のみを畫いたるものともいふべし。

さて右に言へるが如き新脚本成れりと假定し、彌々新科白の研究にも着手せりとして、尙良俳優を仕立つるまでには、他に必要なる段取様々あること言ふに及ばぬことなれど、それらは第三段以下の沙汰なり。此の過渡期の最緊急要件は右にいへる二ヶ條たること争ふべからず。

(四十年七月)

脚本難

(大阪の某雑誌の爲に)

俳優の本領は脚本を仕活すにある以上は脚本ありての演劇なり。團十郎、菊五郎再び生るとも、脚本にして今のまゝならば、劇界の大進歩は望むべくもあらず。南北、黙阿彌、櫻痴は勿論、近松、竹田とても最早一種の骨董品なり、骨董品としては尙幾百年も愛玩せらるゝ、價值あるべし、新時代の要求には向かぬなり。つまるところ在來の作は學者のも、黒人のも一切がつさい最早刷新の料たるに堪へず、とりわけ丸本物に手入れして、或は理窟に叶はせんとし、或は上品めかさんとするなどは損ありて益なし。作意を毀け、古き型の美をも失ふ、一舉兩損なり。義太夫は今の浪花節同様、本來が平民向の娛樂なる以上は、用語にも仕草にも多少鄙俗なる趣味あるは其の筈のことなるを、強ひて上品めかさんとするは、鰯や秋刀魚を本膳に使はんとするやうなものにて、到底骨折ほどに賞玩は出來ず。「おまへ」を「あなた」に改め、「わたし」を「わらは」に言ひかへ、玉

だれ、薦だれを、都そだち、賤が屋そだちとして見たところで不調和な悪文が出来るまでのことにて、はじまらず。古きは叶ふべきだけ舊のまゝに演じて古物保存の目的を貫き、新しきは全く別方面に向つて材を求めて貫ひたきものなり。

さりとて新聞小説の引直し、座附作者が間に合せに縫合する史劇物、煮切らぬやうなる西洋物などは、ほんの一時のツナギたるに外ならず。

しからば此の際に處するの策如何といふに、此の答に困むは、今日にては内外殆ど同揆なり。英國、米國なども脚本問題に關しては大困却の體なり。ヘンリー・アーサー・ジョーンスといふは、彼のビネロと並べ稱せらるゝ英國屈指の脚本作家なるが、近ごろ米國に遊びてあちこちにて演説をなし、其の都度脚本の不振を歎じ、いろ／＼其の奨励案を述べつゝある由、外國の雜誌に見えたり。彼れは曰く、新脚本を盛んに刊行し、小説同様に世に廣むるも脚本振興の一策なり。こは予が十五年以前より唱道せる所なるが、其の當時は批評家たちより狂言作者風情の作を他の美文學同様刊行するなどは借越なりといふ攻撃

を受けたりき、されど今日はおひ／＼脚本を刊行すること行はれ來りたるは喜ぶべし。かくして世人が脚本を熟讀含味するやうになれば、自然に脚本の巧拙も分りて在來の如き悪作を歓迎せざるべく、随つて俳優が技藝も進歩することならん、云々と。

これによりて見れば、英米の脚本世界も我國のと萬更月世界と泥龜世界と程にはあらざること明かならずや。尙ジョーンスがハーバート大學に於ける演説の要旨に曰く、脚本不振の原因はおよそ四あり。先づ劇が俗眼に訴ふるを主として高尚なる文學趣味と分離してしまひたる、是れ昔の如き好脚本の出でざる一因なり。次には今の脚本には一貫したる倫理思想といふべきものなく、是非善惡ごつちやにて、何が眞の義理やら、何が眞の人情やら分らぬやうなる亂脈、これも今の脚本の人を感動せしめざる一因なり。第三は批評もまた思ひ／＼にて一定最高の標準なきこと。第四には手軽く間にあふゆゑに、妄りに外國ものを焼直し、風俗人情を異にしたる面白くなき作を場の上すことの流行。これら皆好き脚本の興隆を妨ぐる原因なり。云々。

ジョーンスは更にこれが救済策を立て、曰く、文學と劇とを接近せしむべし。脚本をして人情世態の健全なる解釋者たるに堪へしむべし。劇をして俗受を主とせざる眞の美術たらしむべし。演劇學校を起すべし。云々と。如何に此の策の七分がたは我劇界の爲に説けるものと見るも差支なきにあらずや。思ふに目下のところ誰が考へたところで、別段何の良策もある事なし。せうことなしの窮策の一は、最もよく我が國風に適りさうなる外國最近の脚本を、在來のやり口とは別に、最も深切に、最も巧妙に翻案して、一時のツナギとなすことなり。思想も感情もおひく、内外同調となりつゝある今日は、最近といふところに目星をつけて種を選ば、翻案物とて必しも棄てたものにあらず。新しき科白の研究としては却つてかゝるものゝかた便宜多かるべし。ジョーンスが案のうち翻案物の排斥だけはまだ我國には適らぬと知るべし。

第二の策はシェークスピア物、イブセン物、其の他有名なる大作を、筋も人名も地名も服装もそつくり元のまゝにして、振も西洋人の劇通につけて貰ひ、及ぶべし。

きだけ原作に忠實に演じて見ることなり。これには翻譯の筆法も在來のやり口にては不可なりと知るべし。

さて第三は今の小説家中の劇趣味に富める作家に十分報酬を供して脚本の新作をして貰ふこと也。但しいづれも社會劇たるべきこと。史劇は當分中止するかた利なるべし。

(四十年七月)

俳優について

(某新聞の爲に)

俳優といふ者は、自由自在に種々の役柄に成り了するものが本領であるか、或は又自身の持前によく適る役柄を選んで、それだけを十分に演了するが本領であるか、いひかへれば、言はゞ「八人藝」を深刻精到に演ずるのが優技の極致か、或は役柄の數は少なくとも、十分に觀者を感動させる力さへあれば可いのであるか、これは俳優の位附を論ずるに當つての根本問題であると思ふ。多方面

といふことを標準とすれば、故菊五郎は團十郎よりも幾らか融通の範圍の廣かつた役者だともいへる。すべて上品な又は雄大な又は篤實な役柄は菊五郎の能せざりし所といふは輿論だが、それは菊五郎の技倆の足りないに原因するよりも、彼れが容貌の特質と學識見の足らなかつたのに原因したのではなかつたか。とかく小成功を割愛しかねた、めではなかつたか。菊五郎に少しく團十郎の風采と肚とを加味したなら、團十郎に菊五郎の風采を加味したよりも、融會自在、八面玲瓏の技倆は幾らか上ではなかつたか。俳優としての才分の質からいふと、團十郎よりも菊五郎のほうが正脈ではないかな。技の上からいへば菊五郎のは種々の妙所があつた。白まはしの工夫などは、聲柄がわるいだけに却つて團十郎よりも遙かに工夫を積んだものと間々感服したこともあつた。彼のキーンやフェシテルやブースやアーギングの才の質に近いものは、團十郎にあらずして寧ろ菊五郎ではなかつたか。かくはいふものゝ、どちらつかずの生中な多能、多方面よりは、きつとした一角、一藝のほうが優な事は勿論である。只理想としては何れが上かといふことが將來の

優技研究上の根本問題だと思ふ。

畫とか彫刻とか作曲とか作詩とかは全く創作であるから、一生に只一作でもいつも、同脈、同種の作でも、其の出來が非凡ならば、立派な成功と稱美すべきだが、演劇又は奏曲は、他人の創作に係るものを演じ又は奏して、所謂「仕活す」だけを本領とするものであるから、同種、同脈のものゝ外は仕活し得ないといふことは、才の菲小なることを意味するものではあるまいか。

オペラ眼鏡と電氣燈と寫實式と此の三つのもゝ流行ばかりでも、在來の女形は追ひ、難境に墮らざるを得ないのに、平生は眉を生やし、洋服などを被て、普通の紳士で世を渡らうといふ時勢、かてゝ加へて女形は立役よりも一割がた何かにつけて損の卦と通り相場が極つて見れば、遠からずして變成女子は地を拂ひ、舞臺を擧つて新しい女優の世の中となるでもあらうが、さて其の女優の養成法が、これがまた一つの難問題である。女優は女でさへあればよいといふのではない。第一に容姿が美しく、聲調がよくて、それには是非身長が十分あつて、多少器用質で、そして芝居氣がなくてはいけない。踊が出來、俗

曲が巧いからとて、必しも芝居氣が伴ふとは定らぬ。で此の四拍子がなかなか揃はない。藝妓をそのまゝ梨園へ移したらよからうといふ説もあるが、今のところは藝妓商賣のほうが比較的収入がよくて樂でもあらうから、覺束ない。まだしも女義太夫の粹を抜いて移したほうが、芝居氣のあるのと音吐が鍛つてあるのと舞臺慣れてゐるのとだけでも優ではあるまいか。併し、いづれにもせよ、中年から女優になるといふものは、十中八九までは虚榮心の塊りか、さなくば履歷澤山のしたゝかものであらうから、第一、品位、心術の方面から見ても理想的でないことは明かである。かの三宅雪嶺君がいはれた通り、やつと藝が熟しかけた時分に、金力の誘惑が來るであらうし、當人も、第一流とならば格別、第二流以下で、いつまでかうしてゐたところといふ取越苦勞から誘ふ水を待兼ねるは自然であらうと思ふ。三崎座式の女優ならば知らず、容貌がよければよいだけ腰が据わりかねよう。随つて將來の女優は幼少から、これを目的と合點させて育てあげたものでなくてはなるまいと思ふ。して見れば眞の女優を見るまでには、こゝ二十年ばかりまだ間があらう。

將來の俳優は、男女とも、少なくとも左の資格だけは具へねばならぬ。まづ品位、心術の、今の他の高尚なる藝術家に比して劣る所なきこと、書家、音楽家、文學者の秀でたるものと伍して識見に於て多く遜色なき事。學問は少なくとも中學卒業以上、第一流に位するものは、少なくとも私立大學卒業以上の修養ある事。外國語も一國位には通じてゐる事。更に碎いていへば、此の劇界の過渡期に臨んで革新の大任に當らんとする俳優は、是非とも三大弱點を全脱せねばならぬ。一は金錢に對する慾、二は女性に對する弱點、三は俗受を願ふ心。此の三弱點があつては、學問があらうとも、識見が高からうとも、職業及び周圍が誘惑に富んでゐるから、到底理想的事業を成就するに堪へないであらう。然るに此の三弱點を脱するは、只當人の決心ばかりでは覺束ない。此等の弱點に對するそれらの誘惑を豫防すべき若干の設備が必要だと思ふ。例へば、勿論これを理想上のことで實際には望まれまじきことであるが、せめても其の名聲の定まるまでは、藝によりては生活しないといふ覺悟などが必要であらう。蓋し藝で生活を維持せんとすれば、是非とも鑑札を受けねばな

らぬ。しかるに鑑札を受けた以上は、少なくとも幾十年間は即ち俳優の品位の望通りに高めらるゝまでは、他の高尚なる職業を兼ねることは出来にくい虞れがある。官吏、公吏は勿論、学校の教職員などは先づむづかしい。文學者、新聞記者たるには差支のないやうなものゝ、それだけの閑暇があるまい。それから又はじめより一等、二等の鑑札を受ける餘裕は逆もないとすれば、鑑札面で兎角劣等俳優と同列に視られる損もあり、かたゞ一日も早く大名を博して身分を高めたいとあせる結果、先づ廣く遍く好評判が得たく、随つてツイ俗受をも願ふ段取となり易い。さうなると、はじめの抱負は何處へか去つて、見識と共に藝風も墮落せざるを得ない道理、かうなつては門地ある、多少の財産ある舊俳優なぞのはうが寧ろ優といふやうなこともあらう。といふやうな譯ゆゑ、過渡期に於ける理想の俳優は、是非とも藝では生活せぬといふ覺悟と之れを遂ぐる手段とを具へて出掛けねばあぶなかしいと思ふ。但し給金を取るのを卑しいとか下等だとかいふ意味で取るなといふのでは無い。誤解の無いやうに願ふ。

第二には女性に對して飽くまで清潔きんじでなくてはいけない。世間が將來の俳優に向つて第一に望む所は此點であるから、もし此の點に於て在來の俳優等の振舞に似よつた不都合があつた時分には、劇運の前途の障害となる點は在來のまゝに打棄て置くよりも甚しからうと思ふ。殊に女優と並び立つ場合には、世間も危疑の目を以て見てゐるだけに、一段の謹慎を要する。事實はなぐとも、譏誣中傷の雜説が流布しかねない。或は夫婦共に登場するか、兄妹共に立つか、せめても妻あり夫ある身にしてはじめて登場するなぞが、最も安全な策であらう。但しこれは専門として打つて出る場合をいふので、只時たまに演ずる文士俳優式はおのづから別問題である。俗受を願ふ心は見識の高きものには先づはあるまじき筈、されど生活に困ることゝなると旅かせぎもせねばならず、さすればいつの間にか俗受が主となることを免れない、それ故三弱點といひ條實は金と女性との二問題に歸するのである。

文士俳優の輩出は劇界の一大刺戟たるは争はれない。其の熱心も其の器用も専門家を赧然たらしむるに足ると思ふ。但し文士俳優の最大弱點は、所

謂新舊俳優と根本の一弱點を同じうしてゐることである。といふのは、共に好脚本を有つてゐないといふこと、在來の俳優が已に演じたことのある脚本の外には、殆どこれといふ目ぼしい脚本を持つてゐないといふは、恰も敵方の武器を宛にして、一時借に借出しつゝ、戦争を試るやうなもの。心細い話。脚本は軍艦や水雷や銃砲に比すべきものだと思つたら、軍をはじめ以前に、先づ十分に新しい武器を集めてかゝるべきではないか。今のところでは文士俳優の強所は主として識見と當の脚本に對する熱心なる研究と豫習とのみである。才分は必ずしも彼等よりも勝つてゐるとは言はれまい。されば若し新舊俳優が心を入替へて、此方の強所を幾らか備へることになつたら如何か。而して此れをなすことは心掛一つゆゑ必ずしも難くはあるまい。蓋し今の新舊俳優の最大弱所は、學識見の足らぬのも一つだが、此の脚本に對する研究と豫習とが足らぬのが第一である。もし彼等にして文士俳優の半ほどの熱誠と勉強とを以て、興行毎に十二分の研究豫習を遂げて登場するこゝとならば如何か。文士俳優諸君は如何なる覺悟と方略とを以て之れに對

峙せんとするぞ。要するに小生は好脚本を專賣的に演じ得る新派こそ將來に於ける最大勢力であらうと思ふ。

然らば如何なる脚本が最も文士俳優には適するかといふに、小生の見るところでは、先づ沙翁物や、新しい英佛獨のコメディ物、其他彼方で『忠臣藏』や『先代萩』などの如く、一種の傳來物になつてゐる脚本を、筋も服装も元のまゝに、只言葉だけを日本に譯して演ずること、これは迎も今の新舊俳優には研究の届かぬこと、假令教へても吞込ませがたい所と思ふ。次にはイブセン、ハウプトマン、ゾーダアマン、ダンヌンチキ、メーターリンクなどいふ最近のやゝ理窟ばいやかましい議論のある作意を、或は元のまゝ、或は多少引直して演ずること。これも迎も今の他の俳優には出來ぬ仕事。第三には學者、詩人、藝術家、理想家などいふ見識の高尙な人物を主人公にした新社會劇。第四には在來の史劇とは全く立場を異にした新歴史物。史劇も、活歴や叙事詩脈のを覗つてゐるうちにはあぶない。當分こそはあれ、いつ菊五郎や吉右衛門やに乗越されるかわからない。

時間の制限がおひくは五時間以内になることは明かである。今行はれてゐるやうな一番目だけで六時間以上もかゝる作は、こゝ十数年を出でずして用ひ所のなくなるはほゞ明かである。もう叙事詩脈即ち草双紙張の脚本はやめねばならぬ。過去の履歴は人物の間答中におのづから分るやうに仕組み、舞臺で演ずる所は、タカ、二三ヶ月か、短くば一ヶ月、又は二三日の事に縮め、幕数は五幕でも場数はタカ、十場限にせずばなるまい。此の約束に叶つた良い新脚本を澤山手に入れた派が比較的多く活動するであらう。もつとも古い名高い脚本は、世間が筋を心得てゐるから、要所々だけを引抜いて演じても分るから、此の限りでない。今の義太夫劇乃至沙翁物の或種などがそれである。

歌舞伎座に歌舞伎派の目ぼしい連中を吸収したは、差當つて妙策には相違ないが、長い目で遠く見れば一面旅順籠城といふ意味がないでもない。萬一こゝが陥らたらなり。

(四十一年一月)

女優難と作者難

(「趣味」の爲に)

女優難

女優養成所が出来て良家の娘なども大分志願者になつたと云ふので、新聞紙上にもう色々の批評が見えてゐるが、早晚右様の建物も必要なのだから、皮切りの出来たと云ふ事は、大體に於いて、先づ好い事である。然し女優志願者及び其の父兄、保護者たる人達に於いては、今日日本で女優になつて一廉の成功を遂げると云ふことは如何に困難なことだか、それを豫め會得して置かなかつたら不覺の至りであらう。所謂老婆心切のやうだが、思ひ付いただけを並べて見よう。

僕は現今日本で女優とならうとする者にとつて、ざつと數へて、十難があると思ふ。第一が資格難、第二が無師表難、第三が學課無系統難、第四が自墮落難、第五が失費難、第六が立身難、第七が誘惑難、第八が嫉妬難、第九が末社難、第十が生

活難。聰明な讀者はこれだけ云へば餘は説明せずともよいと云ふでもあらうが、念の爲め一つ一つに説明して見よう。

先づ資格難について云へば、舞臺の美人と平生の美人とは同一でないから、塗つて出来る美人なら幾らもありさうなものだが、さてさうでない。舞臺向の美人が存外得難い。蓋し茲に資格と云ふのは容姿と身長と音聲と才分とを併せて云ふのだ。ところで容姿が好ければ背丈が低かつたり、肥りすぎて居たり、此の二つが揃ふかと思ふと聲が悪かつたり、小さかつたり、ビーン／＼聲であつたり、俳優としての才分が貧弱で表情と來てはカラ駄目であつたりする。局外者は教へさへすれば如何にか出来るものと思ふが知らんが、天賦の悪いものと來ては五年や十年教へたとて物になるものでない。ただしも、舞踊とか語り物とかならば、年數をかければ賣物にならぬ事もないが、演劇となつては流石に複雑な藝術だけに天稟に待つ所が頗る多い。死んだ猿藏などが好い例だらうぢやないか。これが先づ一つの困難。

次には好い師表のないと云ふ事。縦令養成所が幾つ出来てもそも／＼誰が

師となつて指導するか、疑問だ。團十郎か菊五郎ほどの名優が居れば、よしや一々教へてくれずとも、其の藝風を見る許りでもそれがやがて暗示となり、提醒となりインスピレーションとなつて、多少の天分あるものには、知らず知らずの間に感化を興へるに相違ないが、今日日本の養成所では誰れが師範役になるであらうか。舊派にせよ、新派にせよ、今の所謂第一流がまだ、修業中の有様ではないか。彼等の第一流が來て教へたところ、其の藝風に感化せられて、それで十分とは思はれぬ、師匠通りになつた所で不完全だといはねばならぬ。それに、習ふ者が女だ。まだしも男なれば出藍と云ふ事も屢々あるが、女は餘程器用でも勝氣でもタカ／＼模倣に止まる習ひ。女の踊の師匠を見ても分る。新機軸を出し得る者は先づ無い。大概は師匠の藝風に小修正を施すにとゞまる。サラベルナルやエレンテリーやドーセを持たぬ我國は此の點に於いて頗る困難だといはねばならぬ。よしや十分の好師範はない迄も、せめて學課だけでも眞の養成所らしく出来て居れば、まだしも頼もしいと云ふべきだが、今度の貞奴のは問題外としても、

差し當り組織立つたのを建て得られる望があらうか。規則面即ち文字の上で並べ立てる事は容易いが、いざ實行の段取になつて、誰れがそれを擔當するか。舞踊や音楽や化粧法や物真似乃至舊劇の型位は一わたり教へ得る者は幾らもあらう。然しそればかりの修養で二十世紀式の女優が出来る筈がない。更に幾歩を進めて考へると、先づ學問の方では内外の演劇史から、名ある脚本の解釋から、演劇論、演劇術、エロキューション、其の他識見あり修養ある理想的俳優を造らうといふには、まだくゞ欠くべからざる類の課目が幾らもあるであらう。今の日本にそれらを擔當するに適當な人が果してあるであらうか。元より通はある、物識はある、學者的の人もあるが、それらが養成所の教師たることを承諾するであらうか。恐らく承諾をしまいと思ふ。承諾をするにしても、養成所向に教授する事については誰れひとり經驗のある者はない。普通の教育ですら無經驗の仕事は効が擧げぬ。覺束ない話だ。そんな覺束ない遣口ならば必ずしも養成所を待たないでないか。個人個人で研究しても出来ることだと評したくなる。これが第三の困難。況んや下に語る

やうな諸困難を豫期して入學せねばならぬに於いてをやである。

右言つたやうな譯で良師もなく、學制も整はず、入學して見ると豫期した程でなく、課目の大抵が有名無實の遊び事に類するやうであると、自然生徒の心が倦怠する。不平や愚痴が募る。親達の不平や愚痴が手傳ふ。此の際に多少の誘惑が來るのである。平生の稽古事が、演劇の習として、兎角人情に切であるから所謂聯想の然らしむる所、心が緩んだ場合だと、年齢が年齢故妙に心が色戀に傾き安い。蓋し必然の勢として同じやうな境遇に居る若い男子に接するのだから、愈、其の危険が多くなる。尤も倦怠の心さへ生せねば、局外者が思ふ程に墮落の危険があるのではない。藝事に熱して居る間は男女共に競争心が盛で、存外其の方に誘惑されないものだが、一度倦み始めると危ない。次には失費難。普通の遊藝の稽古をさせて見ても分る事、始めの程こそはあれ、暫く経つと、根が華美な、浮氣な名聞專一の仕事だけに、衣服、髮飾、持物まで華美で固めねば成立し難いもの。世間の女學校の例に照して見ても類推が出來よう。女優養成所が質素主義、綿服主義などは先づ矛盾だ。賣物には花を

飾るが當然、又飾らせたがるが父母の心でもあらうから、二年三年と立つ間には大ぶ大荷物となる。當人は其の邊無責任でもあらうが、父母たり保護者たる者此の點を豫期して居らねばならぬ。

以上五難だけは首尾好く切抜けた處で、さて六かしいは立身出世。假に三年なり四年なりで速成式に卒業して始めて公衆の前に立つとする。其の際卒業生全體に凡て好い役を振ると云ふ譯には行かぬ。何れ容姿とか技倆とか若しくは其の他の情實によつて役割が決まる。これは踊の温習でも分つた話。此に至ると多少アヤのある富圖同様。二十人乃至十五人の卒業生の内で何人が好い役を振られるやら、悪い役を振られた時分には卒業はしたものゝ先づ其の年は世間に名を知られる緒を得ないも同然。獨立の生活などは思ひもよらぬ。

好い役を振られた所で、當るか當らぬか、疑問、當つたら幸福かと云ふにそれも疑問。なまなか一度成功したのが存外不仕合せの基となる事もある。是れは女優には限らぬ事だが、兎角人間は若い時分の而も初度の成功で一身の

方向を誤り易い。とり分け華美な演劇道では、滿都の新聞に筆拍子で賞め囃され、女優の開山、日本のベルナール、テリーなど無責任に持ち上げられると、カット上せて得意になるのも無理はないことである。こゝまで至る間の辛抱が長かつただけに、氣も緩む、高慢にもなる、イヤ親や最負の友達が高慢にしてしまふ。朋輩とも衝突する、それが高じると師長とも揉める。不平がはじまる。厭氣がさす。謀叛氣が起る。眞の色情難はこの際に來る。前の第四條の場合に在る色情難は怠惰者、若くは將來望のないやうな輩の身の上だが、才分もあり容姿もよし、行末見込のあるやうな女優は此の初度の成功時代で遣り損ふだらうと思ふ。男優の方面を見ても大概さうの様である。大抵これからと云ふ所名題になりかけなどいふ所で失敗、師匠の立者に破門される、で自暴自棄になる、色と酒とで身體を損ふ。

其の次は誘惑難。やつと世上に名を知られて花形の女優と持囃されるやうになると、忽ち種々の誘惑が來る。先づ狂蝶痴蜂が群がり來つて其の蜜を吸はうとする。明かに云へば、豪商や華族、其の他、色好みの輩が藝者扱にするの

は定り、中には直様大金を出して根引をしてしまふでもあらう。雪嶺君が豫言された通りに、折角出来た女優が一夜の内に消えてなくなる。これが藝術上から見たる最大の誘惑難である。

勿論劇界に居る方が名譽も収入も十分であれば、如何に誘惑が激しからうと當人の志が動かないと云ふ事もあらうが、舞臺裏に種々の困難が伏在してゐるとすると自然心が動く道理。其の困難の一つは嫉妬難である。即ち朋輩のやつかみや先輩のやつかみや、所謂藝人根性のそねみ、ねたみ。こいつは男仲間にも激しいもの、況んや、女優仲間では尙更のことであらう。不平も募る。愚痴も出る。それを又父母親族や最負やが傍から煽る。厭氣がさしはじめ。かてゝ加へて生徒時代からの借財、遣り繰を重ねた擧句の今日故、二萬三萬と札びらを見せつけられては自然に心が動く道理。

器量がわるけりや止むを得ず踏止まらうが、美人だと危ない。かうしてゐたところで五年や八年では連も座頭にはなれさうにもない、其中には皺が出来、艶が抜けると思ふと心細くなる。内から外から種々に心を動かすものが

来る。幸にして右の難儀も切り抜け、堅忍不拔の志を持つて女優たるの位置を保ち、追々に出世して一廉の立者になつたとする。とこゝに又

末社難と云ふ事が起る。今日の男優や、他の藝人の頭分を例に類推しても分るであらうが、華美な商賣だけに、常不斷大勢の子分を引きゐて居ねばならぬ。サラベルナルの一家は華族のやうに多人數だと云ふのもツマリこの理からも来るので、自分の手で食はして置く弟子子分の多いは勿論だが、蝙蝠安式の無縁者までに恩を施して行かざるを得ないのが此商賣。所謂財悖つて入るものはまた悖つて出で、幾ら稼いでも入つても足らぬ勝といふやうな鹽梅とならう。日本の今の情態では其の入る金も到底西洋程ではなく、然も追々は西洋の女役者も入つて来ようから、そこが外見商賣だ、服装持物は多少彼等と競はねばなるまいし、到底借金の上にも借金は免れない。

そこで生活難がついて廻る。一萬圓二萬圓を出さうといふ根引の客が戀しくなる。いや、二千圓、一千圓、五百圓でもと思ふ。然らざれば何か兼業をせねばならぬ。到底地道な藝だけでは収入が足らぬ。となると恐らくは元の木

阿彌。二十世紀の女優ではなくて、寛永時代の女優と後もどり。それを承知と云ふ事ならば世話はない。成る程、西洋の女優とても似たりよつたりのものであらう。

作者難

序でだから作者難の話をしよう。こゝに作者と云ふのは勿論脚本の作者の事である。ところで、僕は舊俳優に逢つた事も尠いし、作者部屋へ入り込んだ事は全くないし、新俳優の立者連とは尙更縁故が薄いから、下に話す事は、或は傳聞、或は推測、或は直覺、種々の混淆な要素から成立つて居るから、多少事實とは違ふであらう、其の積りで聞いてください。

新脚本の需要は今や頻に切迫して居るのであるが、之れを得る事は依然として甚だ難い。蓋し劇場に親しまねば好い作は出来ぬが、それには是非とも俳優に親まねばならぬ。所で俳優に親しむと、茲に忽ち一困難が生ずる。尤も舊時の如く、作者は役者の下につくものと云ふ覺悟で交際へば兎も角もだが、

同等若しくはそれ以上に立つて、彼等を指導しようといふ見識があつて着手する場合には、恐らく久しからずして我慢が出来なくなるであらう。先づ第一に、彼等俳優連の自分に對する態度が甚だ面白くなく感ぜられるときが来るであらう。同じく俳優と云ふ内にも、まだしも舊俳優の上位に在る者は、流石に多年好い身分の人に交際ひ慣れて居ると、江戸時代以來最負客の待遇に慣れて居ると、内心はともかくも、交際の呼吸だけは圓い。何となく、大やうにふつくりと應待する術を得てゐるものもある。(皆が皆では無論無い。中には藝人風なものもあるし、妙にかつ、當世風に際立つものもあるが)新俳優連に至つては、この點は妙でないらしい。畢竟は元が書生風若しくは壯士風の人物であつたのと、積物と言はれまいと息込むとが元でいかつくなる。例へば舊華族に對する新華族と云ふ氣味。それに一面は舊俳優との競争もあらうが、一面は俗威嚇し、兎角驕奢を衒ひ、尊大に構へる傾向が見える。人前程、妙に尊大に振舞ふと云ふ傾向があるらしい。従つて自然作者との折合も困難になるのである。

それにまた兎角この社會の習慣として服裝で人の估價を決める故、樂屋へ入り込まうとする時は作者も服裝を飾らねばならぬと云ふやうな必要も起らう。金時計が入用にもならう、バナマも最新流行のでなくてはなるまい。そればかりでなく、役者が馬車で通ふのに、作者が徒歩でも行かれぬと云ふやうな事情も起らう。役者自らは侮蔑せずとも樂屋の空氣が自然に作者を侮蔑して居たゞまれぬやうになる事もあらう。

然しそれ等は些細な外見だけの事故、作者自らが平然たればそれ迄の事。だが、外にまだ堪へられないことがある。立者連がおひく、自分勝手な注文を、作に對して持出す。見當違の批評を加へる。無理な修正を命ずる。それが高じてくると追々堪忍がしくくなるであらう。

次に煩さいのは芝居者の學者觀である。これは俗人の常ではあるが、學者とさへ云へば何でも彼でも知つてゐる者と思ふのが習ひ。學者は彼等の眼から見ればオムニッシェント(全知)であらねばならぬ。和漢の學は勿論の事、洋學から佛學、有職故實、香花、茶の湯の諸藝を始め、苟も芝居道に關係ある限りのあら

ゆる藝事、それらに對して何時何を聞いても言下に答へ得る人物でなければ、學者とは思はぬのである。云はゞ彼等は生きた百科字彙のやうなのを學者の理想とする。勿論左程深い事は要しないのだが、何でも屋でなくては望に副はぬ。故櫻癡居士の如きは、此の點に於いて頗る適任であつたのだが、又それが爲めに團十郎が推服して居たのであつたが、それですら芝居者は服してはをらなんだ。「しかゞ」の事を聞いて見たが、福地さんの答は曖昧であつた、存外なものだ、云々。

唯博覽強記ならそれで好いかと云ふに、其の上に作が上手でなくてはならぬ。無論芝居道に通じて居ねばならぬ。そして作も巧運よりは拙速を貴ぶ。加ふるに俗受がせねばならぬ。然らば新聞受や、上流受や、學者受は悪くても構はぬかと云ふに、金主は随分構はぬと云ふ、役者は矢張氣にする。新聞にしかゞの悪評があつたの、やれ先日某先生に逢つたら、云々の筋は正史に違ふと云はれたの、と一々悪評を氣にかけて、作者を咎め、又藝の難も蔭ではすべて皆作者のせゐにする。かの古河黙阿彌が晩年團十郎に見棄てられたも之れが

爲俗受だけで云へば黙阿彌に及ぶものはないが、當時の上流受け及び新聞受けが悪かつたので、追々黙阿彌を軽んずるやうになつた。

是等の外に尙立入つて調べたなら、幾らも困難があるであらうが、今云つたやうな作を考へても、立派な作をしようと思はゞ、役者に離れてゐて作するに若くはない。年期中は止むを得ない、樂屋へ入り込むも是非がないが、舞臺の呼吸が分つたら、一日も早く足を洗ふ事さ。大才イブセンがベルゲン座監督中に作つた脚本は幾つあつたか知らんが、今一つも傳はらぬ。永く後世に残る作は、恐らく劇場を離れて後に作つたものばかりであらう。

とは云へ、座付作者でなくて而も脚本家で世を渡らうと云ふ事は、當分日本では難かしい。沙翁やイブセンの作のやうに一種のクラシックになれば格別さうでない脚本は矢張舞臺に上つて後、其餘光で讀まるべきもの、單行して小説と競争の出来るものではない。

それなら如何したら好いかと云ふと、當分兼業が必要。小説家兼帯か、何か別の職業をして居て作るか、これより外に道はない。脚本作者となるも、さてさ

て難いかなと云はねばならぬ。

觀劇漫言

(早稻田文學記者に語るに擬す)

近頃の芝居は見ぬはうがよいと信じてゐながら、何かの機で稀に出掛けることになる、妙なもので、幼年、青年の時分に沁み込んだ、芝居は面白いものといふ意識が何處かに残つてゐるものと見えて、一寸まあ斯んなことを思ふ。大ぶ久しく見ないから、さうはいふものゝ些は藝が進歩したであらう、番附面がともかくも多少新しげに見える、佛蘭西種だといふから何處か當世向の味ひ位はあるだらう、役割も適つてゐるらしい、何といつても此の役などは目下他へ持つてゆく所はないなぞと思ふ。

一體僕は買ひ冠るはうだ。何かの行懸りで感情の調子が狂つてゐる時は別だが、さうでなければ、人でも物でも、先づ短所や缺點よりも長所や美所が先へ

目に着く。で例の氣短かで感情的だから、ツイうっかり褒め過ぎて後で粗忽であつたと思ふことが多い。芝居などを見る場合が特にそれだ。よくよくでない、序幕などは先づ買冠る、まあ此の位なら上の部だ、大ぶ背景や道具が進歩した、流石に歌舞伎座だ、筋立も翻案にしてはバタ臭くない、まあ近頃の座附の作としては佳いうちだらうなどと思ふ。慈善會の二日目に女連の隨行員をいひつかつて此間の歌舞伎座を観た時の初手の感じは是であつた。ところが二幕目も濟み、三幕目にかゝつた時分からそろ／＼倦みはじめ、一番目の大詰ごろには疲憊はてたが、女連が是非とも二番目をといふので附合つてゐたが、とう／＼鎌倉河岸邊で退場してしまつた。

さて何が氣に入らぬかといふと、無論作意其物が妙でなく、藝にもいろ／＼疵があるが、それはまだ二の次の話で、第一に、いつもいふ事だが、藝の生命たる調和を缺いてゐるので見づらい。作意も翻案だけに無理が多く、筋立があらこちら矛盾して調和しない。白が粗笨で、人物の性格と調和せぬ。それから科介や表情が作意や境遇と調和しない場合が多い。如何に翻案だからとて、

近世の事らしく引直したものに、青々園君の評に見えた通り、服装が慶長寛永から文化、文政にまで亘るといふ時代ちがひ、この不調和も目障り。それから一番目ほどではないが、中幕の「荊萱」とも同じく調和といふ點だけをいへば二番目の方がまだよい。其の仔細を少しばかり言つて見よう。

本來翻案といふものはツマリ骨折損だと思ふ。まだしも近世劇、例へばイブセンとかハウプトマンとか、それでなくとも十九世紀末の大陸作者のならば時代思想が同じやうになつて來たところから、明治の世話物に仕立てれば随分折合ふまいものでもないが、西洋の時代物や稍や古い世話物を日本の過去へ填めるなどは頭から無理な事だ。風俗がちがひ、道德標準がちがひ、一切の趣味がちがふから、筋は適つても味ひが適らない。食へんことは無いが旨くない。生中の手細工をするよりも、そつくり元のまゝ、出来るだけ彼方の風俗を取調べ、單に言葉だけを日本へ引直して演じたほうがよいと思ふ。

今度の歌舞伎座のスクリーンなどが適例。原作は知らんが、翻作された結果で見ると比較的よく引直してあるのだが、如何にも見た目ばかりの代物で、言

は、活動寫眞の念の入つたといふ味があるばかりで、其の癖末二幕三幕は歌舞伎式の薬味が利過ぎてゐる位でありながら、どこ極感といふ箇所もなく、何としても情が移らない。とりわけ大念入の大詰などは、女連の目にさへ大ぶダレ氣味の者であつた。筋が舶來物で通じかぬるからかといふに、さうでない。女連にさへ筋は感心に分る。流石に座附の作だ。人物の性格も一寸面白い筈に出来てゐる。先づ千姫は勝氣な個人本位の自儘な女、大内藏は内氣な薄倅な女俳優、通廣は勤王家の、武勇もあり情もある公卿といつたやうに隨分面白氣に取合せてはゐるのだが、如何にもそれが故とらしかつたり、日本の幕府時代の風俗人情からいへば案外に思はれることが多かつたりして不思議に情が移らぬ。さらば一種の夢として見ようかといふに、夢にしては何となく活歴臭く、理窟臭くて、見る方でも理窟評、穿鑿評がして見たく、到底竹本物を觀てゐるやうな氣にはなれない。もつとも、原作とても佛の默阿彌といふ作者が書いたのだから、恐らく人物が主ではなく、陰謀や驚愕が眼目となつてゐるでもあらうが、默阿彌式に引直して鏡山などを加味したので砂糖味が勝

ち、殊に男主人公を勤王家に仕立てたなどは頼朝に滔々と勤王論を演説させた櫻癡居士以來の歌舞伎座一流の小刀細工。あゝ、いつまで明治十年代を夢に見てゐることだ。原本では多分只の好色者であらうものを。でなくては千姫の役も大内藏の役も面白くない筈だ。勤王家が有夫姦などはバタ臭過ぎる夢だ。公家に仕立てた所は働きたが、業平式の好色者にせなんだのは野暮つたい。大内藏との密會も千姫との逢引も、あゝ左様然らば式では情味が足らぬ。それに噂にばかり勤王家とあつて、忍びの武士と立廻りの最中不自然な氣焔を吐く以外には、前後の舉動にそんな證據は殆ど見えない。いつそ主義も何もない(ダモン)チヨなどの小説中の主人公のやうな(只)の好色男であつたら氣持よく見られたであらうに、詰らんこつた。八百藏の役の本多中務などもさうだ。所謂驕馬式の、女房に我儘勝手をされる只の小貴族とすると、今も昔も多くある例で、却つて同感も起るが、これ將た依然たる櫻癡式で、生中何かと理窟ばり、分別ぶり、剩へ勤王家の賛助者にまでなるのだから、甚だ不自然で、人情に遠くて、自然主義的觀察點からは却つて役がわるくなる。劇

中劇の場なぞも仕掛ばかり大げふで、存外感銘があつけないのは、勤王家や捌役が多くて見識ふるはうが勝ち、分別氣が内攻して眞情が發露しないからである。これは藝の方だが、芝翫の大内藏は例の單調子な泣き聲で、劇中劇の白と千姫を罵る白との移りが妙でない上に、嫉妬だか狂氣だか憤慨だか、表情の上には何の意味深い働きもない上に、高麗藏の通廣は勤王家の英傑といふので、これもさまで取亂した表情は出來ず、八百藏も同じく分別氣が勝つので、此の大騒ぎの場が豫期せらるゝ程には引立たぬ。原作は知らんが、よもやこんなに分別づくめではあるまいと思ふ。又此の場で艶書のやりとりもいかいはいしい。見物席に於ける姦婦姦夫の舉動が今少しキハドイのでなくては舞臺の嫉妬が引立たぬ譯だと思ふ。自然主義御法度時代といふので、例の歌舞伎座式に上品專一に引直したのではないかな。それが即ち此の幕のつまらない所以でないか。あれだけの事に、何も餘り面白くない劇中劇まで見せる必要はない。

高麗藏の通廣を暗殺せんとして吉右衛門の忍びの侍が切つてかゝる、此の立廻

りの最中に大氣焔を吐くといふのを以て、察する所高麗屋聊か溜飲の下げどころとしてゐるやうだが、これが即ち明治十年代式である。せめて本多中務を相手に立廻りならならば、もつともとも聞えようが、覆面の名も知れぬ忍びの者を相手に息を切つて働きながら大音聲、而も長い、くどい立廻り。立廻りの長いばかりでも通廣が小さくなる。膽力ある公家を見せるなら寧ろ白刃の下に端座して動する色なく、そのまゝで氣焔を吐かしたはうが面白い。さなくばほんの一二度立廻つて、極簡勁な白で、——それも中務の彼方に忍ぶを意識した思入で——幕府を手強く諷刺する位でなくては豪さうにない。序にいふが、新派はまだしもさうでないが、歌舞伎派となると、情事の場はいつも高尚に淡泊に、品行方正に、滅法固くなつて不自然を極めてゐるに反して、特に立廻りをするときベラボウに寫實がつて舞臺中をあばれ廻つて危なつかしいやうにやる。其の癖石燈籠へ切附けるとボンと言ふ音がする。立廻りが寫實めいてゐるだけに滑稽だ。

寮の場で千姫と大内藏の立廻り及び樂屋の場の不自然などは新聞の劇評に

言ひ盡されて居たから省く。大詰は成駒屋式に注文澤山強ひて憐れがらせうと工んで居るので無理が多い。これも評は省く。以上ほんの一端だが、これだけ言つても、不調和、不自然の多いことは分るであらう。

序に白の粗笨で、其の人物の人柄と調和しないといふ證據を挙げよう。もう程經たから大概忘れたが、今尙覚えてゐるのが二つ三つある。一つは家光の白だ。え君、三代將軍だよ、それが曰く——將軍職といふ者は世人は如何にも安樂な者と思ふであらうが、といふ意味の言葉のつきに——曰くさ、ヤレ儀式ヤレ古例のと——何とやらして五月蠅きことのみ多く——將軍ほどいいやいなものはない。此の白を例の羽左衛門式に勿體ぶつて生重く言ふのだから、何だか馬鹿にされてゐるやうに感じる。それからもう一つ。女主人公も女主人公、悲劇の女主人公、寛永の女俳優が通廣に向つてもまあ憎らしいお口ぢやなあ、位はまだよい。大煩悶の場で嫉妬に心亂れて、あちこち驅廻りながら、氣が揉めるやら、妬けるやらは色消しではあるまいか。それを平氣で聽いてゐる見物はえらい。東屋の場の暗闘ほとぎの白なぞも随分名文句だ

つたと思ふ。

それでも新代の諸君は、まだしも此の方が二番目よりは面白いと觀たらしい。君の此の間の話もそのやうに聽いた。しかしこれは、僕に言はせると、藝の評でなくて作意の評だ、だと極めるは獨斷だが、ぢやないかと思ふ。蓋し作意はともかくも西洋傳來だけ微かながら現代に觸れる所があつて、人物の性格もしくは事件の纏れ鹽梅などに幾分かの近世臭がある。例へば千姫の性格などが人物の出來榮や藝にかまはず、筋の上だけで評すると一寸面白い。又僕の言つたやうにすれば、通廣も本多も多少面白くなる。或は知らず、それを喜んでゐなざるのぢやないかと思ふ。藝の生命は主として調和にあるといふ僕の見解が誤でなくば、二番目の方が慥かに調和といふ點に於ては勝つてゐる。無論羽左衛門の佐七は若輩だ、それでも江戸兒には相違ない。梅幸の小糸は大姉えで、佐七の情婦にしては片荷づつてゐるとも見えるが、今の所動かぬ役で、藝も先づ手に入つたものといつてよい。一番目中ひつくるめて、松助の型にはいり過ぎた周菴をも含めて、二番目の役々ほど——猿之助の伴

平は餘りぞつとしない——調和したものはあるまい。藝としては二番目の方が味ひが深いと思ふ。もし鎌倉河岸までいふともし二番目に不調和な點があつたとすると、世間では最も受けたやうだが、高麗藏の勘平と宗十郎のお軽との關係であらう。成程、おさらひの諷刺は面白い、しかし宗十郎のお軽がこれが又例の念入でシンネリ／＼と踊るといふのと釣合はないのみか、高麗屋どこの立者としては少々道樂過ぎる。此の間うしろの伴平や小糸や佐七は消されてしまつて、十中七八の見物には佐七と小糸との件が目につかない風であつた。これは何かの附合に出ることになつた所からの思附で、無論買つて出たのではないであらうが、かういふことで場受がするとわるい例にならう。立者がめい／＼自分本位に役を買つて出て、勝手に工夫を凝した時分には、部分の面白味はあつても全體の調和は破れざるを得ない。工夫は面白いが、これは若手に教へてやらしたほうがよかつたと思ふ。中幕の「高野山」も背景が寫生畫めいて一寸奥の院めかして薄昏く奥深く、念入に出來てゐるだけに、はじめのうちにはよいが、極感に近づくにつれて、わざとらしい、ねばつた

形式的な、竹本劇式な宗十郎の藝風とは調和しない。苧萱の貌の拵へなぞが最も調和しない。青坊主が大勢出るのも賑か過ぎて妙でない。女連でさへ其様には泣いてゐないやうに見えた。あの舞臺面ではヤハリ堀越式の苧萱でなくては折合ふまいと思ふ。

さてと、まだ何か言ふことがあつたが、あの劇を観なかつた人には餘り面白くもなからうから止して、序に一言添へたいと思ふは——専ら新代の需要に供する——新しい思想、感情、趣味、好尚を持つてゐる人達の需要に供する——獨立の一劇場が欲しいといふ事である。今の小説は少々新代に偏し過ぎると思ふ程に特別なものになりかゝつて、今の文學は青年の専有物だと誰れやらが言つた程にもなつてゐるが、特に演劇だけは、これはまた餘りといふ程に俗受專一で、これに對しては學者や識者や文學者や新思想や新感情は殆ど何等の勢力もない。青年用の劇場とか新代劇通用劇場とか試演用劇場とか言ふのが成立たない限りは、劇界は、當分現状繰延、いつ東が白むか分つたものでない。さりとて劇場は素手では建たず、建てゝくれるやうな頭は古い頭だし、困

つたものだ。作者も今の所甚だ乏しいし、未熟でもあり、役者も今の所甚だ覺束ないが、せめても試演用劇場でもあつたなら、其の未熟な乏しい作者をも活用する道が立ち、其の覺束ない役者にも眞生命が吹込めまいものでもないが、さて其の端が更に發けぬ。文學壇を占領した餘勇を奮つて「青年劇場」設立の運動を試みてはどうだね。

(四十一年十一月)

藝術界のために大博覽會を利用せよ

四十五年の大博覽會が五十年に延びたのは我藝術界の爲めには祝すべきことである。なせかといふに、理想上でこそいろ／＼勝手な注文も出来るもの、我藝術壇の實際からいふと、何か目前に大きな立派な目安でも置かねば、先づは眞に命がけになつて仕事に取りかゝらないといふが普通の人情、又取りかゝれない事情も少くない。大博覽會に出品するとか、さなくも其機會を利

用して廣く世界に示すとかいふ便宜でもあつたら、自然在來とは違つた態度を取る手合が殖え、何等か前例の無い様なものも出來さうなものだと思ふ。今日の藝術壇の(といつても例の通り、先づ主として劇壇及び之れに聯關した方面をいふのだが)其の弱點の第一は、其の目的が概して目前的、而も内國的で、眞に廣く世界を對手にして戰つて見ようといふ氣になつてゐないことに在ると思ふ。政治的には日露戰爭といふ大修羅場を経過したが、藝術上には歐亞の惡戰が近づいてゐることは比較的等閑視されてゐるといはねばならぬ。大博覽會は此の惰眠を驚かす丈の役には立つであらう。明治も最早四十一年である。内外の文藝史によつて類推するに、個人も國家もほゞ同理だが先づは五十年代といふところが善惡何れへかの回轉期である。行止まりでないまでも絶頂、絶頂でないまでも海拔はこゝいらで略ぼ量られる。古來個人としては五十六十の間が最も深みの見える時代で、七十以上で名作を残した例もあるが、其の立案又は着筆を其の以前にしてゐるのが定り。國家の文明とてもやゝ同じやうな趣。して見ると此の五十年といふ

機會は輕々しく逸せしむべきでない。五十にして爲すなくんば明治の文藝も或は頗る悲觀せねばならんことになるかも知れない。かう考へると大博の延期が大ぶ意味のあることになる。蓋し向う五年といふのでは到底亞鉛張より外に工夫がないと思つたものも、向う十年と聞いては心の据ゑ方が變るべき道理である。移り變り時代の自然の状態とはいへ、我今日の文學界、演藝界は、主として新奇を追ふに忙はしくて、紛々然、擾々然として、如何にも混沌としたもので、おちつきがない。そこに進歩向上の機縁が伏してゐるともいへるが、何分にも新陳代謝が目まぐるしくて氣せはしい。随つて稀には入念の、深みのあるものも出掛けるやうであるが、兎角俗受がしない、随つて咲きかけても容易に満開にはならず、或は半開きで萎れてしまひはせぬかとも危ぶまれる。ごく大體の傾向からいふと、目新しいものを主とする點せか／＼と落着の無い點、只もう變化を主とする點、局面の狭い點、味ひの淺々しい點などが近ごろ流行る活動寫眞に似てゐる。流行るのも道理だ、活動寫眞は現日本の多數者の嗜好を頗るよく標現したものだと思ふ。

これ畢竟は生存競争、名譽競争が激しいので、當事者自身も我知らず功名を急ぐからであるのだが、二つには享樂者、鑑賞者の側に高をくゝる癖があるからである。高をくゝるとは、當の代物の見本をタカガ二つも見ると、其の見本の良否、巧拙、眞贋をよくも考へずして、あゝオペラとかはタカガこんなもの、シエルクスビヤとはタカガこんなものときめてしまひ、もう直に何か變つたものをと氣を移す癖をいふ。文壇にも此の弊は有る。ロマンチズムの呼聲なども一時は一寸高かつたが、まだ殆ど物にならぬうちに自然主義にかはり、其の自然主義もわるくすると、昨今が絶頂で過去りかねない虞れがある。併し文學はまだよい。劇になると、主として俗を相手の仕事であるのと、見識のある作者や批評家が乏しいので、只もう流行を追ふばかり。種々の新企圖も試みらるゝやうだが、要するに西洋の流行を遙かに後れて皮相的に模倣でゆくに過ぎない。ほんの影坊師で、目も口も鼻もない。以上の二弊の外にも、もう一つ日本の藝術を落着の無い、氣せはしいものにする原因がある。それは批評が餘り盛んなことである。近頃ほど新聞や雜誌に

文藝批評の繁昌することはあるまい。多くは埋草に書くのでもあり、強ひて頼まれて當座の考を話す、それが直に立派さうに載せられるといふ例も多いが、兎に角目まぐるしい程の批評だ。氣に掛けまいと思つても蠅や蚊がせゝるやうなもの、ツイ氣になつてならぬでもあらう。根が生え附かぬうちにあちこちと草木を移植するやうなもの。大きな物を作るためには妙でない。此の意味からいふと新聞雑誌の文藝記事は廢したらよからうと思ふ。

それからまだ一つある。それは先線りを爲過るといふ傾向。もつともこれは日本ばかりの事ではなく、西洋も一般の事だといつてよいのだが、神經が鋭敏で智慧がよく働き、よく廻るので、あゝでもないかうでもないが高じて、先の先を見越し、まだ一の物がやつと成立つたか成立たぬかのうちに、もう已に其の衰廢を豫想し、更に新たなるものを紹介せんとする傾向。これはもとより其れみづからよりいへば、わるいことではなく、又時としては止むを得ざる必要でもあるのだが、其の當事者、享樂者に於ける影響からいふと、人により場合によつては妙でない。何となく一種の不安を感せしめて、迎も昔のやうに落

着いて製作し、落着いて享樂せしめがたくする。そればかりならだが、前にいつた批評や議論が如何にも耳うるさいので、いつとなく當事者の心が動く。

流行の餘波に煽られ易い。此種の傾向の今ほどではなかつた十九世紀の中國にすら、而もイブセンのやうな剛情我慢な男でさへ、多少これがために惱んだ氣味が見える。況んや其の他をやである。まして日本の作家や藝術家に至つては、西洋におくるゝこと數段であると同時に、横字新聞や雑誌に依つて西洋の將來をも早くから窺ふことが出来るからたまらない。目を白黒させてやつと呑みこんだと思ふ間もなく、それは吐き出したはうがよいぞと注意されるやうなもので、安心して仕事をし得ない氣味だ。思ひ切つて目をねぶつて耳を閉いで、舊い株を守つてゐればそれまでだが、新を追はうとする氣があるといふと、先づは安心が出来がたいことになつて、勢ひ其の作品が小さくなり、重みがなくなり、一時的のものとなり易い。

それといふも、畢竟は生活難といふ奴と神經過敏とがもとで、功名を急がせるからでもあるが、一つは、さしあたり是れぞといふ際立つた目安がないからだ

とも思ふ。全世界を相手にせねばならぬといふことを、何か有形に目前に感せしめるやうな目安でもあれば、少しはめい／＼の態度がかはり、もう少しは落着が生じさうなものである。例へば競争をするにしても三百ヤード、六百ヤードであればこそ、あせりもし、こせつきもするのだが、五十里、百里となればおのづから態度が變る道理。それを思へば大博覽會の延期は何等かの福音を少くとも劇界、畫界、樂界などに齎すであらうと思はれる。又さういふ風は大博覽會を利用したいものだと思ふ。

(四十一年十月)

帝國劇場會社重役に與ふるの書

明治四十二年一月毎日新聞

改曆の慶賀宇内同風謹んで申納候、先以て御一同一段と御堅勝藝運多望の新年を御迎被成候條、祝着千萬に御座候、陳者年頭早々より少々八釜しらしき申分には候へども、悠長の昔日さへ一年の計は元日に在りと申し慣はし候位、五

年十年は電光石火の現代、既に帝國座の礎石式も御舉行相濟候今日に於ては、豫め同座開場の曉を想像致し生等が取越苦勞の微衷を陳じ以て諸君の參考に供し候はんに、よもや大舊式の鬼共以外に嘲笑を相試候者も有之間敷と存候。

扱先づ當今の流行に従ひ、態と無作法らしく單刀直入に磊落げに切込みて申試候はんに、諸君帝國座御創立の本意は、一面國家の爲と申す儀十分御肝煎に相違無之、且つ世間へも左様御吹聴の事と相信し候へども、又一面一種紳士の營業としても十分御成功相成候やう御苦心の事と相察し申候、即ち約言致し候へば、諸君の立場は公・私・相・半の一語を以て相蔽ひ得らるべく、随つて程よきさへ參り候へば、古今是程穩健なる立場は無之、道義の絶巔迎も是以外には有之としも不被存候次第、何人も此種態度に對して異議を申立候事は有之間敷候、乍併いざ御實行と相成候ては此單純げなる御主張が、其立脚的態度の必然の結果として、恐らくは古今の最も紛糾せる實際的難問と同一轍に陥り可不申哉と生等杞憂に不堪候、愚案候ふに、論理上は暫く措き、實際上の立場として

は二股ほど厄介なるものは御座なく候、改めて申さずとも、公私二股に立脚せる實際家は極めて卓越せる手腕家が殆ど専制君主的權力を有して單獨にて主宰し經營せる場合の外は、早晚無數の難題に逢着して、双刃共に鈍り候例古今實に雲の如きは諸君の夙に御熟知の儀と存候、況んや演劇類は水物、營業一點張に勉強致候現在の諸興行主すら、時代風尙の此大過渡期に際しては、往々其觀望を誤り、時に大失算の形跡を暴露し申さるや、況んや諸君の御營業は世にも立派なる方々の御顔揃の儀に候へば、當然紳士的乃至模範的といふ大花冠を戴いて御創始相成らねば叶はぬ次第に候ふべく、さすれば立脚地の二股に更に一股を附加へ候ふ道理、若し夫れ只の船頭さへ多きに過ぎ候ふ時は船を岡へ進め候ふ諺、如何程聰明に在し候ふとも、公卿方多勢御自身御指圖は存外龍頭鷄首の運轉に御便利ならざるべくやとも懸念仕候、加ふるに世間一統に於ては、かゝる御内情は相察し申さず、一へに諸君の御顔觸に重きを置き、十分の望を囑し、めい／＼勝手放題なる詔や注文を持出し可申候ふをや、例へば或人々は被申候半、今や我日本帝國は、外、宇内列強と伍して決して遜色無き

程度の一文明國と相成りたれども、一たび内を顧れば不設備の箇所夥しく、とりわけ外賓款待の機關の不完全なるは、猶門構ばかり立派なる新邸宅に趣致ある器具裝飾の全然缺如せるがごとくに、索然たり、帝國座は須らく帝國當來の盛飾たるべし、何は差置きても外賓款待の機關たるに相當せざるべからずと。

扱此望に副ひ申さんには、勢ひ獨佛、英、米等の名ある劇場を標準となし、先づ第一に見た目、居心地といふ點に重きを置き、内へ盛る代物よりも盛りて出す器のよしあし、即ち劇場其物の構造、觀覽席の設備、休憩室やら食堂やら運動場やらの講究に多分の力を費さねばならぬ仕儀と相成るべく、諸君に於ても現に専ら此點に御苦心相成、既に屢々専門家に諮詢し、特に調査員を海外に派遣し、十分御研究を遂げられ候ふ哉に承り及び候、然る處如きは、言はゞ當事業のホンの立關口にも比すべき設備たるに過ぎず、形式も形式、單に容器の格好と品質とを定められ候ふに外ならざるべく、随つて帝國座に對する世間多數の要求は寧ろ此にあらずして他の内容に可有之候。

例へば或者は申候半、生存競争の日に倍々激烈にして人々神経を勞するとの甚しき今日に在りては、めい／＼一日の心勞の後、時に藝術の別天地に遊び、折々は恍然として忘我し暫く現實を離るゝことあるを要す、身分及び知識の流以下に屬する者の爲には現今の寄席乃至劇場の如きも或は尙用を爲さんが、苟も新代の思想感情に涵養せられたる四十歳未滿の人士に取りては今や一の娛樂機關無く慰藉の具なし、興行の時間夜へ掛けて九時間餘、之に臨まんとすれば殆ど全日を費さるべからざるやうなる興行制度の新代國民に適せざるは言ふまでもなく、其興行物の内容もまた陳腐を極め、或は殆ど兒戯に類す、或は之を以て日本藝術の特色を發揮するものと做し、外賓などには専ら是等を觀覽せしむべしと主張する者あれど、そは頗る誤れるに幾し、彼等は過去の日本を代表するも活ける日本を代表するに堪へざるなり、幕府全盛時代に専ら武家に喜ばれ若しくは中央首府の中流以下、而も町家趣味を説けば狭斜劇場、歴史を説けば軍談講釋、意氣を談すれば市井の俠客位を標準となし所謂江戸ッ子の嗜好にのみ適せし演藝を以て、前後五十年間に少くとも泰西

百五十年がたの文化を吸收し盡し、字の通り一躍して立憲國民となり、其豹變に宇内列強の耳目を震駭したる吾々共の唯一無二の娛樂と爲し、もはや此以外には何一つもござりませぬとは何ぼう矛盾したる境界ならずや、美術品は古びが着いて彌々結構とはいふものゝ、意氣旺盛の活動盛りの、所謂 "joy of life" に満々たる現代の若い者までを擧りて骨董いじくりの仲間入させんことは新興國の名譽にもならねば利益にもなるまじきなり、あはれ願くは、我帝國座重役各位は須らく此點に着目して他の興行主の供し得ざるものを供すべきなり、興行時間其他に關する制度組織の悉く文明式なるべき由は吾等既に之を了せり、願はくは更に一段大切なる脚本の内容、優人の藝風に於て十二分に "up to date" たらんとを力めよ、構へて新代の要求と囑望とに脊く勿れと。

然るに又忽ち嘴を挿む者の候ふべし、曰く論者は連りに慰藉を言ひ娛樂を説けり、成程神經衰弱者の追々増加する今日に在りては慰藉娛樂も必要なるべし、併しながら單に凡庸淺薄なる慰藉娛樂を供することを目的とせば、必ずしも我堂々たる帝國座を俟たざるも可なり、むしろ川上音次郎夫妻の如き斯道

の老巧に責任を負はしめ、十二分の保護資金を與へ、別に企業せしむるの優等なるに如かず、否吾々其の帝國座に望む所は然らず、帝國座は須らく耳目の娛樂、空想の慰藉を供給するに止めずして、**理性の要求**をも満足せしめんことを力めざるべからず、即ち劇場は宜しく人生の眞趣味を翫味鑑賞するの場所たるべしと。

又或は下の如く説き申すべし、曰く、我帝國座は須らく模範劇場たることを以て自任すべきなり、行々は外國の先例通り我皇室の直轄ともなり、一面は古今の藝術の演奏場たり、理想的娛樂場たると同時に、一面は國民に對する**智情意教育の機關**ともなり、所謂移風易俗の泉源たらんことに力めざるべからず、すなはち帝國座にて演ずる劇は單に面白きもの、斬新なるもの、藝術的なるもの、時尚に適切なるものたるに止まらしむべきにあらず、趣味はあくまでも高尚に、思想感情はあくまでも健全ならざるべからずと。

又更に一人ありて申すべし、前論者は趣味の高尚を説き、思想感情の健全を言ふ、所謂高尚、所謂健全の定義は如何、夫れ藝術は神聖なり、藝術は不羈ならざる

べからず、常識の所謂高尚や健全や藝術上より見るときは全く取るに足らざることあり、有害無價値なることあり、若し我帝國座にして此道理を悟るなく、眼前の政治、眼前の教化、眼前の俗論に敢て超越する能はざらんか、日本演劇の前途は知るべきのみ、蓋し思ふに彼のイブセンやショーやゴールキーやストリンドベルヒェダヌンチヨや、其他寫實派、自然派の外國作家等が作せる如き脚本を演ずることは、俗道德の認めて以て危険若しくは猥褻若しくは不健全と做す所ならん、しかも是の如きを敢て興行するの勇無くんば我帝國藝術の將來は咀ふべきのみと。

又一人ありて曰はん、そも、演劇を以て一の娛樂と做すの見は其根本に於て誤れり、眞に高尚なる藝術は一種森嚴なる感銘を與へ、**幾分の苦痛**を覚えしむ、之を希臘の古劇に見よ、之を全盛當時の能樂に徴せよ、演劇は一の神聖なる儀典にして、國民の之に臨むや肅然として端坐し、襟を正して謹み看、謹み聽き、或は景仰し、或は尊崇し、或は懼然として畏怖し、或は瞞然として慚愧し、悉く俗腸を洗滌せられ、全く劣情を攘除せられ、看了りて場を出づるや、さながら心機

の一轉せるが如くに感じたるの例も少なからざりしものゝ如し、少くとも其劇に對する態度の今に似ざることの甚しきを見るべし、すなはち劇場は一神聖なる宗教的機關たりき、希臘の古代に在りては多神教的精神教育の一大學堂にして彼の中庸の訓、因果應報の理、其他あらゆる希臘的理想は殆ど皆其觀劇の間に浸潤せしめられしなり、尙我能樂の武士道的理想、佛教的訓誨の鼓吹に力ありしが如し、蓋し演劇が娛樂本位と墮落せるは殆ど何れの國に於ても遙かに後世の事たり、彼のトルストイがあらゆる近世の演劇を呪咀すると同時に其本尊たる沙翁劇を口を極めて痛罵せし所以のものは此に在るなり、苟も我帝國座にして模範劇場たることを望まんとするか、必ず先づ此排娛樂本位といふ點に立脚せざるべからず、苟も此覺悟無からんか、娛樂本位の劇場の決して乏しきを告げざる今日堂々たる多數の紳士名族を戴ける帝國座の何の必要ありて起らざるべからざるか、吾人は竟に解する能はずと。

以上諸種の提議は多少相通する所あるやにも被存候へども、敷衍致候ふ時は存外大いなる逕庭を生じ、到底相調和しがたき傾を生じ候ふ習ひに御座候、う

つかり、それも御尤く、など、被仰候ふ時は後々御困りの場合可相生と存候、尙之に類する異説幾らも提出され可申候ふ間、豫め御用心ありて可然候。

或は又諸君に問ふ者の候ふべし、傳聞する所にして誤らずば、帝國座の興行は夜を主とし、毎日の開演四時間、乃至五六時間を越ゆること無かるべしと、果して然らば興行第一の武器たる脚本は在來の物にて間に合ふべきや否や、慣例によれば一番目大抵四五時間、中幕一二時間、二番目三四時間、合せて九時間以内を定格とす、時としては二種に止むることもあり、二番目の方長時間のこともあり、言ふまでも無く此數種並薦の献立は劇道の古例ながら、特に風尙の過渡期に在りては、萬人萬様の嗜好測り知りがたく、彌々以て此三方張、四方張の必要を感ずるならん、然るに帝國座は時間の制限上此方法を用ふる能はずとすれば、如何にせんとする、當局者は或は答へん、舞臺の設備、道具の裝置、背景の工夫等に新案あり、故に幕間の短縮せらるゝこと、在來の比にあらず、假に在來の興行九時間中の二時間餘は全く幕間に費すものとすれば、正味は、殘る七時間弱に過ぎず、之に對して我五時乃至六時間の中、半時間は幕間其他に費すも

のとするも、正味は尙四時間半乃至五時間半、其中三時間半乃至四時間半を通し狂言に用ひ、一時間を丸本式的一幕物に用ふるか、二番目代りの喜劇又は振事様の物に用ひば可ならずやと、吾人は之に對して尙懸念無き能はず、何となれば用ひらるゝ脚本が全くの新作とならば格別、さなくば在來の作の舞臺面は兎角室内が多く、剩へ表より見たるものが多ければ有樂座の經驗にて明かなるが如く、西洋寫しの舞臺設備は思つた程に用をなさず、如何に何でも八尺以上の障子や襖も用ひがたく、屋根や庇も見せねばならず、ヤハリ建築に手間がかゝり、或場面に至りては、如何に新工夫を凝さるゝとも十分以内にてはむづかしかるべし、よしそれは何とかして旨い工夫が着くとしても、本來幕間の長びくは道具よりも扮装なり、五代目の幕間といふ樂屋の諺に徴せらるべし、女形は悉く全くの女が扮することゝならば格別、又幕毎に同じ役、同じ扮装にて出るやうに作せば知らず、さなくば此邊は如何にすべきか、よしこれも又何とか妙案が着くとせん、舊派新派を通じ、在來の脚本にして、道具立の上よりも、扮装の上よりも、筋立の上よりも三時間半乃至四時間半といふ條件に適應す

るに都合よきもの果して幾種ほど有るやらん、もとより當事業の關係者中には幾多の劇通も通人もあることなれば其邊如才無く精査せられたるならんとは察すれども、尙頗る心懸りなりと言はざるべからず、思ふに丸本式的一幕物にして今日屢々繰返され、將來も俳優次第にて尙多少賞翫せられさうなるもの流石に少からず、例へば、染分手綱の子別れ、安達の袖萩、布引の物語、腰越狀の後藤、鳴門のお弓、毛谷村、盛衰記の逆櫓、先陣館の盛綱、千兩幟、荊萱道心、双蝶々、鎌倉三代記、太閤記十段目の類、されど此等は帝國座へ出すものとして所謂長し短しなり、一番目にも据りわらく、追出しにも妙ならず、されば變則に中幕に置くとすれば前後の時間へ食込むべし、此點の不折合は他の舊脚本にもあり、例へば、天狗舞の高時、伊勢の三郎、島の爲朝、馬場の大酒盃、細川夫人、赤垣源藏、清水一角の類、是等も本來中幕質なり、思ふに丸本式の作にて其儘帝國座に適るべきは、例へば、菅原、妹香山、嫩軍記、大藏卿へ續けるとにして、鬼一、仙代萩の類、併し是等も嚴密に言ふ時は一幕か二幕限りにて出すべきもの、本來が支離滅裂式なれば帝國座將來の一番目には向かぬ物なり、而して

彼の「忠臣藏」といふ獨參湯に至りては四時間以内に縮め得らるべきか否か疑はし、普通の歌舞伎のうち、曾我の討入「桃山譚」、湯殿の長兵衛などは仔細なけれど、「佐倉義民傳」「加賀騒動」「春日局」「春雨傘」等は四時間制限の帝國座に適用せんこと随分難義なるべくや、もとより彼の江戸趣味本位に作られたる「加賀齋」「めぐみの喧嘩」「小糸佐七」「御所の五郎藏」「辨天小僧式」のものを取出し來れば、他にも尙あまたあれど、それらは此座當來の見物に向くべきか否か疑問なり、右の外に大切物に適用し得べき振事物は少からず、「六歌仙」「乗合船」「靉猿」「左小刀」「操三番」「娘道成寺」「奴道成寺」「石橋」とんつく「靜忠信」の類、乃至「二人袴」「釣女」「吹取妻」「素襖おとし」の類、されど彼の「勸進帳」「土蛛」「戻り橋」「紅葉狩」「望月」「船辨慶」「山姥」の類に至りては果して大切に用ひて妙なりや否や疑問なり、振事物も狹斜趣味の厭はるゝ世となりては次第に其數と特長とを減じ行く傾きなり、「戻駕籠」「關の扉」の類は到底此座には上るまじと思ふ。

かく考へ來れば、他の新派の脚本の利用し得らるゝものに如何なる好臺帳あるか不案内なれども、只一點明かなることは其大概は通し狂言にして到底四

時間以内に煎じ詰むることの難かるべきなり、次にほゞ明かなることは「乳兄弟」「不如歸」「サッホー」などの外には餘り多く當り作も無げなることなり、そは其反覆せられざるによりても察せらる、果して然らば帝國座の當事者は同座將來の脚本に對しては如何なる方針をか取らんとする、若し夫れ時間の制限などいふ條件は度外視するも尙且つ時尚に恰當する好脚本の缺乏せる事實は歌舞伎座其他の劇場が如何に其の興行目録に貧なるかによりて證せらる、彼等は幾たび同じ目録を反覆し、同じ埒内をドウ／＼めぐりし、自ら求めて見物に歴かれんとするぞ、生年二十幾歳の劇通も己に十指を屈め盡して其の觀たる「熊谷」觀たる「政岡」觀たる「梅王」の算へ盡されざるを誇らんとす、「熊谷」を觀、「政岡」を觀、「梅王」を觀んためには歌舞伎座あり、宮戸座あり、明治、市村あり、豈更に煉瓦造の、時間半減の割合には木戸錢高き、莊麗なれども窮屈なる我帝國座を要せんや、況んや帝國座にて用ふる所の脚本は同じ脚本とは言ひながら、處々削り取られ、之を鯉魚に譬ふる時は片身にして、而も事と場合とによりては或は骨附の方にあらざるべきをや、況んや之を演ずる俳優は、さしづめ外から出る

筈も無ければ、多分歌舞伎か市村の俳優然らざれば川上夫妻高田河合一座、伊井喜多村一連、さなくば大阪の仁左衛門若しくは鴈次郎、何れにもせよ、材料も一つ、料理人も一つ、其の料理法もツマリは一つ、只一つ異なる所は席と器皿と献立とのみ、かくの如くにして多く見物と呼ばんとす、そもくまた難からずや。

或は當事者は之に答へて下の如く言はんか、脚本は一切新に書卸す積りなり、まづ座附には幸ひに太郎冠者あり、喜劇に於ては向うに前無きこと恐らく世人も認むるならん、尙外國の近世劇より翻案し得らるべきものも若干あらん、我名ある小説家中にも脚本の新作を試むる人若干あらん、何等か正當の方法を設けて座より特に依頼して作せしめ、或は廣く新作を募らんに當分の供給事足るべしと、果して然るか、太郎冠者子の喜劇に老巧なるは輿論の許す所なるべし、但し帝國座の一番目を毎回のやうに喜劇にも出来まじく、且つは知識の中流以上の嗜好よりいへば、今行はるゝたぐひの喜劇は先づは一幕物位が極度なり、二幕以上となりては甚だ甘きに過ぐ、次に外國劇の翻案といふこと

果して容易かるべきか、サツホーの如きは稍成功したる方ならんが、多くは失敗に近かりしが如し、尤もイブセン、ハツブトマン一流の作物のうちには殆ど其儘にも移され得べきもの無きにあらねど、それらと呼物として興行するの勇氣果して當事者にこれあるべきや否や、或意味よりいへば劇の翻案は餘程の老手でなくては出来ぬ仕事なり、兎角の評はありたれども、スクリーブの作を昨年『女歌舞伎』程度に引直したるは流石に歌舞伎座の座附なればこそ、不慣の作者では繼目々々が目に立ち、直ちには板に附くまじきなり、扱今の小説家中に未來の好脚本作家を得んこと、是は當然に望まらるべきことにして、又最も望まじきことにもあるなり、又現に二三の末頼母しき作家もあるなり、されどズバ抜けたる天才にあらざる限りは、如何なる老練の作家といへども、其脚本の處女作は往々實地用に不向の物か、少くとも俗受には向かぬ習ひなれば、それを第一の呼物と頼む帝國座は大分の勇氣を振はざるべからず、而して其作家に對しては此際思ひ切つて豊かなる報酬を供せざるべからず、何となれば作者が脚本を作する骨折は、小説を作する骨折の二倍三倍なればなり、併

しながら又それと同時に、凡そ作家といふものは十中七八までは、畫家、彫刻家、其他の美術家連とほゞ同じ肌合の者にて、飄逸にして見識高く、俗に言へば我儘で、無作法で、ズボラで、氣に障れば違約もすべく、よし請合ふことは請合うてもインスピレーションか、せめても金スピレーションか、或は貧スピレーションか、何か其邊の刺戟なければ、往々にして仕事には掛らず、随つて如何程念入に依頼し置いたればとて何年何月までには必ず出来るなどは餘り當にしてはなるまじきものたるをも合點せざるべからず、随つて假令多勢の作家に依頼しおくと、其中大博覽會以前に出來上るもの果して幾篇なりや容易くは觀測しがたし、イブセンの大才を以てして、作劇に手慣れたりし五十歳以後すらも三年タカバ一作の平均なり、もつともヂューマやスクリーブの如き製造屋式の腕達者も世にはあれど、そのたぐひの作ならば何もわざ／＼小説名家に依頼するに及ぶまじくや、或は廣く世間に向つて懸賞募集も妙なるべし、さりながら是とてもまだ手に捕らぬ鴨の噂なり、それを當にしての座敷開は少々氣の揉める話ならずや、夫れ大ハイカラ式の煉瓦劇場の落成は、一大要

塞を築き、倣せるに比すべく、一好攻防地を略取したるに比すべし、名ある俳優は、良將校にして、新作の好脚本は、最新式の機關砲なり、爆裂彈なり、彼の一幕物の喜劇、一幕物の丸本物、乃至振事類の如きは、タカハ小銃の連發に外ならず、將校も敵から借用し、小銃も時々敵國から融通し、機關砲の製造は、目下同盟國に早晚逃へる事に相談中にして、而も幾程もなく天下に開戦の宣告とは餘りに大膽過たる戰略にはあらずや、かくの如くにして勝算ありや、當事者以て如何となすと。

以上の諸説は、各々幾何かの眞理分を含有致候ふと同時に、何れも局外者の自儘評たるに過ぎず候ふ故、到底悉く御採用被成候ふ譯には參らざる事勿論に候へども、さりとして堂々たる御主張の面目上から申し候へば、全然御閑却被成候ふ譯にも參るまじく候、就中最後の一説、即ち脚本に關するものは、下馬評とは申しながら、頗る實際的と評し申すべく、これだけは篤と御含味可然、早晚此點に關しては何とか明快なる御裁斷無かるべかすと存候、蓋し諸君にして其立場を一變せられ、彼の二股を脱せられ候ふとも、かやうに注文の五月蠅から

んには、嗚かし實際は御面倒なるべしと相察せられ候ふ處に、一面紳士の御營業の御振合も御座候ふ儀なれば、御經營の御苦衷又一段の事かと奉愚察候、扱も諸君は如何に此錯節を截斷せられ候ふやらん、箇様無作法に申試み候はゞ、或は餘計なるオセツカイなりと鋭き御叱斥も圖り難く候へども、生等好劇の餘り貴座の前途を憂ふるの微衷禁じがたく、敢て威嚴を冒し、全く腹藏無き所を申試み候次第に御座候、若し以上の卑見を以て多少とも御參考に供せられ、彌々御開場の曉に及びて、吾々新代の好劇家輩をして杞憂の眞に杞憂たりしことを悟らしめられ候半には、一期の本懐之に過ぎず候、意餘りありて筆從はず、蕪辭禮に悖るもの多く候半、謹んで諒恕を乞ひ奉り候、再拜敬具

明治己酉元旦

新代好劇生某々

帝國劇場株式會社重役諸君

侍曹

追啓尙貴座の爲に献ぐべき愚案一策有之候へども、或は既に御心附の儀かとも存じ、遼豕の譏を憚り、此度は態と差控申候、他日機を得て或は可申試と存候。

日本舞踊の現在及び將來

「新小説」のために

(口述筆記)

一分類

一口に舞踊といふが、これを分類して見ると、舞踊、振の三つになる。それを世間普通の人達は區別せず、同じ物に見做して居る。併し専門家に言はせると大ぶ區別があつて、定義沙汰がやかましいが、暫らくそれを置き、只語義から見ても、多少の區別がある。舞といふのは、態度の悠揚として優美なのをいひ、踊といふのは、踊躍して拍子に合せて活動するを意味する。又振といへば、いふまでもなく悲しむ振、怒る振、喜ぶ振、即ち劇的表情を意味するものと見

てよい。併しながら普通東京では此の三つをひつくるめて踊といふ詞で掩つて居るし、京阪では舞といふ詞で掩つて居るので頗る紛らはしい。要するに今日日本の舞踊を總稱すべき名目がない。東京で舞といへば、能のやうな風の舞と心得るし、京阪で踊といへば、活惚れのやうなのを踊と心得る傾きがあつて、其の區別は甚だ曖昧。今後學理的に研究せんとする場合などには、總稱が無いので不便を感じることであらう。假に之れを「表情舞踏」といへば總稱にはなるやうなもの、實はもつと通俗的な名稱が欲しい。で私は表情舞踏を之れを演ずる場所より大別して二つとする、即ち「筵席的」と「舞臺的」である。が亦た更に其の内容よりも大別して二つとする、即ち筋の立つてゐるものと筋の立つてゐないもの、即ち「有脚色」と「無脚色」とに分ける。が此の二大別は必ずしも一致するといふ譯にはいかない。有脚色のもの必しも舞臺的ではない。清元の「梅の春」、「北洲」、常盤津の「老松」の類及び長唄物の多數は無脚色のものであるが、常盤津の大物や富本物や維新前後に出來た長唄本位の大物、浄瑠璃と唄と掛合の物等は、大抵有脚色の物と見てよい。さてこれらの物は

何と總稱しようか、其の名目がない。日本人すら東京と大阪とで名稱を異にして居るので惑ふ位だから、これから外國人などに話をする場合には詰らぬ面倒が多からうと思ふ。

二 名 稱

以上申した有脚色の物を何と總稱しようか。在來は此の筋の立つて居る即ち劇のやうになつて居るものを、或は所作事といひ、景事ともいひ、または物によつては大切浄瑠璃ともいつた。景事といふのは上方の名で東京の所作事と同じものなのである。さて「何いふのが所作事か」といふと、例の雛段といふ者を設けて長唄連中などが列ぶのを普通所作事といふ。さういふ事の無くて清元とか富本とか乃至常盤津とか、長唄と常盤津との掛合又は是等と竹本との掛合とかのは、普通には新浄瑠璃などといつた。併しこれでは如何にも學理的の名目ではない。それで今少し學理的の總稱を設ける必要があると思ふ。嘗て「振事劇」といふ名目を設けてはいかゞと唱へて見た事もあるが、

振事劇も少々長過るから扱ひにくい。もつと短い名前が欲しい。彼のオペラを歌劇といふに對して、これは舞を本位とするのであるから、何と歌劇に對して「舞劇」又は「舞踊劇」と名づけて見たら如何であらうか。名正しからざれば實従はずだから、先づ名前から正して行きたいと思ふ。「舞劇」といふと大層聞き苦しいやうに思ふが、字の上から見れば左程わるくもない。吾々の目的は耳に聞くが主ではなくて、眼に見る方が主だから構はないと考へる。今の學者や文士たちの號などでも、耳に聞いては結構でないやうなものも、字で見ると存外好く奇麗なものもあるやうなもので、見馴れ聞馴れ、ばよくなるかも知れない。で「表情舞踏」又は「舞劇」。ちつと固過ぎる名目ではあるが、まづそれはそれで假りに定めたとして、さて優人の事を何といはう。普通の俳優と區別するに如何なる名稱を以てしたものであらう。昔は太夫とか、踊子、舞子、舞姫などといつたが、女ばかりでないから舞姫、踊子では妙でない。舞子も優しすぎて可笑しい。私が考へて見たところでは、彼のオペラの優人の如きも日本ではまだ別に譯名が無いやうに思ふ。オペラの名女優を西洋では何といふか。

スターともいふが、座頭のことにはブリーマ、ドンナといふ、これを直譯すれば「歌伎長」といふのである。併し「歌伎長」では藝妓に紛らはしくていけない。さればといつて「歌劇女優長」も長過ぎる。では「歌優長」、これも聞き馴れないから變だがさうわるくもない。それに對して、舞劇の俳優を約して「舞優」ともいへよう。だがこれも餘りに耳觸りがよくない。歌手、舞手、或は舞踊手か、何れも餘り面白くない。在來はシテとかワキとかツレとかいふ詞を用ひたものだが、これは所謂樂屋詞で妙でない。ところがまた舞踊の師をば何と名付けようか。踊の師匠も俗過ぎる。振付師も劇的に偏し過ぎて、これも樂屋詞であるのみならず狭い。振を付けるばかりではない、もつと色々な事をするから意味が狭過ぎる。且ついつれも舊稱で、連想が面白くない。折々苦んで差手引手などいつて見る者もあるが、これも氣取り過ぎて可笑しい。差手引手といふのは、舞の方の主なる手の名であるから、それだけで全稱に代へるは比喩めいて妥當でない。舞踊師とか、舞踊手とか、舞踊家とか、此邊で定めたい。孰れも可笑しいやうではあるが、それは聞き馴れぬ爲めであらう。過渡時代には

止むを得ぬ事なれば、其の折々の便宜に應じて、或は舞踊、舞踊劇、振事劇、或は踊手、舞手、舞優、舞踊手、或は舞踊師、或は舞踊家など稱すべきである。ツマリは其の名目の確定は自然淘汰に任するのであるが、可成は此際あらかじめ決めた方がよろしい。例へば今日行はれて居る事物の名稱でも、昔は蒸氣車といつて居つたものがいつの間にか汽車とちまつてゐる。はじめから汽車とちいめかねたが、次第に使つて見るととんだ簡短で便利なやうなもので、要するに少しの間の辛抱、少々耳觸りが悪くても、此際舊稱を廢止して、成るべく學理的に用ひ易い名目を選択し、科學的研究に資する方が其の研究の上からいつても、また外國人に紹介する上からいつても、孰れからいつても都合がよからう。

三 現 況

「表情舞踏」は我が全國に盛んである。併し一言に表情舞踏といふ中にも、緩漫と疾急、優美と雄壯、活潑と柔和、洒脱と濃艶、野俗と高雅、直線本位と曲線本位、曲

直圓融能が、りと芝居が、り、保守的と進歩的などいふ相違がある。此中曲線本位といふのは身體の動かし方を圓く柔くふつくらと規つてやるので、大阪の山村などや、之れに近い。直線本位といふのは、例へば能の如きをいふので、藤間式のやうなのは之れに近い。京都の井上流なども直線本位に近い。曲直圓融といふのは、言はゞ偏し無いので、西川などが之れに近いかと思ふ。西川流のモットーに「丸くしやんと」といふ語がある。次に能がかりと芝居がかりといふのは、これは主として作柄からいふので、別に説明するまでもあるまいと思ふ。保守的と進歩的といふのも詳しくいふ事もない。かやうに幾分の相違はあるけれども、大體に於ては孰れも同系統の舞踊で、彼の西洋のダンスとは無論脈を異にして居る。ダンスは概して足本位で、歌に伴つて表情することはない。普通ダンスといふのは、式こそ違へ我益踊式のものだといつてよい。尤も西洋には物真似を主として踊るバントマイムといふものもあり、我が振事劇に似た所作のバレエといふものもあるが、それさへも日本のとは大ぶ脈を異にしてゐるらしい。日本の手も足も腰も目も心も言葉も全體

一致の舞踊であつて、叙事的又は抒情的の歌に伴ふといふが特色である。我邦の舞踊は、東は東京を、中央は名古屋を、西は京阪を根據地として、長崎より函館、新潟、仙臺、恐らくは琉球のものも同脈の物といつて可からう。

斯程に表情的舞踊が盛んに行はれるが中にも、最も其の練磨研究に熱心なのは、京都、大阪、名古屋であつて、東京は恐らく第四位であらう。まづ京都には彼の有名の片山お春(井上八千代)の七十歳を越えて尙ほ鏗鏘として稽古所を張り、且つ毎日一回みやび會といふへ出て井上流を奨励するがあり、之れに加へて祇園新地には所謂歌舞練場の設けがあり、例の都踊の舞臺があり、其の他先斗町、宮川町、七條新地、島原、五條町、上七軒町等、各々奨励の稽古場があるといふこと。次に大阪もまた同規模であるが、中にも南新地の設備が最も整つてゐる。舞の師三名、山村いた樂、同じく海老樂、吉村ふぢ、此三名が日々に出勤して例の蘆邊踊に出演すべき舞子等を教授してゐるのみならず、其の他の遊藝一切を教授する設備が具つてゐて、ほゞ立派な學校の體裁をなしてゐる。其の組織に付て言つて見れば、いた樂、海老樂、ふぢの三人がおのゝ受持が分れて

ゐて、大體二科に分れて居つて、初級の方をいた樂が教へれば、稍上級の方をふぢが教へるといふやうな組織で、鳴物ばかりを教へて居る教場もあれば、三味線は長唄、竹本、地唄等など、科を分つて教へて居る教場もあるといふ鹽梅。ほゞ立派な學校組織といつてよい。先達て私が阪地へ行つた時、此の演舞場を見たが、興味のおつたのは新作物を稽古して居る所である。それは何れも能を引直したものであつたので、一部分は狂言になつてをり、一部分は能が、りになつてをり、一部分は長唄又は竹本になつて居た。斯ういふ場合にも能や狂言に關する時は女の師匠ではあるが、其の専門の師匠がそれを受持つて教授する、それが忽ち一轉して長唄の曲となると吉村ふぢ(舞の師匠)が引取つて教へる、此の轉換鹽梅が大ぶ面白かつた。此の協同教授は東京では見ぬことだ。聞けば新町にも、堀江にも、北新地にも、稍この規模を小にした稽古所があるさうな。稽古所のあるは東京も同じだといふ人があらうが、以上の如き稽古所は東京にはまだ一も無いのである。彼方は兎も角も學校組織になつてゐる、それが東京の及ばぬところである。就中京都祇園新地などは、居然

たる舞踊學校ともいふべきもので、片山一流の教授法は、日本舞踊の教授法として最も進んだものであるといつて差支ない。これは教場の鹽梅も大阪のに較べれば、また幾段か進んで居て、學科は習字から裁縫、茶の湯、生花、女藝一通り具はり、其上に修身講話もある。かて、加へて淨瑠璃も教へれば、三味線は申すに及ばず、長唄、地唄、義太夫。又舞踊の教授は南の新地などでは見なかつた立派な教場、舞臺が二ヶ所まで出來て居つて、二人の師匠が專任して同一の方法によつて教へて居る。太鼓も教へれば、笛鼓も教へる、藝妓に必要な限りのあらゆる藝事を秩序だて、教へて居る。東京で普通踊を教へるのは、師匠が立つて子供と一緒に同じ手振に踊つて見せて教へる。それから出來上つて、浚ふ時になつても、間違へればまた立つて行つて同じ手振で繰返して教へるが、片山一流の教へ方は、教へ上げると向ひ合ひ、師匠の方は座つて居て、毎に左手を用ひて教へる、生徒の方はそれを見ながら右手でする、それで大變習ひよい。東京の師匠にも左手を使ふものが無論あることはあるが、斯う規則だて、教へてはゐない。そればかりでなく、一つの箇所を十度も十五度も繰

返して親切に教へ、嚴しく小言を言ひ、師匠の思ふ存分な形、表情が出來るまではいつまでも繰返す。これは東京の踊の師匠などには殆んど無い事といつてよい。東京の踊の師匠などの教へ方を此の片山一流の教へ方に較べれば不親切でもあり、不規律でもあり、師たるの威令乏しく、殆ど原始的といふべきである。今東京で嚴しく叱言をいつて教へるやうな師匠は、或は罕れにはあるかも知れんが、殆ど無いといつても宜しい。尤も京阪の方は嚴密に叱言をいふとも出來る筈もある。それは對手が藝妓や舞子だから、目下に見て教へて居る爲めで、東京では素人の弟子が多いから、嚴しく叱言をいふと弟子が離れてしまふ。あのお師匠さんは叱言をいふから嫌だといふ。また親達も子の褒められる事ばかり喜んで居つて、嚴しく叱られることを喜ばない。東京の弟子は半分は名聞と道樂、いや親達の名聞と道樂でもつて習はせるのが多い。京阪では營業上から一生懸命眞劍勝負に弟子の方も覚え、また師匠の方も給金を貰つて教へて居るから、弟子が減つたと少しも恐れない。これらは京阪の藝妓の能く舞踊し得る原因で、また其の盛んな所以であらう。

名古屋の近年の様子は知らないが、兎に角故西川鯉三郎の門葉が二派に分れて競争し、屢々盛んな温習會を催し、剩へ大阪にまで勢力範圍を及ぼしつつある所を見れば、其の熱中の度合の京阪に亞ぐべきは略ぼ察せられるのである。次に西京と名古屋とはまだ調べて見ないが、大阪特に南新地では、年々余が所謂有脚色、即ち劇的の物の新作を幾番となく登場せしめつつある。現に今年も「田村」「蟬丸」など兎も角も能を焼き直したる劇的の新作物を登場した。これは勿論曲として、舞劇としての價値は言ふ程でもないが、一寸大物である。神戸の如きも大阪唯一人の振付師梅茂登扇性といふが指導して、折々新作物を出すといふこと。本年出した「今様羽衣」の如きは扇性の自作だが、東京の狂言作者連の近時の作に較べると一段立優つて氣の利いた作である。唯彼方の東京と異なるは、劇の俳優は右團次を除いては、大概舞に堪能ならぬ事である。舞は盛んであるが、之れを舞ふものは皆藝妓である。素人を教へる舞の師匠と藝妓を教へるものとは全く別なものも彼方の特色である。東京では藝妓にして舞の出來ぬ者も多いとのことだが、また半玉時代を過ぎては立たないや

うになるのが此方では通例のことであるに、彼方では老妓になつてからも盛んに立つて舞ふ。これも異つた所である。且つ京阪では藝妓にして舞が出來ぬは非常な不名譽として居るらしい。また藝妓が舞ふ間は客も感心に盃を止めて見て居る。彼方にては盛宴の餘興に舞のあるは勿論、十人八人の會でも舞は必ず伴ふのである。これも先日彼地へ行つた時、中華亭然たる狭い旗亭、何とかいつたつけが忘れたが、そこへ行つた時、そこですら舞子を招んで舞はせる客があると見えて、丁度晩食をした時、其の家の疊敷にしたら僅か二三疊位しか餘地のない廊下の板の間で、舞子が舞を浚つて居たのを見て驚いた。客の席へ出る前に忘れた所でも浚つてゐたのであらう。總じて大阪の客は、奈何な場所でも構はず舞を舞はせるといふ風と見える。藝妓や舞子もまた其の所望を普通として應ずるらしい。これを見ても其の如何に舞踊の盛んに行はれるかを知る事が出来る。

四 何故に京阪に盛んにして東京に盛んならざる乎

今尙ほ東京には都踊式の演舞場も無く、第一の狹斜である新橋にすら遊藝學校の設備は無い。(尤も昨今設けられるといふ噂あれど)。さらば俳優社會にはそれに相當する研究所でもあるかといふに、聞えたる大立物すら漸く藤間の家元へ、其の子を通はせる位を關の山としてゐる。何故に然く東京には盛んならずして、京阪には盛んなるか、其の理由如何といふに。

第一の理由は、京阪にては舞が藝妓の必須の藝になつて居るが爲めである。それといふは大會なり、小會なりの席上で餘興が必要となつてゐるが爲めである。また藝妓が東京よりも必要と認められ、其の藝もまた幾らか重んぜられてゐるが爲めである。

第二の理由は、實業上、政治上、其の他派手な大會の屢々催さるゝのと、都踊、芦邊踊などいふ營業的興行があるのと、京都、大阪、名古屋の當局者が互に營業上及

び名聞上競争する氣味があつて、相刺戟し、相奨勵する所あるが爲めである。一言以て掩へば、狹斜の有權者等が營業上の必要から遊藝學校を設置し、謂はゞ強迫的に藝を修めしむるからである。

それでは東京に舞踊の振はざるは如何いふ譯かといふに、第一の理由は、京都、大阪、名古屋に匹敵する程に社交上に舞踊の必要も無く、舞踊手にそれ程の熱心も無く、又それだけの設備も無く、機關も無いからである。それから第二の理由は、世間普通の考へは、踊は藝妓の藝たるよりも俳優の藝たるが如く思惟して、藝妓に相應の巧手があつても京阪で持て囃すやうには持て囃さぬからでもあらう。

尙ほ此の外に、東京では、藝妓で舞踊の巧手なものを得ることは今の所殆ど無い。何となれば東京の舞踊は京阪の如く筵席的のもの、無脚色のものを主とせずして、どちらかといへば舞臺的、劇的のものを眼目とするからである。劇的のものはセリフ廻しの巧みならんことを眼目とするがゆゑに、到底藝妓輩では俳優には匹敵し難い。さればとて東京の藝妓にも踊に巧みなる者がな

いではないが、セリフ廻しを眼目とする劇的のものを演せしめた時分には、お
浚ひ式とならざるものは殆ど無い。併し理由は唯だそれのみではない、目下
舞臺的、劇的のものは、花柳寂びれて以來は濱町の一手専賣の如くになつて、新
作物も大概は藤間ばかりが振を付けるといふ有様であるから、従つて忙しく、
老人の事でもあるから自然間に合はせにもなり易く、それに立派な作詞者も
作曲者もなく、むづかしい注文を持出す大立者もなく、之れを見分ける見功者
も追ひ／＼少なく、かれこれ振付師に於ても新に懇ろに研究して、一月も二月
も苦心するなどいふことはあらう筈がない。かやうな次第で自然競争とい
ふこともなく、従つて振が乾固まつたといふ氣味で、癖が目立ちはじめ、新意
に乏しい。それに目ぼしい新作物も甚だ乏しい。縦令偶々出來ても稽古に
出して普通に能く行はるゝといふものは近年は絶無だ。「紅葉狩」「二人袴」の
如きは屢々繰返されるけれども、これらは舞臺のみで稽古には出さない。そ
れゆゑ其の昔新しい振事が出來る度に稽古本が出來、江戸全市に直ぐ行はれ
たのに較べれば、衰へ果てたものといつてよい。尤も素人が黒人と同じ師に

付て存外盛んに習ふといふ點だけは、京阪と大いなる違ひであるが、これも前
申す通り其の教へ方も不親切、學ぶ者も道樂一方だから、上達の度は甚だ低い。
今尚ほ藤間の外に花柳、若柳を始め中村、阪東、西川等十派程の舞踊師があるこ
とはあるが、何れも不振の有様におちいつてゐる。
要するに東京では舞踊は俳優を主眼とし、而して俳優は舞踊よりも劇を主眼
としてゐるから、必ずしも新曲の必要を感じない。會々振事を主なる出し物
とするがあつても、舊型の儘を演じて済ますといふ慣ひだから、嚴密な意味
で研究といふ事の必要もない。それ故名題になる以前までは随分熱心に修
業もするが、其の後は其の都度々々に一わたり浚つて場に登ぼせるにとゞま
る。是れがためにとんと新發展の道が開けない。
管に舞踊家に新發展の兆が見えないのみならず、又作詞者に新しいものを作
らうといふ氣込も見えない。毎年新年の作として所々の狭斜で新曲を場に
登すことはあるが、それらは所謂筵席的の無脚色のもので、余の云ふ舞劇では
ない。舞劇即ち有脚色の大物に至つては、近年殆ど作者がない。默阿彌に

も存外成功した舞劇は乏しい。櫻癡に至りては、「二人袴」やうの狂言を引直し
たものがあるばかり。今行はれるものゝ中で「紅葉狩」、「辰橋」などは黙阿彌の
作。「釣女」も多分同人の作。櫻癡のは「二人袴」と「大森彦七位」。併し此の二つは
眞の舞劇といふよりも準舞劇である。

五 過渡期の困難

我が舞劇の現在は大體前に陳べた如くであるが、然らば將來は如何に成行
べきか、舞劇は榮ゆべきか衰ふべきか、京阪より新機運を齎すべきか、東京で何
か新しい活動が始まるべきかといふに、此の答に先立つて、我が舞踊が今や大
いなる過渡期に際して其の危機に臨めることを説く必要がある。總て維新
前より傳來の藝術は危機に臨んでゐるが、就中其の保存すらも如何かと案じ
られるは舞踊である。其の理由は曾て某雑誌の爲めに草したが、故あつて不
用となつた拙文には、見えてゐるから其れを一覽せられたい。即ち左に

一方に於ては江戸式からハイカラ式へ一足飛の趣味の變遷、十年以前ま

では清元某がかゝつた寄席でオペラまがひの興行、地方を見れば浪花節
の大全盛、かやうに時勢の變り來るにつれて最も心懸りなるは江戸式演
藝の運命なり。例へば、彼の能樂の如きは、同じく舊時代の遺物ながら、と
もかくも上中流に保護者あり、所謂家元にもそれ／＼頼もしき後繼者あ
り、それに今尙嚴格な掟習慣おきてじまりの存在することなれば、如何に世の趣味が移
り行くとも形かたちなしに藝風の崩るゝやうのことはあるまじく、まして悉く
衰滅に歸するやうの虞れはなかるべし。箏曲、尺八の如き、これ將た其の
遺風を保存するだけの事は大丈夫ならん。ひとり俗曲と總稱する江戸
式演藝の行末は心元なし。まだしも曲だけは、田中博士の如き忠實なる
斯道の専門家ありて、蓄音機にも收め、譜にも取りて保存の法を講せられ、
且つ或範圍までは今尙恥かしからぬ家元もありて、相應の熱心を以て研
鑽を怠らぬ體なれば、強ち取越苦勞にも及ぶまじけれど、かの舞踊に屬す
る部分は、こゝ一二十年のうち、何とかせすんば、少なくとも其の最も古
雅なる部分即ち最も大切なる部分を形なしにする虞れあり。今日斯道

の家元として先づ重きを置くべきは、東京にては藤間勘右衛門と花柳勝次郎位、一兩人のみ。名古屋の西川鯉三郎は數年以前に没し、これは他流ながら京都の片山お春の如きもまた已に大きに老いたり。此の兩三人の亡き後ともならば、斯の道ばかりは殆ど古きを温ぬるに由なかるべし。否、今日とても通例劇場にて演じ、温習場にて演じ、乃至黒人素人の其の子らに習はするものは、大抵文化度以降のものが多く、それさへ能などゝは違ひ、時好につれて型を改むることを忌まぬゆゑ、往々已に原色を失ひ、爲めにやゝ品よくなりたるもあれど、多くは巧に過ぎ緻に過ぎて古風の味ひは乏しく、眞に保存したしと思ふやうなる部分は家元の手元にて既に殆ど失はれ去らんとす。實にこれも尤もなることなり。何一つ規則立つたる目印の法とてもなく、只幼少より何百回と繰り返して習ひ覺えたと、子弟に何百回と教へ授くることによりてのみ、言はゞ一へに手心的に記憶するに過ぎぬなれば、教ふる必要な部分は次第に遺亡し去るべき筈なり。ともかくも百五十年以上、二百何十年にも垂んとする歴史ある。

我が殊別なるミメチックダンスのかくして衰滅に歸せんこと惜しむべきにあらずや。

或は、今尙行はれつゝあるが江戸式舞踊の精粹なり、廢れたる部分は惜しむ程のものでなし、といふ人もあらかなれど、成程、花やかとか巧緻とか大物とか俗受とかいふ點よりいへば、通例行はるゝものが其の頂點ならん、但し他の自然とか、簡樸とか、古雅とか、いはゞ河東、一中、又兵衛、師宣などを富本、常磐津、歌麿、呂、豊國などに比する時に覺ゆる一種の味ひを求めんとせば、舞踊に於ても遙かに古きを尋ねざるを得ざるべし。例へば、彼の猿若の狂言に見ゆる如き手振、やゝ下りても、一人、椀久などにほのめける趣味などは、常磐津物、清元物などゝは、やゝ撰を異にすべく思はるゝなり。概して長唄物のうちには、やゝ古風なるが殘れるげなれど、其長唄の曲、其物が西洋音楽と競争の結果などに、や、おひくゝ急間になり、手繁くなりて、幾らかづゝ變遷しゆくげなれば、之れに伴ふ振とても同じく移らざるを得ざるべきか。予は先年振事本位の樂劇といふことを唱へたりしが、予

がいふ振は今の振其の儘にはあらず、今のを臺木にしてそれへ明治の新思想を以て新しき振を工夫し、接ぎ合せて將來の用に立てんの意なり。而してその第一着としては、あらゆる藝術の改革期のならはしの如く、時に屢々其の源泉に歸ることの必要あるを感ず。「關の扉」や「戻り駕式」の振事は、所謂狹斜趣味も餘りに濃厚になり過ぎて、すぐには將來の用には向きがたし。「松の葉」時代に立戻つて一工夫せんためには、古い舞踊は頗る大切なる参考品ともなる譯なれど、それが今は殆ど亡び失せたるは残念なることなり。こゝ十餘年も油斷せば「關の扉」「戻り籠」の振をすら失ひ了るに至るべし。

地方々々の名物踊なども、おひ／＼に廢れゆくらし。汽車發達のために、中央を没落せし藝妓などが、今は邊鄙の地方にて營業するゆゑ、いつの間にか其の感化が其の地の名物踊にも及ぶらしく、今日に在つては、さんさ時雨も、おけさぶしも、恐らくは舊時のまゝにはあるまじ。

曲とはちがひて譜に取る譯にはゆかず、活動寫眞に越すものはなけれど、

斯道の大檀那でも現れぬ以上は、演せしむると撮影すると、どのみち負ひきれぬ費用倒れの仕事なり。雜誌「歌舞伎」の主筆は、早くもこゝに目を着けられたりと見えて、大物よりはじめておひ／＼型の研究を進められつゝ、あれど、尙前陳の理由により他の方法をも講ずる必要あるを思ふ。尙ほ右にいふ狹斜趣味といふ事に就ての詳細な説明、我舞劇に伴ふ種々の弱點、今日行はれるものは大概廢滅せざるを得ざる所以、舞踊の性質の東京と京阪と如何に異なるか、京阪の舞踊の長所短所乃至將來に處するの策如何等に就ても所見があるが、餘りに長引いたから、これで先づ一段落として又機を得て語り續ぐことにしよう。

日本舞踊の將來

「時事新報」のために

凡そ國として、舞か踊の無い處はない。どんな野蠻の國でも、何等か謠に似、音

樂に類似したものの、ある以上は、必ず之れに伴ふ舞踊がある。故に、その國、その地の音樂の旋律は、その國、その地の舞踊の特質に基くとさへ唱ふる學者がある位。併しながら、同じ舞踏と云ふ中にも、西洋のダンス、我國の盆踊などの如きは、他人に踊らせて看る物と云ふよりは、寧ろ自ら踊つて樂むたぐひの舞踏であるが、此の外に、他人に舞はせ踊らせて見るを主とする舞踏がある。美術の一種として、畫や彫刻や大建築や大文學と併べ稱すべきは、このたぐひの舞踏でなくてはならない。五ヶ月六ヶ月稽古すれば、だれにも一通りは眞似られるやうな藝は、決して眞の美術とは言へない、天才と少くとも十五年以上の修練とを俟つて、始めて物になるやうなのが、眞の藝術であらう。西洋にも、 그리스全盛の昔には、右の専門家でなくては到底見るに足るやうには演じがたい類の舞踏が榮えたが、それは後に羅馬に移つて、羅馬の亡びると共に滅びて、今は全く其名残をも傳へない。その特質は如何な點にあつたかと云ふに、單に拍子に合せて、面白く四肢を動すと云ふに止まらないので、何等かの物語、若しくは何等かの稍複雑な感情を差手、引手に依りて、又は足拍子、又は顔面

其の他の働きに依りて、具體的に表出すると云ふ點にあつたらしい。今は全く絶えたもの故、詳細の事は解かり兼ねるが、右の舞踏の中には、我が國の劔舞のやうな、しかもそれよりは多少發達した、勇ましいのものもあり、又我が振事に似た、戀愛などに關する、優しい、美しいものもあつて、相應に發達して居たものらしい。それに比すべくして、全く系圖を異にしたもので、今尙佛蘭西に所作のバレエと稱するものがあるさうな。これも演劇的の舞踏で、一時は他の國にも行はれたが、何分にもオペラ全盛の勢には敵しがたく、今はあまりに歡迎せられぬと云ふことである。彼のバントマームなども、その音樂の伴奏に伴れて、手足を拍子面白く働かすといふ點だけは、稍同じ脈のものらしいが、道化した、たはいのないもので、逆も 그리스の昔のなどに比較すべきではないらしい。然るに、件の 그리스風の舞踏に似て、さらに幾段も複雑に、且つ巧緻に發展したものが、獨り東洋の我日本に在るとは妙でないか。我が所作事又は振事など、稱するものが、即ちそれである。詳しいことは嘗て拙著「新樂劇論」に述べて置いたから、今はくたくしく申さぬが、とにかく演劇的舞踊たる點に於い

ては當代無比であることは論を俟たない。近年、亞米利加、或は獨逸などにて、何かの序に我所作事を瞥見したのが元で、之れをどうにか利用せんと企て、一種の新舞踊劇を起こさんとしつゝある由を、嘗て一二の雜誌の上で見たことがあつた。彼のミッス・ダンカンとか、ミッス・デニスとか、ミッス・フラアとは云ふ婦人連の舞踊劇は、確かに幾分かは日本の振事を模倣したものと思はれる。併し未だ着手後日も浅いことゆゑ、之れに伴ふべき音楽さへも、稍や其の端緒が開けたばかりで、至つて幼稚なものであるらしい。併し油断はならぬ。恰も彼の西洋畫家が、日本の線畫を研究して、すんすん新しい繪畫を工夫しつゝあるやうに、うつかりして居ると、どんな立派な新舞踊劇が獨佛、米あたりから産聲を揚げまいものでもない。

私が日本の振事、即ち世界無比と稱すべき舞踊劇を何とかして新代の需用に適するものとして望む所以は、日本の藝術中でこれ以外には將來大に利用せらるべき、而も天下一品と稱するに足るものがあるまいと信ずるからである。日本の繪畫も、日本の音楽も、日本の建築も、日本の演劇も、無論それ

特色はあるに相違ない。併し是等のものゝうち、假に舊演劇の佳き部分は所謂振事即ち舞踊劇と密接に關係するものとして除いたなら、其の他は到底在來の特色のみを以てしては、世界將來の新藝術と相拮抗するに足らうとは思はれない。語を換へて言へば、只古美術として、又は一種風がはりの藝術として珍重せらるゝことは疑ひないとも言へようが、殆ど根本的といふほどの手入を加へない以上は、到底新日本の、况んや世界の新時代精神には適し兼ねようと思ふ。それに比すれば、振事即ち舞踊劇は、脚本さへ新時代精神に適するやうに改めたならば、必ずしも根本的の革新を行はずとも三四十年間位は、日本特有の舞踊劇とし、彼の北齋、歌麿が歓迎せられた程度にはもてはやされ、旅オペラなどの向うに立つてなら、多少目ざましい戦を試みるに足るだらうと思ふ。

或一部の人は、將來日本にもオペラを起さねばならぬと唱へて、頻に其の準備に盡力して居られるが、それも誠に結構なことである。若しそれが實行し得らるゝことならば、固より國の譽ともすべきことであるが、假令ひ實行せら

るゝとしても、甚だ懸念なはそれがこゝ三十年や四十年で果して外國人に見せることが出来る程の物になるか、どうかである。英國、米國の例に徴しても、この兩國すら今尙ほ世界に誇示するに足る自國特有の歌劇は有してゐない。依然として佛、伊、獨の輸入品で満足して居る爲體。況んや日本に於いては、安く積つても、こゝ五十年以内には子供歌劇以上のものは出來さうにもない。假令ひそれ以上のものが出來たとしても、外國貴賓歡迎の用などには供しにくからう。イヤ貴賓などは存外鑑賞眼の低いものゆゑ兎も角もとしても、彼方の専門家や鑑賞家やオペラ通などの前へは持出しにくいことであらう。恰も日本今日の油繪が、今尙ほ西洋人の油繪通の前で誇示しにくいと同じ譯合であらう。油繪は唯一人の天才の出るのを俟ちさへすれば、一朝にして古今の傑作をも得らるべきであるが、それさへ司馬江漢以來既に夥しい星霜を重ねて、尙ほ未だ一人のラファエルをもレンブラントをもコロロをもミレロをも得ないのである。歌劇に至つては、先づ傑出した作曲者にして兼ねて日本音樂の大集成者たるべき人を要し、其の作曲者と同心一體たるべき作詞家

をも要し、オルケストラを組織すべき音樂の名手少くとも數十人を要し、之れに加ふるに聲樂家にして美女たり美男たると同時に、演劇的表情術及び舞踊術までも併せ心得たる者是非數十名を要すとせば、それを三十年や四十年で養成しようとするのは、きのふ植ゑ附けた杉や檜で大音樂堂を建てやうと企てるやうなもので、眞に眞晝間の夢ではないか。それやこれやを考へて、私は將來の日本の樂劇は是非とも在來の振事即ち所作事風のものに立脚したものでなければなるまいと思ふのである。併し茲に困つたことは、在來の所作事は何分にも徳川時代の中等以下の趣味好尚に適ふやうにと出來て居るものである故、今日の中流以上、とりわけ西洋好みの人々の好尚に適はぬは勿論である。又其の江戸趣味に偏して居る點が、今の地方出の人々には全く向かない。加ふるに、歌詞が殆ど皆文學的價値に乏しく、半以上囃語うはことの如き無意義なもので、逆も新代の人々の同感を呼ぶに足らない。殊に所謂狹斜主義、即ち遊女屋式の風流が眼目となつて居るのが最も不都合で、此の儘では如何ともしがたい。着想も、文章も、人物も皆狹斜を此の上

もない結構な處と立て、作してある。從來音樂會などの出し物となつて居る舞踊は、大概將來は用ひ難いものである。彼の「老松」なり「北洲」なり「梅の春」なり「保名」なり「道成寺」なりが、其の歌詞を一々穿鑿することゝなると、到底表立つて上品な社會の前には持ち出し悪い。固より多少上品なものもある。彼の「勸進帳」とか「紅葉狩」とか「山姥」とか乃至京阪名に行はるゝ或舞踊などを最上等として、其の他にも、作意は無意義に近いが、兎も角も見ただけは上品らしいものがある。それらは當分は如何なる社會に持ち出してもまあ、差支ない。併しながら所謂上品なものは振事としては最も面白いものではない。我が所作事の本領は尙ほ其外にあるのであるから、斯様な能狂言まがひの物や、造花式、活人畫式、ラム子式の物ばかりに引縮めて了ふのは頗る残念であると思ふ。さればと云つて、前に申した理由で、我が舞踊劇の本領たる「辰駕」關の「扉」「靉猿」乃至「拍子舞式」の振事の如きは、今更改良の仕様もない程に、着想も卑しく、文句も卑しい。かういつても私は例の演劇改良論以來唱へられたやうな意味で非難するのではない。只だ文句が野卑だとか、猥雑だとかいつて難す

るのではない。それは抑々末である。されば一時の便宜上、幾分か文句上の修正をして當座のお茶を濁して居る向もあれど、それらは畢竟小刀細工で、決して永遠の策ではないと思ふ。何となれば私が此等の振事をいけないといふのは、單に文句の末をいふのではない。全體の着想が時勢後れで將來の人には面白味を覚えしめないからいけないといふのである。早晩彼の西洋のオペラに對して、ワグネル式新樂劇の起つたが如く、我が所作事に對しても、一大革新が起ころねばならぬのである。然らざれば我が特有の樂劇も、都踊や、蘆邊踊や吾妻踊にその最もつまらぬ部分の名残だけを止めて、昔のグリースの舞踊劇の滅びたが如く、滅びてしまふであらう。扱それならば如何に改良を施したらよいかといふに、一應は拙著「新樂劇論」にも述べて置いたが、なほ其の後數年間の經驗によつて考ふれば、多少思ひ違へてゐたことを發見し、又いろ／＼實行の困難を覺えることも多くなつた。然し、何れにもせよ、脚本の着想から改めていかなければならぬといふ點だけは動かない。とはいふものゝ、困つたことには、今日のところ、假令舞踊劇の脚本

だけは我々文學者の考案次第で、全然革新し得るとしても、其の作意に従つて新に適當な曲を作り、且つ新に適當な振を附け得る者が目下の所殆ど一人も無い。由來我が演劇や俗曲に關係する手合はおしなべて學問見識の乏しいのが常であるが、とりわけ高尚な新知識と新思想と、尙ほそれに加へて熱烈な向上心を有するものに至つては、全く絶無と言つてよい。二には、日本の舞踊の特質を重んじて改良に志す人も甚だ尠い。演劇の改良に同感する人は多いが、此の一種の逸品たる日本舞踊の革新に同情を寄せる人は極めて尠い。脚本の刷新だけは、文學者の才能次第で出来るとは云ふものゝ、是れ又非常にむづかしい。オペラは我が能の如く、役者をして立つたまゝで長く謠はしむることが出来る故、随分複雑な新思想や新感情をも述べさせることが出来るが、舞踊劇に至つては踊るといふことが主であるだけに頗る新しい思想や感情が寓し難い。「關の扉式」「保名式」に作るのなら必ずしも難くはないが、二十世紀といふことを眼中に持つて作せんとすると眞にむづかしく、今日のところ作者が殆ど無い。相談相手もない。且つ踊ると云ふ以上は、とかく浮かれ

ふと云ふことが多い故に、眞面目なこと、莊重なことには向かないのが本領。これも困難の一理由。在來の如き無意味な、只だ美しいとか只だ可笑しいとか云ふことに傾き易い。今日は俗曲を解する人々は次第に殖えたが、踊や舞を解する人は比較的に少い。音樂學校で俗曲の研究は、じまつたが、舞踊は度外視されてゐる。俗曲を踊と離れて研究するのは、挿書を離れて「田舎源氏」を研究するやうなものであるが、そこに心附いた人が割合に尠ないのが残念である。とりわけ、此の革新に關しては、明治生まれの新知識に富んだ人々の同感と協力とを要すること最も肝要なのであるが、新知識ある新代の人々の舞踊に對する知識と鑑賞力とは、まだ甚だ漠然としたものである。彼等は只だ軽くしなやかに間拍子よく踊りさへすれば上手だと思つてゐる。又脚本に對しても或一部は只だ無意義なものとして、無差別に讀み、或一部は音樂と舞踊と三角同盟の上で始めて美術品となるものだといふことを忘れて、只一へに讀む物としてのみ批判をする。かく同感もなく知識もない社會に立つて、此の至難な革新を行ふといふことは殆ど出來ぬ相談に近い。

此の方面に盡力する新代の英才が多く出らるれば知らず、さなくば惜しいものながら、只だ衰へ行くばかりであらう。

音楽と文學 (口述筆記)

(美術評論の爲に)

凡そ音楽に二種類ある。器樂のみにて音楽たるものもあれば、文學と相待つて始めて音楽たるを得るものもある。泰西の音楽の如きは、往々にして、單に器樂のみより成るのであるが、我が箏曲の如きも其の手事物に至つては、歌詞はほんの添物位の程度。然るに我が俗曲、例へば長唄、河東、一中、清元、常磐津、富本の如きに至つては、一へに詞章と相待つて音楽たることを得るのである。手を附け節を附くるに先立つて、先づ詞章が無ければならぬ。されども此處に説を爲すものがある、曰はく、凡べて謠物、語物の面白味は、主として曲にある、節奏にある、手附と節附との鹽梅にある。拙き文句も節附、手附が面白ければ

聴くものを魅し得て餘りある。詞章に文學的價值を求むるのは局外者の觀察、常磐津、清元、長唄等の詞章を讀物として稽查し、其の着想の卑俗、其の脚色の支離滅裂、其の文句の猥雜等を論ずるが如きは迂愚の沙汰である。實際其の場に臨んで、音楽として之れを聞く時は、殆ど全く其等の缺點には氣が附くものでない。殊に舞踊の伴ふものに至つては、觀る者は姿態の美に心を取られて、音楽は單に美しい拍子として聞くに過ぎない。詞句の如きはほんのチギレ／＼に美しげな艶つぼげな言葉として耳に入るばかり。決して醜とも俗とも氣づくものでない。彼の俗曲改良論の如きは、此等の道理を知らざる机上論、目で讀んでばかり論を立つる手合の迂愚の考より出でたことである、云々と。果してさうであらうか。

之れを飲食物に喩へんに、飲食した當座こそは大ぶ口に旨いやうに思ふが、暫くして不快を覺ゆるたぐひの飲食物がある。俗に之れを「後口が悪い」と云ふ。又「二度びつくり」とも云ふ。始めから詞章らしいものが全然伴はぬものならば兎も角もなれど、苟くも詞章がある以上は、今日の如き批判意識が進んだ時

代には、到底其の意義を無視することは出来ぬ習ひである。誰れにもせよ、古き又は新しき曲を聴いて深い感興が起つたとしたら、其の必然の順序として、其の詞章の意味を取調べて見たいと云ふ念が起りさうなものである。とりわけ新曲などであつては其の念が起るべき筈。文學趣味の貧弱であつた舊幕時代などは違ひ、今日ではかくあるべきが自然の趨向で、現に長唄研精會などでも稽古本を膝にして居る聴衆がだん／＼多くなつて來た。將來は益々此の傾向が加はるであらう。果して然らば、或は拙劣を極め、或は無意義に等しき、或は猥雜、卑陋なる詞章を讀む時の感じはいかゞであらう。後口の不快なのに等しくはなからうか。興味俄に索然とするやうなとがなからうか。本尊の帳を開いて後に甚しく信心の衰ふる底の悔がないでもあるまい。

凡そ曲物の詞章に二大別がある。一貫せる意味の有るものと無いものとのある。一貫せる意味のあるにしても、朦朧體なのと然らざるものとある。朦朧體なのは、到底其の意味の捕捉すべからざるものである。淨瑠璃類は大概

意味が兎も角も一貫して脚色もある。修辭上の價值があるのみでなく、詩としての長所もある。然るに彼の河東節の詞章や長唄の文句のやうなものは、修辭上では往々にして淨瑠璃類に勝るが、内容は頗る乏しいのが多く、河東の如きは、往々之れを美文視する人もあれど、それは單に雅馴に止まる位の程度のものである。しかし河東、長唄はまだ可い。下つて彼の清元の「梅の春」「北洲」のやうなものになつては今では仕様がな。何となれば其の意味を理會するに及んで、興が醒めざるを得ないからだ。此等は到底二十世紀の公開席上に用ひ得べきものでない。狹斜に關してゐるが爲といふばかりではない、如何にも目の着け方が低く、文學的價值が乏しいからである。朦朧體の詞章でさへ已にさうである。況んや一貫せる意味があつて、劇的脚色を備へたものをやである。例へば、彼の「瀧夜叉」「關の扉」の如きは、我が振事劇の目ばしいものではあるが、これらも將來は用ふことが出来まいと思ふ。必ずしも其の着想が狹斜趣味を理想としてゐるからではない。猥雜な文句が多いからでもない。詞章全體の上から見て、如何にも卑俗で、如何にも淺劣で、殆ど何等の文學

的價值がなく、殆ど玩讀するに堪へないからだ。只之れを舞臺で見る瞬間、美しく装うた俳優が之れを演舞せる瞬間のみ、夢心地になることが出来、只其ればかりで満足するならば兎も角もであるが、如何にも自意識が鋭く、批評的傾向の盛な今日に於いては、到底阿呆の樂園に安んずることが出来まい。我が俗曲の詞章も根柢から刷新すべき時機が迫つて居る。

按ふに音樂に伴ふ文學ばかりではない、あらゆる文學は、最早純空想には安んじかねる時勢と爲つた。昔はグリムのお伽話のやうなものを、子供許りでなくて大人も喜んで讀んだ時代があつた。又彼のロマンチズム全盛の時分には、純然たる夢物語に全力を注いだ詩人もあれば、之れを讀んで俱に夢幻境に遊ぶことの出来た讀者も多かつた。十九世紀後半以後は同じくロマンス的主題を取るにしても、隱然何等かの寓意、言はゞ第二の意義を含ましめなければ作者も讀者も物足らぬ感じがするらしい。彼のゲーテの大作の如き、テニスの「アーサー王物語」の如き、いづれも醇乎たるロマンスではない。ワグネルの音樂劇の如きも、一面に此の寓意的用心があつて、彼の俗衆を魅すると

同時に、學者、理窟家をも羅し去る力がある、沙翁の作中でも *As You Like It* と *Merchant of Venice*. とは、俱に半夢幻的なる喜劇であるけれども、或一部の人は、前者は甚だ喜ばれないが、後者はなほ流石に歓迎せられてをる。其の然る所以は何ぞや。前者は二十世紀好みの解釋を附會するに困難であるけれども、後者は彼のシャイロックといふ人物が居るので、多少の新説明を試むることが出来るからだ。沙翁の本意はシャイロックを敵役として綴つたことは明らかで、アーピングを始め、最近の或俳優等が演ずるやうに、主として同感を彼れに集めようとしたのでないのは明らかである。然れども今日では此のやうな解釋の方が歓迎せられてをる。近くは明治座のシャイロックの如きも、此の最近式によつてゐるのらしいが、新代の學者達には氣に入つたやうである。此の意味よりすれば、オセロのイヤゴの如きも新解釋を加ふることが出来よう。彼れを在來の如く紋切形の惡人とはせず、ニイチエの超人主義を濫用した一天才としたらどうだらう。此れも一種の風變りの舞臺面を開き得べきではないか。

いづれにもせよ、めい／＼多少の識見を具へて批評するに忙しい二十世紀の今日に於いては、曲物の詞章も多少文學的ならざるを得ない。さりとして音樂の規律に縛せらるる以上は、如何なる天才の筆を以てしても到底十分に詩的なる能はざるは、ワグネルの先例に因つても知らるることであるが、なほ及ぶべきだけは文學的なるを要する。少くとも謠曲以上、ワグネル劇程度、若くは叶ふべくんば、希臘劇程度たらんことを要する。よしや朦朧體に止まるにせよ、なほ表面に現はれた以外の意味あることが望ましい。彼の「梅の春」「北洲」の如き詞章にすら、本來は二重の趣味があつたものだ。即ち其の表面は何となく美しげなる叙景、裏面は種々の狹斜的連想、いはゞ兩天秤にかけて、聽く者の心を魅したのである。將來の詞章は、最早狹斜趣味を蟬脱せなければならぬのであるから、之れを作為する手心が頗る困難である。

此のころは新代の學者連で大ぶ俗曲研究に志す人も生じたやうだが、まだ文學上より研究を試る人が甚だ少ないらしい。新曲が出来ても、古いのと調が似てゐれば、詞意脚色まで一つであるやうに思つてゐる傾きがある。どうか

もすこし眞面目な深切な俗曲の研究家がほしいもの。(四十年二月)

舞踊劇に對する予が作意の過去及び將來

四十二年二月の「新小説」のために

自分が三十七年の冬、振事本位の日本樂劇の新發展を主張して以來、月日の経つのは早いもので、もう足かけ六年になる。其間に初一念は少しも變らんが、作に對する態度は大ぶ變つたと言つて可い。これは自分の一身に關するのみでなく、我舞踊劇全體の前途にも關する事のやうに思ふから、一應話して見よう。

自分が今までに公にした舞踊劇の脚本は、第一が「浦島」、第二が「かぐや姫」、第三が「鉢かつぎ姫」と俄仙人、第四が「金毛狐」、このうちに一休禪師、お夏狂亂、初夢、保名の翻案を含む、都合九種、外にオペラまがひの作「常闇」を加へて十篇になる。「浦島」「かぐや姫」に對する態度と「鉢かつぎ」以下「金毛狐」までの作に對する態度と

は一つで無く、常闇に對する態度はまた全く別である。こんど此雜誌に掲げた和歌の浦の如きは又更に別である。其仔細をざつと話さう。

「浦島」と「かぐや姫」

「浦島」は三十七年十一月新樂劇論主唱の當時、自分の論の俗おどかしの空論でないことを明かにせんために作つたもので、其序詞中にも斷つた通り、自分が理想の片影を示す徒の見本雛形たるに過ぎぬものであつた。「かぐや姫」は一年後の作で、「浦島」に示した様式のみでは何となく物足らず、題材によつては到底あのまゝでは如何ともしがたいと心附いた所から、これも全くの見本の積りで試みたのである。

「浦島」を歌舞伎本位の舞踊劇と假稱すれば、これは、能本位とも假稱すべき一種の様式。要するに二者共に見本で、理想の片影で、決して其儘直ちに作曲させようとも、作曲し得るものがあらうとも思つてゐなかつた。然るに故岡安喜三郎が兎も角も「浦島」の一部に手を付けさせてくれと懇望して來たので、自宅

で一應試みさせて見たが、果して豫期した通りであつたから中絶してしまつた。彼の前曲を六左衛門が作曲したのも自分が好んでしたことでは無く、其實文藝協會の爲に作の一部を寄與したに過ぎない。されば、あの前曲の聞かせは自分は聽いても居ない、只の一言も指圖もせねば注文もしなかつたのである。其後文藝協會の本郷座興行に、再び「浦島」の一部を作曲させることゝなつたが、是れ將に同協會の爲にしたので、自分が望んで出したのでは無い。併し此際は勘五郎にも藤間にも一通り作意の説明をなし、曲に附いても振に附いても種々注文を持出して見た。二人とも善く作者の言ふことを聽いて、随分と苦心はしてくれたやうだが、何分にも、理想の片影として作したもので、作者みづからも實際に演ずるものとしては斯うでは無いわいと疑つてゐるやうな作、而も中々の大物へ何の段取をも附けんで一足飛をしようと言ふのだから無理だ。曲にもまだ、折合はぬ部分が多く、振には殊に妙で無い部分が多かつた。そこへ持つて來て仔細あつて行違つて背景も扮装も衣裳も作者の思つたやうで無く、剩へ素人が演ずるのであるに係らず稽古が十分でな

かつたから、あの通りな結果となつた。世間では、彼を以て自分の舞踊劇全體を評せんとする人もあるらしいが、餘りにそれは門外評といふもの。藝術中でも湊合藝術といふ複雑な奴の革新が一朝一夕に出来るやうに批評家までが思つてゐるやうでは心細い事だ。

「かぐや姫」も同様、尙修正すべき部分も多く、また到底急には實演せらるべき作で無いのである。

「鉢かつぎ」以下に就いて

「浦島」の前曲などが多少の經驗となつて、これは到底一足飛は無理で、何か飛石を拵へる必要があると思ひ附いたと同時に、今のやうにして押して行くと、古い舞踊劇は例の狭斜趣味の嫌ひがある所から次第に廢れ、それに振附とても藤間を除くの外は殆ど無いと言つてもよい有様だから、勢ひ斯の道は衰滅せざるを得ないと杞憂し、そこで兎も角も目下のツナギになる物を拵へようと思ひ附いた。一面は作曲者の手馴らし、振附の手馴らし、一面は自分の手馴ら

し、舊型保存の役にも立たせ、新發展の用をも兼ねさせようといふ一舉兩得主義。此趣意で拵へたのが「鉢かつぎ」以下「保名」の翻案までである。これらの作は現在の俗曲家にも出来る。現に「鉢かつぎ」は小三郎、六四郎に托して附けて貰つた所、大ぶ善く出来た、振も藤間が骨を折つてくれて、ほゞ曲が氣に入つた程度には氣に入つたといつてよい。それから「俄仙人」、これは岸澤仲助が最初作者の説明を聽かず自分の考だけで作曲して來たもの、後に多少修正を命じたが、何分にも先入主となつて、それに題材が有りふれたものだけに、兎角陳い作に因縁が付き過ぎてゐて、倦ぬやうに賑かには出来たが、作者の本意から見ると妙で無い。併し是れ將た直ちに演じ得られるやうに曲が附いて居り、現に花柳勝次郎が振に工夫を凝してゐてくれる筈。次に「一休禪師」、これは自分から吉住に頼んで六四郎と二人で骨を折つて貰つた。彌々振を附ける段には、尙二三ヶ所修正を要する點があるが、兎に角すぐに用ひ得られるやうにはなつてゐる。それから「初夢」、これは有樂座の望で、登場を承諾した結果、同座の依頼によつて仲助が骨を折り、藤間が振を付け、ともかくもあの通り興行した。

題材も題材であるから、どう新しいといふ手も附いてゐないが、從來有りふれたものとは、あれでも大ぶ變つてゐる所がある。常盤津としては品もよくなつてゐる。仲助の熱心と勇氣とに更に幾段かの深沈とした工夫が加はつたら、將來大いに頼もしいと思ふ。今の所は才氣が勝ち氣短である。それはともあれ、曲も振も先づ相應に調つてゐる。只西洋樂との打合が殆ど全く無く、俳優連もいろ／＼の都合で、例の通り舞臺稽古はたつた一日、而も大道具や假髮其他は彌々初日といふ其日まで更に整はぬといふヤツケケゆゑ、まだしもあれだけに出来たは可いうちと言ふべきであらう。若し稽古を十分にしておいて作者の詠をも聴き、西洋樂との打合に念を入れ、道具や光線に一段の工夫を加へ、幕切の舞踊を今幾段か面白くし、キュービッドの働きを作意通りにしたなら、全體の感興は慥かに幾倍したであらうと思ふが、是非が無い。と言つたやうな譯で、これら間の楔として書いた作には自分は餘り重きを置いてゐない。併し是等の作に於てもヤハリ新發展といふ事は眼目にしてゐることゆゑ、これでも現在の俗曲界に取つては随分の重荷である。例へば今

日現在の俗曲界からいふと、「お夏狂亂なり」「金毛狐なり」「保名物狂なり」は大ぶ重荷で、容易くは手の出せない氣味。何故然うかと言ふに、困難の原因は義太夫と唄と常盤津、又は三者共に掛合といふ點に在る。局外者から考へられたら此三者の掛合は歌舞伎其他の劇場で屢々見聞する所でもあり、義太夫は今尙大流行の有様でもあり、何でも無く直出來さうなものと思はれるであらうが、それが存外さうで無い。所謂チヨボ式の筋を通し、間を維ぐだけの義太夫ならばだが、苟も音樂として聴くに足る而も長唄なり常盤津なりと協力同心して眞面目に新意を發揮するやうな義太夫の作曲者があるかといふと、全く無いことは無いであらうが、眞面目氣になつて協同して作曲に従事してくれるのが、さて無い。木に竹を接ぐやうな作曲の仕方では物にならぬ。或は作曲者は探し得たとしても、作曲者が語ることを兼ね得るとは限らず、語り得たとしても、人によりては、小三郎や伊十郎や喜代八の向うへ廻して掛合せるに適當であらうかといふ疑問も起らう。其他こゝには明言する必要の無い種々の事情があつて、單にあれほどの詠へさへ中々實行となるとむづかしい。况

んや自分の詠へのうちには西洋樂といふ難物がある。バレエ式の踊といふ注文もある。これらも掛合の一部だから厄介なことになる。さて此西洋樂の用ひかたに付いては自分の宿論があるから聽いて下さい。自分は彼の「京鹿子」にピアノを使用するとか「越後獅子」をヴィオリンで合奏するとかいふ方法は、單に試て見るまでといふ趣意以上には賛成しない。眞面目で「京鹿子」をピアノで弾いて面白いといふ手合があつたら、自分は、其人は、抽象的の音樂だけが解つて特殊のが解らず、特に日本の文藝といふものゝ内容が全然解らないのではあるまいかと疑はざるを得ない。自分は伊十郎があの大薩摩式の太い聲で「戀の手習ひ」云々と唄ひ出すのを聽いて、別段不調和とも感せず十分面白がつて聽いてゐる人を見ると、少々妙に思ふ。詞句が無ければ知らず、如何に囁語同様の詞句だからとて、誰に見しよとて紅鐵漿つけよぞといふやうな一くさりづゝの意味だけは明瞭に分る筈、而して此艶いた詞句とあの太い聲と折合ふであらうか。勿論長唄は淨瑠璃とは違ふ。表情が主で無い。女の情を抒ふる詞句だからとて何も假色を使ふには當らぬ。併

し長唄も今は次第に變つて來て昔の儘では無い。幾分かづゝ清元や富元やに近づいて來てゐる。して見ると、必しも伊十郎を拙いと言ふでは無いが、不調和だとは感ぜざるを得ない。「京鹿子」は、小三郎か喜代八の物だと感ずる。恰どそれと同じに、如何に賑かゝ善いからとて、元祿式を命と頼むものゝ中へ西洋樂の音色よし旋律は日本式であらうとも、自然に外國的聯想が起らうでは無いか。嚴密に言ふと、電氣や瓦斯の明りさへ妙で無い位。出来るものなら純徳川式の演藝は依然として純檜舞臺で大蠟燭を使つて演じさせたいと思ふ。先月有樂座の開業式に喜多の能を觀て淺ましく感じたものは自分ばかりか知らぬ。それに尙帝國座開場の曉には、あそこでも能を演じさせようといふ企望があると聞いて歎息する。美術の命は一に調和に在ると信ずるのに、世間の鑑賞家の意向は必しもさうで無いらしいのが不思議だ。女義太夫なり男義太夫なりを歌舞伎又は有樂座で聽くに、あの舞臺の家臺が、りの俗悪さ。あんな芝居じみた可厭事をせんで、何か別に工夫がありさうなもの。むしろ平舞臺四五間の間に幾らか奥へ下げて置舞臺をして、其上へ燃立つ如

き緋の敷物か何かを一ぱいに敷詰め、後は金屏の素晴らしい奴を三四隻も使つたら、如何にも桃山式でないまでも古風で、竹本曲勃興當時の聯想をも呼起して面白からうでは無いか。上野の音樂學校などで俗曲を演奏させるにツイ先頃までは金屏風さへ使はず、甚しきは大きなビヤノを出しはなしにしておいて藤間に踊らせたこともある。西川嘉義を彼處で踊らせた時、小三郎、六四郎へ對しても氣の毒さに、自分がわざ／＼早稻田から金屏を運ばせ、又赤い敷物等をも準備させ、どうかかうか不體裁なからしめた。これは横道の話だが、總てが此調子。周囲との調和、内容との調和などいふ事に、殆ど全く關なかまはいと、いふ遣口が多い今の藝術界。八百善の割烹を西洋皿に盛つて出す格だらう。随つて西洋音樂なぞの應用も随分亂暴に流れかねない。新作に應用するのならばいろ／＼に試みて見てもよいが、折角歴史附の古風な趣の在る所に聯想の面白味の籠つてゐる「京鹿子」などを、何も無理やりに、無意義に、バタ臭くするにも及ばぬことだ。西洋樂を用ふるなら用ふるやうに内容即ち題材に伴はせて貰ひたい。題も無く、詞章も無い只の器樂なら格別、苟くも意味

を有する文句があつて又其文句に伴ふ振もあつて、種々の聯想や解釋を引出し來る力のある曲に至つては、是非とも内外の調和と言ふ事を考へて貰ひたいものだ。とは言へ西洋樂の應用とか和洋樂の合奏とか言ふことは至極面白くもあり、又必要でもある。早晚樂器を改めると同時に旋律をも拍子をも改修する所が無くては、逆も／＼將來の日本國民樂といふやうなものも出來さうにない、随つて自分が望むやうな新舞踊劇が出來よう筈が無い。そこで以て自分も西洋音樂の應用には賛成、今日只今から盛んに試用して見たいと言ふ主義である。只其遣口が違ふ、あくまでも内容に伴はせ、詞句と調和させるやうにして用ひたいと思ふ。委しく言へば、こゝは意味の上、着想の上、筋の上から見て、どうしても西洋樂でなくはならぬと言ふ所にのみ用ひたい。例へば在來の歌舞伎や所作物に於て、管絃とか大拍子とか篠入とか里神樂とか禪の勤めとか言ふたぐひを作意に取合せたと同じ格で行きたいのである。「金毛狐」に用ひた西洋樂「初夢」に用ひたボルカ、其他、何れも作意から割出したもので、舞臺都合ばかりでは無い。何故に「金毛狐」に前後二回、一は神怪なのを、一

は妖艶な奴を用ひたかば、少しく金毛狐によつて表されたる想の何たるかを考へれば分るわけだ。それはともあれ、目下の所詞句のある部分に西洋樂を用ふるは徒らに謠ふ聲を溺らすのみで何の味ひも無い。西洋樂は主として間奏にのみ用ふべきであらうと思ふ。

以上は、大略ながら過去の自作に就いての話、將來の作に對しては又更に用意を異にせざるを得ない理由がある。將來は主として新發展に資することを目的として初一念に立戻るの端を發かうと欲するからである。「和歌の浦」は其手始めに書いて見た。

「和歌の浦」に就いて

我舞踊劇の特質いろ／＼ある中で、自分が將來大いに發展させて見たいと工夫してゐる長所の一つは、三人以上の男女が手を揃へて踊る所謂手踊脈である。もつとも此手踊にも種々あつて、藝妓などが例の都踊式に演ずるのも其一種、地方踊、盆踊風の簡樸なものも其一種、いにしへや「三つ人形」に挟んである「さ

んさ時雨様のもまた其一種。自分の將來大いに發展させて見たいと言ふのは、其劇脈と纏綿した上から言へば、先づ「さんさ時雨」式だが、其自然的な簡樸的な味ひを生命とさせようと思ふ點から言ふと地方踊式なのである。彼の能や狂言を其儘に引直して來たやうな單調子の高尚めかした振事物を自分が好かないのも、一は此肝要な特長を遺却してゐるからである。

それから此式の手踊に伴ふ唄は、自分の理想から言へば是非とも純抒情詩式の民謡若しくは擬民謡でなくては妙でない。年々狹斜で年の始に作曲するやうな類のでは何にもならぬ。これには仔細のあることだが、話が込入るから今は言ふまい。要するに將來の舞踊には必ず此脈を發揮させようと思ふ。是れが一ヶ條。

次に在來の振事物は、曲も振も兎角技巧の末に流れ、如何にも細工が多く、せまこましく、自然な大やうな旨味に乏しい。其原因の一つは歌詞が抒情詩的でなく叙事的、狀物的であると云ふ事にも在るが、主として節や手の附けかたが纖細なからである。最も感情が高潮に達した激越な部分でも旋律の鹽梅が

タカ、湖水の漣のやう、多くは沼か池の漣が動搖するやう。細かいとか奇麗とか言ふ感じは起るが、假初にも澎湃として起伏する狂瀾や巨濤に比喩すべきやうな強い趣を見出ださしむるのがない。活動寫眞よりも早い位に旋律が變移する。謠が、りだなと思ふうちに、もう只の艶な長唄、ハ、ア木遣だと思ふうちに最早只の常盤津、ツ、ミウタを使はうが、平家、催馬樂などを使はうが、巡禮唄を使はうが、其他馬子唄、船歌、何れにもせよ、在來普通の使ひかたでは今の西洋樂標準の耳には何等永續すべき印象を残しさうにも無い。長唄でも常盤津でも實に手のせゝこましいものだ。而して此點を改めぬうちは振も勢ひ改まらない。大やうな手振などは附きやうが無い。然るに今日の俗曲家に向つて大まかな曲を附けると望むは恰ど今の歌舞伎俳優に向つて二十行以上の白を立つてゐて獨りで言へと命するやうなもの、在來の習慣に囚はれてゐるため如何してもやり得ない。だれもすでせうとか、倦きませうとかいふ。何に見物の方は必ずしも倦かぬかも知れぬ、作曲家や演奏者自身に工夫が足らず自信が無くて、自ら氣咎がして逡巡するのである。小三郎、六

四郎は流石に、鉢かつぎの、やんれ目出たやの折返しを二章とも同じ曲譜で附けた。これは黙つて附けさしたのだが、其儘に繰返したのは、譬へば一寸大きな浪を二度同じ度合に打寄せさせた格で、在來の式に比ぶれば稍大マカで、頗る作者の意を得たものだ。單に唄ふ物として聴くと、在來のを聴き馴れた耳には、或は一寸くどく思はれるかも知れんが、さて踊に伴はせて見ると、太郎、次郎兩冠者の歡喜の情は全く之れによりて始めて見物に傳はると思ふ。これは、ほんの一例だが、將來は此種の折返しを盛んに試みて、池波式を轉じて海波式にしたいと思ふ。是れが第二の箇條。

それから前に言つた内容即ち題材に伴はせて西洋樂をますゝ、多く併せ用ふる事。是れが第三條。

及ぶべきだけ江戸式特調を蟬脱して、むしろ世界調と地方調を攝取することに力むる事。これは前の地方踊とも關聯してゐるが、こゝには手踊の部分ばかりでなく全體の上に就いても其注意を要すると思ふ。話が込入るから詳細は省く。是れが第四の箇條。

在來の舞踊も西洋普通のダンスに比ぶれば慥かに標象的舞踊と稱すべきものであるが、只其所謂標象が、曲節の漣式であるが如く瑣屑で菲薄で、又詞句が支離滅裂であり、嚙語然たるものであるが如く支離滅裂で、月とか鳥とか花とか船とか乃至たかゝ色合とか口説模様とか嫉妬とか憤怒とか狂態とか醉態とか言ふ普通な淺薄な客觀的な情緒を現示するに止まり、ツマリ小さく細かく、うすべらで、何等深刻な永續すべき印象をも與へない。蓋し標象が暫且的たるに止まるからである。若し二十分三十分に亘る舞踊をして何等か複雑深邃な若しくは神秘雄大な思想兼感情の標象たらしむることが出来て、之れを觀了つた後の印象は他の美術即ち音楽や繪畫や演劇が與ふる所のものと全然別種であるといふやうであつたらば頗る面白く、こゝに東西の舊藝術以外の特色が發揮せられさうなものと思ふ。我舞踊を擧げて悉く斯くならしめようと言ふのではない。無論劇脈や抒情詩脈を保存し擴張することにも力を致すのではあるが、此新氣脈を加へない以上は、迎も將來の鑑賞に適することは難く、また大規模の發展に便ならしむる所以で無いと思ふ。手近い例

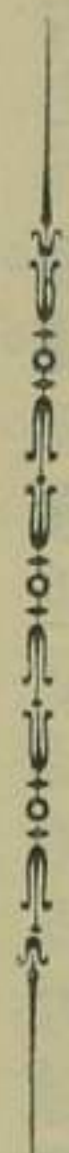
を言へば、將來使ひ古した春夏秋冬といふやうな陳腐な題目の舞踊を作るに
してからだ。在來のは春と言へば只優美で陽氣と言ふ位が關の山、詞句は花
とか鳥とか蝶とか霞とか言ふ常套文句、振とてもアテプリ澤山の平凡が定り、
若し之れを根本的に覆して、曲譜も如何にも春らしく、振も一目して如何にも
春の標象らしく見えるやうに付けることが出来たら妙だ。夏秋冬とも同斷で、
曲を聴くと共に詞句は聞かずとも自然に其季節らしく感ぜられるやうに出
來て居り、振將た之れに準じたら、總體に意味深くなり、一段面白からうでは無
いか。在來のにも幾分か其氣味が無いでも無いか、要するに瑣屑淺薄、自分
が望む所とは一つで無い。尙作曲者と振附に新しい天才が出たならば、生と
か「死」とか「耽溺」とか「煩悶」とか「向上」とか「神秘」とか「破壊」とか「衰滅」とか言ふやうな
思想をも標象することが出来まいものでも無い。併し此邊の消息は將來の
大發展の主眼なので、到底此紙上では盡し難いから、今は此位で止めておく。
只一語一句の標象を主とせずして一段一章の標象といふ程の大規模に立脚
せねば不可ぬといふ事。これが第五の箇條。

また此外にも幾らもあるが、先づ少くとも此五ヶ條の端を發くことに取掛らうといふのが自分の所謂新發展。その目的に副はしめんとしてホンの瀬踏に作つて見たのが「和歌の浦」である。

「和歌の浦」は鶴をシテと立てた作で、これは四五年前に(?)雅樂の舞を參觀して偶然思ひ浮べた想像に基いたものである。即ち舞樂の舞の如何にも悠揚として閑雅に、迫らぬ、大やうな、古樸な味ひを恰も鶴が舞つてゐるやうだと思つたのが元である。

本曲の寓意は特に説明する必要もあるまい。鶴は勿論漁童も漁人も、何れも何者かのシムボルであるとも解せられる。併し作意上に謂ふシムボルと曲や振の上に謂ふ標象とはおのづから別であるから、そのことも合點しておいて貰ひたい。

本曲中に用ひた西洋樂は「金毛狐」や「初夢」に於けると同例、内容と伴はせて用ひたのである。



寫實式の背景と唄物、淨瑠璃物

改めて言ふまでもないが、東西ともに大昔の舞臺面はおしなべて標號式シムボルで濟ましたものであつた。標號式とは能舞臺のやうなのを言ふ。よし一步進めて背景を用ひるにしても、大道具を用ひるにしても、タカカ所作舞臺程度といふのがそれ。希臘の古劇がさうであつたし、沙翁時代のもまた略同様。寫實式即ち油畫式になつたのは近代以後の事である。我國のも此の三四年このかた際立つて寫實的になつた。これは脚本其物が寫實的になり、藝風全體が寫實的になつて來た所から、必然の勢ひで、さうなつて來たのだが、目下の所如何にも目新しくもあり、立派でもあるから、見功者、不見功者、引くるめて、先づは大受といふ有様である。併し近ごろのやうに此の式が次第に竹本物や所作物にまで應用されんとするに至つては、少々考物であると思ふ。

西洋では此のバナラマ式が岩組の間から本水を落すといふ程度までに進ん

だので、英吉利などでは大ぶ反動を起し、とりわけ能舞臺乃至所作舞臺式に綴つてある沙翁物に對しては頗る不調和を感せしむることが多いので、エリザ劇研究會などいふ特に沙翁時代其の儘の舞臺をしつらつて興行を試みる連中も現れ、例のエレン、テリーの悴クレীগのやうに思ひ切つたヌーボー式を唱へ且つ實行する者も出た。これはツマリ餘り濃厚な料理に壓れて來たといふ氣味でもあるが、一つは背景が寫實式に成り得る程には筋や藝の方は自然式には成りにくい事情があるので、そこで不調和が目立つか、或は双方とも迎も進んだ頭を満足さする程寫實式には出來かねるので、それなればいつそのこと半以上を想像に二任する方が面白いと、標號式即ち能舞臺式へ逆戻りしたのでとも解せられる。

日本では油畫式がほんの昨今だから、まだ壓くには程があるし、又今暫らく壓かせぬほうがよいでもあらうが、竹本物や所作物に於ける應用に至つては、此の際少々考へて貰ひたい。

思ふに藝術の生命は形式と内容との調和にある。内外の調和さへ十分なれ

ば、甚しい下等な物でない以上は、兎も角も見聞して享樂するに足ると思ふが、いくら内容は結構でも、若しくは其の反對に形式だけが立派でも、或は双方ともに立派でも、内外相調和せなかつた時分には、見る者の氣が移らず、随つて夢心地になれず、たま／＼恍々となりかけても程なく破れて興が醒める。證例としては十分適切でないが、假に歌舞伎座の「荳」を引かう。先づ幕が開いた當座には、ともかくも昔見た「荳」などは全く違つた念入の背景、油畫まがひの色調、實景を知らぬ者には、まあこんなでもあらうかと奥の院を想像させるだけの力はある。面白くもないが邪魔にもならぬ。で坊主首が大勢揃つた頃までは別段何の興も起らぬ代りに大した不調和をも感せず、にゐたが、荳の出になり、石動の出になり、いつもならば極感といふ所に近くにつれて、背景が邪魔になりはじめ、幕切に至つては彌々面白くなく、只妙に氣が散るやうに感じた。藝の巧拙といふこともあるが、主として宗十郎の藝風と背景、チヨボと背景との間に相調和せざるものがあると感じた。

淨瑠璃物には油畫式の背景は絶対に調和せぬといふのでない。幸ひに立派

な指圖役があつて、相調和するやうに、藝風からもテヨボからも歩びやつて念入に工夫を凝らしたなら、或はパノラマ式の淨瑠璃劇といふものも成立つまいものでもないが、それはもう一種の新藝術を興すも同様の手間で、今日行はるゝやうなオインソレ式のヤツテツケでは覺束ない話。

かういつたとて、大昔へ戻つて粗末な、野俗な、操り式の舞臺面を其の儘にといふのではない。調和を害はない限りに於て、大小道具の品位をも高め、背景の趣味風情をも高めるのは妨げないことである。そこは、本來の舞臺面が能とは違つて、流石に純然たる標號式ではなく、油畫式でこそなけれ、繪畫式には相違ないので、濃淡弛張何れとも融通が利くと思ふ。背景ばかり改めるといふ譯にはゆかぬが、白も科介も表情も扮装も一切に行渡つて、餘りに誇大な、操り式なのを和らげ、自然に近づけるやうにすれば、寫實まがひの背景も随分調和することゝなるであらう、併し此の手加減が、言ふは易くして行ふは難い。下手に手を入れると今度は筋立の不條理なのが浮上つて來る。さりとて在來の淺俗い誇大な調子は、到底これからの神經の鋭敏な、趣味性の細微な

藝術鑑賞者には適するものでない。竹本劇の壽命の長からんことを欲する人々は此の際大いに工夫を凝さねばなるまいと思ふ。

次に將來の所作舞臺はどんな鹽梅に裝置し且つ裝飾したら適當かといふ疑問が浮ぶ。近年歌舞伎座などで振事を出すと、大抵は油畫まがひの背景を用ひる。それが不調和に見えることが多い。畫の出來が妙でないからであるか、或は油畫式若しくは寫生式の背景は根本的に振事とは調和せぬのであるか、これが又別の問題になる。竹本物の場合とおのづから違ふ。あれは白が多く、加之時々科介なり表情なりが寫實式に近づく。そこで却つて調和しにくい仔細もある。振事は白は甚だ少なく、主として見るもの、聽く物になつてゐるだけ、彼のオペラの背景がパノラマ式であるのに思ひ比べて、古い物ではいかんが、特に新作したものであれば、何とかしたら調和が付きさうにも思はれるが、どうであらうか。で、自分の書いた振事物の如きはトガキはいろいろで、時としては油畫を用ひて見ようといふ積りで書いたこともある。全くの標號式を用ひたのもある。本式に試験をして見る機會がないので、實を言

へば少々曖昧な態度であるが、しかし七八分がたまでは新標號式といふのが自分の立脚地。すなはち純粹の標號式と寫生まがひとの間を行つた日本畫式といふのが最も折合がよからうと思つてゐる。何事も試験を主とすべき今日の事だから、將來兩様とも試みて見る積りだが、油繪の方はさておき、日本畫式はどんな風にやつたらよからうか問題。

自分の經驗では、樂器が三絃本位である以上は、日本畫式にしても折衷畫めいた、やゝ奥行のある薄昏い背景は妙でない。必しも寫實式がいけぬといふのではないが、色の調子が重いよりは軽く、濃いよりは淡く、細かいよりは粗く、昏いよりは明るい方がよいと思ふ。近頃劇場で用ひるやうな色調の高い、濃い、毒々しいやうなのは面白くない。本來が能舞臺式から脱化したのだといふことを考へると、明るい、淡白な、簡淨ななどといふことが自然の要件として附屬せざるを得ないかと思ふ。嘗て自作鉢かつぎの背景、といつてもほんの三間ばかりの背景を或新派の畫家達に畫いて貰つた所、言はゞ折衷畫で古沼に枯葉まじりの葎が生茂つてゐて月が雲間に出てゐるといふ景色、それが寫生

でなく、さりとして在來の日本畫でもなく、幾らか奥行もあり、雅趣もあつて、宅の舞臺に掛けて見た所一寸目新しく、これなら餘興用には澤山と思ひ、さて踊子どもに衣裳を着せ、其の前に立たせ、あちこちと動かして見ると、頗る妙でない。衣裳の好みも妙でなかつたのだが、それよりも目障りは背景の色の調子。何よりも薄昏い、奥行のある色の調子が、眞白に塗つた顔と妙に矛盾し、而も端手々々しい衣裳の濃い色とは同調子になり過ぎて、時々背景の方が勝ち、おつかぶさるやうな趣があつて妙でない。人形がひつたゝぬ。で、畫家に無心を言つて、夜景としては不都合でもあらうが、どうか葎の葉の枯れたのをもつと思ひ切つて黄色くして下さい、即ち一言でいへば背景全體を明るくして下さいといつて、こゝかしこ塗り直して貰つた所、たしかに人形との折合はよくなつた。そこで考へた、劇場などではどうしてゐるか知らんが、少くとも新作物といふうちにも所作物などは、其の背景を畫かせる前に、畫工に人形の扮装を呑込んで貰ふ必要がある。如何に畫としては妙であつても、振になつてからの調和がわるくては何にもならぬ。要するに新案に成れる藝術品は之れを

公にするまでに餘程下しらべに手を掛けねばならぬ。さうせねば作者の本意などは少しも察せぬ見た目勝負で、頭下し悪くいはれて、新芽のうちに枯れてしまふ。

それにつけても、せめて一ヶ所位は試験用の劇場がほしいものである。今日のやうに粗末な未成品を公衆に見せて忽ちに愛想をつかさね、若しくは一度の打合せもしないで新舊の要素を暗雲に舞臺で出合せたりする習慣は、實に無謀な沙汰で、自重心の無いにも程のあつた話。よく新しい藝術を興すには犠牲を要すなどといつて、かういふ無謀な手合の輩出するのをも何等か新藝術に益する所あるものゝやうに言ふ人もあるが、それは局外者の考といふもの。かやうな手合の輩出は眞藝術の邪魔にこそなれ何の益になるものではない。少なくとも二十年の修養準備を必要として懸命で切つて出る新藝術家が欲しいと思ふ。幸ひ大博覽會が延びた。明治五十年はやゝ大きな試験を行ふには好い機會である。どうかそれまでに小さくてもよいから一の試験用劇場がほしいものである。また此の様な趣旨目的で、一の研究團體が出来

たならば、我藝界の前途のため頗る有益なことであらうと思ふ。

初夢の曲と振

四十二年二月「趣味」の爲に

本來此作は舊式の舞臺で演ずるものとして書いたのだから、間口五間半限りといふ此座では引立たない。それに花道が無いため藤娘や座頭の出所が作意とは違つてしまつた。工夫さへすれば狭い舞臺は狭いなりに又別の方法もあるのだが、座附の道具方が獨りで吞込んでゐて初日になつて始めて作者を驚かすといふ遣口だから仕方が無い。扉ヒラキの代りにせめてもデンガクを用ひたならと誰しも思ふ。又せめて藤娘と座頭は下手の襖からだしてくれたらよかつたと歎息した。要するに道具立は殆ど作意に伴つてゐないと言つてよい。比較的善く出来たのは夷大黒の宮であらう、新菰を作意通りに使つてくれたのが嬉しかつた。一々には説明しない、トガキを讀んで比べて見

れば解る。

曲は仲助が車輪で附けた。變化は十分に附いてゐる、常盤津としては品もよい。現在の標準から言へば上出来の中であらう。併し總て藝は車輪ばかりでもゆかぬ、車輪だと得手獨吞込にも氣短かにもなる。作曲者の胸でばかり合點してゐて謠る太夫へは傳はつてゐない部分も大分あるらしい。作意と背中合せになつてゐる部分もある。「初夢」などは大甘物だから如何でもよいが、眞面目な作意を、これは仲助を咎めるのではない、今の劇界や俗曲界の習慣のやうに、碌々作意を咀嚼もせずマアこんな意味だらう式に早吞込をしてやつては、又よしんば曲は相應に出来ても謠ひ手や踊子やとの打合せに骨を折らぬやうでは、逆もく、知識の上流を喜ばすことは難いと思ふ。登場以前に實演の練習を重ねないといふのが今の俳優、今の藝人全體に亘る通弊である。彼等が此弊を脱せぬうちは彼等を藝術家などと呼ぶは勿體ない。まづそれまでは彼等を依然として藝人として扱ふも止むことを得ない、彼等の藝に對して尊敬の念が起らう筈が無いから。

曲のうちで妙でない部分の一二を言へば、先づ勝頼八重垣の條が十分でない。これは仲助も相應に苦心して幾回も附直したのだが、ごちらの腹が吞込めぬといふこともあつたらうし、三絃樂の特質に弱點があるのでもあらうし、君が心と一つにいつかの邊作意とは伴はぬ。其以前の部分も狐といふ點を眼目としたものゝやうになつて戀といふことが陰になつた趣である。随つて振も此の部分が最も妙でない。

座頭と藤娘も長唄と常盤津の掛合として書いたものゆる作意と違つてゐることは言ふまでもない。併し出端はあれでも差支ないが、「よしや憂きこと」にくや雁金の折返し、が二上りと三下りと全然曲譜の變つたものになり、又、どうせうぞいなあが淨瑠璃の一部へ繰込となつたなどは案外の事であつた。これは最初斯う附けさせたので無かつたが、いよゝゝ振を附ける頃になつて何時の間にかあゝ變つた。どうでもよいから咎めもしないで舞臺に掛けさせてしまつた。といふのは變化はある、賑かでもある、俗受はすると思つたからである。併し作者の本意は、故と同じ旋律で附けさせて振だけは意味に合せ

て變へさせ、只、どうせうぞいなあ、だけは前後全く同じ振にして見物の印象を深からしめようといふ案であつた。但しそれを作意通りにしようといふには、今度のやうに初日が最初の舞臺稽古といふやうなヤツテツケでは出来るものでないから、頭から言ひ出して見なかつた。

西洋樂への移りも作意通りで無い。これも頭で双方打合せもしなければ、練習は無論といふ次第ゆゑ、話にならない。座頭の曲や夷大黒の曲はあれでよい、併し如何新しいといふ程の點も無い。

道具がチャチであつた程ではないが、衣裳假髪も十分では無い。夷大黒の假面並びに衣裳は久保田金僊君の骨折で、あれほどに出来て、こればかりは作者も大満足、それゆゑあの場が一番心持が好かつた。振も相應。勘彌榮三郎もよく勤めてゐた。藤娘はヤハリ例の黒地の着附の方がよかつたと思ふ。振は曲相應。芙蓉もよく踊つてゐた。座頭の頭が初日は青坊主で、如何にも若輩で作意とは違ふゆゑ、指圖して改めさせたが、まだく、若い。それゆゑ何となく色氣があつた。「ハテ女もさ」といふ詞句が嘘らしく聞える。着附も今に

なつて考へれば更に老作りにしたはうが好かつたであらう。三津五郎も好く踊つた。併し、ほろ酔ひ機嫌の千鳥足といふ詞句の味が振の中に現れないのは如何したものか。で三日目頃に、云々と注意しておいたが、何か誤解したと見えて、藤娘の獨踊の間に俄に酔つた人になつて出で来るは變しい。要するに座頭は作意の座頭ではなく、在來の俗曲中の座頭である。「官」も「色氣」も棄て、只酒に忘我するといふ飄逸な性格の影は見えなかつた。

最も情なかつたのは鼠とキュービッドである。淺草の玉乗の子供を借りて来て、最初は長い三絃の間奏に伴れ、後には西洋樂に合せて十分に活動させる案であつたのを、大ぶ久しくベストに罹つてゐたかともいふやうな如是不活潑な鼠を使ひ、あんな兒戯にひとしい振を附けたのだから始末がわるい。それでも見物が見てゐてくれるから有難いものさ。ついで悪かつたは幕開の隠居と太郎冠者。白がまるで狂言詞になつてゐない。樂屋名人の新十郎も困つたもの。つまらぬ役ゆゑ抛げてゐたのでもあらうが、セリフの文句が自己流なども困る。此隠居の語は多少の意味を持つてゐるのだから、言ひ

廻しによつては新代の見物には萬更印象を與へぬでも無いのに、藝人社會の習慣も困つたもの。

油繪式背景の適用範圍

(四十二年「早稻田文學」)

故山本芳翠氏が故左團次の爲に背景の筆を揮つて以來、油繪式の背景はおひ／＼歓迎せられ、新派劇では本郷座などが此方面で最も評判になつた。明治座杯も和田英作氏はじめが工夫を凝らされるので立派なのが出來、ツイ此間の蘆の湖畔の景などは大評判であつた。西洋式を應用したものととしては、其適用鹽梅が手際よく、此體で進んだなら數年を出でずして彼方のと互角になるであらうとも想像される。併しこゝに一つの疑ひは此式の背景の適用範圍。僕の見るところでは、劇の性質によつては、此式の背景は邪魔になるとも便宜にはならぬことがあると思ふ。ざつと現在我國で行はれる劇を分けて見る

と、其一が純然たる竹本劇、すなはち「先代萩」の御殿とか「忠臣藏」の七段目とか「妹背山」とか「刈萱」とか言ふもの。其二が歌舞伎風の史劇又はお家騒動や世話物の社会劇。其三が近頃出來るやうな活歴仕立の史劇。其四が新派が演ずるやうな明治の社会劇。其五が太郎冠者氏式の喜劇。其六が外國の敷寫し。其六が振事物。ざつと如是ものであらう。ところで油繪式の背景は此中の或者には適らぬと思ふ。

先づ竹本劇には妙で無い。この理を昨年「歌舞伎」に「寫實式の背景と唄物淨瑠璃物」と題して一通り論じておいた。一寸考へると、油繪の調子高なものと淨瑠璃物の誇張的に調子高なものは、其共に調子高な點に於て折合ひさうにも思はれるが、一方の寫實式と一方の荒唐無稽とが久しからずして相牴牾するか、次第に厭氣が差して來る。蓋し双方共調子が高いのが彼の金紙ばりの襖とデコ／＼刺繡の打掛とが共に調子が高いながら折合つてゐるのとは違つて、西洋と日本寫實と空想、舊幕と明治と言ふ風に脊中合せになるから如何しても妙で無い。若し竹本物に油繪式を幾らでも導き入れようとするならば

先づ臺帳其物の内容にも手を入れ、ツマリ双方から歩びあつて調和を求めねば駄目であらう。

次に振事物。これも在來の作には油繪式が妙でない。新作の振事物で、内容にも多少寫實式な所があるか若しくは西洋樂を用ふるなど言ふやうな事があつたら如何だか。これは試験して見ねば分らぬ。此點は前の「歌舞伎」の論に相應にくはしく言つたから今は省く。

明治の比較的寫實式の社會劇には、本郷座などが屢々之れを應用して喝采を博してゐるから、先づ最も適してゐると見ねばなるまい。併しいつも暇が乏しく、都合がわるくて、本郷座の評判の背景と言ふ奴を僕は殆ど全く観てゐないも同様、故に此點は當分預りにしておく。

外國物の敷寫し、即ちシェークスピアとかイブセンとかハウプトマンとかを其儘に演ずる場合は、是れは勢ひ外國式の背景を用ひざるを得ない。ツリー一流の大念入の見世物式の背景でないまでも、在來の作は遙かに寫實氣の勝つたものと少くも日本人の目には見えるのをを用ふることゝなるに相違ない。

で、これも油繪式應用の類へ入れる。

喜劇物は仔細なし。これは滑稽が調子高なものと、言動が外面だけながら當世式、寫實式だから折合ふ。

殘る所は舊歌舞伎風の史劇及び世話物と近時出来る活歴仕立の史劇。これらのものには如何かといふ問題になる。

此等の作には、若し油繪式を使ふならば、或特別な場面を除くの外は餘程調子を引下げて使はねば、肝腎の作意を押殺してしまふ虞れがある。將來の史劇は知らぬが、今のだけに就いて言へば、誰れの作も種々の點に於て無理が多い。筋立も幾らか不自然、とりわけ白が誰れの書いたのも拵へ物。舊作者の書いたのに至つては最も甚しい不自然な七五調式で、コンデンショナルを極めたもの。そこへ持つて來て此三十年間に時代精神の推移が驚くべく急で、不易と言傳へられた人情さへ大きに變遷したと思はねばならず、倫理標準が場合によつては眞逆様にもなりかねない位だから、作中の人物の言ふ事が如何もピタリとは見物の胸に沁みぬ。何となく空々しい。泣いても怒つても餘所

事のやう。それにまた禮義正しい武家の立居振舞が無禮講式の明治の目で観ると如何にも不自然的儀式的のやうにも見える。巧みに實際を寫してゐるのさへも今の目には然う見える。虚らしい。所で此虚らしい言動と背景の實らしいのが、先づ第一に折合はず次に此言動の何となく餘所事らしく身に沁まぬのに對して背景の如何にも生々いき々と率引力アクトラクションの強いのが侵略的に浮上り、おひくゝに觀者の目は勿論、心をも其方へのみ引寄せ、果は其前に活動する人物をば只の偶人のやうに思はせてしまふ。俳優が非常の名人であつて其白廻しせりふがまた驚くべき名調子で、もあらば格別だが、さうで無くば、連もかやうな背景の引力には勝てるもので無からうと思ふ。此の間明治座の「破戒會我」を觀て此理を感じた。僕は紫紅君の作を無遠慮に酷評したが、一は此不調和に原因する所が多いのに其際は心附かなんだ點もあつたらしい。若し果して然らば其點だけは山崎君に謝さねばならぬ。さりとて僕は之れを以て彼の背景を畫いた畫家諸君の罪だとも無論言はない。背景畫としては頗るよく出來てゐるのだと思ふ。ツマリ罪は何處にも無い。只我劇壇が此方

の經驗に乏しいから、當分は此種の不折合が幾らも起るのであらう。按ふに、將來史劇だちのものに此種背景を用ふるならば、成るべく肝要な筋大切な場面に關係の無い處、言はゞ白せりふや仕草ばかりに一任しては大きにダレルといふやうな幕にのみ用ひたらよからう。若しくは殆ど白せりふの無いやうな場、例へば「文覺」の劇ならば、袈裟を斬つて出て來て、石磴の上で月光に切首を透して見る件くだんあの一場には只一句の白も無い。あゝ言ふ場面にはよからう。盛遠が出て來る前三四分間を空舞臺からにしておいて、遠くから徐りそとと盛遠が出て來る、これにもまた二三分を費させる、それからジツと思入あつて月光に首をかざす、これにも二三分、やがてハツと驚いて尻居にドウとなる、これにも二三分などは面白からう。或は竹本物から場面の例を借りて言はうなら「忠臣藏」の五段目などが妙。與一兵衛、定九郎、勘平の件。白が少くて而も田舎道の雨夜の景。勘平が死骸を探る間の長いなが最も背景を鑑賞させる便宜ともなつて妙だ。

彼の故左團次が春日社頭の後藤又兵衛を演じて大きに當てたのも、畢竟白が

主で無い場面ゆゑだと思ふ。要するに活人畫といふ點を考へねばいけない。若し此理を考へずして、妄に油繪式の背景を頼みとし、半は之れに助けて貰はうの下心で將來の作を試みるならば、恐らくは失敗に終らざるを得ないであらう。

外國は本來が油繪本位の國だが、それすらシェークスピア物などは寫實式を用ひては只の見世物に墮せしむるばかりで、多くは失敗に近いらしい。又時として物好の手合があつて、アズ、ユー、ライク、イットなどを自然の林中又は大きな庭園などで催したともあつたらしいが、是れ將た一時の好奇慾を満足せしむるの効があつたばかり、眞の見巧者は頭から顰縮したらしい。それは其筈の事、如何に彼の作が半以上寫實まがひの散文で綴つてあるからと言つて、到底眞自然とは折合ふものではない。彼方にもクレীগ一流の反動が起りつゝあるは尤の事である。

終に臨んで將來の作家に望む。背景利用といふやうな事は座附作者に一任しておいて、局外から出て劇を刷新しようといふ側の作者は、寧ろ全くそんな

事は度外視し、只管作意の方に力を致しては如何であらう。老練な座附作者でも舞臺面に捕はれては技巧にばかり流れる。まして局外からでは尙やりにくい。劇の理想もそろ／＼改まるべき機運が近づいた。端手な面白い、目ざましい、美しい、明るい、賑かな動作の多い劇よりも、深い、鋭い、暗い、哀しい、凄く動かぬ、沈んだといふやうな劇を欲するものも多い現代、餘り背景に重きを置くと昔のよりも一段見せ物脈が激しくなりかねない。昔の日本式背景は如何に贅澤に出来ても、決して俳優を消すやうなことは無かつたが、油繪式は俳優を活人畫にしてしまふからおそろしい。

ふと思ひ出したから言ひたす。前に言つた西洋式の背景と日本式の言動とが調和しかねる理由を再考するに、其原因は種々あらうが、一つは繪具の色にも因らう、在來用ひ來つてゐる歌舞伎風の衣裳の色は油繪風の背景の色とは折合が妙で無いと思ふ。素人目の間違かも知れんが、在來の衣裳の色の妙に澤が乏しくて、如何に端手であつても其には拘らず生氣と沾ひとが無いのに比べて、西洋繪具の色は何となく生々しい。次に

在來の日本劇の言動は何處となく形式的に角があつて、何れかと言へば直線的若しくは之の字式である。能の血脈を引いてゐるのにも因らうが、高尚がつた方面の作には特に其氣味が多く、又史劇は例の活歴の緣故から堀越式、藤間式の武張つたる若しくはギクシヤクしたる味ひを有し、かたゞ、圓みがちでは無い。然るに所謂油繪式の背景を見ると、寫實の然らしむる所と見えて、總てが何處となくふつゝとして、日本畫では何時も骨々しく畫かれるを例とする梅の老幹や何かさへも油繪では見違へる程に丸みが附いて見える。言はゞ曲線式。此何となく丸い味と前の生々しい色とが角張つた拵へたやうな言動や何となく乾燥びたやうに見ゆる色の衣裳と折合はないやうに思ふ。まだしもこれがアベコベであつたらよからう。人物のはうが油繪風であつたらよからう。今のやうでは人物は必ず背景に食はれてしまふ。主客顛倒といふもの。就中有樂座などで用ふる布地に畫いた背景は一段と此感を強からしむるものゝやうに感じた。九米八が龍田姫の新曲を演じた時、曲の内容には

關係なく、單に見た目の上に一種言ひがたき不妙の感を抱いたも、畢竟は此味ひの調和せざる點に原因したのであらう。或はかくの如く感ずるは僕一箇の見誤りかも知れない。廣く好劇家の意見が聞きたいものと思ふ。

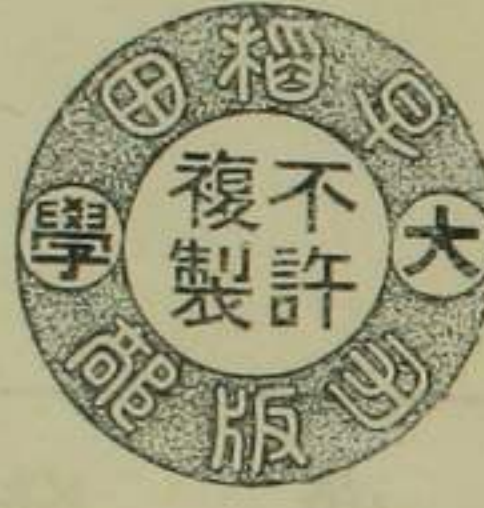
作 と 評 論

大尾

19905

明治四十二年五月二十五日印刷
明治四十二年五月二十八日發行

絶版



著者 坪内雄藏

發行者 荒川信賢

印刷者 渡邊八太郎

印刷所 日清印刷株式會社

東京市小石川區音羽町四丁目十一番地
東京市牛込區榎町七番地
東京市牛込區榎町七番地

發行所 早稻田大學出版部

東京市牛込區

48
03
5713

發 賣 所
博 文 館

東 京 市 本 橋 區 本 町 三 丁 目

其 他
全 國 各 地 書 林

